

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）

# 医科学研究所附属病院 A 棟地点

研究編

2022

東京大学埋蔵文化財調査室



東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17

東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）

# 医科学研究所附属病院 A 棟地点

研究編

2022

東京大学埋蔵文化財調査室



## 例 言

1. 本報告は、東京大学白金台構内、医科学研究所附属病院部 A 棟新設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 研究編である。
2. 本書は、医科学研究所附属病院 A 棟地点の発掘調査に関わる諸問題について、調査、研究を行った成果である。各研究は、調査、整理に関わった室員の他、阿部常樹（國學院大學学術資料センター）、江田真毅（北海道大学総合博物館）、大内利紗（船橋市教育委員会）、渋谷葉子（徳川林政史研究所）、谷口榮（葛飾区産業観光部観光課）、西田泰民（新潟県立歴史博物館）の各氏から研究論考をいただいた。記して感謝申し上げたい。
3. 本報告の編集は、堀内秀樹、小林照子が行った。
4. 調査の概要、個別の層序、遺構、遺物などの内容の詳細は、『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 医科学研究所附属病院 A 棟地点 報告編』に記録している。参照されたい。
5. 本書は、印刷物の他に平成 29 年の文化庁報告『埋蔵文化財保護行政におけるデジタル技術の導入について 2』にそって、低解像度 PDF（150dpi）を東京大学埋蔵文化財調査室ウェブサイト内オンライン刊行物として公開を行っている（<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp/e-book.htm>）。



東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）  
医科学研究所附属病院 A 棟地点発掘調査報告書  
研究編

目 次

例 言  
目 次

【研究 1】	藩邸北東部よりみた大村藩邸下屋敷	大成 可乃	1
【研究 2】	医科学研究所附属病院 A 棟地点 出土一括資料の数量的分析	堀内 秀樹	15
【研究 3】	肥前大村藩下屋敷から出土した「柴安」瓦	谷口 榮	43
【研究 4】	医科学研究所附属病院 A 棟地点出土の徳利について	大貫 浩子	55
【研究 5】	大村藩下屋敷における動物利用の様相 －医科学研究所附属病院 A 棟地点出土の動物遺体－ 阿部 常樹・江田 真毅・大内 利紗		67
【研究 6】	出土ガラスについて	西田 泰民	123
【研究 7】	東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について（再録） 原 祐一		127
【研究 8】	肥前国大村藩白金下屋敷について（再録）	渋谷 葉子	131
【研究 9】	出土したレンガ基礎遺構	堀内 秀樹	149





# 藩邸北東部よりみた大村藩邸下屋敷

大成 可乃

## はじめに

調査地点は東京大学白金台構内の医科学研究所1号館建物の北側に位置する(1図)。現在は概ね平坦な地形であるが、明治28(1895)年の「東京実測全図」と調査地点を重ねると、調査区北、東側が低く、西、南側の限られた部分のみが平坦に描かれており(2図)、現在の平坦な地形は明治28年以降に行われた大規模な盛土によるものであることが判る。発掘調査でも調査区中央付近から東側に南北方向に伸びる谷筋が検出されたが、その部分にも江戸時代の遺構が確認されており、西、南側の高台部分と、東側の低地部分との高低差に富んだ土地利用があったことが確認された。

既に渋谷葉子氏により詳細な文献調査が行われ、本地点は大村藩が寛文元(1661)年に下屋敷として拝領した北東部分に該当する場所であった事が明らかにされている。しかし調査の中で、下屋敷の絵図面や具体的な動静などを知り得る直接的な史料はほとんど確認されなかったという(詳細は渋谷2004、本研究編研究8参照)。

そこで本稿では、地形的転換点に立地し、平坦な場所が限られていた藩邸ではどのような空間利用がなされていたのか、検出された遺構、遺物から復元を試みたい。

## 第1節 遺構の検出状況

医科学研究所附属病院A棟地点報告編(以下、報告編)第II章第4節基本層序でも触れたように、本地点では上位からA面、B面<sup>(1)</sup>、C面、L面(関東ローム層上面)の4枚の遺構検出面が確認されているが、L面以外は局所的な検出にとどまる。すなわちA面は調査区南東部の埋積谷部分で、B面は調査区F～Dライン付近の埋積谷西側立ち上がり付近斜面地で、C面は後述する段切りを埋めた版築層の上位面として確認された。

遺構の検出状況を見ると、破線で示したエリア毎に検出される遺構の種類や数が異なる状況がみえてきた(3、4図)。

①としたエリアは、地形的には西から東へ緩やかに傾斜し、西側の高い部分と東側低い部分との高低差は1mほど確認される。B面、L面で遺構が検出され、小ピットを中心に、井戸(SE2)、廃棄土坑(SK1)、採土坑(SK201)

長方形土坑(SK202、SK205)などが確認されている。SE2、SK201などは比較的遺物が多く出土しているが、大半の遺構からは遺物は出土せず、出土してもごく少量である。小ピットからは遺物が出土せず帰属年代は不明であるが、重複して検出されるピットも幾つかあることから、作り替え、あるいは時期差のあるピットが検出されている可能性が高い。出土遺物からSK1が17世紀後葉に、SK202が18世紀前葉に、SK201が18世紀中葉に、SE2が18世紀中から後葉に、SK205が18世紀後葉に比定される。以上のような様相からは、本エリアは遅くとも17世紀後葉頃から継続的に利用されていたが、恒常的な建物が建てられる場所というよりは、仮設建物か、ある程度の頻度で立て替えの行われる場所であり、植栽、採土坑、廃棄土坑などを掘削できる空閑地的な利用も可能であった場所と推測される。

②としたエリアは、地形的には調査地点の中で最も高く、比較的平坦面の確保が容易な場所であり、西側の高い部分と東側低い部分との高低差は50cmと、もっとも小さい。①のエリアと同じくB面、L面で遺構が検出され、溝(SD209、SD214など)、植栽痕(SK208)、廃棄土坑(SK218)、塀列(ピット列5、ピット列6)などが確認されているが、遺構が希薄で、SK218以外は遺物が多く出土する遺構は確認されなかった。出土遺物から、SD214、SK218が17世紀後葉に、SK208が18世紀前葉に比定される。SD214、SK218が位置する付近は地形的に東側に緩やかに傾斜し始める地形的転換点にあたる事から、藩邸内の土地利用を区分する区画溝として機能していた可能性もある。以上のような様相からは、本エリアも①エリアと同じく17世紀後葉頃から利用される始めるが、遺構からの出土遺物に18世紀前葉を下る遺物が確認されず、18世紀中葉以降の利用があったか否かは不明である。東西にのびる2本の塀列からは遺物が出土しておらず、溝や植栽と同時期に存在していたのかは確認できないが、塀列を境にその南側には遺構がほぼ検出されておらず、溝や植栽と同じく、何らかの区画施設であった可能性もある。

③としたエリアは、A面、B面、C面、L面のすべての遺構検出面が確認され、そして最も多くの遺構が検出されているエリアでもある。調査区Eライン付近から東への急傾斜が確認され、Eライン付近と東側Cライ

ン付近との比高差が4m 余りにも及ぶ。また調査区南から北東方向へも傾斜し、その比高差は2m ほど確認される。このような複雑な斜面地上に位置し、平坦面が限られた状況が局所的な面の形成に繋がったと推測される。

B 面、L 面で検出された遺構(3 図)と、A 面、C 面で検出された遺構(4 図)では様子が大きく異なる。B 面、L 面で検出された遺構は数、種類ともに全エリアの中で最も多く、段切り、柵列(ピット列1、2)、塀列(ピット列3、ピット列4)、大型建物址(建物址)、井戸(SE261)、地下室(SU360)、溝(SD237～SD240、SD361、SD362など)、方形土坑(SK259、SK358、SK488など)、植栽痕(SK232、SK233、SK235、SK386、SK387、SK396、SK477、SK499など)などの遺構が検出されている。ただし、いずれの遺構も遺物量はさほど多くはない。出土遺物からSE261が17世紀中～後葉に、SK232、SU360、SK387が18世紀前葉、SK477が18世紀前～中葉、SK259、SD362、SK358、SK499が18世紀後葉にそれぞれ比定される。本地点で最も古い遺構と推定されるSE261の存在から、③としたエリアが、拝領後、最も早く利用(作事?)が開始された場所である事が推測されるが、他に17世紀中～後葉に比定される遺構がなく、遺物も少ないことなどから、この段階にはまだ積極的な利用があったとは思われない。ただ本エリアで最大規模の遺構(地業)である段切りと、それに伴う柵列(ピット列1、2)は、18世紀前～中葉に比定されるSK477と重複し、SK477より旧であることが確認されており、拝領後比較的早い段階で段切りを伴う地業が行われた可能性が高い。SE261はその地業と前後して構築され、地業が終了した段階で役割を終えたとも考えられる。

段切りにより3つの平坦面(以下、東側の高い方から上、中、下段と呼称)を作出し、上段には南北に長い大型建物や塀、地下室などを構築し、中段には植栽を施し、下段には南北に伸びる溝が構築された状況が確認できる。ただしこのようにエリアの利用が本格的になるのは遺物量、遺構数が増える18世紀前葉以降であり、利用率が上がるのは1遺構からの遺物量も増える18世紀中葉以降からであろう。ただし相対的には遺物量がさほど多くないことから、継続的な利用があったとは考えにくい。

C 面は、段切りされた東側谷部分を埋め土し、その上面を版築し、構築された面である(4 図灰色)。検出された遺構は、検出範囲が限定されている事もあり、溝(SD324、SD357)、土坑、柱穴など数、種類ともにごく限られる。本面を構築する層(版築層)からは、報告編で報告したようないわゆる広東碗や小広東碗、ロクロ成

形の塩壺に加え、瀬戸・美濃系磁器碗など、18世紀後葉から19世紀初頭に比定される遺物が出土しており、谷部の平準化がこの頃に行われたと推察される。しかし本面で検出される遺構の少なさからは、平準化後の利用はさほど多くはなかったと推測される。

調査区南東部、埋積谷部分のみで確認されたA 面では、大型の廃棄土坑(SK207、SK229、SK258)の他は、凹み状の遺構や柱穴などが検出されたのみである。版築後、利用状況が低かった本エリアにSK258をはじめとする大型の廃棄土坑が構築されたと推察される。もっとも大型の不整形土坑SK207の覆土には、多量の焼土と焼瓦、陶磁器等の遺物を多く含むことから、火災時に一括廃棄が行われたと考えられ、この火災は、陶磁器の年代観から安政元(1854)年の火災と判断されると報告されている。

これまでエリアごとに地形的な状況や遺構の検出状況などを確認してきたが、以下のような違いが確認される。

#### 1. 地形的な状況、利用方法が異なる。

①エリアは緩斜面上に、②エリアは調査区内では地形的にもっとも高く、広い平坦面上に、③エリアは西から東、南から北東へ複雑に傾斜する斜面地上に位置する。そのためか①、②では地形的に影響をあたえるような作事が行われた状況は確認されず、③のみで、段切り、版築などの地形を大きく改変するような遺構が構築される状況が確認された。

#### 2. 検出される遺構の種類、数などが異なる。

①エリアは小ピットを中心に、井戸、植栽痕、採土坑、長方形土坑などが、②エリアは遺構が希薄で、検出される遺構の種類もピット列、溝、植栽痕などに限られるが、③エリアは急傾斜地という土地利用には不向きな地形であるが、大型建物址、ピット列、溝、地下室、井戸、大型廃棄土坑、植栽址などが検出されるなど、本地点で最も多くの種類と数の遺構が検出されている。

3. 濃淡はあるが、調査区全体で17世紀後葉から18世紀後葉に比定される遺構が確認される。しかしその一方で、17世紀中葉、19世紀中葉の遺構が確認されるのは③エリアのみ。

全エリアで17世紀後葉から18世紀後葉に比定される遺構が確認されることから、この間は調査地点全体が利用されていたと推測される。その中で一番早い17世紀中葉段階で開発・利用が確認されるのも、一番遅い19世紀中葉まで利用が確認されるのも③エリアである。

③エリアでは、段切り、あるいは版築という地業による土地の平準化を行い、利用しようとした状況が確認されるが、版築されたC 面上には重複するような遺構は

確認されず、遺構からの遺物出土量も少ないことから、長期・継続的な利用があったとは考えにくい。平準化したつとも、やはり地形的な不便さは解消できなかったのか、19世紀中葉には調査区南東部の谷部の低い部分は、大型廃棄土坑が構築可能な空闲地となっていたと推測される。

①、②エリアは地形的には比較的平坦な台地上にあり、傾斜地である③より土地利用は容易であったと思われるが、③エリアほどの利用が無かったのは、藩邸内における空間利用の違いを反映しているのであろう。

## 第2節 遺構主軸からみた遺構の変遷

主軸が確認できる遺構は建物址、溝、幾つかの土坑などに限られるが、大きくはN-17°～20°-EまたはN-70°～73°-Wの主軸を有す遺構と、これらとは全く異なる主軸を有す遺構に分かれる(5図)。配置状況を見ると、濃淡はあるが前者の主軸を有す遺構は調査区全体に確認され、後者の主軸を有す遺構は、①エリアのSK205、②エリアのSD209、SD215、③エリアの段切りや、その立ち上がりに沿って配置されたピット列1、ピット列2、段切り上段で検出されたSK429、SK430、段切り下段で検出されたSK488、SK206、SD237～SD240と概ね③エリアに限られる。後者の主軸を有す遺構は、段切りや、段切り立ち上がりに沿って構築されたピット列、段切り面に構築された土坑などであり、地形を意識し、地形に平行あるいは直交する形で構築された可能性が高い。SD237～SD240も、地形に対し直交するような形で構築されていることがわかる。以上のような検出状況から、後者の主軸は藩邸内の地形を意識した主軸といえるであろう。

遺構主軸を確認しうる遺構は少なく、年代毎の主軸の変化を捉えることは困難であったが、注目されるのは建物址、ピット列3、SU360、SD212、SD324、SD361などが有すN-18°-Eの主軸(5図黒破線)であり、この主軸は医科学研究所北側を東西に走る道路と直行するものである(1図A)。この道路は寛文10～13年の「新板江戸大絵図」には確認され(6図)、『御府内場末往還其他沿革図書』をみると延宝年中から弘化3(1846)年に至るまで大村藩下屋敷との位置関係に変化がなく(7～9図)、更に明治20(1887)年内務省地図局発行『東京実測全図』にも同じ位置に確認され、現在にまで至る道である(10図)。また、いずれの時代の絵図も道に面して藩名の記載が確認されることから、この道路に面して藩邸の入口(門)が存在していたと推定され、藩邸内の建物配置が門のあるこの道路を基準に決められた可能性

が高い事が指摘できる。なおこの主軸を有す遺構は、③エリアに版築が施される前と後で検出される遺構に確認されており、藩邸北側を東西にのびる道路が、版築前と版築後の両方で藩邸内の建物配置の基準であった事が確認できる。

2021年2月から6月にかけて調査が行われた白金台困障改修地点の調査で検出されたSX20やSX38(5図)などの遺構もこの東西にのびる道路に並行する主軸を有すと報告されており<sup>(2)</sup>、藩邸外郭整備などに際し、この道路が1つの基準とされていたのであろう。

## 第3節 遺構の変遷と文献資料との照査

渋谷氏の詳細な文献調査により、大村藩下屋敷における災害、世代交代などを契機とした上屋敷との関係や、相对替用地としての下屋敷の利用が明らかにされている(渋谷2004、本研究編研究8参照)。以下では、渋谷氏により明らかにされた下屋敷の様子と、発掘調査で確認された本地点の様相とを比較検討してみたい。

### 1. 17世紀代(11図)

17世紀前半を遡る遺構は確認されず、また同年代に比定される遺物も出土していない。最も早く廃絶が確認されるのは、17世紀中～後葉に比定される井戸SE261(③エリア)である。ついで17世紀後葉に比定される廃棄土坑SK1(①エリア)、溝SD214(②エリア)、不整円形土坑SK218(②エリア)などがあるが、いずれの遺構も遺物量はあまり多くはない。段切りやピット列1、ピット列2などは、18世紀前～中葉に廃絶が確認されるSK477に切られることから、本段階には構築されていた可能性が高い。以上のような状況から、住空間としての利用頻度はさほど高くないが、藩邸内の開発行為は大規模に行われていた段階と推定される。

明暦3(1657)年頃を描いたとされる「江戸大絵図」(報告編I-4図)などをみると、本地点は原野のような場所として描かれており、発掘調査において17世紀前半を遡る遺構が確認されなかった状況は、それを裏付けるものであろう。大村藩が本地点を下屋敷として拝領したのは寛文元年(1661)であるが、藩邸を描いた絵図面は見つかっておらず、藩邸内の様子は明らかではないが、渋谷氏は文献資料の分析と地形的な条件を考慮した上で、本地点が藩邸北側の「詰人空間」として利用されていた可能性が高いとされている<sup>(3)</sup>。また寛文8(1668)年2月1日外桜田備前町上屋敷の焼失を契機として、少なくとも寛文8年5月末から翌9年5月下旬までの1年間、下屋敷は藩主居屋敷として機能していたと推察され

ている。わずか1年間とはいえ、藩主の居屋敷として利用されていたとすれば、上屋敷から多くの家臣も伴われてきたはずであり、これを契機に、これまで限定的な整備、利用にとどまっていた藩邸北側の「詰人空間」の整備が進められた可能性は高い。17世紀後葉あたりから廃絶する遺構が少しずつ増える状況は、居屋敷として利用された事が影響した可能性はあろう。そしてこのような居屋敷としての利用が、大村藩の中で下屋敷を今後も居屋敷として利用可能なように整備する気運を高め、段切りを伴う大規模な地業や、そこに大型建物やそれに付随する施設を配置する本格的な整備を進めたとも推測される。ただ本地点において、17世紀代に廃絶した遺構は多くなく、重複する遺構も確認されないなど、居屋敷として利用された期間も積極的な利用があった様子は認められない。段切りなどの大規模な地業を伴う整備を進めたものの、やはり地形的な理由で使い勝手が悪く、本格的な利用が手控えられたのか、あるいは本地点のある北側の「詰人空間」部分より、調査区外の南側にあるとされる「御殿空間」の整備が優先されたとも推測される。17世紀代の遺構の分布状況を見ると、SE261以外は本調査区南側と西側高台に限られ、藩邸南側から続く平坦な場所に限定されていることから、渋谷氏が下屋敷の南側と想定されている御殿空間の整備を優先させた可能性はあろう。

溝 SD214 からは2次的な火熱を受けた陶磁器・土器が出土し（報告編Ⅳ-70図）、それらの中には、平戸焼と推定される手描きで精緻な絵付が施された染付磁器壺なども含まれる<sup>(4)</sup>。不整形土坑 SK218 からは本年代の遺構としては最多の遺物収納箱5箱分の陶磁器・土器が出土しているが、その大半は破片であり、破損したものが廃棄土坑にまとめて廃棄されたと推測される。本遺構出土遺物は絵付の丁寧な磁器碗、京都・信楽系色絵陶器碗などが中心であり、いわゆる下手の製品は余り含まれていない（報告編Ⅳ-71～74図）。SD214 や SK218 が位置している②エリアは、御殿空間からの塵芥などが持ち込まれるような空間利用がなされていた可能性はある。

## 2. 18世紀代前半（12図）

前代と比べ、全エリアにおいて遺構数も倍近く確認されることから、18世紀前半代までには藩邸内の整備、利用が本格化したと推測される。渋谷氏によると、18世紀に入ると白金周辺も武家屋敷などが増加し、閑静な土地柄が変容し、下屋敷門前にも辻番所の設置が申し渡されており、そのような中、道路付近に近い屋敷内北側の整備なども加速させ、それが本地点の遺構数の

増加に繋がったとも考えられる。①エリアの方形土坑 SK202、②エリアの植栽痕 SK208、③エリアの SK232、SK387、SK386、SK396、SK477、方形土坑 SK358、地下室 SU360 などがあり、多くは掘り方などから植栽痕と推定される遺構である。このような状況からは、18世紀前半の本地点は庭園のような利用状況であったとも考えられるが、植栽以外の泉水や飛び石など景観を作出するような遺構は確認できておらず、本格的な庭園として整備が進められていたかは疑問である。③エリアの SK477、SK358、SU360 などは段切りや大型建物址を切って構築されており、③エリアの空間利用が前段階から変化した可能性もある。

SU360 からは鉛インゴット 112 本がまとめて出土しており、それらは銅製錬で使用されるような高純度のものであるという（原 2002、本研究編研究 7 参照）。少なくとも本地点の調査では、銅製錬が行われた痕跡は見つかっておらず、大村藩がどのような目的で、どこから純度の高い鉛インゴットを入手したのかは不明である。居屋敷としての利用が一段落した詰人空間の1つの利用として、人があまり立ち入らなくなったこの場所に地下室（SU360）を構築し、鉛インゴットのような資材を保管する場所として利用することを考えたのかもしれない。

## 3. 18世紀後半～19世紀初頭（13図）

廃絶した遺構が最も多く確認される段階である。①エリアの井戸 SE2、採土坑 SK201、方形土坑 SK205、③エリアの溝状土坑 SK206、方形土坑 SK259、植栽痕 SK345、SK499、溝 SD362、SD361、土坑 SK278、SK583、性格不明遺構 SX267 などが挙げられ、種別的にも数量的にも、18世紀前半より更に多くの遺構が確認される。また、1遺構から出土する遺物量も増加する事から、18世紀後半代には本地点の利用状況がより活発になっていたと考えられる。

渋谷氏によると、18世紀後半には、隠居した元藩主や元藩主夫人、その子女らが江戸屋敷に居住する状態が常態化し<sup>(5)</sup>、上屋敷が飽和状態となり、白金下屋敷がそれらの人々の居住施設として使用された事は十分ありうるとされている。元藩主や元藩主夫人、その子女などが居住する状況になれば、それらの人々の世話をする家臣や侍女なども一定数居住していたはずであり、そのため藩邸整備が進められたことは想像に難くない。発掘調査でも18世紀後半代に検出される遺構の数、種類が増加し、1遺構から出土する遺物量もそれまでより増加する傾向が確認された事は、渋谷氏の想定を裏付けるものであろう。

しかし一方で、地形的に有利で、平坦面の確保も比較的容易な場所であった②エリアでは、遺構が増加する状況は確認されない。他のエリアとは別の規制があったのか、あるいは異なる空間利用が行われていた可能性がある。また①エリアにおいて廃絶年代が確認できた3基についても、それらと重複する遺構は確認されず、またSK201のような採土坑の掘削すら可能な場所であった事から、①エリアも18世紀後半代には住空間的な利用があったとは思われない。SE2、SK201からは、遺物収納箱10箱弱の遺物が確認されており、この時期に芥の廃棄が可能な場所であったと推測される。最も多くの遺構が確認されたのは、前段階と同じく③エリアである。ただ遺構検出場所は更に調査区南東寄りの地形的に低い部分であり、性格が特定される遺構は溝や植栽痕のみで、多くは性格不明な遺構や不整形土坑である。遺物が多量に出土している遺構も、そのような性格不明の遺構SX267や不整形土坑SK583であり、住空間としては不向きな調査区東端の低地部分や、南東部分の斜面地などを廃棄の場として利用するようになったのではなかろうか。

SX267からは遺物収納箱22箱分の遺物が出土し、その出土遺物の特徴として、碗、瓶、鍋、土瓶などの特定の器種がまとまって出土し、破片は大きく、半完形で出土しているものが多い点が挙げられる。また2次的な火熱を受けているものや、焼継などが確認されるものは少なく、蓋付き磁器碗などは身と蓋がセットで廃棄された状況が確認できることから、火災などの災害に伴う廃棄ではなく、何らかのタイミングで日常的に使用されていたものが一括廃棄された可能性が高い（報告編Ⅳ-97～101図）。SK583からは遺物収納箱19箱分の遺物が出土し、前述したSX267と同じく、大半の遺物は2次的な火熱を受けておらず、何らかのタイミングで廃棄された可能性が考えられる。その様相をみると、肥前系磁器碗、皿などに波佐見地方で生産される粗製品があまり見られない一方で、土瓶や播鉢などのいわゆる調理具や、大型火鉢やコンロなども一定量確認される（報告編Ⅳ-105～117図）。以上のような出土遺物の様相から、藩邸内の様々な場所から芥が集められ、廃棄された可能性も考えられる。なお両遺構ともにアワビやサザエ、マガイなどの階層が上位の人々の食物残滓と推定されるものも検出されており（阿部2022、本研究編研究5）、様々な空間、階層、場面の芥がまとめて廃棄されている可能性を裏付ける証左となろう。

前述したように18世紀後葉から19世紀初頭にかけて③エリアでは、段切り部分に版築を伴う大規模な整地層が

確認される。近代以降の撓乱のため版築層は平面的にはグレーのトーンで示した範囲の検出にとどまるが、この整地により、段切り面で検出された大型建物址をはじめとする遺構が埋められ、西側台地部分との平準化が進められた様子が確認される。版築層により整地されたエリアで検出された遺構は、小ピットや土坑など10基ほどで、それらは概ねD5、D6、E5、E6グリッドの版築層が確認された範囲の南端部付近に限定され、遺物が出土せず、深さも浅いものである。SD324、SD357は南北方向にのびるやや深い溝であり、ちょうど西側高台と東側低地との地形転換点に構築されていることから、整地後も東西の高低差は意識され、これらの溝で区画された藩邸利用が行われていた可能性もある。このような整地の契機として、寛政6（1794）年の備前町上屋敷全焼を契機とする下屋敷の居屋敷化が指摘されている。渋谷氏によると、寛政6年の火災後、新たな上屋敷（永田町上屋敷）が完成するまでの約6年間、下屋敷を居屋敷として利用するため、「御殿空間」も「詰人空間」も多くの建物を新築・増設する必要が生じたのではないかとされている<sup>(6)</sup>。

整地層が確認されなかった西側台地上に位置するSE2、SK205、南西隅のSK583、東側低地部分に位置するSK206、SX267、SK259、SK278なども遺構出土遺物の年代観から整地層と同時期に廃絶したことが確認されることから、本地点が位置していた藩邸北側では、18世紀後葉から19世紀初頭段階に西側台地部分も含め大規模な作事が行われ、藩邸内における本地点の空間利用が大きく変化した事が想定される<sup>(7)</sup>。渋谷氏の指摘のように多くの建物を新築・増設する必要が生じた中、より広大な平坦地確保の手段として、藩邸西側の台地部分と藩邸東側の谷部分の高低差のある土地利用を見直し、版築を伴う大規模な整地を行い、藩邸北側付近の平準化を図り、居屋敷として利用しやすい空間にしようとした可能性はあろう。

#### 4. 19世紀代（14図）

19世紀代に廃絶したことが確認されるのは、不整形大型土坑SK207、SK229、SK258などであり、③エリアの南東部に限られる。これらの遺構はいずれも多量の遺物が出土しているという共通点がある。SK229、SK258の覆土には、漆喰、炭化物、焼土、灰褐色粘土、動物遺体などを含む層が確認され、これらは日常の廃棄行為で堆積したと報告されている（報告編2022）。一方、本地点で最も多くの遺物が出土したSK207は、覆土に多量の焼土と焼けた瓦や陶磁器を多く包含し、陶磁器の年代観から安政元（1854）年の火災の一括廃棄と考えられ

ており、版築後も③エリア南側の西から東への傾斜地が、邸内の廃棄場所として利用されていた状況が窺える。SK207の出土遺物の様相をみると、碗、皿に加え、段重、壺、土瓶などが蓋と身がセットで出土し、磁器製の花生や植木鉢などに大型品や凝った装飾が施されたものが目立つなど、他の遺構とは出土遺物の様相が全く異なる(報告編Ⅳ-11~69図)。このような出土遺物の様相からは、藩邸内の蔵(?)のような所で保管されていた陶磁器類が被災し、廃棄された可能性も考えられる。

19世紀段階にSK229やSK258のような大型廃棄土坑が構築され、大量廃棄が行われた背景として考えられるのは、寛政11(1799)年12月の永田町上屋敷の完成と、相対替えによる上屋敷の屋敷地拡大があると推測される。渋谷氏によると、大村藩は寛政6(1794)年に消失した備前町上屋敷に変わり、寛政6年に永田町上屋敷3600坪を新たに拝領し、その後相対替えを利用し、永田町上屋敷の隣接地を囲い込み、永田町上屋敷は5049坪に事実上拡大したという<sup>(8)</sup>。備前町上屋敷は消失時2719坪3合であり、それと比べれば遙かに広大な面積が確保できた事で、下屋敷をさほど利用しなくとも上屋敷の機能を維持することが可能となったのではなかろうか。そして下屋敷が6年間にわたる居屋敷としての役割を終え、下屋敷内に居住する人数も減少し、建物の新設・増設などは不要となり、必要とされたのは上屋敷に戻る人々が移動に伴い排出する芥などを廃棄するための芥溜であり、それがSK229やSK258を構築するきっかけになったのではなかろうか。

前述したことを裏付けるものにSK258やSK229からの出土遺物の様相が挙げられる。SK229には完形に近い状態の陶磁器類が比較的多く認められ、それらとともに骨(魚、鳥、ほ乳類など)や貝などが焼土を伴わない土中から確認されていることから、日常の廃棄行為で堆積したものと考えられると指摘されている(報告編2022)。阿部氏の分析によると、出土した貝類には大型のサザエやアワビなどが多く(阿部2022)、詰人空間からの残滓である可能性も無くはないが、御殿空間から廃棄された残滓である可能性が高いと推測される。一方、陶磁器類には御殿で使われていたような上質の陶磁器類はあまり検出されていないが、焼継痕跡のあるものはあまりなく、完形あるいは完形に近い状態で廃棄されている陶磁器類が目立つ。陶磁器類で多く認められるのは、瀬戸・美濃系磁器端反碗、湯呑碗、飯碗、徳利などであり、詰人空間で利用、廃棄されたと推測されるものである。また武家屋敷では出土することがあまり多くない筍や簪、人形、ミニチュアなども含まれ、屋敷内の子女が

居住していた空間から廃棄されたことを想起させるものも一定量出土しており、上屋敷への移住に伴い、様々な空間、階層の芥がまとめて廃棄された状況が推測される。

整地をしてもなお住空間として適さなかった本地点南東側部分が、藩邸全体から芥が集積される場所として利用された可能性は高い。ただし掘り方や覆土の堆積状況からはSK258やSK229には複数回の掘削と埋め土が行われたような状況は認められないことから、日常的な廃棄が繰り返されたというよりは、下屋敷が居屋敷としての役割を解かれるという特殊な状況下で発生した芥を、その頃の日常の廃棄物とともに廃棄したのではないだろうか。さらに安政元(1854)年の火災で住居向きが全焼した際も、SK258やSK229と一部重複する形でSK207を掘削し、火災で被熱した陶磁器類や瓦などを焼土とともにまとめて廃棄する場としても本地点の南東側エリアを利用したのだろう。ただ安政元年の火災後も度々災害に見舞われている<sup>(9)</sup>が、それらの災害に伴う廃棄物や、安政元年以後の日常的な廃棄物などが出土する遺構は確認されておらず、安政元年の火災後、本地点の空間利用が変わり、それに伴って一括廃棄場所としての利用も無くなったのかもしれない。

#### 第4節 小結

これまで遺構の検出状況や主軸方向、変遷などを確認し、文献資料を詳細に分析された渋谷氏の所見を合わせ、本地点の空間利用について検討してきた。その中で見えてきたのは、藩邸の大部分が複雑な傾斜面上に位置しながらも、上屋敷のおかれた状況に対応し、段切り、版築などの地形を変える大規模な作事を行い、平場を作出したり、住空間としては不向きであった場所には大型土坑を掘削し、屋敷内の芥処理に対応する下屋敷の姿であった。そしてこのような上屋敷と下屋敷の連動する様子は、拝領直後から幕末まで続く事が確認された。ただ大型廃棄土坑SK207を利用した火災処理が行われた後は遺構や整地層などが確認されないことから、下屋敷北側が積極的に利用されたとは考えにくい。渋谷氏によると、文久2(1862)年、幕政改革により大名妻子の在府・在国が自由とされたのを機に、大村藩では江戸の妻子らを文久3(1863)年3月までにすべて帰国させたという。このことによって上屋敷が狭隘化することも無くなり、上屋敷との関係性が変化し、下屋敷の利用が限定的になったとも考えられる。

最後に、渋谷氏が課題として挙げられていた相対替え替地の利用実態について少し触れておきたい。渋谷氏が相対替え替地と推定された部分と調査地点を照合する

と、ⅡとⅢとされた部分の南西部分が含まれていることが判る(5図)。Ⅱの部分は寛政2(1790)年に、Ⅲの部分は寛政10(1798)年に、それぞれ相対替えされたことになっている。しかし版築層出土遺物の年代観から、まさにこの頃は版築を伴う大規模な整地作業が行われていたと推定される時期であり、この替地部分にも版築層が確認されていることから、実体を伴う相対替えが行われたとは考えにくい。また18世紀後葉から19世紀代、南側にはSK207をはじめとする廃棄土坑が構築されるが、相対替え替地部分を含む北側整地面上には遺構は確認されず、整地後は「明地」となっていた可能性が高い。渋谷氏が指摘していた「名目のみ他家へ譲渡した場所をどのように利用したのか」、「替地として傾斜地を受け取った場合はどう利用したのか」という疑問について、少なくとも本地点に含まれていた部分に関しては、大村藩では「明地とし、利用していない」、受け取った側も「地業、作事などを行っていない」という事が確認される。「名目だけの相対替え」との指摘を受けないよう、受け取った側がいつでも利用可能な状態であることを示すために意図的に「明地」としていたとも考えられるのではないだろうか。

本稿を草するにあたり、香取祐一、渋谷葉子、堀内秀樹の各氏には大変お世話になりました。末筆ながら感謝いたします。

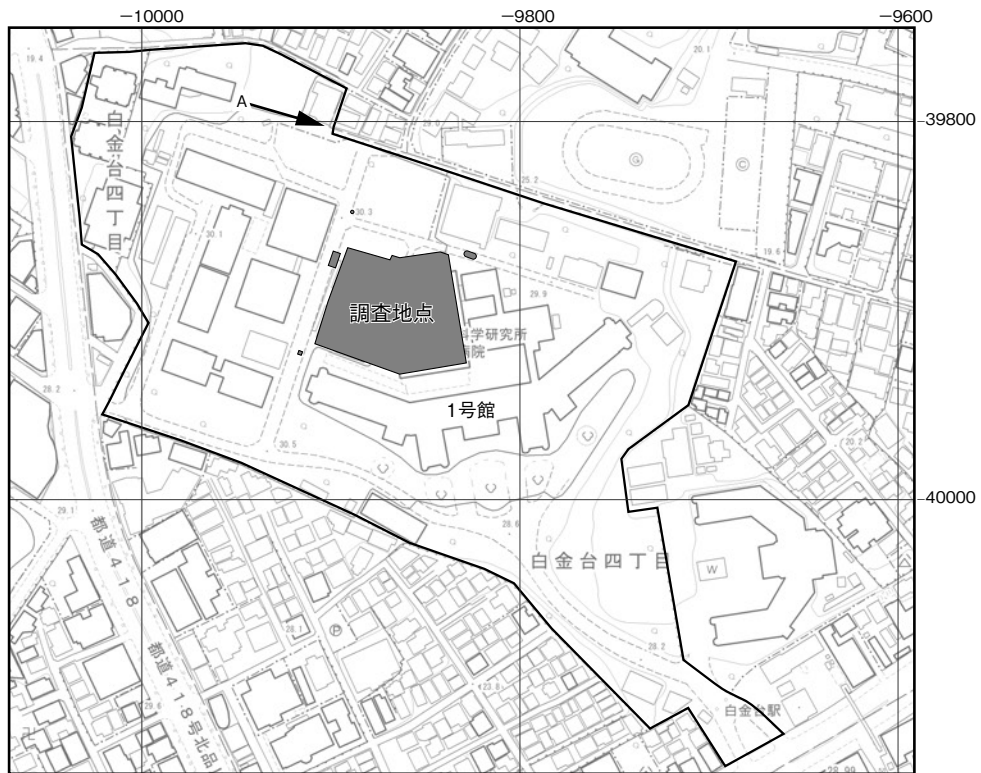
#### 【註】

- (1) B面は概ねF～Dライン付近の埋積谷西側立ち上がり付近斜面地の関東ローム層直上で検出した黒色土面。ローム土直上の自然堆積層であり、B面構成層からは土師器や一部縄文土器などの破片が少量出土している。江戸時代以前の自然堆積層と考えられるが、本面で検出した遺構の大半からは遺物が出土せず、遺物が出土し、年代比定が可能であった遺構は全て江戸時代の遺構であり、B面検出の遺構はL面と同じ扱いとした。
- (2) 2020年2月3日、6月3日、2021年2月1日～2月10日、2月24～6月21日に調査が行われた白金台囲障改修地点(年報15掲載予定。以下、囲障改修地点)A区で検出されたSX20、SX38は、地業に関連する遺構ではないかと報告されている。SX20は医科学研究所北側道路に並行な主軸を有し、敷地内から道路に傾斜を形成し、段差を解消させる意図があったと推測されている。SX38は遺存状態は良くないが、西から東への傾斜に段差を設け平場を形成する意図があったのではと推測されている。
- (3) 医科学研究所北側の道路を基準に『御府内場末往還其他沿革図書』と明治28(1895)年『東京実測全図』から屋敷範囲を復元し、屋敷の南側が平坦面、北側が傾斜面という地形的な条件を考慮し、本地点は藩邸北側の「詰人空間」として利用されていた可能性が高いとされている(渋谷2004、本研究編研究8)
- (4) 大橋氏によるとSD214から出土した染付磁器壺は平戸焼磁器の盃台の可能性があり、三つ葉葵文の表現からは17世紀末に遡る可能性が高く、年代的には1680年代の鶴姫(五代將軍綱吉娘)の資装(嫁入り道具)献上に伴う可能性のあるものだと指摘を頂いた(大橋2017)。
- (5) 享保16(1731)年、備前町上屋敷が類焼した際には七代藩主純富が短期滞在、純富の生母紋も白金下屋敷に避難した可能性があるという。享保18(1733)年の白金下屋敷が被災した際には、七代藩主純富の妹藤が負傷したことが確認されるという。享保18年から元文3(1738)年までは6代藩主純庸が隠居しており、寛延3(1750)～明和2(1765)には6代藩主夫人、7代藩主夫人、8代藩主夫人が、安永6(1777)～天明6(1786)には、7代藩主夫人、8代藩主夫人、9代藩主夫人が江戸屋敷に居住していたという。
- (6) 渋谷氏によると、白金下屋敷が寛政6(1794)年11月以来、約6年もの長きにわたり藩主居屋敷として機能していた事から、下屋敷の「御殿空間」が藩主在府時の恒常的な生活の場になるとともに、書院などの儀式空間や政務全般を執行する役所向きなどに必要な施設が増設され、「詰人空間」でも従来居住していた藩士に上屋敷居住だったものが加わることになり、そのための長屋が増築されたとみられるとされ、「御殿空間」、「詰人空間」ともに多くの建物を新築・増設する必要が生じたのではないかと推定されている。
- (7) 本地点北東に位置する囲障改修地点で検出された段切り状遺構SX20、SX38も、出土遺物の様相などから本地点の段切りと同じく19世紀初頭頃には廃絶した可能性が高く、藩邸北側一帯がこの段階に整地が行われ、これまでとは異なる空間利用となった可能性はある。
- (8) 渋谷氏によると、寛政10(1798)年、天保3(1832)年、天保5(1834)年、天保8(1837)の4回にわたり白金下屋敷を用地とした相対替えが行われ、これにより獲得した用地は全て永田町上屋敷隣接地であり、これらの用地を囲い込み永田町上屋敷は5049坪に事実上拡大したという。
- (9) 安政2(1855)年の大地震では、上屋敷は殿舎・長屋・石垣・堀・土蔵が被害を受け、安政3(1856)の大風雨では、上屋敷の書院など殿舎表向きのあちこちが破損、長屋1棟が倒壊、万延元(1860)年7月24日の大風雨の際も被害に見舞われたという。いずれの災害も下屋敷の具体的な被害状況は不明であるが、上屋敷の被害状況を見ると、下屋敷において同様な被害があったと推測される。

【引用・参考文献】

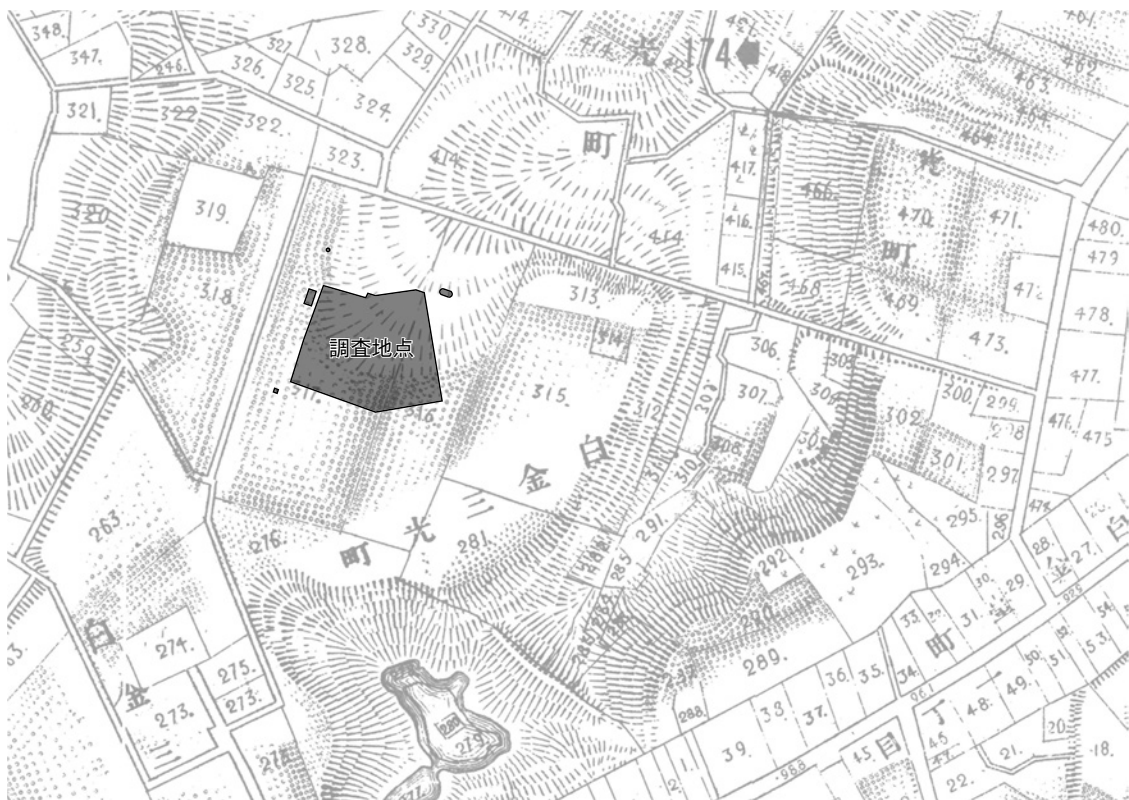
- 阿部 常樹 2022「大村藩下屋敷における動物利用の様相—医科学研究所附属病院 A 棟地点出土の動物遺体—」『東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡） 医科学研究所附属病院 A 棟地点発掘調査報告書 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室
- 大成 可乃 2011「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（2）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』7、東京大学埋蔵文化財調査室
- 大橋 康二 2017「江戸中期における家紋入り磁器の盛行について」『中近世磁器の考古学』第7巻 雄山閣
- 渋谷 葉子 2004「肥前国大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4、東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2、別冊
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004「医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点発掘調査略報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2022『東京大学白金台構内の遺跡（港区 No.135 遺跡） 医科学研究所附属病院 A 棟地点 報告編』
- 原 祐一 2002「東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3、東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内 秀樹 1997「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1、東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内 秀樹・大貫浩子 2021「東京大学構内遺跡編年修正について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』14、東京大学埋蔵文化財調査室





1図 調査地点位置図

世界測地系  
S=1/4000



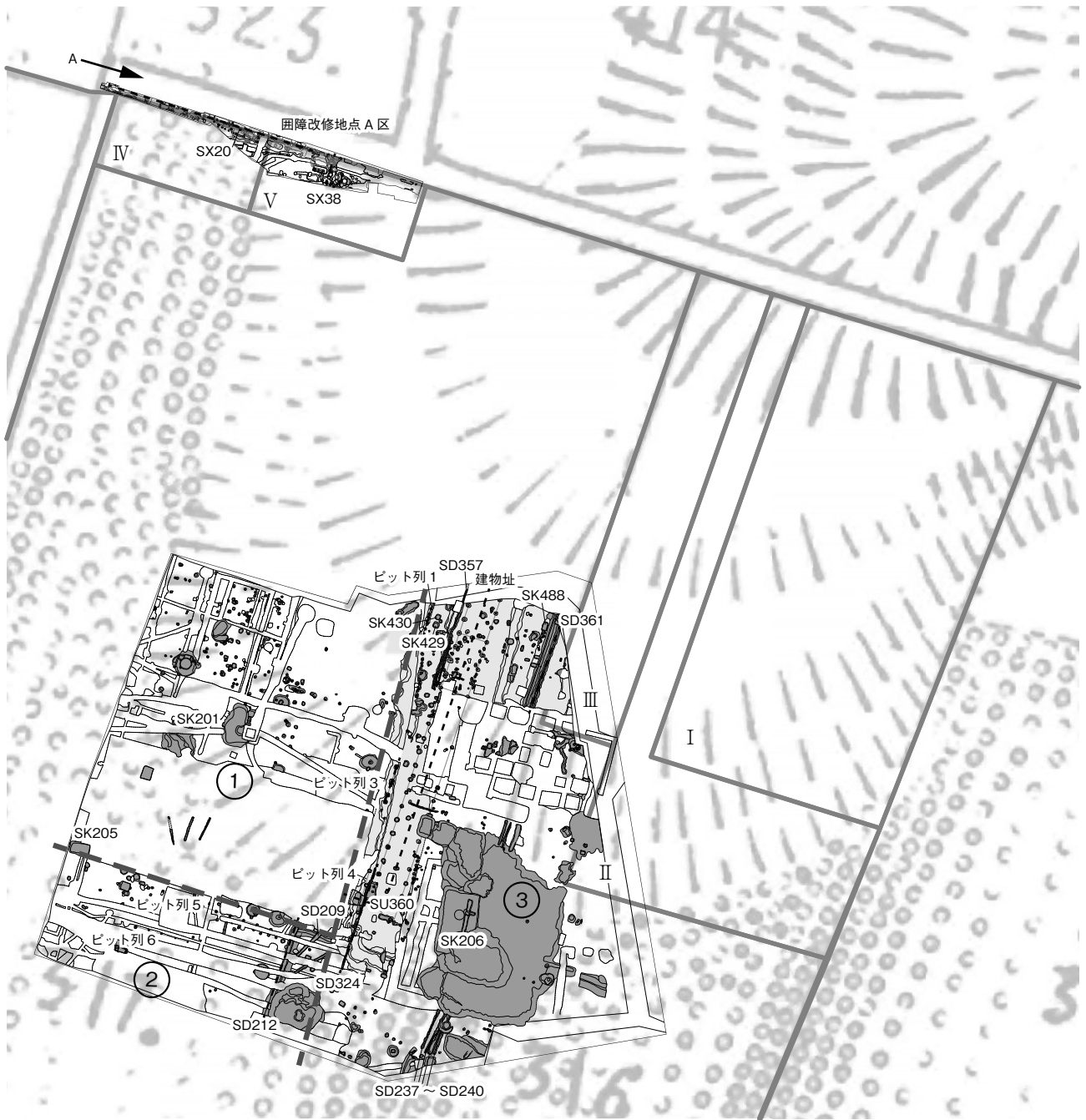
2図 明治28年の調査地点  
(明治28年『東京実測全図』に加筆)



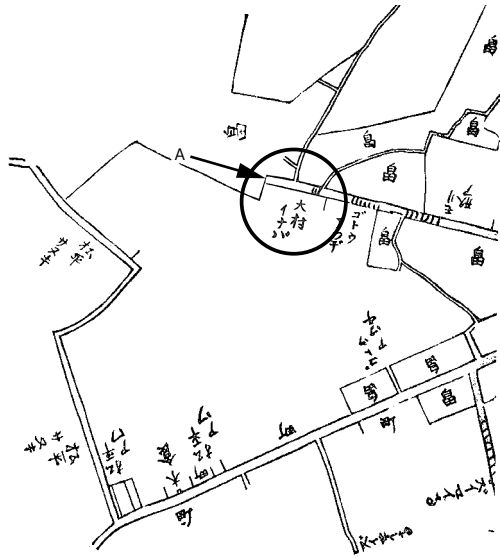
3図 B面、L面 遺構配置図



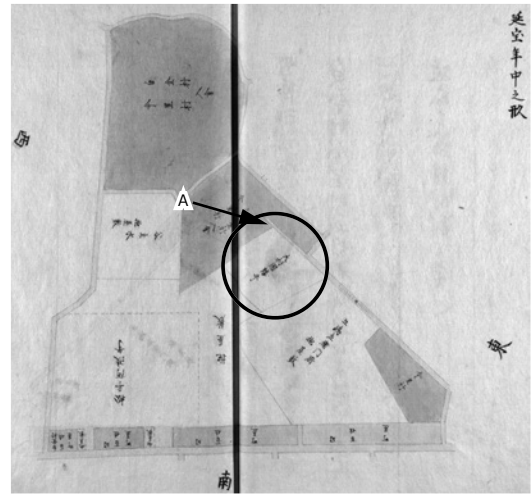
4図 A面、C面 遺構配置図



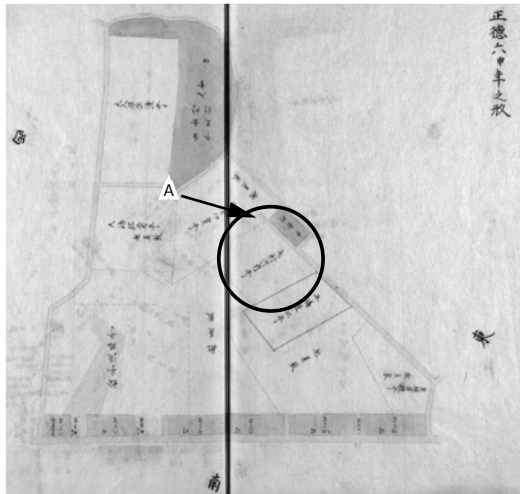
5図 明治28年『東京実測全図』と調査地点(渋谷2004を参考に作成)



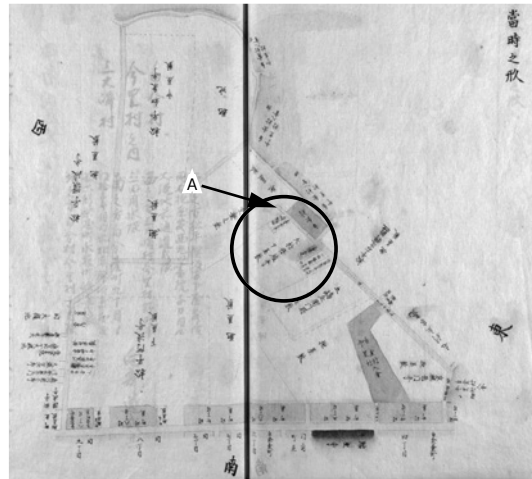
6図 「新板江戸大絵図」(寛文10~13年)



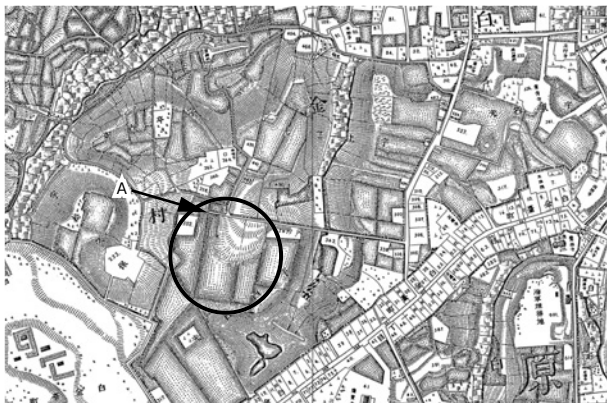
7図 「御府内場末往還其外沿革図書」(延宝年中)  
国立国会図書館オンライン



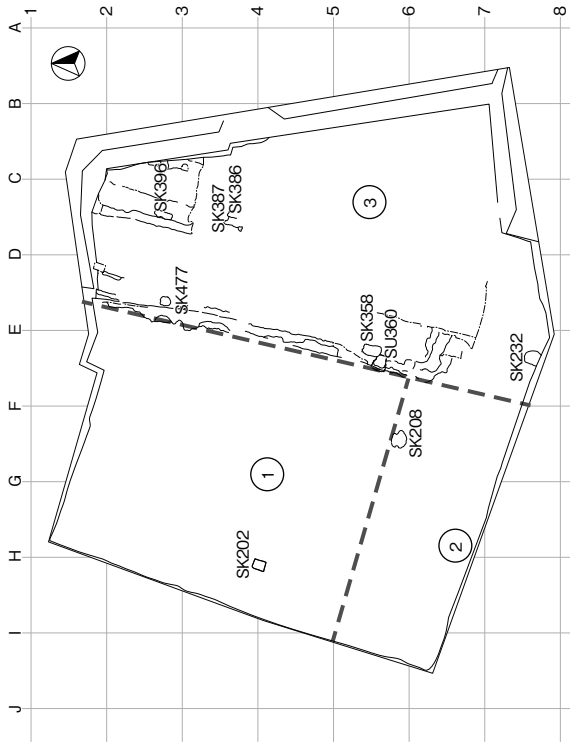
8図 「御府内場末往還其外沿革図書」(正徳6年)  
国立国会図書館オンライン



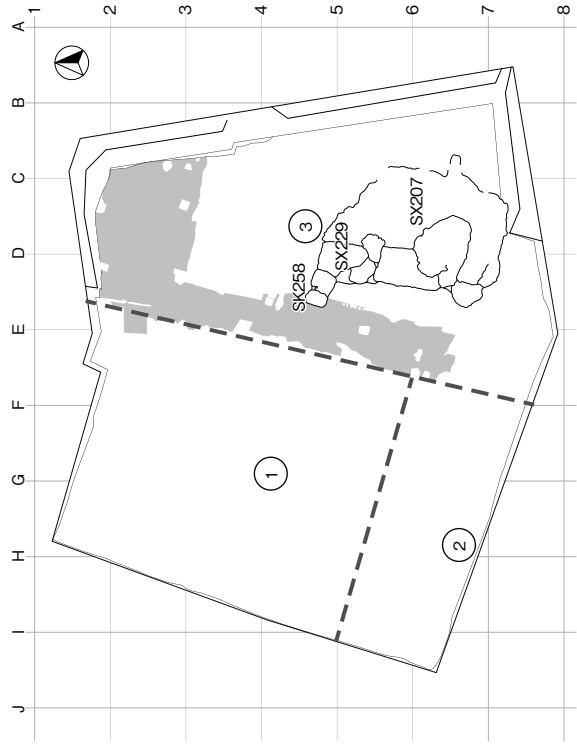
9図 「御府内場末往還其外沿革図書」(弘化3年)  
国立国会図書館オンライン



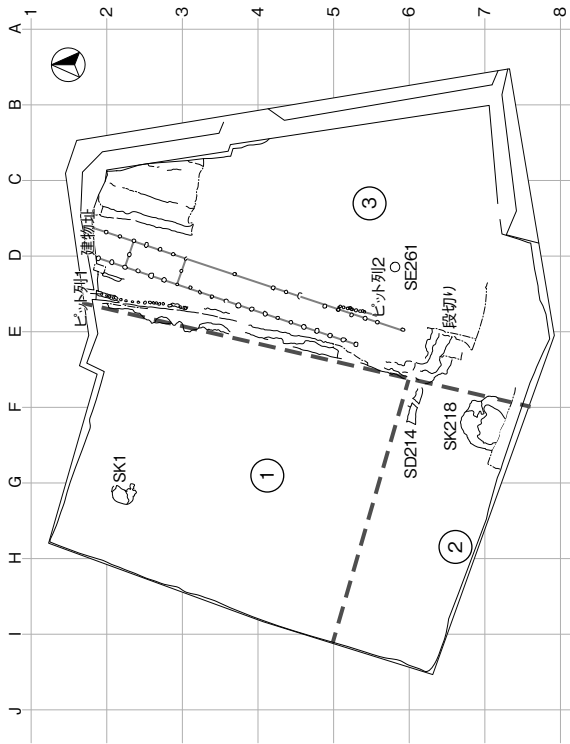
10図 「東京実測図」(明治20年)  
東京都港区三田図書館 1972より抜粋



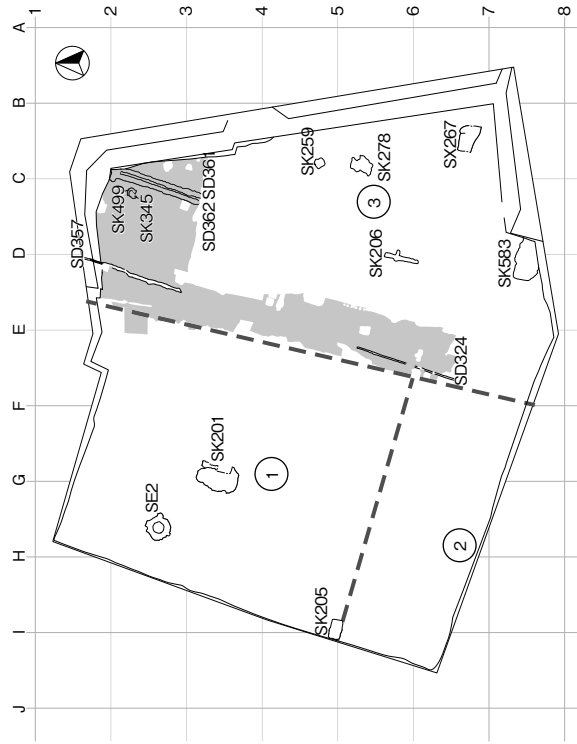
12図 18世紀前半代



14図 19世紀代



11図 17世紀代



13図 18世紀後半～19世紀初頭

# 医科学研究所附属病院 A 棟地点 出土一括資料の数量的分析

堀内 秀樹

## はじめに

アセンブリッジによる数量的分析法と様相把握は、1980年代以降、中世、近世消費遺跡から出土した陶磁器の基本的な分析法として実践されてきた（日本貿易陶磁研究会 1984、港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986、新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 など）。

東京大学埋蔵文化財調査室では、1990年に刊行した医学部附属病院地点以降、①文化相の復元、②社会・経済相の復元、③年代相の復元を目的として、数量的把握・分析を行ってきた（成瀬・堀内 1990、堀内 1997a、堀内 1997b、成瀬 1999、堀内・大貫 2005、大成 2006、堀内 2008、大成 2012、大貫 2012a、大貫 2012b、安芸・小林・堀内 2012、東京大学埋蔵文化財調査室 2016、大成 2016、成瀬 2021）。こうした分析には、「どこに」（サンプルユニット）、「どのようなものが」（分類）、「どれだけ」（カウント）包含されていたかを明らかにし、位相の復元を指向することになるが、東京大学埋蔵文化財調査室では、サンプルユニットを 100 個体以上の陶磁器が出土している遺構や層を対象にしている。ボーダーを 100 個体に設定した理由は、百分率で数量表示を行うことで、それ以上の資料数が望ましいと考えたからである。

分類は、医学部附属病院地点で示した基準を基に（成瀬・堀内 1990）、いわゆる東大分類として、「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類（1）」で示して以降（東京大学埋蔵文化財調査室 1999）、必要に応じて見直しを行い、医学部附属病院入院棟 A 地点で示した「分類 4」（東京大学埋蔵文化財調査室 2016）に準拠している。詳細は、参照されたい。また、出土土人形・玩具の分類については、「東京大学構内遺跡出土土人形・玩具の分類」（安芸・小林・堀内 2012）に準拠した。

カウントは、特定部位カウント法を採用している。ロクロや回転台を使用した製品については底部中央、ロクロや回転台を用いていない型物製品が多く含まれる水滴、急須、土瓶は注口部の存否で個体数カウントを行っている。破片、底部、口縁部、推定数、重量などで行わな

い理由は、識別対象の数量が膨大であること、生産個体数との整合が望ましいと考えたことによる。

## 1、医科学研究所附属病院 A 棟地点出土陶磁器・土器類の年代的様相

医科学研究所附属病院 A 棟地点からは、陶磁器・土器類が 100 個体以上出土した遺構は、SK207、SK229、SX267、SK583、版築の 5 遺構・層であった（1 図、1 表、2 表）。以下、各遺構の年代的位置づけや概要に触れた上で、出土量が最も多かった SK207 出土遺物を中心に詳述したい。

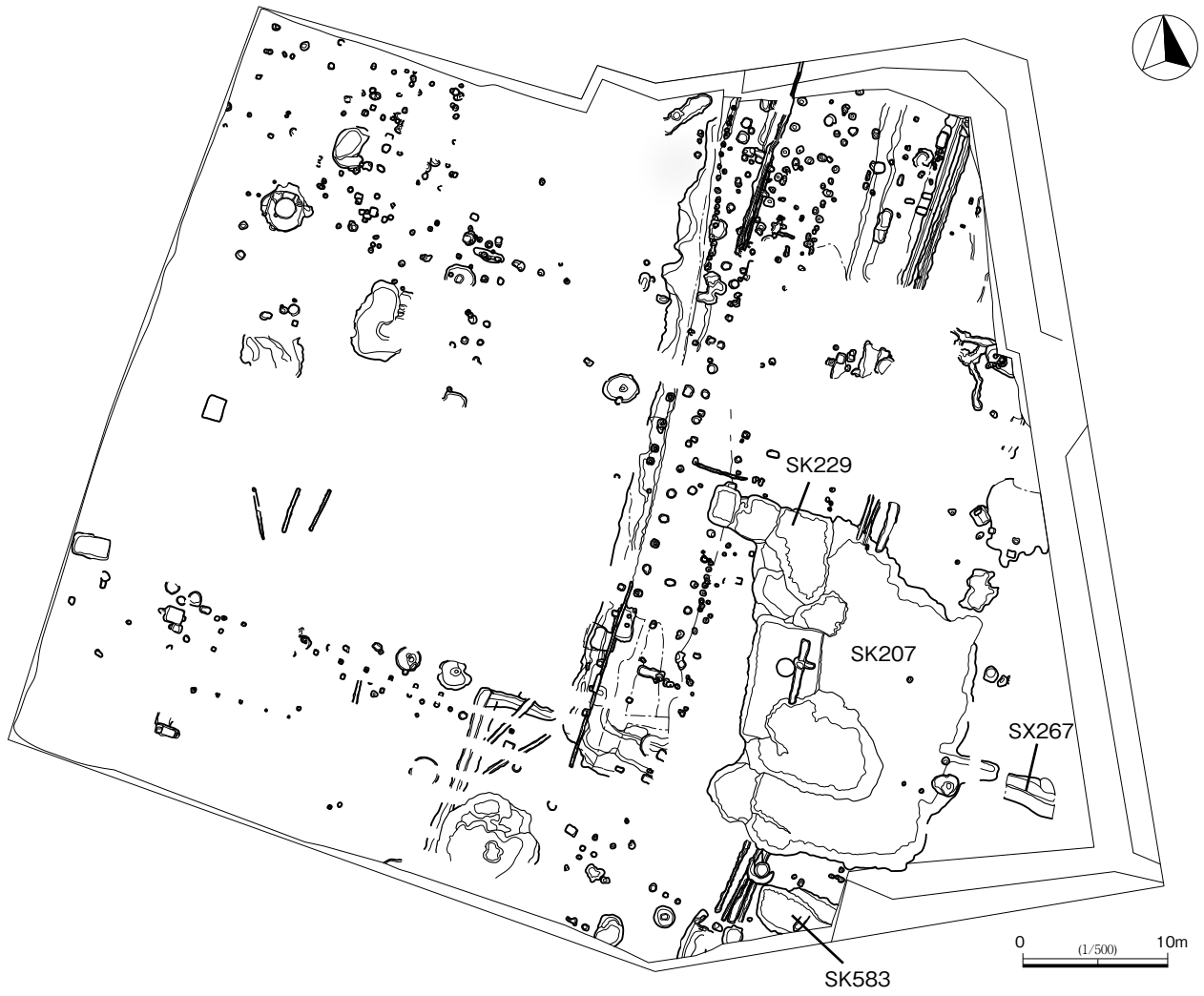
### （1）年代的位置づけ

#### ① SK207

SK207 は、本地点で最も遺物の出土量が多かった大型遺構である。報告編でも触れているように、埋土には焼土を含む厚い層から、二次的な火熱を受けた多量の瓦、陶磁器、金属製品などが出土しており、こうした状況から遺物は火災に伴う廃棄と考えられる。遺構は東へと落ちる傾斜地の谷底に近い地域に位置し、調査によって周囲に多くの遺構が存在しないいわば空閑地域であった。ここにおそらく火災後の造成土を得る目的と絡めて瓦礫廃棄場を作ったと推定される。

年代判断のメルクマールとしている磁器は、JB 群（肥前系）碗が JB-1-d、e、f、g、i、j、l、m、n、o、p、u、v、皿が JB-2-e、i、j、o、p、q、r、s、JC 群（瀬戸・美濃系）碗が JC-1-a、c、d、e、f、皿が JC-2-b、e、f であった（分類基準は報告編を参照されたい）。肥前端反碗（JB-1-n）、蛇ノ目凹形高台皿（JB-2-i）や多くの JC 群が存在していることから、東大編年のⅧ期に該当するが、JC 群の型作りの皿（JC-2-e、f）などが存在する点、いわゆる寿文皿などの木型打込製品が確認されていないことから東大編年のⅧc 期に該当する資料群と位置づけられる。

また、最も多く出土している肥前系磁器碗は、端反碗（JB-1-n）31 個体と薄手半球碗（JB-1-f）30 個体で、Ⅷb



1図 数量分析対象遺構の位置



2図 汐留遺跡5H-042出土遺物



3図 染井遺跡560号遺構出土遺物



1 表 陶磁器・土器組成表

\*カウント基準を満たす個体資料はないが、破片資料が存在しているとき「0」で示した。

段階	胎質・産地 J A1 (原産窯系)																		合計	J B (肥前系磁器)	
	1	2	3	5	6	9	10	13	15	J A2		J A3		6	8	J A9	他	合計		J B (肥前系磁器)	
胎質・産地 器種 小分類	1	2	3	5	6	9	10	13	15	2	3	1	2	6	3	18			1 (碗)	a	b
VII																					
VII	1										1								1		
VII~Ⅷa										0				2							1
Ⅷc																					0
Ⅷc												1	4								5
合計	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	2	0	0	0	0	0	9	0

段階	胎質・産地 J B (肥前系磁器)																														
	器種 1 (碗)																														
小分類	c	d	e	f	g	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	他	小計								
VII	1		1	9	11	2	4	1	4	0	1			1									2	47							
VII	3		4	25	8	2	5	1	1		1			5	1	2							0	59							
VII~Ⅷa		1	6	17	14	6	5	10	1		1			2		1							2	72							
Ⅷc			5	3	3		0	1	8	7														29							
Ⅷc		1	6	30	10	8	2	5	5	2	31	5	2											109							
合計	4	2	22	84	46	27	14	0	15	21	41	12	4	8	1	3	0	2	5	0	0	4	316								

段階	胎質・産地 J B (肥前系磁器)																														
	器種 2 (皿・平鉢)																														
小分類	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	他	小計									
VII							3		1	2				0		1							3								
VII		0	1	1	1	1	1	3	1	3	5	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1		7								
VII~Ⅷa			1	2	2	3	3			8			1		3	1	2						13								
Ⅷc					9		14								1	1	3						26								
Ⅷc					28		33		33	2				10	3	19	2	1					29								
合計	0	0	2	0	40	1	7	0	48	15	5	1	2	0	17	6	22	5	1	0	5		177								

段階	胎質・産地 J B (肥前系磁器)																								
	器種 3 (大皿・大平鉢)																								
小分類	b	c	d	e	f	他	小計	4 (鉢)																6 (杯)	
								a	b	c	d	e	f	g	h	他	小計	a	b	c	d	e			
VII	1						1		3									3							
VII							0		3									3							
VII~Ⅷa		0				1	1		4						0		0	4	1	2	1		1		
Ⅷc				1			1		3								3	2					1		
Ⅷc	2						2		14				3		11	28	5	9							
合計	3	0	0	1	0	1	5	0	27	0	0	3	0	0	0	11	41	8	13	2	0	1			

段階	胎質・産地 J B (肥前系磁器)																			
	器種 6 (坏)			7 (狭口)				8 (広飯器)				9 (香炉・火入れ)						10 (瓶)		
	小分類	f	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	e
VII	SX267	1	1	2	4		1		1								0			
VII	SK583	1	1	4	3	1			1	1					1		2			0
VII~VIIa	版築層	6	4	15	1	1			2	0	0									0
VIIc	SK229			3	0		2		2											0
VIIc	SK207	5	19	2	2	1	2	2	5	1	1	1	1						2	2
合計		13	6	43	4	7	0	11	2	2	2	5	0	9	1	0	1	0	4	2

段階	胎質・産地 J B (肥前系磁器)											12 (蓋物)	13 (合子)					19	20
	器種 10 (瓶)			11 (御神酒德利)				12 (蓋物)					13 (合子)						
	小分類	他	小計	a	b	c	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計		
VII	SX267	0	0	3	1	3	1	1	5		0						5		
VII	SK583			0	1	1	1	1	5	1							6	0	
VII~VIIa	版築層	1	1	5	5	3	0	1	4					1			4	0	
VIIc	SK229	0	0	0	4	0		4									4	1	
VIIc	SK207	2	1	10	3	28	3	10	41	1	1	10	2	2	4		66	2	
合計		1	3	1	19	0	0	20	5	43	5	12	0	0	3	6	0	9	2

段階	胎質・産地 J C (瀬戸・美濃系磁器)											合計	I (碗)	他	J N (九谷系磁器)																				
	器種 21			22				23							24				27 (水注)				29		30					35					52
	小分類	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計									
VII	SX267							0										74																	
VII	SK583							0										94																	
VII~VIIa	版築層							0										132				2	0	1	1	4									
VIIc	SK229							0										73	4	1	28	7	10		1	51									
VIIc	SK207	8	4		1	1	1	1										360	7	2	49	9	1		68										
合計		8	4	0	1	1	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	1	733	11	0	3	79	16	11	2	123									

段階	胎質・産地 J C (瀬戸・美濃系磁器)											合計	I (坏)	他	J N (九谷系磁器)											
	器種 2 (皿・平鉢)			4				5							6 (坏)				7		8					
	小分類	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計
VII	SX267							0										0								
VII	SK583							0										0								
VII~VIIa	版築層							0										2								6
VIIc	SK229	2			2			5	1	8								14								
VIIc	SK207	8		15	6	17	6	29	5	1	25	1	1	23	0	0	2	23	0	0	0	2	52	0	5	4
合計		10	0	0	17	6	0	34	5	2	35	1	1	37	0	0	2	76	0	0	2	76	0	5	4	6

段階	胎質・産地 J C (瀬戸・美濃系磁器)											合計	I (碗)	他	J N (九谷系磁器)											
	器種 11 (御神酒德利)			12				13							14				15		16					20
	小分類	b	c	d	e	f	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	他	小計
VII	SX267							0																		
VII	SK583							0										0								
VII~VIIa	版築層	0			0			0										12								12
VIIc	SK229							0										79								79
VIIc	SK207	1	1	1	5	1	1	11	2	1	2	8	0	4	0	0	190	0	0	0	0	0	0	0	0	
合計		0	1	1	1	5	1	11	2	1	2	8	0	4	0	281	0	0	0	0	0	0	0	0	0	281

段階	胎質・産地 J R (三田系磁器)										J Z (産地不明)										磁器合計	
	5	13	21	他	合計	1	2	6	他	合計	1	2	6	他	合計	合計	合計					
Ⅶ																	75					
Ⅶ						0											95					
Ⅶ～Ⅷa						0											146					
Ⅷc						2											154					
Ⅷc						2											557					
合計	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1027					

段階	胎質・産地 器種	T B (肥前系磁器)										2 (皿・平鉢)																			
		TA2	TA5	TA6	TA7	TA8	TA9	TA10	他	合計	1 (碗)	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b					
Ⅶ	小分類					5		15	3												1										
Ⅶ	SK583																														
Ⅶ～Ⅷa	版薬層																														
Ⅷc	SK229																														
Ⅷc	SK207																														
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地 器種	2 (皿・平鉢)										3 (大皿・大平鉢)										5 (鉢)										6								
		c	d	e	f	g	h	i	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	小計	a	b					
Ⅶ	小分類																																							
Ⅶ	SK583																																							
Ⅶ～Ⅷa	版薬層																																							
Ⅷc	SK229																																							
Ⅷc	SK207																																							
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

段階	胎質・産地 器種	8 9 (香炉・火入れ火入れ)										10 13 (蓋物)										15 (蓋・甕)										22(花生) 23 (片口鉢)										27			
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	小計	a	b								
Ⅶ	小分類																																												
Ⅶ	SK583																																												
Ⅶ～Ⅷa	版薬層																																												
Ⅷc	SK229																																												
Ⅷc	SK207																																												
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		

段階	胎質・産地 器種	T C (瀬戸・美濃系磁器)										1 (碗)										31										合計															
		a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	小計	l	m	n	o	p	q	合計	合計												
Ⅶ	小分類																																														
Ⅶ	SK583																																														
Ⅶ～Ⅷa	版薬層																																														
Ⅷc	SK229																																														
Ⅷc	SK207																																														
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

段階	胎質・産地 T.C. (瀬戸・美濃系陶器)																									
	器種	1 (碗)	r	s	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	aj	ak	al	am	an	他	
Ⅶ	小分類		4	3	0																					0
Ⅶ	SX267																									
Ⅶ	SK583		1	2											0											3
Ⅶ～Ⅷa	版築層		1	3	1						1				1					1						
Ⅷc	SK229		0	2		0									0											
Ⅷc	SK207		3	4	1										0											4
	合計		9	14	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7

段階	胎質・産地 T.C. (瀬戸・美濃系陶器)																									
	器種	1 (碗)	2 (皿・平鉢)	a	b	c	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	
Ⅶ	小分類		9		1		3	1							1		2									
Ⅶ	SX267																									
Ⅶ	SK583		12			2	0							1												
Ⅶ～Ⅷa	版築層		16	0		0	0	0			0	0	0	5		2										
Ⅷc	SK229		3			0	1	1																		
Ⅷc	SK207		18			8	6	5	0	1				3		1										
	合計		58	0	0	1	10	7	0	0	0	1	0	10	0	5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地 T.C. (瀬戸・美濃系陶器)																									
	器種	2 (皿・平鉢)	3 (大皿・大平鉢)	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w
Ⅶ	小分類		9		0																					
Ⅶ	SX267																									
Ⅶ	SK583		1	4										0									2	4		
Ⅶ～Ⅷa	版築層		7	0										0												3
Ⅷc	SK229		2																							1
Ⅷc	SK207		2	26																						1
	合計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	6	1	7	16

段階	胎質・産地 T.C. (瀬戸・美濃系陶器)																									
	器種	9 (香炉・火入れ)	10 (瓶)	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w
Ⅶ	小分類		0																							
Ⅶ	SX267																									
Ⅶ	SK583		1	1																						
Ⅶ～Ⅷa	版築層		0																							
Ⅷc	SK229																									
Ⅷc	SK207		1	1	0	0	0	2	0	2	0	4	60	178	168	79	2	10	0	0	1	498	0	3	21	8
	合計		1	1	0	0	0	2	0	2	0	4	60	178	168	79	2	10	0	0	1	498	0	3	21	8

段階	胎質・産地 T.C. (瀬戸・美濃系陶器)																										
	器種	15 (蓋・甕)	18	19	21	22 (花生)	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	
Ⅶ	小分類		0																								
Ⅶ	SX267		1																								
Ⅶ	SK583		0																								
Ⅶ～Ⅷa	版築層		3																								
Ⅷc	SK229		0																								
Ⅷc	SK207		7																								
	合計		11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	T C (瀬戸・美濃系陶器)																									
	胎質・産地		25		26		27 (水注)		28		29		30		31 (火鉢)		34		38		39		40 (油受け皿)		他	
	器種	小分類	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	他	小計	a	b	c	d	e	他
VII	SX267					2	0	2					1	0												
VII	SK583		1		1		2						1	0												
VII~VIIIa	版薬層		0		0					1			2													
VIIIc	SK229		0		0		0						1	0												
VIIIc	SK207		0		0		0						3	1												
	合計		0	1	0	0	2	3	1	8	1	4	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0

段階	胎質・産地		T C (瀬戸・美濃系陶器)		合計	
	器種		40		44 (ひょうそく)	
	小分類	a	他	小計	他	合計
VII	SX267	2	1	109		
VII	SK583	1	0	50		
VII~VIIIa	版薬層	2	1	109	0	
VIIIc	SK229	0	1	154		
VIIIc	SK207	0	2	315	1	
	合計	5	3	737	1	

段階	胎質・産地		T D (京都・信楽系陶器)		合計	
	器種		I (碗)		2 (皿・平鉢)	
	小分類	a	他	小計	他	合計
VII	SX267	3	2	5	1	1
VII	SK583	2	3	7	1	1
VII~VIIIa	版薬層	2	5	8	0	1
VIIIc	SK229	2	0	3	5	6
VIIIc	SK207	3	7	14	6	15
	合計	6	18	37	11	44

段階	胎質・産地		T D (京都・信楽系陶器)		合計	
	器種		9 (香炉・火入れ)		14 (蓋・甕)	
	小分類	a	他	小計	他	合計
VII	SX267	1	1	2	0	2
VII	SK583	0	0	0	0	0
VII~VIIIa	版薬層	0	0	0	0	0
VIIIc	SK229	0	0	0	0	0
VIIIc	SK207	1	2	3	2	5
	合計	1	3	5	2	7

段階	胎質・産地		T D (京都・信楽系陶器)		合計	
	器種		23		27 (水注)	
	小分類	a	他	小計	他	合計
VII	SX267	0	0	0	0	0
VII	SK583	0	1	1	2	3
VII~VIIIa	版薬層	0	0	0	0	0
VIIIc	SK229	0	1	1	2	3
VIIIc	SK207	0	1	1	2	3
	合計	0	2	2	4	6

段階	胎質・産地			T D		T E (備前系陶器)				T F (備前系陶器)				T F												
	器種	他	合計	1	2 (皿・平鉢)	a	b	他	小計	5	10 (瓶)	a	b		他	小計	12	15	22	29	37	40	41	65	他	合計
Ⅶ	小分類		7					0	0																	
Ⅶ	SK267																									0
Ⅶ	SK583											1		2	3											3
Ⅶ～Ⅷa	版築層																							0		0
Ⅶc	SK229																									0
Ⅶc	SK207													1	1											2
	合計	0	107	0	0	0	0	0	1	1	1	1	0	3	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5

段階	胎質・産地			T G (常滑系陶器)		T H (森系陶器)			T I (万古系陶器)						合計		
	器種	他	合計	15	他	合計	1 (瓶)	他	小計	29	他	合計	1	16		34	他
Ⅶ	小分類		0			0		0									
Ⅶ	SK267																
Ⅶ	SK583																
Ⅶ～Ⅷa	版築層	1				4		1	1	1	1	1	1				0
Ⅶc	SK229					0		0	0	0	0	0	0				0
Ⅶc	SK207					2		1	1	2	2	2	2	2	2	2	0
	合計	1	0	4	1	6	0	2	3	0	3	0	3	0	2	0	2

段階	胎質・産地			T J (大甬・相馬形陶器)		T K (丹波系陶器)		T L (礪系陶器)		T M (笠岡・益子系陶器)		T N (九谷系陶器)		T O (並屋系陶器)	
	器種	他	合計	5 (鉢)	他	合計	29	他	合計	2	他	合計	10 (瓶)	15 (甕・他)	合計
Ⅶ	小分類		0				0	0							
Ⅶ	SK267														
Ⅶ	SK583						6	0	6	0	0	0	0		0
Ⅶ～Ⅷa	版築層					1		2	3	0	0	0	0		0
Ⅶc	SK229					1		3	3	0	0	0	0		0
Ⅶc	SK207					1		6	6	0	0	0	0		0
	合計	1	1	0	2	0	2	17	0	17	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地			T P (淡路系陶器)		T Q (江戸在地系陶器)		T R (飯能系陶器)		T S (薩摩系陶器)		T T (生産地不明)		合計
	器種	他	合計	1	他	合計	42	他	合計	34	他	合計	1 (瓶)	
Ⅶ	小分類		0				0		0	3				
Ⅶ	SK267													
Ⅶ	SK583						0	0	3	3				1
Ⅶ～Ⅷa	版築層												1	
Ⅶc	SK229							0	2	2			1	1
Ⅶc	SK207							0	5	5			1	1
	合計	0	0	0	0	0	0	0	14	0	14	0	14	1

段階	胎質・産地			T Z (生産地不明)		T A (土瓶)		合計
	器種	他	合計	1	他	合計	34 (土瓶)	
Ⅶ	小分類		0					
Ⅶ	SK267							
Ⅶ	SK583						6	6
Ⅶ～Ⅷa	版築層						1	1
Ⅶc	SK229						1	1
Ⅶc	SK207						4	4
	合計	5	1	1	0	0	12	11

段階	T・Z (生産地不明)													陶器 合計						
	胎質・産地 器種 34 (土瓶)			39			42 (行平鍋)			53			他		合計					
	i	k	l	n	他	小計	a	b	c	d	e	f		g		h	i	j	k	他
Ⅶ						2								0					3	123
Ⅶ						0								0					14	92
Ⅶ～Ⅷa						2								0					15	151
Ⅶc						1								0					11	192
Ⅷc						6								3					66	458
合計	0	8	8	5	0	7	2	1	2	0	1	0	0	3	3	1	109	1016		

段階	D・Z (生産地不明)													5 (鉢)	9				
	胎質・産地 器種 DD (京都・信楽系土器)			2 (皿・平鉢)			24			31 (火鉢)			46						
	16	49	50	他	合計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	合計	
Ⅶ					0	2									1	6		0	
Ⅶ					0	6	35								22	67		1	
Ⅶ～Ⅷa					0	1	5								4	14		2	
Ⅶc					0	1									1	2		1	
Ⅷc					1	8	12								4	28		0	
合計	1	0	0	0	1	17	53	0	7	0	7	1	0	32	117	3	0	1	4

段階	D・Z (生産地不明)													38			
	胎質・産地 器種 15 (硬質瓦葺蓋付)			21 (種木鉢)			24			31 (火鉢)			45				
	a	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	合計	
Ⅶ			0													5	
Ⅶ			0												1	1	
Ⅶ～Ⅷa			0												0	0	
Ⅶc			0												1	0	
Ⅷc			0												0	0	
合計	0	0	0	6	18	0	24	0	0	0	2	1	0	0	2	0	17

段階	D・Z (生産地不明)													46	47 (ほうろく)	小計				
	胎質・産地 器種 40 (油受け皿)			43			44 (ひょうそく)			45			46							
	a	b	c	d	e	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	他	合計
Ⅶ	2						2													2
Ⅶ	2						3													6
Ⅶ～Ⅷa	2						5													6
Ⅶc	2						4													4
Ⅷc	2						2													6
合計	10	4	2	0	0	0	16	0	5	16	3	0	0	0	0	24	0	0	5	0

段階	D・Z (生産地不明)													49	51 (楕皿)	p	q							
	胎質・産地 器種 48 (七輪)			49			51 (楕皿)			51			51											
	a	b	c	d	e	他	小計	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p	q
Ⅶ							0																	
Ⅶ	1						2																	
Ⅶ～Ⅷa							0																	
Ⅶc	0						0																	
合計	3	0	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	0	4	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎質・産地 器種	D Z (生産地不明)																				52 (觸台)				
		51 (蠟蓋)	r	s	t	u	v	w	x	y	z	aa	ab	ac	ad	ae	af	ag	ah	ai	他	小計	a	b	他	
Ⅶ	小分類 SX267							1														1	2			
Ⅶ	SK583					10						0											13			
Ⅶ～Ⅷa	版薬層					1																	1			
Ⅷc	SK229					7							6										13			
Ⅷc	SK207					1						1	5										9			
	合計	0	0	0	0	20	0	20	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	1	38	0	0	0

段階	胎質・産地 器種	D Z (生産地不明)																				土器合計		備考	
		54	53	OO (蓋)	他	合計	小計	他	合計	備考															
Ⅶ	小分類 SX267	0						1	1													17	17	215	
Ⅶ	SK583	0	1			4		4														102	102	289	
Ⅶ～Ⅷa	版薬層	0				4		4	1													32	32	329	
Ⅷc	SK229	0						13														31	31	377	
Ⅷc	SK207	0				7		6														70	71	1086	
	合計	0	1	1	0	16	21	21	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	252	253	2296	



2表 人形・玩具組成表

段階	胎・産 器種	DQ(江戸在地系)																								遊具 合計	その他計	総計			
		1 (人形)						2 (器物)						3 (建造物)						4 (遊具)											
		1102 恵比寿 神	1110 虚無僧 ひと他	1100 ひと計	1206 狐	1215 鶏	1200 動物 他	1300 他計	1000 人形	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2013 搦鉢 蓋	2014 七厘	2020 鏡貨	3001 祠	3002 塔	3000 建物 他	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子								
																								人形 合計	器物 合計				3 (建造物) 合計	4 (遊具) 合計	
Ⅶ	SX267		0		0	0	0	0	0	0	0				0	0		0								0	0	0	0		
Ⅶ	SK583	1	2		0	0	2	1		1	1		1			4		0								1	1	0	7		
Ⅶ~Ⅷa	版築		0		0	0	0	0								0	1		1						1	2	4	0	5		
Ⅷc	SK229		0		0	0	0					1				1									0	2	2	0	3		
Ⅷc	SK207		1	1	1	4	0	5	1	1	1	1	1	1	3										0	1	5	1	7		
計		0	1	0	2	3	1	2	1	4	0	0	0	0	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	14	0	30

段階	胎・産 器種	DD(京都・信楽系)																								遊具 合計	その他計	総計		
		1 (人形)						2 (器物)						3 (建造物)						4 (遊具)										
		1102 恵比寿 神	1110 虚無僧 ひと他	1100 ひと計	1206 狐	1215 鶏	1200 動物 他	1300 他計	1000 人形	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2013 搦鉢 蓋	2014 七厘	2020 鏡貨	3001 祠	3002 塔	3000 建物 他	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子							
																								人形 合計	器物 合計				3 (建造物) 合計	4 (遊具) 合計
Ⅶ	SX267		0		0	0	0	0							0	0		0										0	0	0
Ⅶ	SK583		0		0	0	0	0								0		0											0	0
Ⅶ~Ⅷa	版築	1	1		0	0	1	0								0	1		3						0	0	0	0	1	
Ⅷc	SK229		0		0	0	0	0								0									0	0	0	0	0	
Ⅷc	SK207		0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	6
計		0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	3	0	6

段階	胎・産 器種	DZ(不明)																								遊具 合計	その他計	総計		
		1 (人形)						2 (器物)						3 (建造物)						4 (遊具)										
		1102 恵比寿 神	1110 虚無僧 ひと他	1100 ひと計	1206 狐	1215 鶏	1200 動物 他	1300 他計	1000 人形	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2013 搦鉢 蓋	2014 七厘	2020 鏡貨	3001 祠	3002 塔	3000 建物 他	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子							
																								人形 合計	器物 合計				3 (建造物) 合計	4 (遊具) 合計
Ⅶ	SX267		0		0	0	0	0							0	0		0										0	0	0
Ⅶ	SK583		0		0	0	0	0								0		0										0	0	0
Ⅶ~Ⅷa	版築		0		0	0	0	0								0		0								0	0	0	0	0
Ⅷc	SK229	1	1		0	0	1	0								0	1		3						0	0	0	0	1	
Ⅷc	SK207		1	1	1	0	0	1	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
計		1	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2

段階	胎・産 器種	JA(輸入陶磁)																								遊具 合計	その他計	総計		
		1 (人形)						2 (器物)						3 (建造物)						4 (遊具)										
		1102 恵比寿 神	1110 虚無僧 ひと他	1100 ひと計	1206 狐	1215 鶏	1200 動物 他	1300 他計	1000 人形	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2013 搦鉢 蓋	2014 七厘	2020 鏡貨	3001 祠	3002 塔	3000 建物 他	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子							
																								人形 合計	器物 合計				3 (建造物) 合計	4 (遊具) 合計
Ⅶ	SX267		0		0	0	0	0							0	0		0										0	0	0
Ⅶ	SK583		0		0	0	0	0								0		0										0	0	0
Ⅶ~Ⅷa	版築		0		0	0	0	0								0		0								0	0	0	0	0
Ⅷc	SK229		0		0	0	0	0								0	0								0	0	0	0	0	0
Ⅷc	SK207		0		0	0	0	0								0		0							0	0	0	0	0	0
計		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



段階	胎・産 器種	TE(備前系)														総計												
		1 (人形)				2 (器物)				3 (建造物)				4 (遊具)														
		1102 恵比寿 杖	1110 1115 虚無僧 ひと他	1206 狐	1215 1200 鶏 動物他 物計	1300 他	1000 人形	人形 合計	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2012 搦鉢	2013 蓋	2014 七厘		2020 銭貨	器物 合計	3001 祠	3002 塔	3000 建物他	建造 物計	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子	遊具 合計	その 他計
VII	SX267			0				0									0										0	0
VII	SK583			0				0									0										0	0
VII~VIIIa	版築			0				0									0										0	0
VIIIc	SK229			0				0									0										0	0
VIIIc	SK207			0				0									0										0	0
	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

段階	胎・産 器種	TZ(不明)														総計												
		1 (人形)				2 (器物)				3 (建造物)				4 (遊具)														
		1102 恵比寿 杖	1110 1115 虚無僧 ひと他	1206 狐	1215 1200 鶏 動物他 物計	1300 他	1000 人形	人形 合計	2001 碗	2002 皿	2009 土瓶	2011 釜	2012 搦鉢	2013 蓋	2014 七厘		2020 銭貨	器物 合計	3001 祠	3002 塔	3000 建物他	建造 物計	4001 土鈴	4003 笛	4004 碁石	4006 泥面子	遊具 合計	その 他計
VII	SX267			0				0									0										0	0
VII	SK583			0				0									0										0	0
VII~VIIIa	版築			0				0									0										0	0
VIIIc	SK229			0				0									0										0	0
VIIIc	SK207			0				0									0										0	0
	計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

土質総計	1	1	1	4	7	1	2	1	4	0	0	0	11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	4	1	6	6	17	0	38
磁質総計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
陶質総計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
総計	1	1	1	4	7	1	2	1	4	0	0	0	11	5	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	4	1	6	6	17	0	44	

期には生産が減少する広東碗 (JB-1-m) 5 個体、小広東碗 (JB-1-i) 8 個体、小丸碗 (JB-1-j) 2 個体となっている。また、皿では高台高の高い蛇ノ目凹形高台 (JB-2-i) 33 個体に対して、低いタイプ (JB-2-j) は 2 個体など、前段階 (Ⅶ～Ⅷ b 期) では主体的な小器種は多くはないものの一定量含まれており、資料群の年代的なまとまりはやや広いと考えられる。

渋谷氏によると記録に残っている大村藩下屋敷の火災はいくつか確認されるが (渋谷 2004、本研究編研究 8 参照)、東大編年Ⅷ c 期 (19 世紀中葉) あたりに該当するものは、弘化 2 (1845) 年と安政元 (1854) 年の 2 回である。このうち弘化 2 年の火災は、表長屋 1 棟を焼いたのみとあり、SK207 から確認された多量の焼土、焼瓦、陶磁器類の廃棄との関連性は考えにくい。むしろ安政元年の屋敷の全焼によるものと判断される。

## ② SK229

SK229 は、SK207 と重複関係にあり、SK207 に切られている。本遺構からは、陶磁器類、瓦、金属製品、ガラス製品、石製品、動物遺体などが多く出土しており、陶磁器は遺構間で接合する例も多い。ただし、出土している層には、焼土が多く伴わない点、出土遺物も二次的な火熱を受けていない点から、廃棄要因は SK207 とは異なると推定している。いずれにしても本遺構が埋没した後に SK207 の掘削、埋没があったと考えている。

年代判断のメルクマールとしている磁器は、JB 群 (肥前系) 碗が JB-1-e、f、g、l、m、n、o、p、皿が JB-2-e、i、o、p、q、JC 群 (瀬戸・美濃系) 碗が JC-1-a、c、d、e、f、皿が JC-2-a、b、e であった (分類基準は報告編を参照されたい)。SK207 同様に肥前端反碗 (JB-1-n)、湯呑碗 (JB-1-o)、蛇ノ目凹形高台皿 (JB-2-i) や多くの JC 群が存在していることから、東大編年のⅧ 期に該当するが、JC 群の型作りの皿 (JC-2-e) などが存在する点、いわゆる寿文皿などの木型打込製品が確認されていないことから、東大編年のⅧ c 期に該当する資料群と位置づけられる。これは SK207 と同じ段階であり、SK229 の埋没後にそれほど大きな時間差なく SK207 が掘削されたと思われる。

年代的まとまりについては、JB 群 (肥前系) 碗では、端反碗 (JB-1-n) 8 個体、湯呑碗 (JB-1-o) 7 個体、皿では高台高の高い蛇ノ目凹形高台 (JB-2-i) 14 個体で最も多く、JC 群 (瀬戸・美濃系) 碗では、端反碗 (JC-1-d) 28 個体が主体的であるが、これに加えて JC-1-e (湯呑碗) や JC-1-f (飯碗) などの JC-1-d より後出的な小器種も一定量認められる。一方、前段階 (Ⅶ～Ⅷ b 期) では主体的な広東碗 (JB-1-m)、小丸碗 (JB-1-j)、筒形碗 (JB-1-l)

などの小器種はそれほど多くはなく、資料群の年代的まとまりは比較的高いと考えられる。

## ③ SX267

SX267 は調査区東部を南北に走る谷の谷底域に位置している。周囲には遺構はなく屋敷内の空閑地域に構築されている。遺構は溝状を呈するが、不定形で立ち上がりも明瞭ではない。版築との関係は不明であるものの、位置的に谷内の窪地を利用したものと考えられる。年代的には段切り、建物と同時期に機能していた可能性が高い。

年代判断のメルクマールとしている磁器は、JB 群 (肥前系) 碗が JB-1-c、e、f、g、i、j、l、m、n、q、皿が JB-2-g、i、m、p であった (分類基準は報告編を参照されたい)。このうち多く出土している小器種は、JB 群 (肥前系) 碗では、小広東碗 (JB-1-i) 11 個体、粗製碗 (JB-1-g) 11 個体、薄手半球碗 (JB-1-f) 9 個体、次いで筒形碗 (JB-1-l) 4 個体、広東碗 (JB-1-m) 4 個体で、広東碗含む段階は、東大編年Ⅷ 期に該当する。これはⅧ a 期のメルクマールである JC 群 (瀬戸・美濃系磁器) が含まれていないこと、端反碗 (JB-1-n) が 1 個体しか確認されていないことから首肯できる。ただし、小広東碗の量が多いことを勘案すると一定の埋没期間あるいは使用期間の存在が想定されよう。比率としては、皿 (7 個体) に比べて碗 (47 個体) の比率が高く、SK207 (皿 102 個体、碗 108 個体) や SK229 (皿 29 個体、碗 29 個体) と対比するとその違いは顕著である。使用者の相違も考えられる。

18 世紀後半は、器種アセンブリッジからの年代幅推定は難しい。18 世紀には小器種のタイムスパンが長いものが多いからである。Ⅴ 期 (18 世紀前半) にさかのぼる小器種や文様は確認できない一方、14 の銘款は「乾隆年製」、24 は「寛政年製」であり、Ⅶ 期と年代的齟齬はない。

## ④ SK583

SK583 は、調査区東部を南北に走る谷部に位置している。周囲には遺構はなく屋敷内の空閑地域に構築されている。年代的に段切り、建物址と同時期に機能していた可能性が高い。

年代判断のメルクマールとしている磁器の出土状況は、JB 群 (肥前系) 碗が JB-1-c、e、f、g、i、j、l、m、q、r、s、皿が JB-2-b、c、e、f、g、j、l、m、o、r であった (分類基準は報告編を参照されたい)。このうち多く出土している小器種は、JB 群 (肥前系) 碗では、薄手半球碗 (JB-1-f) 25 個体、粗製碗 (JB-1-g) 8 個体、小丸碗 (JB-1-j) 5 個体、望料碗 (JB-1-q) 5 個体、皿では、高台高が低い蛇ノ目凹形高台 (JB-2-j) 3 個体、器高が低く腰が張

る皿 (JB-2-o) 3 個体である。また、肥前系広東碗 (JB-1-m) が含まれること、端反碗 (JB-1-n) や JC 群 (瀬戸・美濃系) がいないことなどから、東大編年 VII 期の様相を呈している。SX267 同様に皿 (13 個体) に比べて碗 (59 個体) の比率が多い。

### ⑤版築

版築は、調査区東部を南北に走る谷部に降る緩斜面に構築されている。版築以前は、斜面に段切りを行った後、長屋建物が構築されていた。この版築は南側が薄くなり明確さは欠けるが、SK258 に一部切られ、谷頭部に近い版築の東側南域は、塵芥廃棄の場として機能していたと考えられる。

年代判断のメルクマールとしている磁器の出土状況は、JB 群 (肥前系) 碗が JB-1-b、d、e、f、g、i、j、l、m、n、q、s、皿が JB-2-c、e、g、j、k、m、o、p、r、JC 群 (瀬戸・美濃系) 碗が JC-1-d、e、g であった (分類基準は報告編を参照されたい)。このうち多く出土している小器種は、JB 群 (肥前系) 碗では、薄手半球碗 (JB-1-f) 17 個体、粗製碗 (JB-1-g) 14 個体、広東碗 (JB-1-m) が 10 個体で、小広東碗 (JB-1-i)、小丸碗 (JB-1-j)、筒形碗 (JB-1-l) などが続く。皿では高台高の低い蛇ノ目凹形高台 (JB-2-j) 蛇ノ目釉剥ぎ (JB-2-k) が多く、主体的に出土している小器種様相は東大編年 VII 期に該当するが、少量とはいえ JC 群 (瀬戸・美濃系) や肥前端反碗 (JB-1-n) も出土している点から、東大編年 VIII a 期にかかる時期に下限を有する資料と考えられる。

## (2) 胎質組成 (3 表)

次に胎質組成をみたい。今回、数量提示を行った一括資料は 5 サンプルユニットである。これら資料群の年代は、18 世紀後葉～19 世紀中葉と江戸時代後期に属している。胎質組成は SK229、SX267、版築層は類似した傾向にあるが、SK583 の土器の割合が 35% で、その他が 10% 以下であるのに対して明らかに高い。土器の器種組成では、102 個体の土器のうち、かわらけ類が 67 個体、塩壺が 13 個体である。SK583 出土遺物は東大編年 VII 期 (18 世紀末) であり、この時期の白金下屋敷は、寛政 6 (1794) 年に外桜田備前町にある上屋敷が全焼し、再建がなった寛政 11 (1799) 年に引き移るまでの間、藩主と藩主家族が居住している。かわらけと塩壺の量の多寡は、こうした階層の使用の可能性も考えられる。

また、SK207 は磁器が全体の半数以上 (51%) で、その他の資料が、20% 後半～30% 前半に比べると高い。明確な理由は判じ得ないが、SK207 は後述するように多くの上質の磁器製品が含まれており、白金邸にはこの

時期に第 11 代藩主大村純顕夫人が居住していたことが判っており、こうした関係も想定される。

上記の違いに触れたが、分析資料数が少なく、傾向として抽出しにくい。比較資料として、加賀藩底と大聖寺藩の詰人空間の出土事例をあげてみた (3 表)。工学部 1 号館地点 (以下、「工 1」と略す) SK1 は加賀藩邸北側の詰人空間に位置する大型廃棄土坑で、コンテナ箱に 300 箱以上の多量の陶磁器類が出土している邸内の最終処分場的な性格を有する遺構である。出土資料には安永 5 (1776)～文政元 (1818) 年までの紀年銘が多く確認されたと陶磁器様相から東大編年 VII～VIII a 期 (18 世紀末～19 世紀初頭) に比定され、日常ゴミが廃棄されていると思われる土坑である。また、医学部附属病院外来診療棟地点 (以下、「外来」と略す) SK81 は、大聖寺藩邸西縁部に位置している大型土坑で、「天保」、「天保四」などの墨書陶磁器を伴っている。陶磁器様相から東大編年 VIII b 期 (19 世紀前葉) に比定され、日常ゴミが廃棄されていると思われる土坑である。胎質の対比では大まかな比較にならざるを得ないが、これまでの加賀藩邸の調査では、御殿空間のうち特に儀礼などの共食に関連した火災などによる非日常的な一括廃棄資料は磁器やかかわらけの割合が多いなどの特徴があり、逆に陶器が多い資料は「詰人空間の様相」(堀内 2005) として考えてきた。特に廃棄土坑の使用期間が長くなるに従って、破損しなくても廃棄が行われるいわゆる貧乏徳利 (瀬戸・美濃系灰釉徳利) の割合が増加することは想起できる。例えば、被熱を受けていない SK229 の瀬戸美濃系灰釉徳利は 138 個体 (全体の 37%) であるのに対して、火災被災資料の SK207 では 189 個体 (全体の 18%) と大きく異なっていることから首肯できる。しかしながら、

3 表 本拠点と加賀藩邸との比較

遺跡	段階	遺構	磁器	陶器	土器	合計
医 科 研	VII	SX267	75	123	17	215
			35%	57%	8%	
	VII	SK583	95	92	102	289
			33%	32%	35%	
	VII～VIII a	版築層	146	151	32	329
			27%	46%	10%	
VIII c	SK229	154	192	31	377	
		27%	51%	8%		
VIII c	SK207	557	458	71	1086	
		51%	43%	7%		
工 1	VIII b	SK1	989	3153	1060	5202
			19%	61%	20%	
外 来	VIII b	SK81	282	283	115	680
			41%	42%	17%	

前述したSK583では18個体(全体の6%)とかなり低く、廃棄期間だけではなく、使用者など異なるバイアスも考える必要がある。

### (3) 器種組成

新宿区内の遺跡を対象に出土一括遺物の器種組成について分析を行った井汲氏は、区内旗本屋敷の18世紀前葉～中葉頃の廃絶と思われる資料の定量的データに類似した「型」を指摘した上で、類型が「旗本屋敷に限定されたものではなく、他の身分・階層にもある程度共通する型であることが指摘できる。」と評価した(井汲1997)。行為と道具は連動しており、同じ活動様式である範囲は、年代、地域、階層、季節、嗜好、伝統などの各種バイアスによって違いは認められるものの、おおむね似た傾向を示すことは以前指摘したことがある。おのおののバイアスを明らかにするためには、全体の比較ではなく、その違いを反映する器種を取り上げて分析する必要がある。例えば、幕藩体制下の日本では、階層の上下に関わらず、膳を用いて漆器や陶磁器の碗皿などの道具を使って魚、菜類を中心とした食膳形態であり、先に挙げたバイアスによって違いはあるものの使用する道具類は大きな差異はない。以下では、取り上げた5遺構・層の中で大きく、量比が異なっている器種について指摘する。

#### ・碗(1類)・皿(2類)

東大編年Ⅶ～Ⅷa期に比定されるSX267、SK583、版築例は、磁器碗：皿の比率はそれぞれ48個体：7個体、59個体：13個体、72個体：26個体で、碗が皿の3～7倍程度多く、碗の量が卓越している。これに対してⅧc期のSK229、SK207では、29個体：34個体、178個体：135個体で、碗と皿がそれほど数量差がなく、大きな違いが指摘できる。SK229、SK207の碗を詳細にみると、口径が計測できた9cm以下の小法量の主に飲用と思われる碗が、SK229では41個体中19個体、SK207では73個体中35個体で、SX267の18個体中3個体、SK583の30個体中4個体、版築の21個体中3個体から大きく増加していることが判る。一方、陶器碗の量はSX267が4個体(小法量2個体)、SK583が10個体(小法量1個体)であり、陶器が磁器に変化したと言うより、藩邸内で小法量の碗を用いた飲に関わる行為の頻度が19世紀前半の中で高くなり、小法量碗の量が多くなった結果、碗の比率が高まったと思われる。

また、皿の量も多くなっていることも指摘できる。SK229で多く出土している皿は、高台断面U字状の皿(JB-2-e)、蛇ノ目凹形高台の皿(JB-2-i)で、この段階に

は一般的な製品である。また、素地は白色で、天草陶石を使った製品であると推定されるが、SK207ではやや上質な製品(報告編127、176など)は散見されるものの、上質の製品のみで構成されているわけではない。ただ、SK207の4図17～20、27などは、見込みが松竹梅、帯文、唐草文で構成される同文様の揃いであり、同時期購入の可能性も考えられる。『新編大村市史』によると大村藩の表高は約27,900石で、安政3(1856)年時点における家臣の総数は足軽も含めて2,866人である(大村市史編さん委員会2015)。SK207の出土遺物の総量は石高にしては多いとも感じられるが、そのうち江戸在勤は上屋敷と合わせておそらく数百人、白金邸の居住者は100人規模であったと推定される。これら揃いは表向で使うような質と量は具備しているとは思えないが、こうした小規模の揃いであっても、それを使用する、上級の居住者が所有していたと推定される。文献との対比から、当該期居住していた第11代藩主大村純頭夫人あるいは、嘉永3(1850)年に起こった上屋敷火災時に避難、翌年まで一時的に居住していた第12代藩主大村純熙とその家族の可能性が想定できる。

#### ・坏(6類)

坏の様相も東大編年Ⅶ期のSX267、SK583とⅧc期のSK229、SK207とでは大きく異なっている。前者がSX267が2個体、SK583が4個体に対して、SK229が25個体、SK207が71個体と大きく増加している。特にSK229で14個体、SK207で23個体出土しているいわゆる江戸絵付を含むJC群(瀬戸・美濃系)の薄手の製品(JC-6-d)が目立っている。これらはSK207の丸形(4図23)、端反形(同24)、木盃形(同26)などのバリエーションがあり、26などのやや大型の製品もあるものの、小法量のものが大部を占め、飲酒専用器と考えられる。年代的に爛徳利の増加と関連したものと推定しているが、ここでは爛徳利の出土はSK207から5個体しか出土しておらず、薄手製品がやや先行して出現している。やや年代的なラグがあるものの、こうした状況は爛酒を飲む習慣の拡大と関連していることが考えられ、Ⅶ期の遺構から出土例が少ないのは、そうした飲習慣の普及する以前であると解釈できる。

#### ・人形・玩具

本地点出土の人形・玩具は、破片資料を含めても50点に満たない。人形・玩具が出土した遺構の年代は、SK218が18c中葉、SK583が18c後葉、SK258、SK229は19c前葉、出土数の半数を占めるSK207はⅧc期(19c第2四半期)である。胎質割合は、土製が83%、陶磁製が17%と、器種を問わず土製のものが大半を占めて

おり、土製の約 80%は江戸在地系である。主な器種は SK218 から江戸在地系の西行、SK583 から江戸在地系の袴、七輪、京都・信楽系の塔、土鈴、SK258 から江戸在地系の恵比須、大黒などである。Ⅷc 期に比定される SK207 からは江戸在地系の狐、鶏、碁石、京都・信楽系の虚無僧、瀬戸・美濃系磁器の上質なミニチュアの皿、風炉などがみられる。いずれも江戸遺跡では頻出する資料であり、江戸在地系の土製玩具が多い点は、当該期の特徴である。全体的に人形・玩具の出土量が少ない点では、武家地における人形・玩具の特徴をよく表しているといえよう。

## 2. 医科学研究所附属病院 A 棟地点出土陶磁器・土器類の様相

以下では、本調査で最も多く遺物が出土し、資料の多くが二次的火熱を受けていた SK207 出土資料を中心にその様相と背景について触れていきたい。

### (1) SK207 出土資料の様相

年代的様相と他の一括資料群との対比から器種のトピックについて簡単に触れたが、SK207 を対象にすこし掘り下げてみたい。

SK207 で最も多く出土した遺物は焼け破損した多量の瓦類である。このことは藩邸内に瓦建物が存在し、火災によって廃棄が行われたことが想起できる。他方、陶磁器類だけでコンテナ箱で 100 箱以上、推定個体数 1,086 個体にもよる遺物の出土からは、屋敷の広範囲が被災し、それほど多くの居住者が想定できない藩邸で使用されていた陶磁器類の多くが廃棄されたと推定される点である。

#### ①器種組成

SK207 から出土している陶磁器・土器類は、1,086 個体をカウントされる。多く出土している上位器種は、碗 (214 個体)、皿・平鉢 (204 個体)、瓶 (204 個体)、坏 (73 個体)、土瓶 (61 個体)、蓋物 (52 個体)、壺・甕 (50 個体)、植木鉢 (45 個体)、鉢 (41 個体) である。これと加賀藩邸の工 1SK1 出土遺物と対比してみたい。工 1SK1 から

4 表 SK207 と工学部 1 号館地点 SK1 の出土器種の数量

	医科研SK207				工学部1号館 SK1				
	磁器	陶器	土器	計	磁器	陶器	土器	計	
1	碗	178	36	0	214	553	964	1	1518
2	皿・平鉢	135	41	28	204	217	100	230	547
3	大皿・大平鉢	2	0	0	2	1	0	0	1
4	爛徳利	5	1	0	6	3	0	0	3
5	鉢	29	12	0	41	24	43	2	69
6	坏	71	2	0	73	34	18	0	52
7	猪口	2	0	0	2	10	0	0	10
8	仏飯器	10	0	0	10	9	1	0	10
9	火入れ・香炉	6	5	0	11	10	27	4	41
10	瓶	2	202	0	204	3	1082	0	1085
11	御神酒徳利	4	0	0	4	16	0	0	16
12	油壺	4	0	0	4	4	0	0	4
13	蓋物	47	5	0	52	22	3	0	25
15	壺・甕	12	38	0	50	0	92	0	92
16	急須	1	7	1	9	0	9	0	9
18	合子	6	0	0	6	3	52	0	55
19	水滴	3	1	0	4	3	15	0	18
20	蓮華	2	0	0	2	0	0	0	0
21	植木鉢	17	8	20	45	0	26	38	64
22	花生	4	1	0	5	5	16	0	21
23	片口鉢	0	5	0	5	0	80	0	80
29	擂鉢	0	6	0	6	0	55	0	55
30	餌入れ	0	3	0	3	0	11	0	11
31	火鉢	0	2	4	6	0	11	220	231
34	土瓶	4	57	0	61	0	119	14	133
40	油受け皿	0	8	2	10	0	49	117	166
41	油徳利	0	0	0	0	0	4	0	4
42	行平鍋	0	3	0	3	0	9	0	9
44	ひょうそく	0	2	6	8	0	0	33	33
49	涼炉	0	0	0	0	0	0	1	1
51	塩壺	0	0	9	9	0	0	99	99
	計	541	445	70	1059	917	2786	759	4462

出土している陶磁器・土器類は、5,202 個体をカウントし、出土量は SK207 のおおよそ 4 倍程度である。遺物の数量は、1 人あたりの陶磁器・土器類の使用量や廃棄遺構へ廃棄する人数、廃棄遺構の存続期間などが影響するので、単純に藩邸の居住する人数と単純に相関する訳ではないものの、居住人数と無関係ではないと考えられる。工 1SK1 では、碗 (1,518 個体)、瓶 (1,085 個体)、皿・平鉢 (547 個体)、火鉢 (231 個体)、油受け皿 (166 個体)、土瓶 (133 個体)、塩壺 (99 個体)、壺・甕 (92 個体)、鉢 (69 個体)、植木鉢 (64 個体) で、順序は異なるものの 8 器種が共通している。これは基本的な生活様式が類似していることを意味していると考えているが、器種が異なっていたものには SK207 にある蓋物、散蓮華と SK1 にある油受け皿、塩壺であった。

#### ・碗 (4 図)

最も多い碗では、SK207 では磁器の量 (178 個体) が陶器 (36 個体) を大きく上回っているのに対して、工 1SK1 では全く逆である (磁器 553 個体、陶器 964 個体)。SK207 で多い碗は、先述のように肥前系端反碗 (JB-2-n、4 図 6、7) と薄手半球碗 (JB-1-f、4 図 3、4) が最も多いのに対して、工 1SK1 では小丸碗 (JB-1-j) の量 (300 個体) が磁器碗の全体 (480 個体) の 2/3 以上を占めている。薄手半球碗は、溶姫御殿で使用したものを廃棄したと推定される情報学環・福武ホール地点 (以下、「JF」と略す) SK10 出土資料でも 4 図 12、13 のような体部が直線的に開く蓋付き碗 (JB-1-p、JC-1-f) などと共に多く確認されている (成瀬 2017)。薄手半球碗は、東大編年 IV b 期 (18 世紀初頭) にやや深手のプロトタイプが出現し、出現ピークは V a ~ VI b 期 (18 世紀前葉~中葉) である (大成 2011)。19 世紀に多頻度で出現する小器種ではないが、両者の共通点である女性の御殿の特徴として抽出できる可能性がある。2 図は港区汐留遺跡 (仙台藩伊達家上屋敷) と 5H-042、3 図は豊島区染井遺跡三菱重工業染井アパート地区 (津藩藤堂家下屋敷) 560 号遺構出土の一括資料である (東京都埋蔵文化財センター 2000、豊島区教育委員会 2001)。一見して化粧関連の道具類と考えることができるが、この中には 4 図 15 のような薄手半球碗と同形の坏 (JB-6-f) が多く含まれており、こうした用途に利用される頻度が高いとすると大名藩邸の中で女性に関わる地域では、これらの小器種のみならず磁器碗の出土量に影響していることもあろう。また、工 1SK1 で多く出土している碗は陶器である。50 個体以上の出土は、瀬戸・美濃系灰釉丸碗 (TC-1-c、5 図 4 ~ 7、6 図 5、6) 162 個体、同柳茶碗 (TC-1-g、5 図 10、6 図 9) 84 個体、京都・信楽系小杉碗 (TD-1-d、4 図 29、

5 図 12、6 図 16) 182 個体、同端反小碗 (TD-1-g、4 図 30) 63 個体であった。このうち瀬戸・美濃系の灰釉丸碗と柳茶碗については、筆者が以前大名藩邸出土陶磁器の消費モデルについて論じた際に加賀藩本郷邸御殿内の出土資料の分析から御殿空間内の「役場の空間」の資料として性格づけた御殿下記念館地点 233 号遺構、245 号遺構に多く含まれている (堀内 2016)。また、両遺構からは小杉碗もあることから、おそらく 18 世紀後葉前後の加賀藩邸の役場の中では、中法量の灰釉丸碗、柳茶碗と小法量の小杉碗が多く使われたと考えられるが、19 世紀に入ると主体が瀬戸・美濃系 (中法量) から肥前系磁器小丸碗や京都・信楽系 (小法量) へと変化しているように思われる。この変化は、長佐古氏が指摘している「振り茶」道具から「淹茶」道具への変化とも整合する (長佐古 2002)。また、柳茶碗等の中法量の陶器碗は、尾張藩邸出土陶器碗の分析からも 18 世紀後葉以降の役場での利用を指摘しており (内野 2005)、加賀藩邸内においても内容は異なっているが、役場で多頻度に利用された碗が存在していたと推定される。

#### ・蓋物 (7 図)

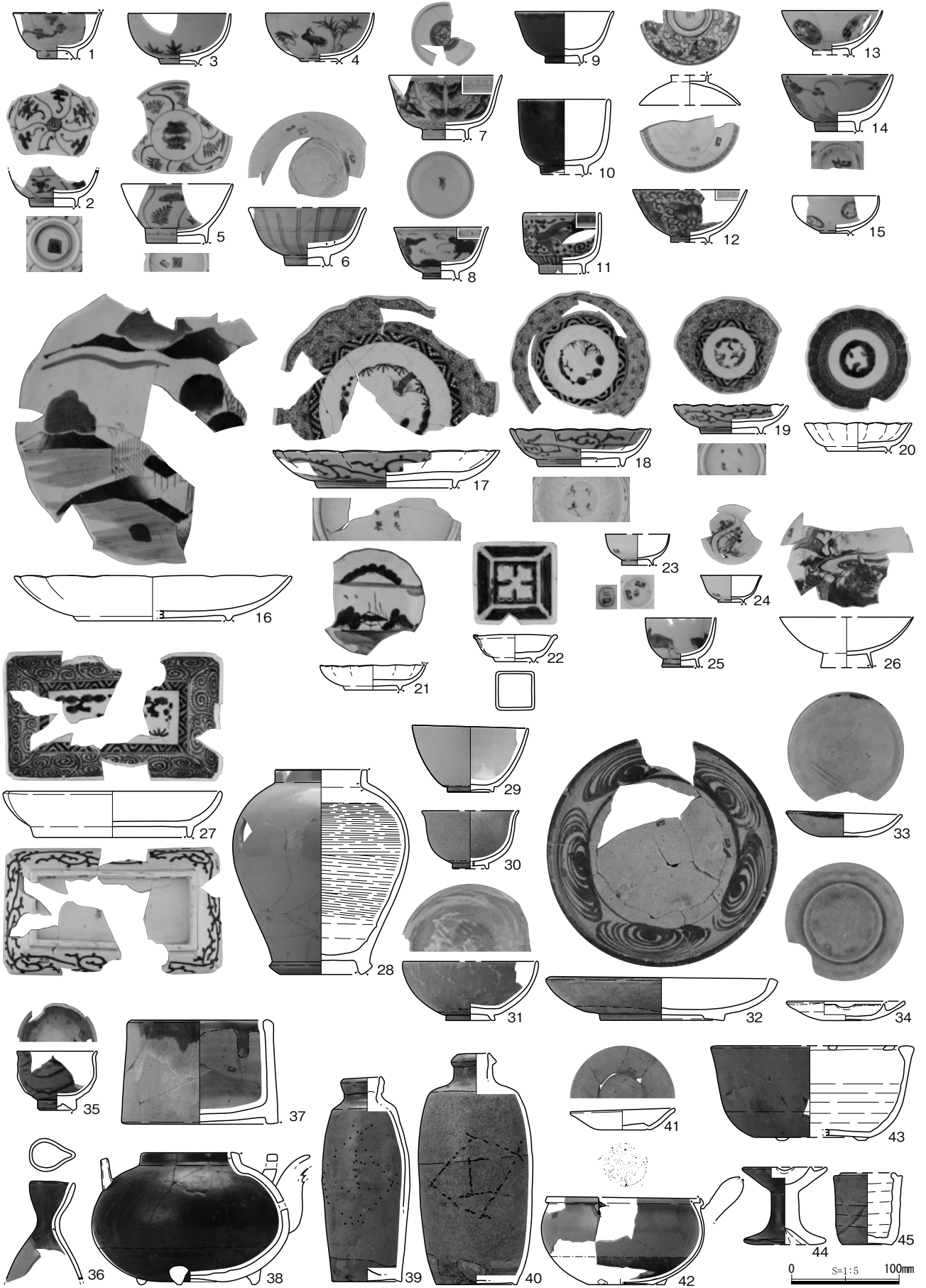
SK207 からは蓋物が 52 個体出土している。この量は、本地点でカウントを行った他遺構と対比しても (SX267 が 4 個体、SK583 が 6 個体、版築と SK299 が 4 個体) 多い。これらの多くは、碗形の身をもつものと段重である。碗形の身を持つものは、2 ~ 5 寸程度の小~大型のものがあり (7 図 1 ~ 6)、各法量で複数個体存在している。また、分銅形、木瓜形などの型作りの変形製品 (同 13、14) もあり、これらの製品の多くは質的に低いものではない。また、段重も比較的精緻な文様が描かれた製品のみで、色絵 (同 7)、方形 (同 9) などの製品も上質である。

先述した伊達家、藤堂家の化粧道具の資料の中にも肥前系磁器、京都・信楽系陶器、金属器などの多くの蓋物や合子が確認されており、また、現存している大名の婚礼道具類にも、漆器などを含めて種々の胎質や形状の小型蓋付容器が確認できる。前述の様に史料から白金邸にはこの時期に第 11 代藩主大村純頭夫人が居住していたことが判っており、こうした点を勘案すると本遺構出土の蓋物類も化粧道具として利用されたものが多く含まれていると推定される。

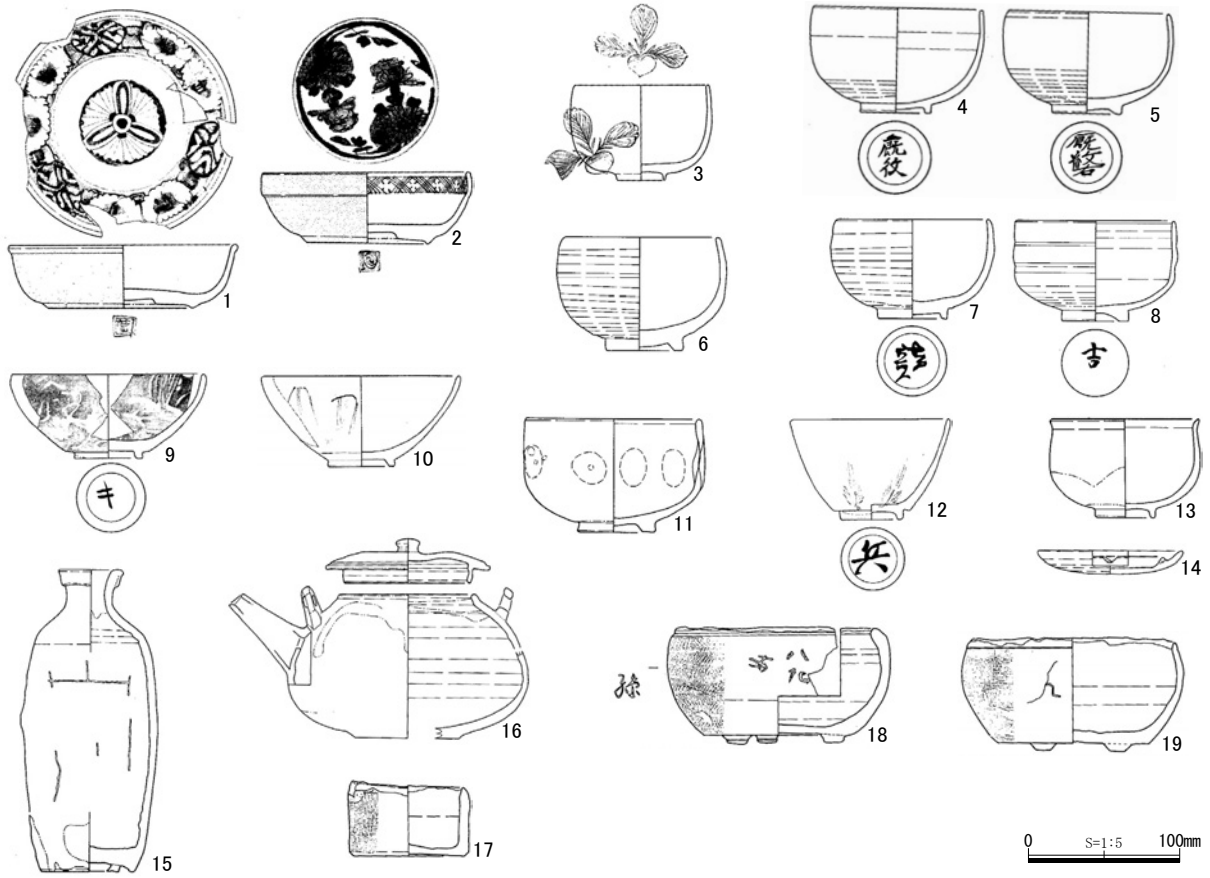
#### ・植木鉢 (8 図)

本遺構出土遺物で、特徴づけられる器種の一つが植木鉢であろう。SK207 の出土量は 45 個体で、磁器 17 個体、陶器 8 個体、土器 20 個体である。さらに瀬戸・美濃系陶器のいわゆる半胴甕や銭甕 (TC-15-a) は、底部穿孔

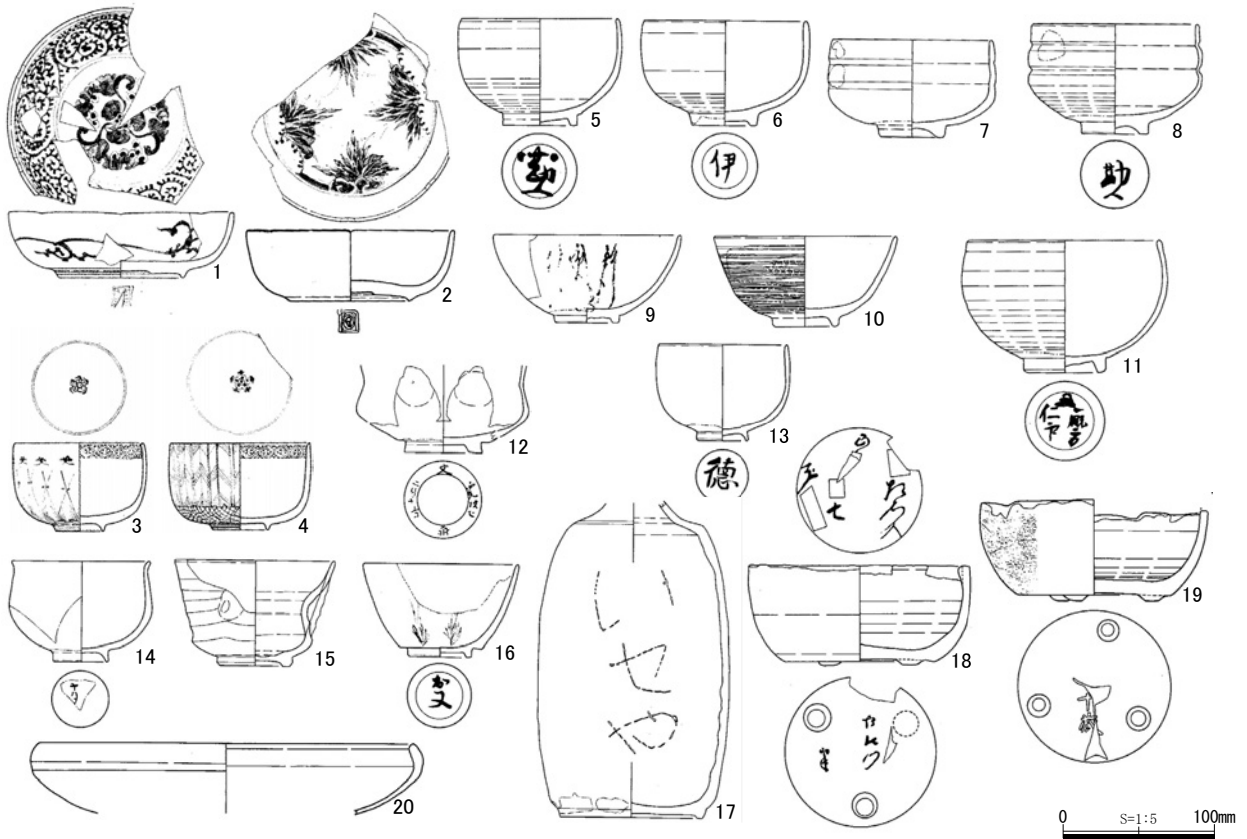




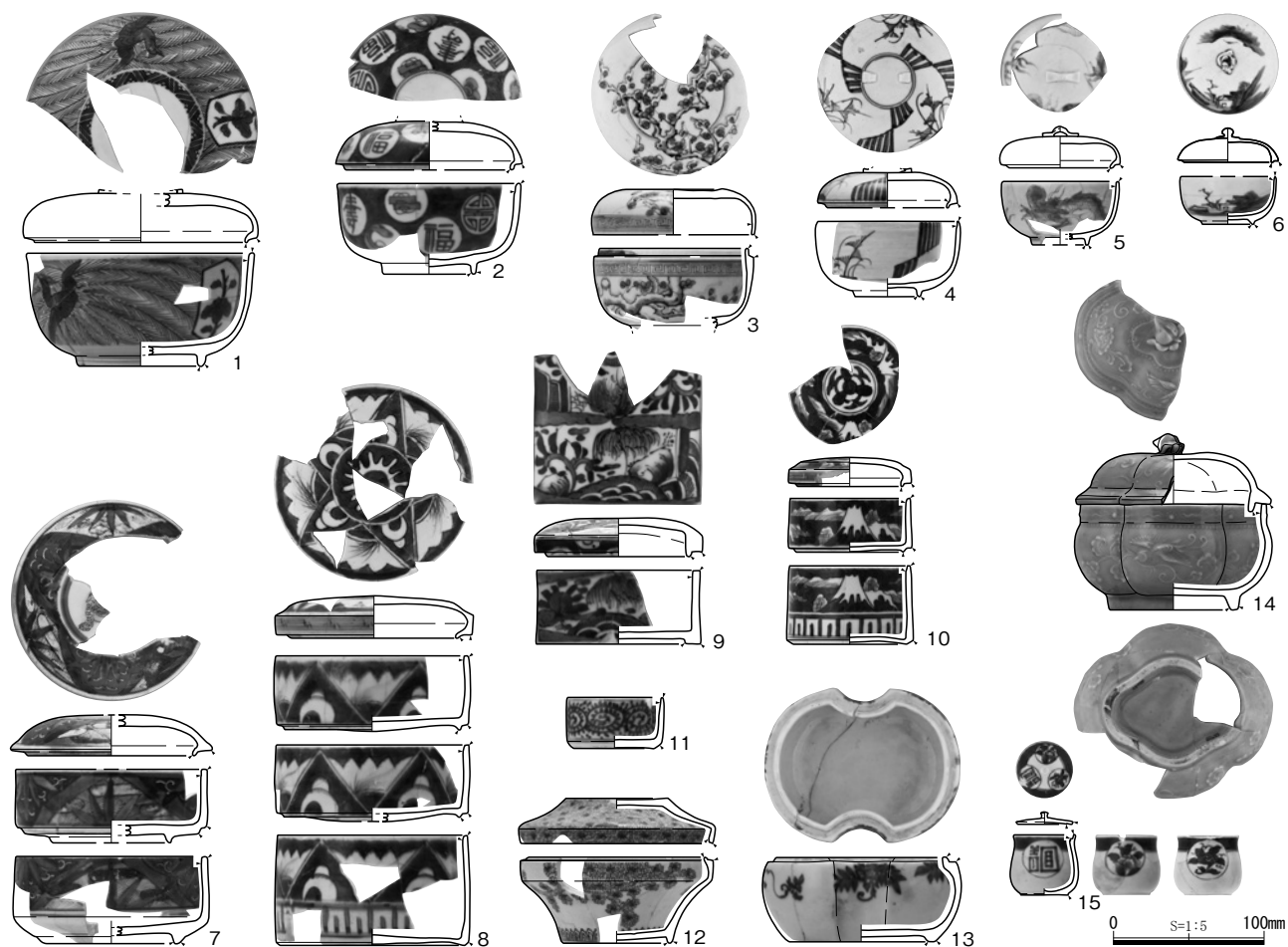
4図 SK207出土遺物



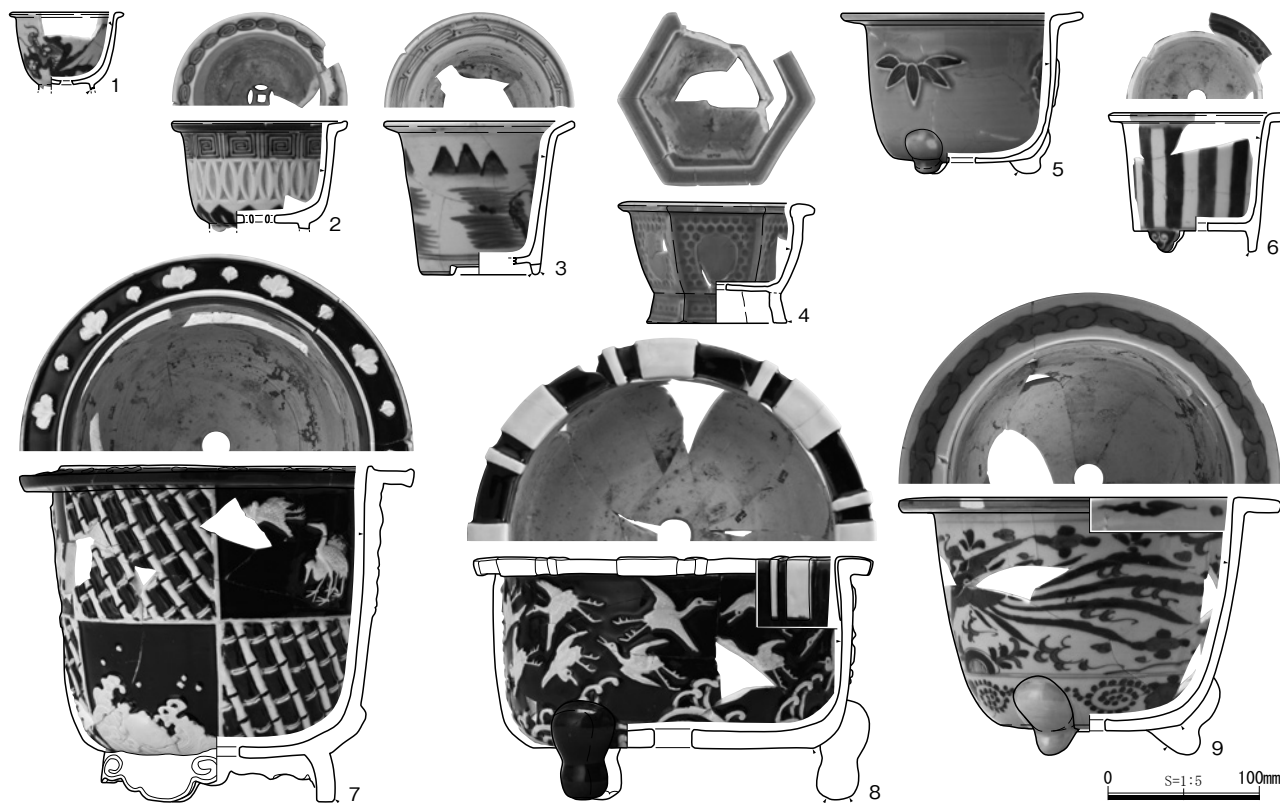
5図 御殿下記念館地点233号遺構出土陶磁器



6図 御殿下記念館地点245号遺構出土陶磁器



7図 SK207出土蓋物



8図 SK207出土植木鉢(1)

を行って植木鉢として利用することが多く、底部中央を薄く作り、植木鉢としての使用を前提に生産されていると推定できる器種である。植木屋が集住する豊島区染井遺跡では、丹羽家地区（豊島区教育委員会 1991）、染井よしの桜の里公園地区（高木 2011）、興銀ひろば地区（江戸東京博物館 2013）をはじめとして半胴甕底部中央を穿孔した際の破片が多く出土していることから、鉢植の生産段階で穿孔していることが推測される。この半胴甕・銭甕の量を合計すると、11 個体増えて陶器は 19 個体、合計で 56 個体になる。一方、加賀藩邸の工 1SK1 と対比すると出土しているのは 64 個体で、陶器が 26 個体、土器が 38 個体で、磁器は 1 点もない。また、同遺構から半胴甕・銭甕が 53 個体出土しており、これを合算すると土器と陶器の量が逆転し、陶器が 79 個体となる。これらから SK207 の大きな特徴は、磁器の植木鉢の多さと言える。

出土植木鉢の数量分析を行った土田氏の分析によれば、18 世紀以降に江戸北郊の園芸地域として発展する豊島区駒込一丁目遺跡（コーシャハイム駒込地区）の出土資料 S1b 号から出土した植木鉢 640 点の内訳は、陶器 46 点（うち半胴甕 43 点）、土器 209 点で、磁器は 1 点もない（土田 2006）。磁器が少ない傾向は、染井・駒込地区の生産遺跡で多く見られる様相とのことである<sup>(1)</sup>。

また、瓦質植木鉢の法量については、土田氏が同遺跡出土の計測可能な 26 点に対して、外径「約 5～6 寸を中心とした分布傾向」を指摘、また、文京区東京大学白山構内の遺跡（農学生命科学研究科附属小石川樹木園根圏観察温室地点）と豊島区染井遺跡（天理教地区）の分析を行った大貫氏によれば、小石川樹木園では法量が判る 28 個体中、小法量（外径 10～11.5cm）が 5 個体、中法量（同 11.5～15cm）が 14 個体、大法量（同 15～17cm）が 9 個体、染井遺跡 159 号遺構では、径が判断できる 22 個体中中法量が 21 個体、大法量が 1 個体であった（大貫 2012b）。こうしてみると調査地点によって少なからず違いがあり、今後、年代的な傾向などを把握する際には、数量分析の母集団を大きくする必要があると思われる。これを陶磁器の植木鉢と対比すると大法量とはいえ、土田氏の分析資料では最大が 7 寸（21cm）で、他は 6 寸以下であった。これを内径に置き換えると、18～19cm（大貫氏では外径で 17cm、内径で 15cm 程度）、かつ数量もごく少ないことが判る。これに対して、SK207 出土磁器植木鉢では、内径で 6～21.6cm あり、18cm を越える製品も 16 個体中 4 個体（8 図 7～9、報告編 329）、陶器では半胴甕を含めて 11 個体中 2 個体（同 13、14）確認されている。植木生産地の染井遺跡丹羽家

地区 9 号遺構からは瀬戸・美濃産の陶製植木鉢が多く出土しているが、図示された 65 個体の口径が判る製品のうち、内径 18cm 以上は 33 個体あり、瓦質と陶磁器の植木鉢は法量的に一致していない。これをみると瓦質と陶磁器では質的な差異だけではなく、使い分けが存在していたと考えられる。

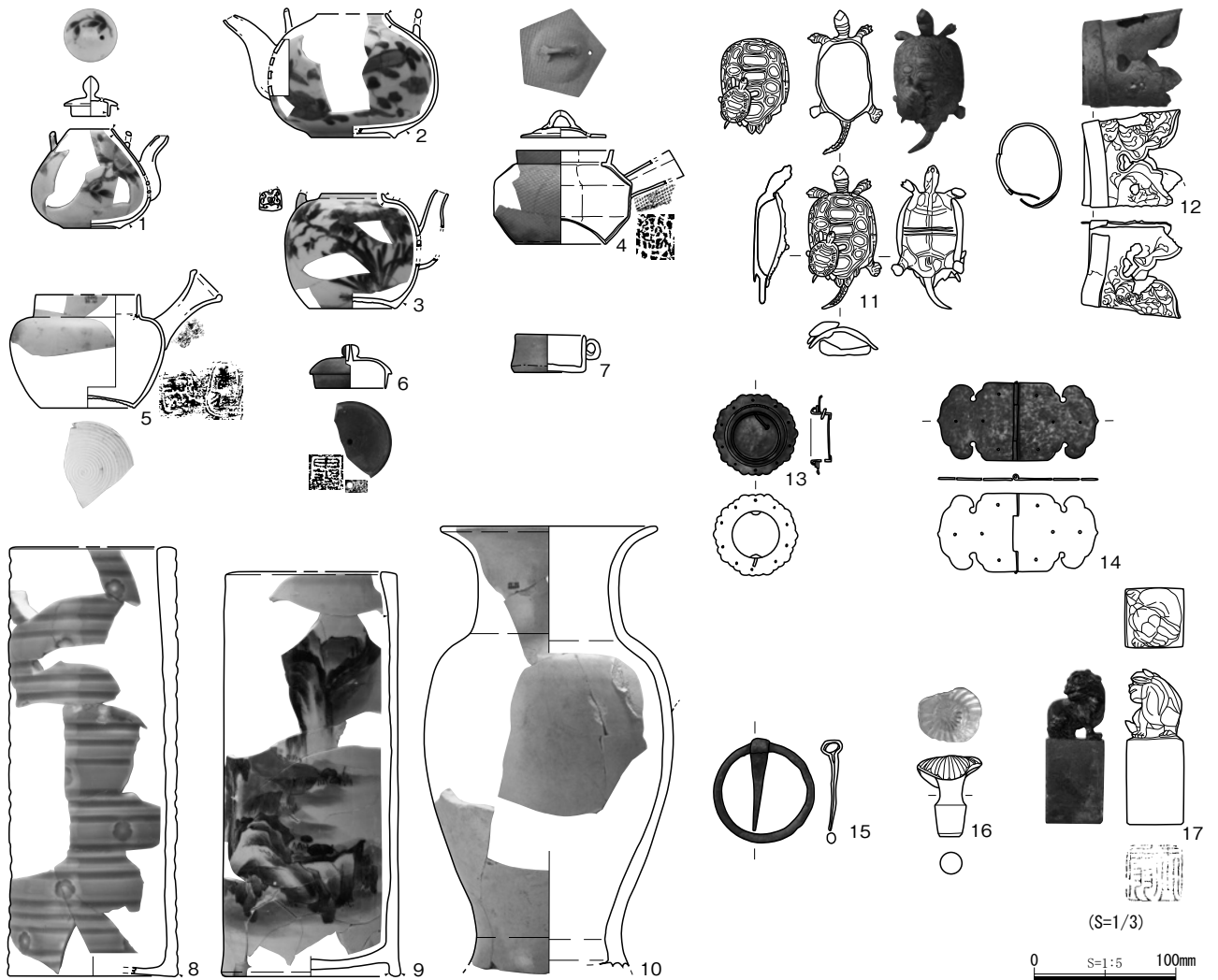
次に磁器の植木鉢について触れてみたい。8 図に示した 1～9 の製品は、染付、青磁（4、5）、瑠璃釉（7、8）である。染付は 3 足で、鏝部に連続渦巻、体部に鳳凰、体部下半に唐草あるいは波濤文が描かれる 9 のような製品が 4 個体あり、同時期に入手したものの可能性もある。また、同図 2 は体部下半に連続輪繫ぎに陰刻、底部中央は七宝に穿孔されており、複雑に施文されている。4 の青磁は、六角形に合わせ型作りされ、底部と高台を貼り付け、器面には亀甲文、高台は丸文を浮文している。5 はふくら雀と笹を型抜きした物を貼り付け、文様部分には染付の上から透明釉を施し、体部には七宝繫ぎのエッチングを貼付文様周囲に細かく彫った上に青磁釉が施されている。7、8 は器面の上から型抜きした細かい鶴、竹、波頭、梅などを貼り付け、貼付文様部には透明釉、器面には瑠璃釉が施される。こうした施文方法は、文政 6（1823）年に跡を継いだ三代川本治兵衛が開発、本格的に始めたとされ（武藤 2017、仲野 2021）、本例も年代的に川本治兵衛の作品の可能性があろう。

陶器は 13、14 は型抜きで雲龍文の貼付を行った後に緑釉を施しているが、型抜きの技法は上記磁器製品（5、7、8）や 15 例などと共通で、技術的な影響関係を考える必要がある。こうした貼付文+緑釉施釉例は、瀬戸の西茨 2 号窯（勇右衛門窯）で類似した製品が確認されている（瀬戸市歴史民俗資料館 1987）。15 は型抜きした菊、桐を体部に貼り付けているが、型抜きは非常に精緻で、胎土も体部の素地と異なるものを使ってコントラストをつけている。このように SK207 の陶磁器製植木鉢の多くは手の込んだ上質の製品であり、このような質の高い植木鉢が多く出土した例は、管見の限り文京区千駄木三丁目南遺跡第 2 地点出土資料に類例が求められるものの（10 図、共和開発株式会社 2007）、他の消費遺跡では確認できない。

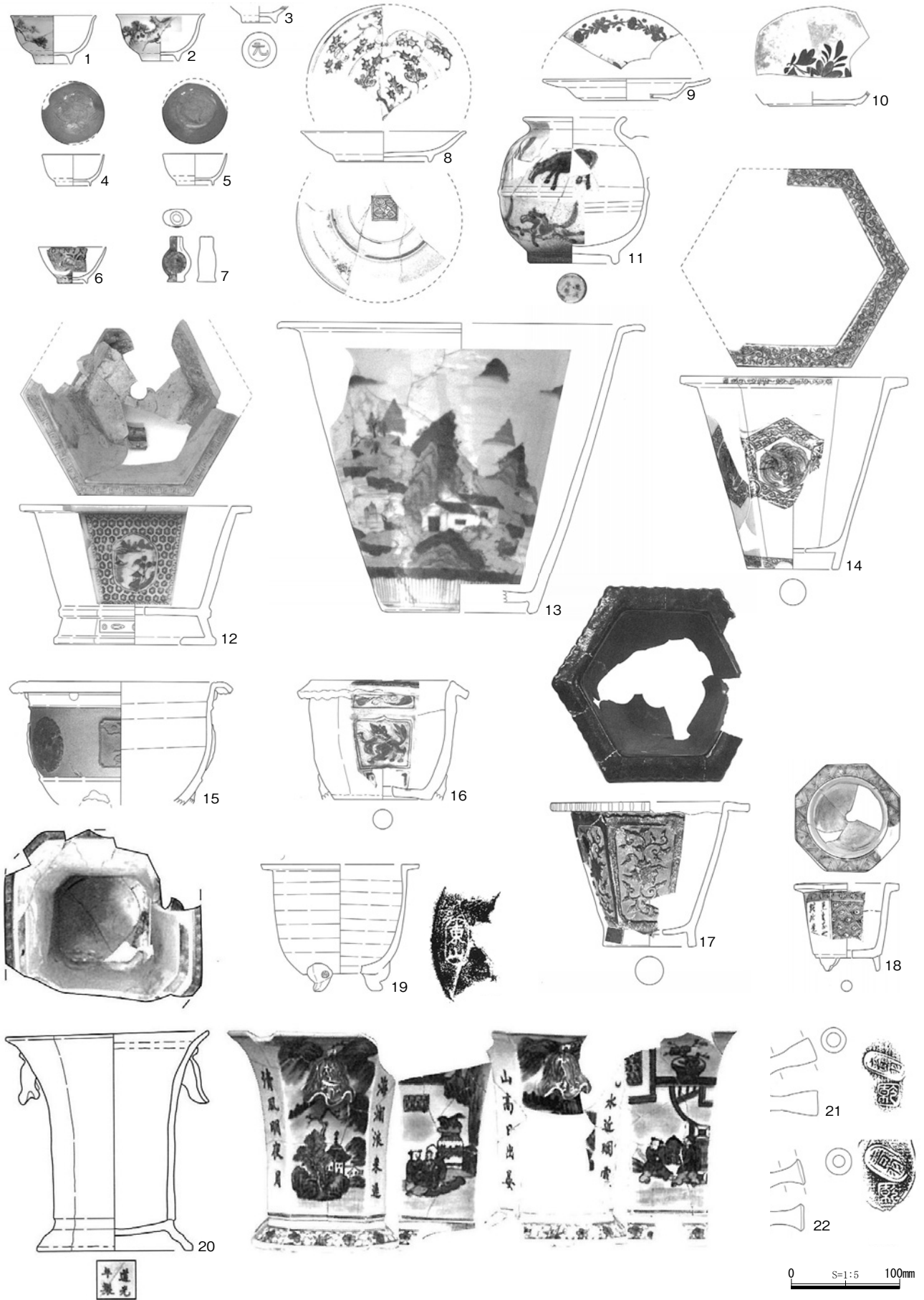
10 図は文京区千駄木三丁目南遺跡第 2 地点 1 号遺構出土資料である。調査地点は、植木屋森田六三郎の屋敷と推定されており、1 号遺構出土の遺物は中国徳化の坏（10 図 1～3）、景德鎮の皿（同 8）、壺（同 11）、香炉（同 20）、ヨーロッパの皿（同 9、10）等と共に植木鉢が多く出土している（同 12～19）。植木鉢は磁器（同 12～14、18）、陶器（同 15～17）、土器（同 19）が出土し、



8図 SK207出土植木鉢(2)



9図 SK207出土遺物(急須、花生、他)



10図 千駄木三丁目南遺跡 第2地点 1号遺構出土遺物

法量も内径 6.5cm 程度の小型製品から 40cm 弱の大型製品、また、SK207 (9 図 15) と類似した貼付が施されている製品や型作りの多角形製品 (第 10 図 12、14、17) など多様なバリエーションと SK207 同様高い技術を用いた上質の製品が確認できる。同 21、22 は「音羽」の刻印を有する急須で、煎茶道具であると思われる。

#### ・その他の器種 (9 図)

急須は、19 世紀第 2 四半期頃から徐々に出現し幕末頃にやや増加することが確認されている (成田 2001)。本遺構からは陶磁器・土器類合わせて 9 個体出土しているが、この量は決して多くはない<sup>(2)</sup>。器種としての急須の量的ピークは近代に入ってからと考えているが、9 図 1～3 の精緻な文様の磁器製品、6 の宜興産、同 4 の万古産、「音羽」銘 (同 5) や「寶山」銘 (報告編 581) の急須など質が高い製品で構成されている。図示はできなかったものの土器製の涼炉が数個体分確認されると共に精緻な文様が描かれた磁器小碗 (4 図 25) や陶器坏 (同 35) など多く出土しており、これらは煎茶道具と推定される。

また、8～10 は高さ 30cm 程度の大型花生であり、9 は、瀬戸蔵ミュージア蔵の伝加藤忠治の染付山水文筒形花生などに描法、器形などが近似しており、上質で、希少性、趣味性の高い製品である。この他、金属製品で、亀形の合子や棚、衣桁、鏡台などに使う引手 (同 13)、飾金具 (12)、蝶番 (同 14)、紐金具 (同 15)、ガラス瓶の蓋 (同 16)、雅号 (「扇玉」) と思しき印が彫られた獅子印 (同 17) など、藩内において上級階層の道具と考えられる遺物が出土している。

### 3. 小結

これまで本遺跡出土陶磁器の様相について記してきた。既に指摘した点も含めて特徴づけられる点などを総括してみたい。

数量的分析を行った以外の遺構や遺物の様相は、本研究編研究 1 で触れられているので多くは繰り返さないが、ここでは概略だけ押さえておきたい。本遺跡からは 17 世紀後半以降の近世の生活の痕跡が確認されているが、数量的に多くの遺物が出土するようになった時期は、18 世紀後葉以降である。ここで取り扱った遺構は 5 遺構に過ぎないが、東大編年Ⅶ期に比定された SX267、SK583 とⅧc 期に比定された SK229、SK207 では陶磁器様相が異なっていた。大きく捉えると後者は、女性の使用品や上質な植木鉢、花生、急須などが多く出土しており、これまでに報告されてきた詰人空間の様相と異っ

ている点である。こうした点は、居住者の階層や性別、嗜好バイアスによるものと考えている。

ここで指摘したバイアスを SK207 出土資料から、押さえてみたい。1 点目は、女性に関わる道具である。本文でも指摘したが、化粧に関わる可能性が高い碗、蓋物、あるいは三棚などに使用するような小型金属製の引手、蝶番、紐金具などの器種が多く確認されている。2 点目は、製品階層が高いものが出土している点である。製品階層の高低を客観的に提示することは難しいが、磁器の素地、文様をはじめとする装飾などを俯瞰すると、肥前系製品は、天草陶石を使用した白色の素地を使ったものがほとんどであった (例えば 4 図 6、14 を除いた肥前製品)。また、瀬戸美濃系と分類した製品もいわゆる関西系と称される細かい筆致で文様が描かれた製品が多く含まれ (4 図 8、11、25 など)、蓋物、植木鉢をはじめとする出土陶磁器類は手の込んだ作りの製品が多い。以上二つの点より、出土している陶磁器の使用者が女性、上位階層であることが推定される。こうした点を踏まえて文献調査を対応してみたい。文献によって居住していた人が推定されている。渋谷氏の調査によると SK207 への廃棄の要因になった白金邸全焼を伝える安政元 (1854) 年の火災は、10 月 12 日西隣の藤堂家からの出火により延焼したが、この時に白金邸下屋敷には前藩主 (11 代) 大村純熙の継室秋田肥季の養女である整が居住していたことが知られており、一時上屋敷に移っていたが、安政 3 (1856) 年 4 月 8 日に白金邸に移り住んでいる。こうしたことから「整は白金を恒常的な住まいとしていたことが判明する」(渋谷 2004、本研究編研究 8 参照) と指摘している。この文献記録は、SK207 出土遺物の特徴として記した女性、上位階層との居住者推定と合致している。

他方、煎茶、植物の栽培・観賞、文房具、印章などの道具は、文人趣味に関わる道具と評価されることが多い。文人という用語については、確定した定義はなく、日本と中国、あるいは中国国内など地域や時代によって異なった意識が存在している点については共通認識として良いだろう。日本の江戸時代後期には、明清時代のこうした影響を受けつつ、教養、趣味、非俗世などを重視する価値観を有する人や活動が展開していたことは間違えない。そうした精神的志向の中で重要視された代表的な「こと」が、琴棋書画、文房清玩などで、また、こうした行為に伴う「もの」であった。日本では、煎茶、書画、詩・歌、動植物の賞翫などが流行したが、考古学的痕跡として残るアイテムとしては SK207 から出土している急須、涼炉、煎茶碗、風炉、水滴、合子、硯、筆

入れ（筆筒）、印章、植木鉢、餌入れなどの器種が該当する。SK207の出土傾向は、文人趣味としての志向性、嗜好性を持つ人の存在が想定できる。同様に10図で示した文京区千駄木三丁目南遺跡第2地点出土資料でも重複する器種が多く、居住者は同じ嗜好性を持っていると考えている。ただし、本地点は上級武家階級で、千駄木三丁目は植木屋であることから、こうした志向性が、既存の身分階層と相関しているものではないと思われる。

この他、いくつか気になった点を挙げてみたい。本遺跡出土遺物は、18世紀後葉から19世紀の製品が量的中心であるが、当該期の磁器製品に通常であれば確認される焼継の痕跡がほとんど見られない点である。SK207の出土磁器製品557個体のうち焼継の痕跡が確認できたものは皆無であった。2点目は、先述のように出土している肥前系磁器のほとんどは、天草陶石を用いたと思われる白色素地の製品、瀬戸・美濃系磁器として分類したものの多くは文様を精緻に描いた関西系と称される製品であった。一方、本遺跡は大村藩邸であり、その藩領には国内有数の磁器の生産地である波佐見地域が含まれる。江戸時代中期以降、波佐見地域で生産される製品は、いわゆるくわんかんと称される製品に代表される粗製製品が主体的で、素地の色調は灰がかり、呉須の発色もやや黒ずんでいる特徴を有している。18世紀後半～19世紀を含む時期に生産していた大新登窯、三股本登・新登、中尾上登、永尾本登などの波佐見諸窯は、いずれも上記の特徴を呈している製品が出土している（長崎県波佐見町教育委員会1993、同2000、同2004、同2006、同2008など）。しかし、SK207をはじめ本遺跡から出土している磁器製品は、こうした当該期の波佐見諸窯の特徴を呈している製品は圧倒的に少ない。藩邸内には、藩主やその家族だけではなく、家臣も多く居住していたと想定される。家臣の使用品と廃棄場所が異なっていたとも考えられるが、調査区内には19世紀初頭ころまで長屋建物が存在しており、当該地域が藩上位階層の居住地域ではなかったことが想定される中で、遺物様相から19世紀初頭（東大編年Ⅶ～期）に比定されるSX267やSK583などからも、やや波佐見製品の割合が多く確認できるものの、やはり客体的である。家臣も含めて領内産の陶磁器を使用していない点は、こうした道具類の購入が、都市江戸の商品流通から入手している証左かも知れない。

本稿を草するにあたり、以下の方からお世話になりました。記して感謝致します。

大貫浩子、小川祐司、金子健一、徳泉さち、中野高久、

中野雄二、仲野泰裕、成田涼子、成瀬晃司

#### 【註】

- (1) 小川祐司氏ご教示
- (2) 本遺構からは、瀬戸・美濃系磁器土瓶と分類された製品が4個体出土しているが、いずれも小型であり、横手に持ち手が取り付けられていないものの、用途は急須と同様であったと推定している。

#### 【引用・参考文献】

- 井汲隆夫 1997 「江戸遺跡出土の磁器・陶器・炆器・土器の器種組成」『東京都新宿区南山伏町遺跡』新宿区南山伏町遺跡調査団
- 内野 正 2005 「出土陶器碗からみた尾張藩市谷邸の画期－柳茶碗・御小納戸茶碗・灰釉平碗の分析から－」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』XXI 東京都埋蔵文化財センター
- 江戸東京博物館 2013 『花開く江戸の園芸』
- 大村市史編さん委員会 2015 『新編大村市史 第三巻近世編』
- 共和開発株式会社 2007 『東京都文京区 千駄木三丁目南遺跡第2地点』
- 新宿区四谷三丁目遺跡調査団 1991 『四谷三丁目遺跡』
- 瀬戸市歴史民俗資料館 1987 『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』Ⅵ
- 高木翼郎 2011 「植木屋集住域における廻室－豊島区染井遺跡・染井よしの桜の里公園地区の発掘調査－」『江戸遺跡研究会 会報』No.130 江戸遺跡研究会
- 土田泰人 2006 「出土植木鉢の様相」『伝中・上富士前Ⅴ－東京都豊島区・駒込一丁目遺跡（コーシャハイム駒込地区）の発掘調査－』豊島区遺跡調査会
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡』Ⅱ
- 徳川美術館 2005 『新版 徳川美術館蔵品抄⑤ 初音の調度』
- 豊島区教育委員会 1991 『染井Ⅱ 東京都豊島区・染井遺跡（丹羽家地区）の発掘調査』
- 豊島区教育委員会 2001 『染井Ⅵ 東京都豊島区・染井遺跡（三菱重工業染井アパート地区）の発掘調査』
- 長崎県波佐見町教育委員会 1993 『波佐見町内古窯跡群調査報告書』
- 長崎県波佐見町教育委員会 2000 『三股本登窯跡』
- 長崎県波佐見町教育委員会 2004 『三股新登窯跡』
- 長崎県波佐見町教育委員会 2006 『大新登窯跡』
- 長崎県波佐見町教育委員会 2008 『中尾上登窯跡』
- 長佐古真也 2002 「「お茶碗」考－江戸における量産陶磁器碗の変遷－」『国立歴史民俗博物館研究報告 陶磁器が語るアジアと日本』第94集



仲野泰裕 2021 「川本治兵衛と製磁技術」『川本治兵衛 - 瀬戸染付の精華そして湖東焼 -』瀬戸市美術館

成田涼子 2001 「江戸遺跡出土の土瓶・急須」『江戸遺跡研究会第 14 回大会 食器にみる江戸の食生活 発表要旨』江戸遺跡研究会

成瀬晃司 2017 「奥女中の暮らし - 情報学環・福武ホール地点 SK10 出土遺物の検討 -」『赤門 - 浴姫御殿から東京大学へ -』東京大学総合研究博物館

日本貿易陶磁研究会 1984 『貿易陶磁研究 - 日本各地の遺跡における陶磁器の組成と機能分担 -』No.4

堀内秀樹 2016 「江戸大名藩邸出土陶磁器の消費モデル - 加賀藩本郷邸の出土資料の分析から -」『中近世陶磁器の考古学』雄山閣

武藤忠司 2017 「瑠璃釉のやきもの」『瑠璃釉のやきもの - 深遠な青の世界 -』瀬戸蔵ミュージアム

港区麻布台一丁目遺跡調査会 1986 『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』

東京大学埋蔵文化財調査室刊行

安芸毬子・小林照子・堀内秀樹 2021 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室

大成可乃 2006 「工学部 14 号館地点出土磁器・陶器・土器について」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部 14 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室

大成可乃 2012 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (2) - 器種 (小器種) の出土状況 -」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室

大成可乃 2016 「入院棟 A 地点から出土した陶磁器土器の様相 - 東大構内遺跡・指標遺構との比較から -」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点 研究編』東京大学埋蔵文化財調査室

大貫浩子 2012a 「医学部附属病院受変電設備棟地点 SK6 の数量分析について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院受変電設備棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室

大貫浩子 2012b 「農学生命科学研究科附属小石川樹木園 根圏観察温室地点 江戸時代の遺構と遺物 出土陶磁器・土器について - 瓦質植木鉢を中心に -」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室

東京大学埋蔵文化財調査室 1999 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

東京大学埋蔵文化財調査室 2016 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟 A 地点 報告編《第 3 分冊》』

成瀬晃司 1999 「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院

地点 (中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点) 遺構出土陶磁器組成表の掲載にあたって」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2

成瀬晃司 2021 「出土遺物からみた富山藩上屋敷」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院看護職員等宿舍 1 号棟地点・臨床試験棟地点・看護職員等宿舍 3 号棟地点 (1)』東京大学埋蔵文化財調査室

成瀬晃司・堀内秀樹 1990 「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析 - 東京大学構内遺跡病院地点出土資料と例に -」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室

堀内秀樹 1997a 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹 1997b 「東京大学本郷構内の遺跡 農学部家畜病院地点 発掘調査の成果 陶磁器・土器」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹 2005 「外来診療棟地点出土陶磁器・土器類について」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹 2008 「農学部共同溝地点出土陶磁器・土器類について - 行人坂鍛冶の一括資料 -」『東京大学構内遺跡調査研究年報』6 東京大学埋蔵文化財調査室

堀内秀樹・大貫浩子 2005 「出土陶磁器・土器類の数量分析」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部 1 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室



## 肥前大村藩下屋敷から出土した「柴安」瓦

谷口 榮\*

### はじめに

本調査地点のSK207から「柴安」と刻印された瓦が出土している(PL52上段右2点)。この「柴安」の刻印は、映画『男はつらいよ』の主人公車寅次郎の故郷として知られている東京都葛飾区柴又で焼かれた瓦であることが判明している<sup>(1)</sup>。

SK207は、覆土に焼土が大量に含まれ、焼土中には多くの被熱した瓦や陶磁器類のほか、貝殻や犬の下顎骨などの自然遺物なども出土している。遺構の状況や出土遺物の詳細については、本報告書で確認していただきたいが、遺構の壁面や底面の観察などから本遺構は採土坑として掘削されたものが、その後ごみ穴として転用されて、最後に火災に遭ったゴミ処理のために使われ、一気に埋め戻されたものと考えられている。

火災が起きた年代は、出土遺物から19世紀中頃と想定され、史料調査から安政元年(1854)の火災の可能性が高いとみられている。したがってSK207から出土した大量の遺物は、火災という事故により短時間に廃棄されたため、19世紀中頃の一括資料として注目される。

ここではSK207から出土した一括資料を構成する資料のひとつである「柴安」瓦について、瓦生産や流通とともに、「柴安」瓦の資料が多く認められる柴又地域の刻印の分類を試みて、本調査地点で出土した「柴安」瓦との比較などをおこなってみたい。

### 1 「柴安」瓦が焼かれた場所

「柴安」瓦の窯場は、現在、葛飾柴又寅さん記念館・山田洋次ミュージアム(葛飾区観光文化センター 柴又六丁目22)が所在するあたりに在った(図1・2)。瓦の窯場は、鈴木安五郎の持ちもので、葛飾柴又寅さん記念館・山田洋次ミュージアムの北側に隣接する山本亭が鈴木安五郎の居宅であった。

1923(大正12)年の関東大震災によって、鈴木家は瓦製造をやめてしまい、その跡地に台東区浅草でカメラ部品を製造していた山本榮之助氏がここに移り住み、居宅とカメラ工場を構えた。昭和63(1988)年、山本氏の所有する工場の敷地と家屋も含めた居宅を葛飾区が取得し、柴又公園の整備の一環として手が加えられ、平成

3年(1991)に柴又公園の開園とともに一般公開されている。

公開されている山本亭は、近代和風建築と純和風庭園が備わり、地下に築かれた防空壕も現存するなど歴史遺産としての価値が高く、葛飾区登録有形文化財・東京都選定歴史的建造物となっている。

工場跡地には、平成9(1997)年に葛飾区観光文化センターが建てられ、葛飾柴又寅さん記念館が開館している。スーパー堤防と一体となったユニークな施設で、昭和を代表する日本映画『男はつらいよ』の記憶のすべてが寅さん記念館に詰め込まれており、映画を撮られた葛飾区の名誉区民でもある山田洋次監督が名誉館長となっている。平成24(2012)年には、葛飾区観光センター内に山田洋次ミュージアムが開館(現在は寅さん記念館内に移設)し、山田洋次監督が半世紀におよび制作してきた作品へのおもいやフィルムにこだわる映画づくりを通して、作品の新たな魅力、奥深さに触れることができる。

山本亭および葛飾柴又寅さん記念館・山田洋次ミュージアムは、都内で初めて国重要文化的景観に選定された「葛飾柴又の文化的景観」の重要な構成要素でもあり、葛飾柴又の文化観光の拠点のひとつとなっている。

そのような「場」に、かつて瓦を焼く窯場があったのである。この「場」での瓦作りを支えたのは、鈴木家の経済力とともに後でも触れるが、東を流れる江戸の人びとに坂東太郎として親しまれた江戸川が存在である。

### 2 鈴木安五郎と瓦作り

#### (1) 鈴木安五郎

鈴木家は、代々柴又村で農業を営んでいたが、安五郎の父の代から瓦作りを始めたといわれている。安五郎は、寛政10(1798)年に柴又村で生まれ、6才の時に鈴木家の養子となって、瓦作りを継ぎ、鈴木家の当主はその後安五郎を名乗った。

鈴木安五郎は、瓦作りだけでなく、柴又村の名士でもあった。弘化2(1845)年、帝釈天題経寺境内に所在する「板刻帝釈天像由来碑」の建立にも尽力している。翌弘化3年の大雨の時には、住民を指揮して江戸川堤が決壊しないように土嚢を積むなどして防いだという。

\*所属 葛飾区産業観光部観光課学芸員

また、鈴木安五郎は、松什という号を持ち、尊敬する芭蕉についての研究書『芭蕉発句類題集』などを著している。彼は、道楽で俳諧をかじっていたというのではなく、江戸・京都・大坂の三都の俳諧師番付を見ると、最上段に並んでおり、関西で催された俳句の集まりで江戸代表として抜擢されるほど、俳壇での地位が高かったことがわかる。

瓦作りだけでなく俳諧でも名を馳せた鈴木安五郎は、肝臓を患って嘉永6（1853）年4月18日に没し、葛飾区金町にある光増寺に葬られた。享年56であった。

二代目の安五郎の時には、鬼瓦も製造するようになり、生産もかなり安定していたといわれているが、大正の頃になると経営は思わしくなくなり、三代目の時に関東大震災を契機に江戸時代から焚き続けてきた窯の火を落としてしまう。

## (2) 創業

鈴木安五郎の瓦窯（以下文中では、鈴木窯と称す）に関する史料は、極めて少なく、江戸時代の様子を直接知ることのできる史料はいまのところ江戸東京博物館が所蔵する安五郎が発行した弘化3（1846）年の引札のみであろう<sup>(2)</sup>。引札によると、「柴又村」と「江戸本所瓦町」の地名が見え、鈴木安五郎はその時期にその2箇所で作成りや販売をしていたらしい。

そのほか『上総日記』<sup>(3)</sup>という史料に、江戸時代の柴又で瓦を窯で焼く情景が記録されている。『上総日記』は、御鷹匠同心片山賢が天保3（1832）年に書き留めたもので、10月16日の記事に以下のような記述がある。

しばまたという所に、帝釈天王のおハしますにもうづ、御堂ハ近頃のけいゑいとおほしく、いとあたらしくて、ミるさままづたうとし、べたうを、経栄山題経寺といふ、大かたなる境内なれど、庭にたてる二本の松など、をかしうつくりなして、清めなど行とゞきたり、こゝに瓦をやく家ありて、竈よりいかめしく、黒けふりふすばりあがりて、いとおどろおどろしくミれど、又めづらし、市川の関を越えて、ふとゑ川を舟してわたる

片山賢は、江戸の役宅から公務で上総方面に出向くが、その途中、帝釈天題経寺に詣でている。帝釈天題経寺は、寛永6（1629）年創建と伝わる日蓮宗寺院で、安永8年（1779）の板本尊が庚申の日に再発見されたことによって、江戸市中で流行っていた庚申信仰と結びつき、多くの人が帝釈天詣に訪れるようになった。十方庵敬順が著わした『遊歴雑記』「式編之中 五十五 芝股題経寺の帝釈天」<sup>(4)</sup>にも、文化12（1815）年に帝釈天題経寺を

訪れた敬順は「近頃の流行寺とす」と記されている。

片山賢が訪れた時期の帝釈天題経寺は、十二世海秀院日輝上人の時代で、「御堂ハ近頃のけいゑいとおほしく、いとあたらしくて」とあることから、近年御堂を新たにしたらしい。

片山賢は柴又帝釈天題経寺の後、市川に向かう途中で「瓦をやく家」を目撃し、「竈よりいかめしく、黒けふりふすばりあがりて、いとおどろおどろしくミれど、又めづらし」と記している。勢いよく黒煙が立ち上る様は、おそらく達磨窯で瓦を焼く際の煙の工程が行われていたものとみられ、その情景を目撃したものと思われる。

片山賢が記した窯は、位置的にも鈴木窯であることは間違いのないものと判断される<sup>(5)</sup>。『上総日記』は、当時の操業の様子とともに、弘化3年の引札よりも遡って少なくとも天保3年には鈴木窯が操業していたことを示す史料として貴重である。

『増補葛飾区史』上巻によると、文政元（1818）年6月の「柴又村御年貢割付状」に「永八百文、瓦竈運上」とあり、安政4（1857）年11月の「曲金村御年貢皆済目録」にも「永八百文、瓦竈運上」とあるので、その頃から中川以東では瓦製造が村落工業の一つとして行われていたと記している<sup>(6)</sup>。

鈴木窯は、安五郎の父の代から瓦作りを行っていたことから「柴又村御年貢割付状」の「瓦竈」の記録は、鈴木窯もしくは鈴木窯を含む可能性が高いとみてよいであろう。従って、鈴木窯はすでに文政元年には操業していたと考えられる。

## (3) 操業の様子

先項でも記したように鈴木窯の史料は極めて少なく、操業開始から関東大震災までの操業の様子は残念ながら詳細は不明である。

ただし、近代以降の創業の様子については、青木更吉氏による地元の聞き取り調査からある程度知ることができる<sup>(7)</sup>。聞き取りによると、大正頃には鈴木窯には瓦を焼く達磨窯が7基ないし8基あり、作業場内にはトロッコが使われていたという。通常の瓦作りは、窯が1～2基を5～6人の職人で行うもので、鈴木窯はかなり大きな瓦工場であったことがわかる。

江戸川河川敷にある新八水路を利用して、瓦工場まで粘土や燃料、燻すための松葉を運び込み、焼き上がった製品を積み出したという。大正年間に行われた江戸川の改修工事前には、旧堤外に船溜まりがあり、ここで高瀬舟からサツパ舟に荷を積み替え、潮位の変化を利用して堤防の水門を潜って運んだらしい（図2上）。

運んできた粘土は、水に入れて練ってから型にはめて

瓦の形をつくる。瓦の形に整えた生地は、天日で乾燥させ、水分がなくなって白くなった生地を「シラジ」と呼ぶ。干し方は、夏場は地面に立てて干すが、冬場は陽射しが弱いので「立て掛け」という干し台に並べて干す。

干し上がった「シラジ」は、達磨窯に詰めて焼成されるが、窯には1000枚窯入れできるものと、800枚の2種類あったという。窯の高さは180cm、地表面から60cm程掘り下げてあったという。窯には煙突がなく高いところに煙出しが2箇所あった。燃料の松葉や背板を左右の焚口から入れて一晩焚き続け、煙の色で焼け具合を見る。

焼成温度の目安は800℃で、煙の色で見極めるが、一人ではなく数人で確認し、窯止めを行う。瓦焼きは勘頼りで難しく、松葉を一束でも多く入れると焼き過ぎてしまつて軽石のようになって水の浮いてしまう。これを「瓦焼かずに窯焼いた」と言った。

窯止めしてから2昼夜経ったら、焚口を開けて水をかけてから窯出しを行う。瓦はまだ熱いので古い藁草履を使って窯出しをしたという。

#### (4) 粘土と燃料

瓦の生地となる粘土は、上流部からもたらされる土砂の堆積によって形成されているので、東京低地では身近に存在し入手することができる。東京低地に所在する遺跡の調査をしていても、微高地の基盤を成す自然堆積中に良好な粘土層が形成されていることが確認できる。古墳時代後期から奈良・平安時代の遺跡の基盤層を構成する粘土層は、自然科学分析で時期的に今から2千年前の弥生時代に堆積したものであることが判明している<sup>(8)</sup>。

この粘土は黒色を呈し粘性が高く、「ねば土」とも呼ばれて、厚く堆積しているところでは黒色を挟んで上下に灰色の粘土が認められる。江戸川右岸にも微高地が発達しており、柴又や下流の江戸川区小岩あたりにそのような焼き物の生地になる粘土が多かった柴又の農家は、畑の土を瓦屋に売って、地盤を低くして水田にしたという<sup>(9)</sup>。鈴木窯も柴又や周辺から瓦の生地となる「ねば土」を仕入れていたのであろう。

瓦焼きの燃料となる松葉や背板は、他所から運び込んだ。松葉は、主に江戸川対岸の東葛地域が供給地で、古くは舟や馬力で運ばれた。江戸川の松戸や流山には葉柄河岸という松葉などの葉柄を積み出す河岸があり、舟運で各地に供給された。供給先は、瓦作りだけでなく行徳の塩田のほか、江戸・東京市中で正月に飾る門松も東葛地域のものが多かった。

背板は、製材の時に出る木屑で木場や製材所から仕入れた。背板だけで瓦を焼くことはなく、松葉と混ぜて使

われた。混ぜる割合は窯場によってまちまちで、松葉は冬期の購入だったが、背板は一年中仕入れることができたので、秋口の窯焼き背板の割合が増えたという。背板が増えたのは昭和になってからといわれている<sup>(10)</sup>。

### 3 「柴安」瓦の分布

柴又村の安五郎の頭の文字から瓦に刻まれる「柴安」が生み出されたことは容易に想像される。この「柴安」の刻印が認められる瓦は、柴又の鈴木窯で製造された瓦と見做すことができる。

隅田川沿岸の窯業の歴史なかで、鈴木窯を位置づけ江戸遺跡出土の「柴安」瓦の分布について報告されたのは、関口廣次氏が嚆矢となろう。平成11(1999)年11月14日に葛飾区郷土と天文の博物館で企画展「江戸・東京のやきもの」の関連イベントとして開催された地域史フォーラム8「地域の歴史を求めて 隅田川・江戸川流域のやきもの」で、関口氏は千代田区飯田町遺跡、港区汐留遺跡から出土した「柴安」瓦の刻印を図示して報告している<sup>(11)</sup>。

谷口もこの地域史フォーラムにおいて、企画展「江戸・東京のやきもの」に伴う事前調査を行った際、流山市の流山小学校、新川小学校、秋元本家〈天晴みりん醸造所 現在の一茶双樹記念館〉、野田の中央小学校にも葺かれている事が確認されたことと、柴又の真勝院・柴又八幡神社金町の光増寺、そして土浦城出土の資料を拓本で紹介している<sup>(12)</sup>。

その後、題経寺諸堂と墓苑にある虚空蔵堂や文化庁の補助事業として行った柴又地域文化的景観調査の際に、柴又に現存する古民家にも「柴安」瓦が葺かれていることが確認され<sup>(13)</sup>、最近では千葉県柏市内の古民家でも確認されている<sup>(14)</sup>。

近世から近代にかけて鈴木窯で製造された瓦は、近世には江戸市中をはじめ、近代には江戸川流域に広く販路を展開していた様子がうかがえ、その分布状況から江戸川の水運を利用し、船で各地に運ばれたことが読み取れる。

### 4 柴又地域の資料

#### (1) 所在場所と刻印の種類

先の地域史フォーラムにおいて、柴又に所在する寺院に葺かれている瓦には、「柴安」瓦が多く認められること。その多くは、瓦の葺き替えなどで屋根から降ろされて敷地内に置かれた状況のものも多く見られ、瓦の製造

や葺かれていた年代の詳細を知ることが難しいが、刻印を観察すると、いくつもの種類が認められ、今後「柴安」瓦の調査研究に刻印が有効であり、その一部を報告した<sup>(15)</sup>。

ここではそれ以降に確認された資料も含め、主だった刻印の種類を紹介したい。

#### ①真勝院・葛飾区柴又3丁目 SS1：図3-(1・2)

境内の瓦溜に、主に棧瓦と若干のいわゆる万十瓦や軒棧瓦、丸瓦があった。棧瓦(1)と万十瓦(2)に刻印が確認できた。確認できた刻印は1種類で、枠線の四隅は丸茂を帯び、大きさは棧瓦(1)ヨコ1.7×タテ1.0cm、万十瓦(2)ヨコ1.6×タテ1.0cmである。2つの刻印のヨコの長さに0.1mm程度差があるが、文字には差異は認められず、焼成による収縮等の個体差ともみられる。

枠の中に左に「柴」、右に「安」の文字があり、後で紹介する鬼瓦の刻印以外、この文字配置となっている。文字は、比較的線が太目であるがしっかり刻まれ、字の輪郭が丸く収まり、「柴」に比べ「安」は小さめの字となっている。全体に枠線と文字の間にスペースが空いている。文字の特徴は、「比」と「ウ」の冠は凸状(山形)で、「ウ」のはじまりは点状となっている。「女」の上端の2本は同じ高さで垂下するが、下端は「柴」よりも低い位置で止まっている。このタイプの刻印を仮にSS1と称しておく<sup>(16)</sup>。

ちなみに軒棧瓦の破片の文様は、江戸式であった<sup>(17)</sup>。

#### ②柴又八幡神社・葛飾区柴又7丁目 SH1：図3-(3)、SH2：図3-(4)、SH3：図3-(5)

柴又八幡神社古墳の学術調査で「柴安」瓦が出土している<sup>(18)</sup>。刻印は、滴水瓦、軒平瓦、棧瓦に3種類の刻印が認められる。

軒平瓦(3)と滴水瓦(4)の刻印は、文字は似ているが、細部を見ると違いがあり、枠線の大きさも異なっている。滴水瓦の枠線は、ヨコ1.7×タテ1.0cm、軒平瓦はヨコ1.3×タテ1.0cmと後者の横幅が0.4cm程短い。枠線と文字の関係は、滴水瓦の文字は上下の枠線に接しているのに対して、軒平瓦は上下の枠線と文字の間にスペースが空いている。文字は、両者とも字は細めでしっかりと刻まれているが、滴水瓦は少し摩滅していて観察し難いところもある。そのため厳密に比較するのは難しいが、両者ともハネがしっかり表現された楷書となっている。「女」の上端の2本が同じ高さではなく、左の方が高くなっているのが共通した特徴である。「木」「女」が若干相違しているようにも見えるが、捺印時の強さとか深さによる印影の違いも想定されよう。あえて挙げるなら、「木」の「ハ」の右側が軒平瓦の方が短いよう

ある。

文様は、滴水瓦は江戸式の文様を施して左に左三つ巴を配し、軒平瓦は東海式<sup>(19)</sup>の文様である。軒平瓦の刻印をSH1、滴水瓦のものをSH2とする。

柴又八幡神社では、異体字の「柴安」の刻印が出土している<sup>(5)</sup>。枠線の大きさは、ヨコ1.6×タテ1.0cm。枠線と文字の間隔は、上下の枠線と文字との間にスペースが空いている。文字は、「柴」が異体字で、「安」は丸味を帯び図案化されており、左右がシンメトリーになっているのが特徴である。これをSH3とする。

#### ③柴又帝釈天・葛飾区柴又7丁目 ST1：図3-(6)、ST2：図3-(7)

大鐘楼と鳳翔会館の間に瓦溜があり、そこに「柴安」の刻印が捺されたものがある。瓦の種類は、軒平瓦、棧瓦、軒丸瓦、丸瓦などがあり、そのうち刻印は軒平瓦と棧瓦に認められ、2種類確認できた。軒平瓦のものは異体字のもので(6)、見た目も枠線の大きさもヨコ1.6×タテ1.0cmと柴又八幡神社のSH3と同数値であることから、SH3刻印と同じ刻印とみられる。文様は、東海式で、左に寺紋の雷菱があしらわれている。この刻印をST1とする。

棧瓦の刻印は(7)、枠線の大きさはヨコ1.3×タテ0.9cmで、四隅は他の刻印の枠線に比べ比較的角張っている。文字は、細目で深く、枠線と文字の間隔は下の線の方が上の線よりもスペースが空いている。文字の「柴」の「比」の左の作りは「L」字状で「止」にはなっていない。「安」の「ウ」冠の右の作りは小さく、「女」の「く」の屈曲部は少し髭状に出っ張っており、下端も「ノ」の下端よりも高い位置で止まっている。柴又八幡神社SH2と似ているが、SH2に比べ、文字は深く刻まれている。この刻印をST2とする。

#### ④柴又帝釈天虚空蔵堂・葛飾区柴又6丁目 SK1：図3-(8・9)、SK2：図3-(10)

虚空蔵堂の裏手に瓦溜があり、棧瓦が多く積まれ、丸瓦も少量みられる。刻印は、2種類確認されている。棧瓦に見られた刻印(8・9)の枠線は、ヨコ1.6×タテ1.0cmで、文字は図案化され、真勝院SS1と同種である。「安」の字は、柴又帝釈天ST1の「安」と類似している。(8・9)をSK1とする。

丸瓦に認められた刻印は、異体字のもので(10)、柴又帝釈天ST1と同じものである<sup>(20)</sup>。これをSK2とする。

#### ⑤光増寺・葛飾区東金町6丁目(KK1：図3-11)

境内に置かれている鬼瓦で、頂点に「南葛飾郡 鈴木安五郎製造 柴又邨」と押されている(11)。字の大きな特徴は「柴」の字が異体字で表記されていることで、「柴

安」の文字は、SK2・SK1・ST1と類似する。あえて違いを指摘するならば「女」の「く」と「ノ」の上端が横棒の上でループ状に繋がっているところがSK2・SK1・ST1と相違しているが、全体的なモチーフは同じである。この刻印をKK1とする。

## (2) 刻印の分類

(1) において、柴又地域で確認できた「柴安」瓦の刻印の特徴について記した。文中でも記したように、刻印の観察から枠線や文字に違いが認められ、数種類存在市同じもしくは近似する資料が存在することがわかった。

それらの刻印には大きく2つの種類がある。「柴安」と枠線と2文字で構成されるものと、光増寺の鬼瓦で捺された3行に亘って文字を配する大きいものがある(図3-11) KK1)。前者を刻印A、後者を刻印Bとする。資料的には、前者が主体であり、後者は鬼瓦のみに認められる。以下、資料的にまとまりのある刻印Aについて、細分を試みたい。

枠線の伴う2文字の刻印Aは、今回は楷書(1類)のものと、図案化されたもの(2類)の大きく2つに大別を試み、文字のバリエーションから1類はa～cの3細分(a:SH1、b:SH2、c:ST1)、2類はa・bの2細分(a:SS1・SK1、b:SH3・ST1・SK2)できる。2類bと刻印BのKK1の字体は「柴安」の「柴」が異体字で、「安」の字も同じである。

刻印AとBに分類された柴又地域の資料の相関関係は、図4に示した。実線の四角い枠内に2つ有るものは、同じ刻印と判断したもので、1類b・1類cを囲む点線枠はハネなどの細部に相違が見られるが枠の大きさおよび字体が近似している。

これらの分類された刻印の年代は、1類については基準となる資料がなく不明であるが、2類については、光増寺の刻印BKK1の「南葛飾郡」という文字が手掛かりとなろう。これと同じ刻印は、流山・野田市の学校に葺かれた鬼瓦にも確認されている。「南葛飾郡」は、明治11(1878)年から昭和7(1932)年まで使われた自治体名であることから、明治11年から鈴木窯が操業を止める大正12(1923)年を下限とする時間幅に収まる製造とみてよからう。

従って、刻印A2類aと刻印Bの「安」の字の類似性からも、同一時期の製造と想定し、2類を大略明治11年以降の製造と捉えておきたい。

## (3) 柴又地域以外の発掘された資料

ここでは柴又地域以外の本調査地点も含め飯田町遺跡と土浦城跡の発掘された「柴安」瓦の刻印のある資料について紹介したい。

## ⑥飯田町遺跡(図5)

飯田町遺跡の調査報告書から出土した「柴安」瓦について紹介してみたい。瓦は調査区全域から出土しており、層位的にはI～IV層のうち出土量の70%がI・II層から出土している。出土した瓦の種類は、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、塀瓦、鬼瓦、棟込瓦、菊丸瓦、海鼠瓦10種類あり、そのうち平瓦、丸瓦、棧瓦が出土点数の80%を占めている。出土状況から明確に時期を絞り込むことができる資料はなく、明治以降のものも多く含まれるという。刻印は25種類認められ、最も多かったのが「柴安」であった<sup>(21)</sup>。

報告書を見る限り軒平瓦と軒棧瓦以外には、「柴安」の刻印は認められない。「柴安」の刻印は、報告書の写真を見る限り大きく額線のあるものと、ないものの2種類に分類でき、前者はさらに2つに細分できる。

額線のあるもののうち四隅が直角ではないが比較的角張っているもの(351頁30・31)と、四隅の丸味が強いもの(351頁32・33・38)に細分され、前者は文字が楷書的で「安」のウ冠がしっかりしており、頭の点は大きく、「ワ」の左端の点も垂直気味ではじまりが横棒よりも上に出ている。「女」の中央の隙間が小さく、「柴」と「安」の下端が同じ位置にある。字体は1類aのSH2に似ているが、「女」の「く」の下端がSH2に比べ長い。

後者は、前者に比べ文字にシャープさはなく、「女」の中央の隙間は大きい。「柴」の「木」の右のハネが前者に比べ長く、「柴」と「安」の下端は「安」の字の方が「柴」よりも高い位置で止まっているなど前者との相違点がある。字体は、1類cのST2に類似しているが、枠線の四隅がSH2に比べ丸味が強い点で異なっている。

額線がないものは(351頁34～37)、文字は不鮮明で、額線のあるものより字は崩れているが、字体は32・33と類似している。

飯田町遺跡出土の「柴安」瓦の刻印の多くは、江戸式の文様が施された軒平瓦と軒棧瓦に「柴安」の刻印が認められたが、1点ではあるが東海式に刻印が認められている。刻印は、柴又地域のものとの関係は類似するものの医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点の刻印とは異なるタイプである。飯田町遺跡出土の「柴安」瓦の刻印の違いは、製造時期によるものなのか、同一時期のバリエーションなのかなどを判断する出土情報は残念ながら不明である。

## ⑦土浦城跡(図6)

整備に伴う発掘調査で出土した櫓門と外丸御殿の平瓦の軒部または江戸式の文様が施されている軒棧瓦に、「柴安」の刻印が認められ、石川巧氏によって江戸遺跡研究

会で報告されている<sup>(22)</sup>。確認した出土した刻印のタイプは同一のものとみられ、枠の大きさ「安」や字体から柴又地域の1類cに類似しており、同範の可能性もある。詳細な時期は不明であるが、石川氏の報告から19世紀前半と捉えておきたい。

#### ⑧医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点（図7）

本報告の発掘調査地点である医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点から出土した「柴安」瓦の刻印は、2点図示してある。2点とも長方形の額線がめぐっている。額線の四隅は少し丸味を帯び、四辺の線は直線的である。文字は、シャープな字体で「柴」の「木」はカタカナの「ホ」の字のように両裾は線状に長くなく、短く点状である。「安」の字の下端の2本は左側が長く額線近くまで伸びるが、右側は高い位置で止まっている。2点とも同じ刻印とみられ、柴又地域の1類cに類似しており、同範の可能性が高い。

2点の「柴安」瓦が出土したSK207は、安政元（1854）年の火災処理のために埋められた可能性が高い遺構である。刻印の年代を押え難い状況のなかで、この「柴安」瓦も19世紀中頃の一括資料を構成する資料として注目される。従ってこのタイプの刻印は、1854年前後の時期と捉えておきたい。

## 5 「柴安」瓦の年代と種類

### (1) 年代

「柴安」瓦については、年代を知る手掛かりが極めて少なく苦慮するが、凶案化された刻印A2類については「南葛飾郡」の文字を手掛かりに、明治11年以降の製造とみられることはすでに述べたとおりである。

出土品も含めバリエーションの多い刻印A1類については、年代を知る手掛かりが極めて少なく苦慮するが、唯一出土情報として本調査の医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点の資料は、安政元（1854）年に起きた火災処理のために埋められた一括資料であり、19世紀中頃の年代を与えることができる。土浦城跡出土の刻印A1類cに類似した資料が、19世紀前半と報告されていることと矛盾することではなく、ここでは柴又地域の刻印の分類で刻印A1類cとした一群の製造年代は、19世紀前半から中頃として捉えておきたい。

刻印A1類a・1類bなどの年代はまだ明らかではないが、資料の集成と刻印の分類を行い、考古学的情報とともに既存の建物の建築年代やその後の瓦の葺替などの年代を参考に、刻印と年代の関係を整理することによって、「柴安」瓦の製造と供給の状況が明らかになる

ものと期待される。

### (2) 瓦の種類

鈴木窯で製造された瓦は、刻印の確認できる種類として、軒平瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦のほか滴水瓦もある。柴又帝釈天虚空蔵堂の資料に1点だけ丸瓦に「柴安」の刻印が認められている以外、丸瓦系には刻印のある資料は確認されていないが、軒平瓦が作られていることから軒丸瓦と丸瓦も作られていたとみて良いであろう。

軒平瓦および軒棧瓦に施される文様は、いわゆる江戸式が多いが、東海式も飯田町遺跡、帝釈天題経寺、柴又八幡神社の資料に認められる。出土している「柴安」瓦は量的には、江戸式が多いが、東海式も製造されていたことが確認できる。

帝釈天題経寺境内の瓦集積の資料のなかに、「柴安」の刻印が押された「東海式」軒平棧瓦の瓦頭に、寺紋の雷菱が配されているものがあり、注文品であることがわかる。帝釈天題経寺に現在葺かれている滴水軒棧瓦の瓦頭に雷菱が配されたものがあることから、「柴安」瓦とすればこれらも注文品とみられる。

柴又八幡神社の資料のなかには、滴水軒棧瓦も見られ、時間的には近代以降の製造と思われる。帝釈天題経寺の帝釈堂と二天門には、滴水軒棧瓦が現在も葺っており、帝釈堂は大正～昭和初期の建造、二天門は明治29年に落慶しているため、鈴木窯で焼かれた瓦の可能性はある。

鬼瓦については、聞き取り調査で二代目安五郎から鬼瓦を作りはじめたとされるが<sup>(23)</sup>、「柴安」の刻印のある近世の鬼瓦は今のところ確認されていない。確実な資料としては、「南葛飾郡 鈴木安五郎製造 柴又邨」とある明治期に製造された鬼瓦である。

## 6 隅田川以東の窯業と鈴木窯

「柴安」瓦が製造された鈴木窯は、隅田川以東の東京低地東部の葛飾区柴又にあり、葛飾区内ではすでに古墳時代後期の土師器窯が確認されており、古くから窯業が行われていた。隅田川沿岸や隅田川以東での瓦の製造は、浅草寺や葛西城跡から中世瓦が出土していることから中世には行われていたことが想定される<sup>(24)</sup>。しかし、瓦製造が隆盛するのは、近世都市江戸の建設、また災害による復興や防火対策から需要が拡大してからである。

鈴木窯もそのような需要を背景に操業をはじめたものと思われる。操業のはじまりは2で記したとおり、少なくとも天保3年までは確実にさかのぼることができ、文政元年には操業をはじめていた可能性が高い。



「柴安」瓦は、柴又に窯場を構え江戸の本所にも出張所を置き、船を使って江戸市中へ運び込まれた。今でも都内の江戸遺跡から「柴安」の刻印が打たれた瓦が出土し、往時の「柴安」瓦の隆盛を垣間見させてくれる。鈴木窯で製造された瓦は、江戸市中だけでなく、江戸川流域にも展開している。

出土資料からは、近世期の供給先は地域的には江戸市中をメインとし、一部は土浦城にも葺かれており、武家屋敷地や城の施設など武家を上得意としていた傾向がみられる。生産地の柴又と供給先の江戸市中は舟運によって結ばれ、江戸地廻り経済の一端を担っていた。

近代以降は、江戸川の舟運によって江戸川流域の流山・野田地域や柏地域にも供給されている。学校のほか民間の家屋にも葺かれるようになっており、購買層を広げていることがわかる。

一方、当該期になると「柴安」瓦が地元柴又の寺社や民家の屋根に葺かれるなど、柴又の主だった瓦葺き建造物の葺を飾り、「柴安」瓦は柴又の風景にはなくてはならないものとなっていった。地元の粘土を使い焼かれた「柴安」瓦は、柴又の資源をうまく活かした地産地消という面でも注目される。

## おわりに

「柴安」瓦の研究は、ようやくその端緒についたばかりである。そのような状況にあって、本調査の医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点から出土した「柴安」瓦は、火災処理のために土坑内に一括廃棄された資料であるため、年代を押えることができる資料として貴重な事例として注目される。

残念なことに肝心な鈴木窯の操業の様子を知ることのできる資料は極めて少なく、詳細が不明な点が多い。しかし、幸いにして製造された瓦が、江戸遺跡だけではなく、現在の柴又に所在する寺社や古民家にいまだに葺かれていたり、敷地の片隅に置かれていたりしている。

今後取り組むべきこととして、江戸遺跡やその周辺、さらに江戸川流域に所在する発掘調査された近世以降の遺跡から「柴安」瓦が出土しているかどうかの確認であろう。報告書に掲載されていない出土瓦も大量にあり、それらを対象に確認作業をすることは現実的には難しい。調査を担当された方などからの情報提供を願うところである。

遺跡出土の瓦資料以外には、「柴安」瓦を屋根に葺く寺社や古民家は柴又をはじめ各地に今も残っており、葺き替えなどの時に降ろされた瓦が敷地内に集積されてい

る場合もある。未確認の「柴安」瓦を葺いた建物もあるはずなので、その所在確認も継続して行い資料を記録化していくことが必要であろう。

そのような地道な作業を継続することで「柴安」瓦の資料の蓄積が図れ、鈴木窯で製造された瓦の種類と文様、刻印の識別が進むことが期待される。本小稿が、今後も江戸遺跡から出土するであろう「柴安」瓦を歴史資料として活かすための調査研究の一助になれば幸である。

なお、本小稿を起こす切っ掛けをいただいた堀内秀樹氏をはじめ、「柴安」瓦や隅田川沿岸の窯業について関口廣次・青木更吉・石川 功・氏にご教示いただいたことが大いに参考になっている。また柏市所在の資料について江藤隆博氏から情報提供いただき、帝釈天題経寺、真勝院、光増寺、柴又八幡神社、葛飾区郷土と天文の博物館には資料の観察等の便宜をいただいた。最後になったが、ここに記して感謝申し上げたい。

## 【註】

- (1) 谷口 榮 2001 『かつしかブックレット 12 江戸・東京のやきもの—かつしかの今戸焼』 葛飾区郷土と天文の博物館
- (2) 都市歴史研究室編 1997 『東京都江戸東京博物館調査報告書第4集 館収蔵資料報告1 今戸焼』 江戸東京博物館
- (3) 橋本直子・葛生雄二 1995 『葛飾区古文書史料集八 かつしか紀行文』 葛飾区郷土と天文の博物館
- (4) 註 (3) に同じ
- (5) 註 (1) に同じ
- (6) 入本栄太郎 1985 「第8章 第6節 村の産業」『増補葛飾区史』上巻 葛飾区
- (7) 青木更吉 1999 「報告4 葛飾の瓦製造」『地域史フォーラム8 地域の歴史を求めて 隅田川・江戸川流域のやきもの』 葛飾区郷土と天文の博物館
- (8) 谷口 榮編 1987 『葛西城址 葛飾区青戸7丁目14番地点発掘調査報告書』 葛西城址調査会
- (9) 註 (7) に同じ
- (10) 註 (7) に同じ
- (11) 関口廣次 1999 「総論 隅田川沿岸の窯業—1988年・1990年・それから—」『地域史フォーラム8 地域の歴史を求めて 隅田川・江戸川流域のやきもの』 葛飾区郷土と天文の博物館
- (12) 谷口 榮 1999 「報告3 葛飾周辺の窯業の系譜と展開」『地域史フォーラム8 地域の歴史を求めて 隅田川・江戸川流域のやきもの』 葛飾区郷土と天文の博物館
- (13) 谷口 榮 2015 「第2章 3節 3 柴又の産業」『葛飾・柴又地域 文化的景観調査報告書』 柴又地域文化的景観調

査委員会・葛飾区教育委員会

- (14) 金出ミチル 2021 「第2章 2-2 建物の特徴」『柏の歴史ある建物 柏市建造物調査報告書4』柏市教育委員会
- (15) 註(12)に同じ
- (16) 以下、説明する便宜上、仮に刻印のタイプ名を付すところにする。
- (17) 加藤 晃 1988 「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」『國學院大學日本史学専攻大学院会研究集録』14 國學院大學
- (18) 谷口 榮 2012 『柴八幡神社古墳 第2分冊』葛飾区郷土と天文の博物館
- (19) 金子 智 1996 年「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒棧瓦の地方色」『古代』第101号 早稲田大学
- (20) 本稿を執筆するため当該資料の刻印を計測しようと現地に訪れたが、残念ながら所在を確認することができなかった。
- (21) 仲津由美子 1995 「4-10 瓦」『飯田町遺跡』飯田町遺跡調査会
- (22) 石川功氏から土浦城出土「柴安」瓦の追加資料の提供をいただいた。石川氏の報告は以下の文献である。石川 功 1999 「土浦城の近世瓦—土浦城跡出土・使用軒平瓦を中心とした近世瓦の生産と流通—」『江戸遺跡研究会会報』72号 江戸遺跡研究会
- (23) 註(7)に同じ
- (24) 谷口 榮 2019 『増補版 江戸東京の下町と考古学—地域考古学のすすめ—』雄山閣

〈主な参考文献〉

- 関口廣次 1988 「隅田川沿岸の窯業」『古文化談叢』第20集 (上)九州古文化研究会
- 都市歴史研究室編 1997 『東京都江戸東京博物館調査報告書 館蔵資料報告1 今戸焼』江戸東京博物館
- 藤原 学 2001 『達磨窯の研究』学生社
- 谷口 榮編 2006 『葛飾区郷土と天文の博物館収蔵資料 窯業 関連資料 今戸焼』葛飾区郷土と天文の博物館

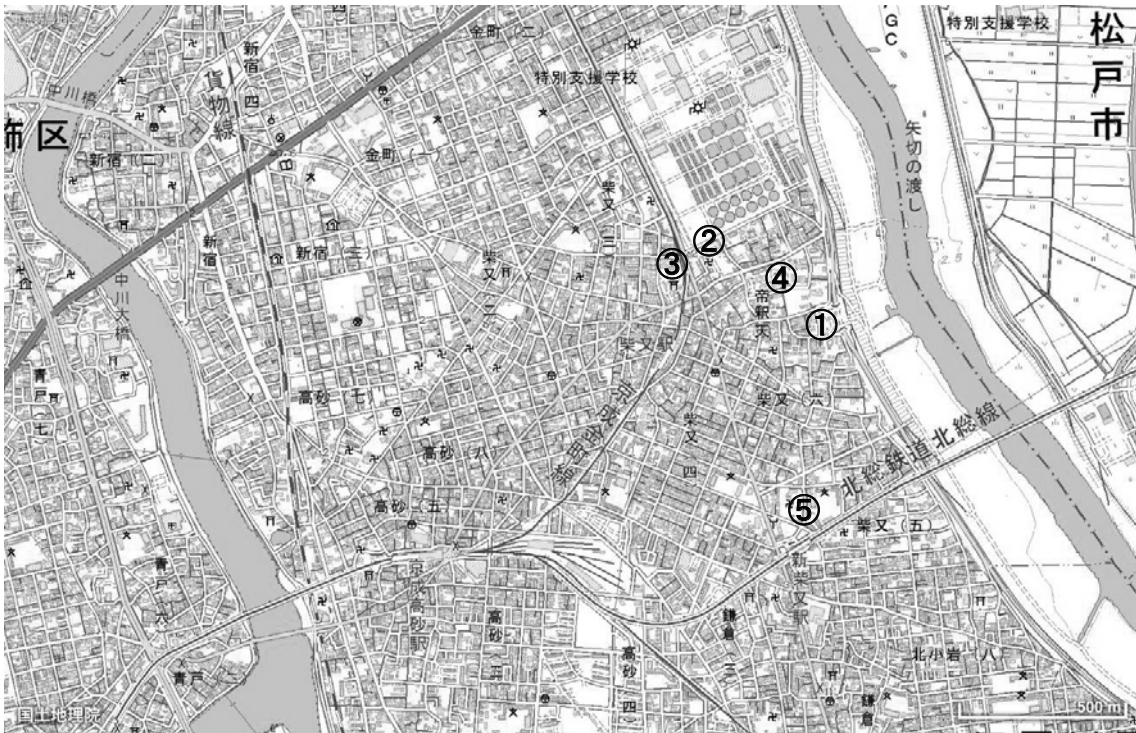
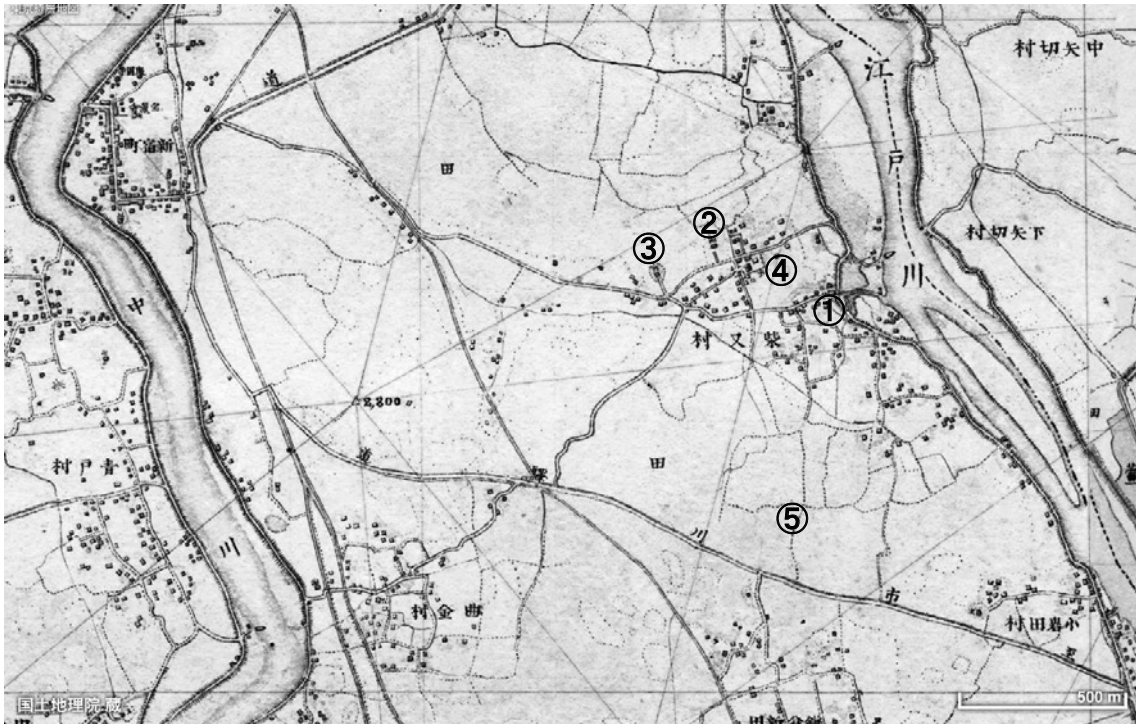


図1 「柴安」瓦を製造した鈴木窯位置図(上は文明開化期、下は現在 東京時層地図より)  
①鈴木窯 ②真勝院 ③柴又八幡神社 ④柴又帝釈天 ⑤柴又帝釈天虚空蔵堂



図2 柴又全図(上は江戸川改修工事前、下は改修後)

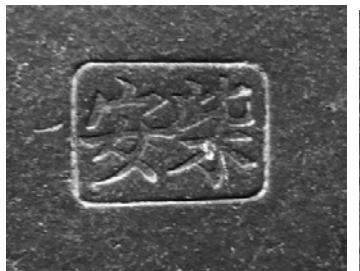
A 柴又帝釈天 B 鈴木安五郎居宅(現在の山本亭) C 瓦窯場(現在の葛飾柴又 寅さん記念館・山田洋次ミュージアム)



真勝院 (1) SS 1



(2) SS 1



柴又八幡神社 (3) SH 1



(4) SH 2



(5) SH 3



柴又帝釈天 (6) ST 1



(7) ST 2



帝釈天虚空蔵堂 (8) SK 1



(9) SK 1



(10) SK 2



光増寺  
(11) KK 1

図3 柴又地域の「柴安」刻印資料

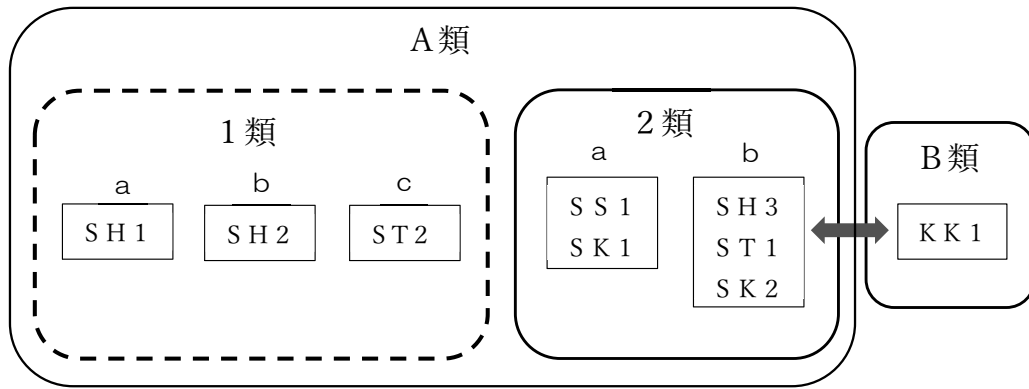


図4 柴又地域の「柴安」瓦刻印A・B相関関係

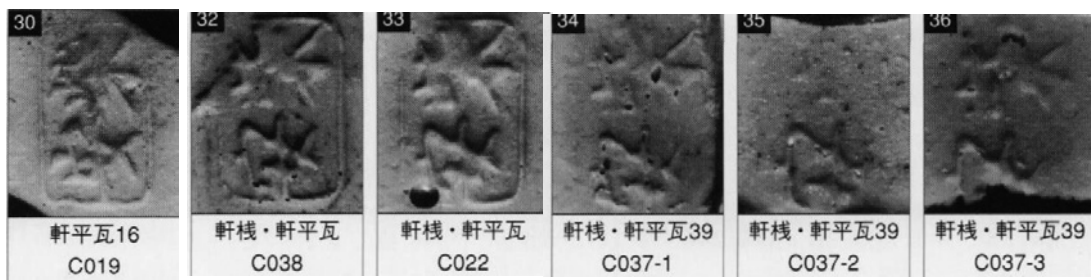


図5 飯田町遺跡出土の「柴安」刻印資料(仲津由美子1995)



図6 土浦城跡出土の「柴安」刻印資料(石川巧1999)

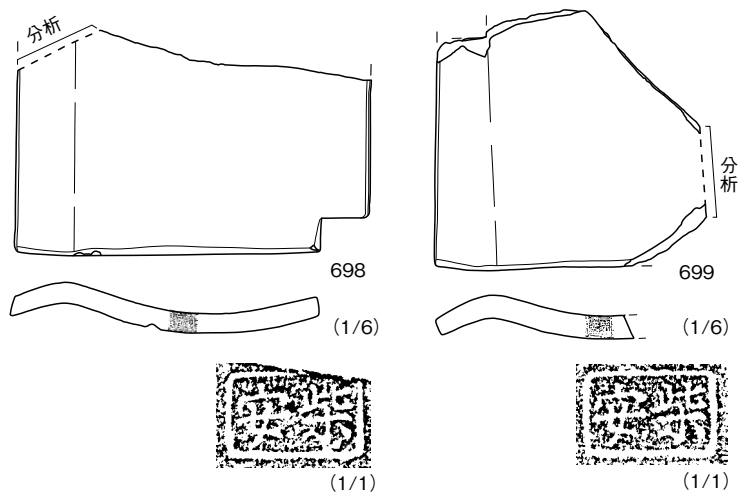


図7 医科学研究所附属病院A棟地点出土の「柴安」刻印資料(東京大学埋蔵文化財調査室2022)

# 医科学研究所附属病院 A 棟地点出土の徳利について

大貫 浩子

## はじめに

本地点は東京大学白金構内の遺跡（港区 NO135 遺跡）の中心部に位置する。文献調査によると大村藩は寛文元（1661）年に江戸幕府より総坪数 5600 坪の下屋敷を白金村に拝領している。「江戸大絵図」明暦 3(1657)年頃によれば周辺は野原のような場所であった。以来幕末まで「白金下屋敷」として所持し続けている。幕末嘉永 7 (1854) 年刊行の「尾張屋江戸切り絵図」のうち「白金絵図」には中原街道（目黒通り）沿いに白金 4 丁目から続く町家があり、周辺には「松平阿波守」「五島左エ門尉」「大村丹後守」の名前が見られる（東京大学埋蔵文化財調査室 2022）。この町屋は百姓町屋とされていたものが正徳三（1713）年には町奉行支配に組み込まれ正式な町名を付されている。白金村は武家地や寺社地と共に都市化していく（株式会社イビソク 2021）。

本地点では、遺物収納箱で 490 箱の遺物が出土している。本調査室では出土遺物の数量分析をするため便宜的に推定個体数 100 個体以上の遺構について検討を加えている。推定個体数 100 個体以上出土している遺構は、SK207、SK229、SX267、SK583 でそれらの陶磁器を分類し数量を計測した。陶磁器・土器は SK207 1071 個体、SK229 377 個体、SX267 215 個体、SK583 289 個体である。4 遺構の合計は 1952 個体であった。この中で今回分析した瀬戸・美濃系灰釉徳利は SK207 189 個体、SK229 138 個体、SX267 75 個体、SK583 18 個体、合計は 324 個体で、全体の 21.5% おおよそ 5 分の 1 を占める。ただし、以降の分析にはこの遺構以外の徳利もすべて含めた。まず、遺構ごとの釘書きを抽出、種類ごとに分類し、個別の釘書きについて分析した。その後、周辺地域の遺跡から本地点出土の釘書きと同様のものや関係する物を抽出し分析した。

瀬戸・美濃系灰釉徳利に関する研究は、1980 年代から徳利の分類や編年、釘書きなどの基礎的研究が行われ（長佐古 1988）（小林 1989）、1990 年代になると流通範囲などの研究がおこなわれた（美濃部 1996）。2019 年には「近世考古学の提唱」50 周年記念研究大会『近世の酒と宴』で徳利を含め酒に関する様々な角度からの研究発表がなされた。また、2021 年に出版された白金台町五丁目町屋遺跡の報告は本遺跡に近く遺構ごとに釘書

きの報告がされているため、本地点の釘書きとの比較対照のための良好な資料となった（株式会社イビソク 2021）。

これまで、「たがね彫り」「釘書き」など不統一だった用語についてはタガネや釘などによって焼成後に付けられたものを「刻書」とし、長佐古により提唱された「タガネ」により幅広く付けられた痕を「ベタ彫り」とした（長佐古 1992）。また、列点状に付けられてはいるが密のため線状に見えるものやわずかに離れているが密になっているものを「列点密」とし間隔の広いものを「列点」とした。小林謙一の論考の中で「技法による分類」の「二種 焼成前たがね彫り」（小林 1989）とされているものは「彫刻」とした。本地点で出土している彫刻されている徳利は線の終わりに粘土を押ししたときに見られる粘土溜まりが見られ、乾ききる前に刻まれていることが解る（1 図）。使用された工具としては、断面に丸みを帯びた工具が使われているのではないかと想定している。明治期以降の焼成前に筆で文字情報が書かれている、いわゆる「文字徳利」は技法によって分類を行ったため「筆書き」とした（1、3 図）。また、容量に関しては、二合半としたものの中に三合を意識しているものも含めた。

## 1. 遺構ごとの刻書について

今回考察した瀬戸・美濃系灰釉徳利は液体を入れる容器として幅広く使われ酒、醤油、油、酢など様々な液体を入れていたと考えられる。刻書はこれらを販売している店の屋号などが書かれていた。また、本地点では出土していないが徳利につけられている刻書と同様の刻書が皿や鉢などにも見られるものがあり、これらは料亭など仕出しをする店の屋号などと考えられている。本地点では徳利以外の器種に刻書を確認することは出来なかったため、徳利の刻書を中心に分類、考察した。

遺構ごとの刻書の種類、数量は 3、4 表に示した。表の形式は遺構ごとに釘書きの報告がされている白金台町五丁目町屋遺跡の表を参考にした（株式会社イビソク 2021）。刻書は全体が残存しているものと、欠損部分の少ない残存状況の良いものだけに限定した。刻書が 2 カ所以上に付されているものについては複数個体に計測されてしまう可能性があるが誤差の範囲として処理した。



1 図 技法ごとの名称

遺構名	東大編年		刻書技法				
			ベタ	列点密	列点	彫刻	
SK583	VII	1780～90年代	9	5			14
SK267	VII	1780～90年代	11	14	1		26
SK229	VIII c	1830～40年代			76	(1)	76
SK207	VIII c	1830～40年代	1	10	44		55
			21	29	121		171

1 表 刻書技法別集計表



本地点全体では185個体で、SK207は55個体、SK229は76個体、SX267は17個体、SK583は12個体が確認できた。SK207、SK229はともに東大編年Ⅷc期(1830~40年代)に比定されており、年代的には近いことが指摘されている。SX267、SK583は東大編年Ⅶ期(1780~90年代)に比定されている。先行研究により瀬戸・美濃系灰釉徳利の刻書はベタ彫りが先行し次第に密な列点になり、粗い列点になっていくとされている。それらのことを元に検証してみたい。

まず、遺構別刻書出土状況(3、4表)から遺構ごとの技法別個数を表にした(1表)。年代順にSK207、SK229、そしてSX267、SK583の刻書を比較してみた。SK207はベタ彫り1個体、列点密10個体、列点44個体である。SK229はベタ彫り0個体、列点密0個体、列点76個体である。SK207、SK229はともに東大編年Ⅷc期(1830~40年代)に比定されている。SK207には古い技法であるベタ彫りや列点密が含まれておりSK229の刻書はほぼ列点である。これだけで比較してみるとSK207がSK229より古いと錯覚してしまうところであるが、実際には遺構の新旧関係はSK229がSK207に切り込まれておりSK207が新しい。遺物全体の傾向としては、SK207は二次的な火災を受けている遺物も多く屋敷が全焼した安政元(1854)年の大火のゴミの片付けではないかと想定されている(本研究編 堀内参照)。その時点で日常生活で使われていたもの以外にも非日常的な道具類などの保管されていた物も多く含まれSK229と比較すると遺物にやや年代幅がある。一方SK229は日常ゴミと考えられている。日常生活で不要になったものを比較的短期間に捨てたもので、遺物の年代幅も狭くより定点的である。

徳利や刻書から見るとSK207は陶磁器・土器1071個体でそのうち瀬戸・美濃系灰釉徳利は189個体で約17%である。一方SK229は陶磁器・土器377個体でそのうち瀬戸・美濃系灰釉徳利は138個体で約36.6%である。日常生活のゴミの中にいかに多くの瀬戸・美濃系灰釉徳利が廃棄されていたのかが解る。また、SK207は189個体中55個体29.1%の刻書が解読でき、SK229は138個体中76個体約55.0%の刻書が解読できる。SK207とSK229を比較するとSK207は火災による破損などで廃棄されたため、破片になっているものが多く、刻書が復元されていないことがわかる。SK229はSK207に比べ解読率がより高く、破片が大きくそのままの状態での廃棄されていたと想定される。SK207、SK229ともに列点の徳利はその時点で通い徳利として酒屋に返されずゴミとして廃棄されたと想定されるが、SK207から出土して

いるベタ彫りと列点密の刻書11個体の徳利は通い徳利として酒屋に返されず日常生活のゴミとしても廃棄されずに瓶や容器など様々なものに転用使用されていたものが火災によりまとめて廃棄されたのではないだろうか。内訳を容量別に見てみると、二合半が1個体、五合が9個体、1升が1個体である。五合が多く転用使用されていたことが想定され興味深い結果である。また、列点ではあるが頸部以上がきれいに打ち砕かれて再利用されているものがSK207では五合が2個体、1升が2個体(報告書未報告1個体を含む)、SK229でも1升が1個体出土している。5個体とも列点であることから、長期間保存使用される物ではないことが分かる。内五合1個体、1升2個体には内面全体に赤色物質が付着している。鉄漿を作る際の鉄漿壺の可能性も考えられるが、五合や1升など容量の大きい徳利を再利用し、付着物が鮮やかな赤褐色であることなどから、酸化第二鉄を主成分とする赤色顔料の鉄丹ベンガラの可能性も指摘できるのではないだろうか。建物や、物の補修などに使用されたのではないだろうか。このように様々な容器として再利用されたと考えられ、用途によって比較的大きな五合や1升が使用されたのではないだろうか。

SK583の刻書はベタ彫り9個体、列点密5個体、列点0個体である。ベタ彫りが多く古い様相がみられる。SX267は刻書はベタ彫り5個体、列点密14個体、列点1個体と3種類いずれも出土しており、列点密が一番多い。ともに東大編年Ⅶ期(1780~90年代)に比定されているが、SX267にはSK583では見られない列点の釘書が出土しており、また、SK583は比率としてベタ彫りが多いが、SX267は列点密が多くわずかながら年代差が感じられる。

今回の4遺構から徳利の刻書が東大編年Ⅶ期(1780~90年代)ではベタ彫り、列点密、東大編年Ⅷc期(1830~40年代)では列点になっていることが分かった。また、一個体のみであるがSK207とSK229が接合した彫刻が出土しており、年代的に古い遺構であるSK229に属する物と考えられる。彫刻は列点と同時期と考えられる。

## 2. 本地点の個別の刻書について

遺構ごとに刻書の種類、数量を数えそれを元に刻書の種類別の数量を集計した(3、4表)。出土数が一番多いものは「◇上」(これ以降「◇上」の「◇」は「菱井筒」である。)、次は「万」と「八」の組み合わせのもの、「○万」と「八」の組み合わせのものであった。「万」のみで「八」が無いものが3個体確認された。他に破片では

SK207 東大編年VIIIc期 (1830~1840年代)

SK207			万八	万八			万		八	イ十	
刻書	列点密	列点	列点	列点	ベタ	列点密	列点	列点密	列点	列点	列点
2合半		15	1				1		1	1	2
5合	2	3	2		1	4	2	1		1	
1升		3	1	1			1	1			
合計	2	21	4	1	1	4	4	2	1	2	2

SK207		イセ由	三							川上	箸
刻書	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点密
2合半				1		1	1				1
5合	1	2			1			1			1
1升				1						1	
合計	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2

SK229 東大編年VIIIc期 (1830~1840年代)

SK229		万八	万八	万		三川	イセ由	すき	内田ヤ	大池	川上
刻書	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点
2合半	44					2	1		1	1	
5合	9						1	1			1
1升	5	2	1	2	1						
合計	58	2	1	2	1	2	2	1	1	1	1

SK229	加	イ	ハキ小	
刻書	列点	列点	列点	列点
2合半				
5合	1			1
1升		1	1	
合計	1	1	1	1

SK207 + SK229		万魚町
	列点	彫刻
2合半		
5合	1	
1升	3	1
合計	4	1

SX267 東大編年VII (1780~90年代)

SX267			箸	箸	竹	小			SX267 + SK207	
刻書	ベタ	列点密	ベタ	列点密	列点密	列点	列点密	列点密	刻書	列点
2合半	3	2	2	8	1	1	2		2合半	1
5合								1	5合	
1升									1升	
合計	3	2	2	8	1	1	2	1	合計	1

3表 遺構別刻書出土状況 (1)

SK583 東大編年VII (1780~90年代)

SK583	㇏	㇏	㇏	八	久	㇏	㇏	㇏	又	㇏	㇏
刻書	ベタ	ベタ	ベタ	ベタ	ベタ	ベタ	ベタ	列点密	列点密	列点密	列点密
2合半	1					2	1		1		
5合		1	1	2	1			1		1	
1升											1
合計	1	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1

SE2

北小	SK583 + SK207	㇏	SE2	㇏	㇏	㇏	山	㇏	八
	刻書	ベタ	列点	列点	列点	列点	列点	列点	列点
	2合半			2					
	5合				1	1			
	1升								1
	合計	14	1	1	2	1	1	1	1

SK201

SK201	㇏	㇏
刻書	ベタ	ベタ
2合半	1	
5合		1
1升		
合計	1	1

SK202

SK202	㇏	㇏
刻書	ベタ	列点
2合半	1	
5合		1
1升		
合計	1	1

版築

版築	井	㇏
刻書	ベタ	列点密
2合半	1	1
5合		1
1升		
合計	1	2

刻書別集計表

	㇏	㇏		㇏	㇏	㇏	㇏	㇏	㇏	㇏
刻書	列点密	列点		ベタ	ベタ	列点密	列点	列点	列点	列点
2合半		61	61	1					1	2
5合	2	13	15		1	4			2	7
1升		11	11				1	2	3	6
合計	2	83	85	1	1	4	1	2	6	15

	㇏	㇏	㇏	㇏
刻書	ベタ	ベタ	列点密	列点
2合半	1	3	2	1
5合	1		1	2
1升			1	3
合計	2	3	4	6

4表 遺構別刻書出土状況 (2)

「万」や「〇万」のみの刻書のものも多く出土しているが、「八」との組み合わせは不明である。「八」のみの数量のみを表示した。

「◇上」はベタ彫りのものは無く、列点密2個体でほとんどが列点83個体の計85個体確認された。上記の結果を踏まえると、18世紀末頃にはこの屋号を持つ店があったと考えられる。全体の比率としては45%をしめる。先に述べた用途の中で一番徳利の使用量が多いものはやはり酒であろう。

「八万」と「八」、「〇万」と「八」、「万」と「八」が刻書されているものを刻書の技法ごとに分類した。表と裏は屋号を表として便宜的に付けた。いずれの徳利にも同一数字の「八」が付されており、数字ではあるが管理番号などではないことがわかる。ベタ彫りの段階には「八万」と「八」、「〇万」と「八」、の刻書が見られ、「八万」と「八」はこの後の刻書は見られない。「〇万」と「八」は列点密が一番多く、列点の段階にも見られる。列点の段階で現れる「万」と「八」は表裏に書かれているものと縦に書かれているものがある。縦書きは「万八」のみに見られる特徴である。

ベタ彫り	列点密	列点
表「八万」裏「八」 表「〇万」裏「八」	表「〇万」裏「八」	表「〇万」裏「八」 表「万」裏「八」 縦「万八」

2表 店の推移

それぞれ屋号が異なるが、「万」と「八」の共通した漢字が使われており関連性をみてとれる。屋号が違うところから本店と支店のような関係ではなく暖簾分けのような関係だったのではないだろうか。「八万」と「八」の店はベタ彫りの段階で途切れてしまったが、「〇万」と「八」の店は列点の頃まで続いているが1個体のみである。「万」「八」の店は列点の頃からの店であり「〇万」と「八」の店から暖簾分けされた店なのではないだろうか。ベタ彫りの「万や」「八」「ト」、「八万ヤ」、彫刻の「万屋」がそれぞれ1個体出土している。彫刻の「万屋」は東大編年Ⅷc期(1830～40年代)の遺構から出土しており、本地点の彫刻はこの1個体のみである。

本地点で数量の多い「◇上」、「万」と「八」の組み合わせのもの、「〇万」と「八」の組み合わせのものの容量ごとに数量を見ていく。数量分析を行って個体数ははっきりしている遺構で比較してみると二合半が一番多く187個体、五合が135個体、1升が61個体である。

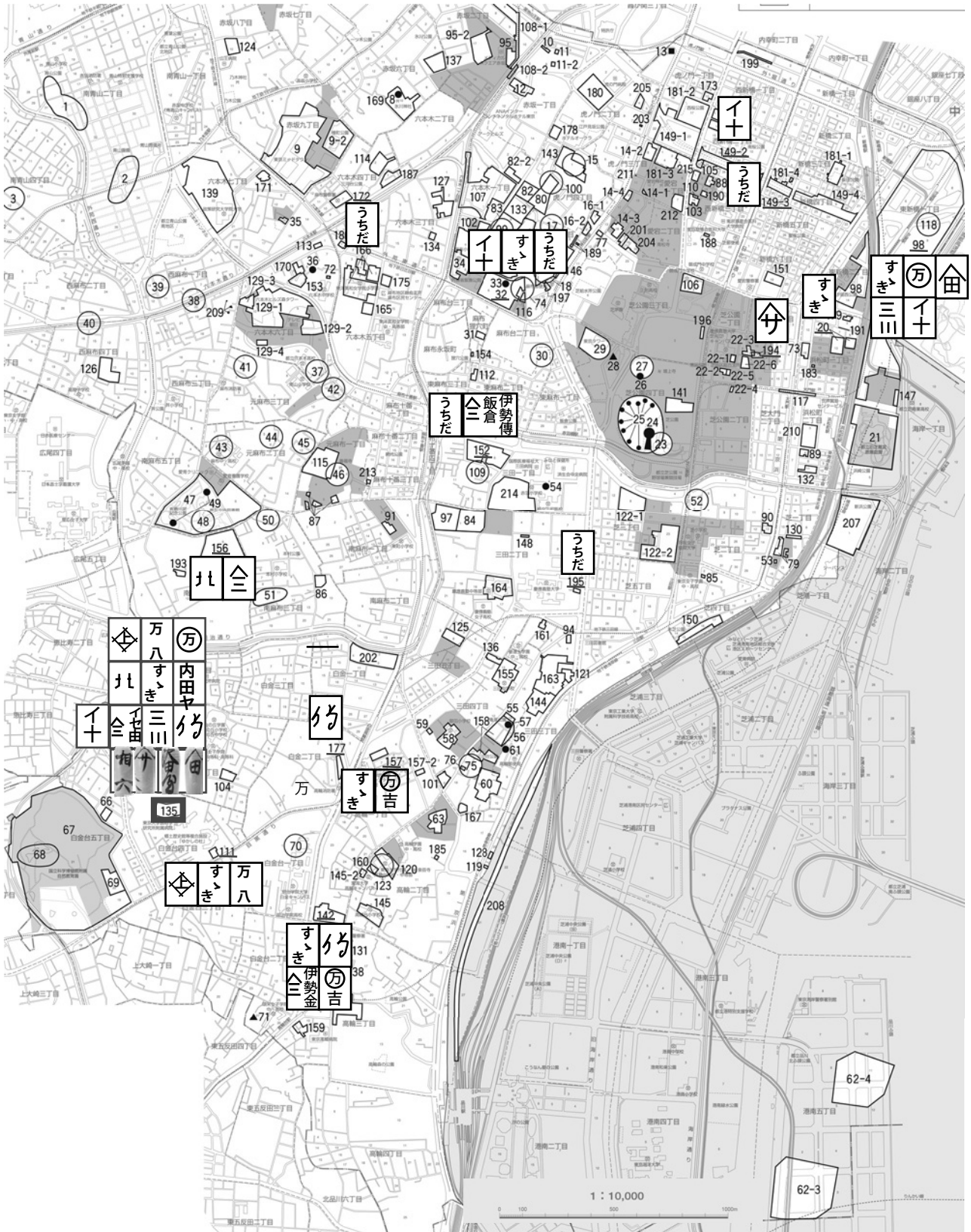
このうちベタ彫りは二合半が14個体、五合が6個体、1升が1個体である。「〇万」と「八」の組み合わせのものについてはほとんどがSK207からの出土であり、5合が多くそれらが再利用されている可能性を指摘している。本地点で出土数の多い「◇上」はベタ彫りの時代には取り手がなかったと思われるため、列点「◇上」と列点「万」と「八」の組み合わせのものを比較してみる。列点「◇上」は二合半が一番多く61個体、五合が13個体、1升が11個体である。しかし、「万」と「八」の組み合わせのものは2合半は1個体のみで五合が2個体、1升が5個体と1升が多いのが特徴である。「万」と「八」の組み合わせの刻書を屋号に持つ店が酒屋ならば、日常生活においては「◇上」の店から購入し、やや特別なときに「万」と「八」の組み合わせの店から購入したのではないか。おそらく扱う酒の種類が異なるのではないかと思われる。酒宴の規模が大きくなれば、徳利などではなく樽などで購入すると思われ、宴会の大小や個人的に飲む場合など使い分けていたのであろう。また、酒屋で醤油なども扱っており酒以外の可能性もある。

### 3. 周辺の遺跡との比較

周辺の遺跡から出土している瀬戸・美濃系灰釉徳利の刻書を本地点出土の刻書や筆書きと同じものや比較検証できるもののみを地図に表示してみた(2図)。刻書の技法は文章中のみとする。報告されているもののみで個体数など不明なものが多い。

「◇上」は本地点の同一年代に比定されているSK207、SK229において137個体中85個体で約62%にあたる。周辺の遺跡を検証してみた。本地点からお抱え包蔵地を挟んで200m南東側にある白金台町五丁目町屋遺跡(2図 遺跡番号111)では刻書全体の約30%にあたり1番多く出土している事がわかった(株式会社イビソク2021)。また、それ以外の遺跡からは確認することが出来ず興味深い結果となった。これらのことから、「◇上」の屋号を持つ店が本遺跡の周辺にあり日常的にこの店から購入していたことがわかる。また、ベタ彫りには類推されるものもなく、列点密の刻書が書かれるころにできた店と考えられる。白金台町五丁目町屋遺跡以外の周辺遺跡からの出土が見られないことから、あまり大きくない小規模の店であった可能性が高い。

「万」と「八」は白金台町五丁目町屋遺跡から1個体出土している。他の周辺遺跡からは「〇万」のものや「〇万」と「吉」は確認することが出来たが、「万」と「八」両方が刻書されているものは確認することが出来なかつ



港区埋蔵文化財包蔵地（遺跡）分布図（令和3年3月1日現在）加筆

2 図 周辺遺跡釘書き出土状況

遺跡番号	遺跡名称	種別	所在地
20	播磨赤穂藩森家屋敷跡	大名屋敷跡	浜松町1-6・13
32	出羽米沢藩上杉家・豊後臼杵藩稲葉家屋敷跡	大名屋敷跡	麻布台1-6
98	汐留	敷跡・鉄道関連跡	東新橋1-5・10,東新橋2-3・8・17・18海岸1-2
111	白金台町五丁目町屋跡	江戸町屋跡	白金台4-5
135	医科学研究所附属病院A棟地点	武家屋敷跡	白金台4-6
142	上行寺跡・上行寺門前町屋跡	社寺跡・町屋跡	高輪1-27
149-2	愛宕下第2	武家屋敷跡	西新橋2-16、24~32
149-3	愛宕下第3	武家屋敷跡	新橋4-14、28・31
152	筑前秋月藩黒田家屋敷跡	大名屋敷跡	三田1-6・9
156	石見津和野藩亀井家屋敷跡	包蔵地・墳墓・大名屋敷跡	南麻布4-6
157	肥後熊本藩細川家屋敷跡	大名屋敷跡	高輪1-4
172	旗本花房家屋敷跡	武家屋敷跡	六本木4-7
177	大和芝村藩織田家屋敷跡	大名屋敷跡	白金2-4
194	芝神明宮跡	社寺跡	芝大門1-11
195	三田二丁目町家跡	町家跡	三田2-14

港区埋蔵文化財包蔵地（遺跡）一覧表 加筆・抜粋

5表 港区遺跡一覧

出土遺構		遺物 No.	胎質	器種	東大分類		法 量 (cm)			文字	類例 数量
コード	No.				胎土・産地	器種	口径	底径	器高		
医科研	表土	1	陶器	瓶	TC	10	3.0	7.6	22.3	中野屋 非買品	2
医科研	表土	2	陶器	瓶	TC	10	3.8	7.7	21.0	中の屋 非買品	1
医科研	表土	3	陶器	瓶	TC	10	3.0	8.5	21.7	中の屋 非買品	1
医科研	表土	4	陶器	瓶	TC	10	3.6	7.3	23.2	ハサ 相六 三合入	1
医科研	表土	5	陶器	瓶	TC	10	3.0	8.2	22.5	ハサ 相六 五合入	4
医科研	表土	6	陶器	瓶	TC	10	3.2	9.0	23.4	ハ田 沢田屋	1
医科研	表土	7	陶器	瓶	TC	10	3.1	7.6	21.0	常磐屋 三光町支店 ◇酒店	1

6表 筆書き徳利観察表

た。白金台町五丁目町屋遺跡以外の周辺遺跡からの出土が見られないことから、あまり大きくない小規模の店であったのではないだろうか。

「八三」と「いせ吉」は本地点からは3個体出土している。いずれも列点の刻書である。他の周辺遺跡からは同一の文字が刻書されているものは確認することが出来なかった。しかし、「八三」と「伊勢金」や「八三」と「飯倉」「伊勢傳」の筆書きのものが出土している。年代的には異なり比較することは出来ないが、同じ屋号で1文字違いの店名と思われる文字が書かれており、同系列店なのではないだろうか。

「すゝき」は白金台町五丁目町屋遺跡で2番目に多く出土しているが本地点では1個体のみである。「すゝき」は本地点より東側900mの間の3カ所で出土している他、直線で4kmほど北に位置する汐留遺跡(2図 遺跡番号98)周辺でもまとめて出土している。汐留遺跡では複数個体が報告されており、この周辺に酒屋があったと推定できる。本地点では1個体のみであるが周辺の遺跡からも出土しており、特に白金台町五丁目町屋遺跡は12個体と多い。美濃部は明治期の筆書き徳利の分布から商業圏を2kmと想定している(美濃部1996)。中心部に近い地域や朱引き線に近い場末の地域では当然状況は異なってくるであろうが、汐留遺跡周辺に1店と別に白金台町五丁目町屋遺跡周辺に1店と同じ刻書を持つ本店や支店などの関係で刻書「すゝき」の徳利を使用する店の商業圏が広がっていた可能性もある。刻書のみでの分布では判断が付きにくいところであるが4km離れたところに2店あるとすれば、美濃部の2kmの想定と合致する。200mしか離れていない白金台町五丁目町屋遺跡で「◇上」は同じように多く出土しているのにもかかわらず、「すゝき」の出土状況は大変異なる。藩邸では出入りの業者などが強く影響するのであろう。また、大きく1地点外れているためこの図には入れることが出来なかったが、本地点から南東方向約4kmの地点にある仙台坂遺跡でも確認されている。仙台坂遺跡は仙台藩伊達家下屋敷で、まとめて出土している汐留遺跡も仙台藩伊達家上屋敷が含まれている。こちらは、上屋敷から下屋敷への人の移動とともに持ち込まれた物であろう。

「イ十」は本地点では1個体のみ確認であるが、汐留遺跡では複数個体の報告がされており、また汐留遺跡周辺部でも出土している。汐留遺跡周辺に酒屋があったと推定できる。本地点からは1個体のみであり、周辺部からは出土しておらず、日常的に購入している店ではないのであろう。

「嶋」は東側700m2カ所で出土している。本地点で

はベタ彫りであったが周辺遺跡の物は列点で長く続いていることがわかる。

本地点の「八」に「サ」は筆書きで「相六」の文字が入っているが、汐留遺跡では「八」に「サ」のみの刻書が出土している。年代も異なることから同一の店であるかは不明である。

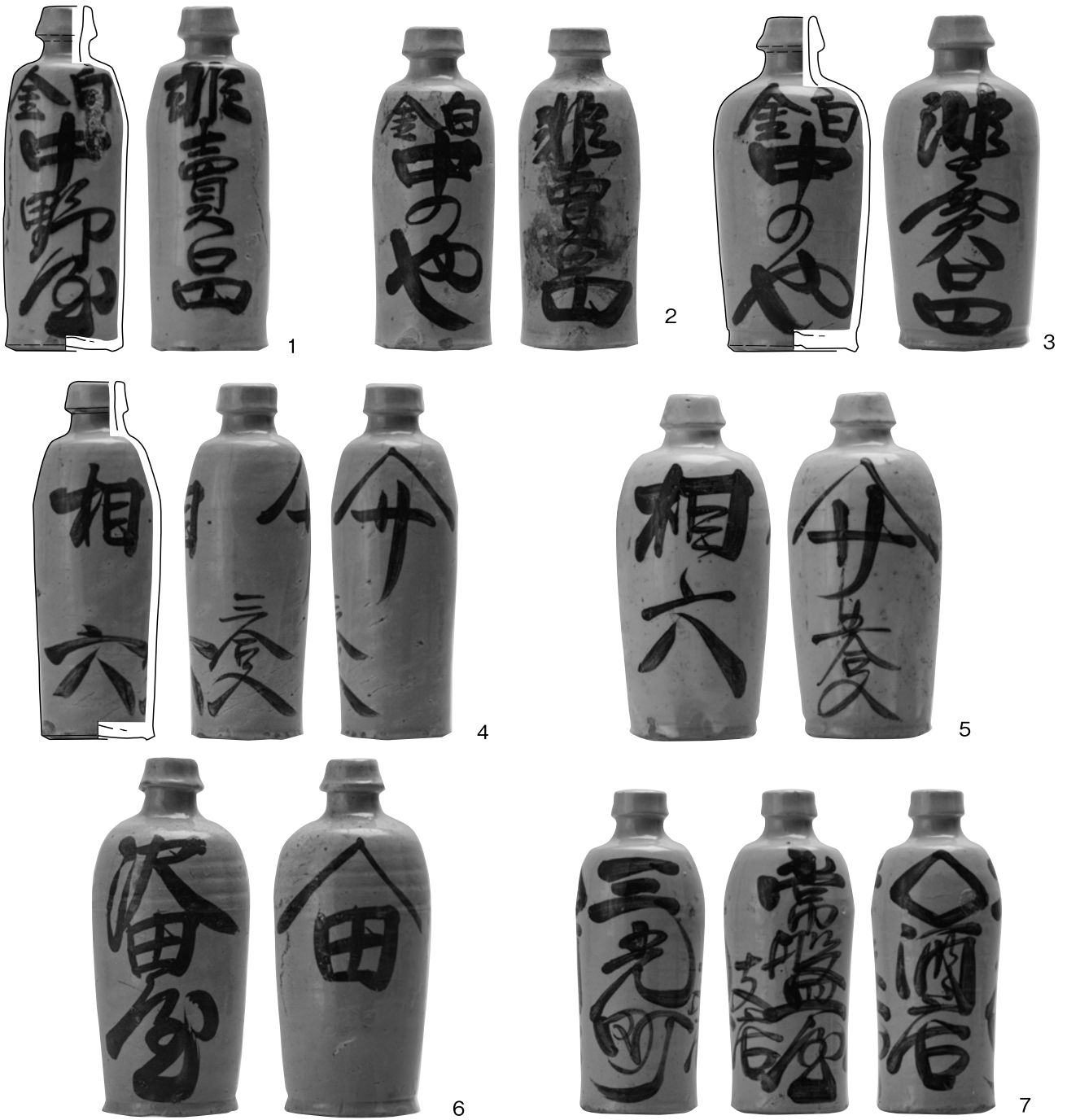
「内田ヤ」は他の遺跡の刻書は平仮名であることが分かった。列点で書かれており年代差も感じられないため他の店舗であろうか。

#### 4. 徳利の容量について

徳利の容量については、天保八(1837)年の土岐郡5箇村庄屋から提出された特産品の文書中に「壺升入りより五合、三合までの」容量の「びんぼう徳利」の記載が見られ、天保年間以降美濃産びんぼう徳利の容量は一升、五合、三合の規格であったことは疑問の余地がない(山下、春日2019)としている。しかし又それと反するように弘化2(1845)年徳利の出荷先の限定化の再確認にまつわる文章において窯屋と問屋間では「徳利升入不足、又ハ不揃、悪しき品等」とありまた取締所と江戸問屋とのやりとりには「精粗不同ニて升目不足等之品多」と言う記述が存在している。共通しているのは「升入不足」「升目不足」とあることから、容量に満たない徳利の存在が問題視されていると言うことであろう。加えて問題なのは値引きをして問屋は引き受けていることである(山下、春日2019)。つまり「升入不足」「升目不足」の商品は市中において流通していると言うことである。「◇上」の刻書を持つ徳利は東大編年Ⅷc期(1830~40年代)に比定されており、上記の時期にあたる。3合入りが多い時期にもかかわらず、容量を確認したところ一部に首まで入れて2合半に満たないと思われるほど小振りな徳利が散見される。「升入不足」「升目不足」の徳利なのであろう。市中に他にも多く出回っていたとすればどのような使われ方をしたのだろうか。他の徳利は三合入るものも多かった。あまり細かいことを意識せず小徳利の認識しかなかったのか、または、2合の酒を買いに行ったのであろうか。「◇上」の屋号を持つ店は値引きをされた小さい徳利を使いながら、あまり競合店が無い地域で小規模の店を構えていたのではないか。

#### 5. 筆書きの瀬戸・美濃系灰釉徳利について(3図、6表、7表)

本地点では表土から焼成前に筆書きで文字を入れたい



3 図 医科研出土筆書き瀬戸美濃系徳利 (S=1/4)

表土						
筆書き	鉄絵具	鉄絵具	鉄絵具	鉄絵具	鉄絵具	
3合	2	1	4		1	
5合		1	2	1		
1升						
合計	2	2	6	1	1	12

7 表 遺構別筆書き出土状況



いわゆる「高田徳利」と呼ばれている徳利が12個体出土している(3図、7表)。すでに江戸から出土している焼成前に筆書きで文字を入れた「文字徳利」として詳しくまとめられている(美濃部1996)。本地点ではその時点で出土していなかった文字も出土しており、個別の説明とともに法量表(6表)、同様の文字が書かれた徳利の容量と個体数(7表)を掲載する。「文字徳利」は明治期以降のもので、高田、小名田で生産され、昭和初期にガラス瓶が一般的に使われるようになるまで続いた。高田徳利を販売する商人は徳利に書く文字の注文を取って各地を回ったとされる(多治見市教育委員会・文化財保護センター2014)。周辺遺跡からも多数出土しており、急激に刻書から筆書きに置き換わったことがわかる。

次に筆書き徳利(3図)の個別説明を行う。

1は「白金」「中野屋」「非賣品」と筆書きされている。3合入り。2、3は「白金」「中の屋」「非賣品」と筆書きされている。1では「中野」であるが「中の」と「野」が平仮名になっている。2は3合入り。3は5合入り。「白金」と地名が入っており本地点周辺の店であることがわかる。「非賣品」の記載であるが、品物を買ってもらった御礼や何らかの記念品として配布したものとも考えたが、三栄町遺跡第4次調査で「売賣禁止」の文字が書かれている徳利が出土しており美濃部は「よほど頻繁に売買や他の目的による使用が繰り返されていたのであろう」とのべている(美濃部1996)。おそらく、この「非賣品」徳利も「売賣禁止」ほどの強い言い方ではないが同様の意味で書かれ、転用して他の商売に使用されることを牽制したのであろう。

4は「八」に「サ」「相六」「三合入」5は「八」に「サ」「相六」「五合入」と筆書きされている。容量が書かれているのが興味深い。先にも述べたが天保八(1837)年の土岐郡5箇村庄屋から提出された特産品の文書中に「壺升入りより五合、三合までの」容量の「びんぼう徳利」の記載が見られ、天保年間以降美濃産びんぼう徳利の容量は一升、五合、三合の規格であったことは疑問の余地がない(山下、春日2019)としている。この「三合入り」の記載はこれらを裏付けるものである。5合入りより小さいサイズがこの時点で2合半ではなく3合入であることがわかる。また、この後ガラス瓶の使用が始まると容器に容量を記載することが一般的になっていく。4の容量を測ったところ「三合入り」の記載がされているにもかかわらず800cc約4合半も入ることが解った。5は1050cc約六合であった。

6は「八」に「田」「沢田屋」と筆書きされている。

7は「常磐屋」「三光町支店」「◇酒店」と筆書きされ

ている。「三光町支店」と地名が書かれている。本地点の周辺は明治24年に合併して白金三光町と呼ばれておりこの周辺地域の店であることがわかる(東京市市史編纂係編1907)。また、常磐屋は本店以外に支店をのある規模であることがわかる。

## まとめ

目白台の狭い地域での「◇上」「万」と「八」の屋号を持つ店を中心に出土の刻書資料から考察してみた。「◇上」の屋号を持つ店は本地点周辺のみを相手に小規模に続けていたのが見て取れ、この店から日常的に購入していたことがわかる。「万」と「八」の屋号を持つ店は次々と入れ替わっているが当地域に根ざして同系列の店として受け継がれていったと思われる。しかし、明治以降の筆書きの徳利の中に「◇上」「万」と「八」の刻書につながりのある徳利は確認されずこれらの店は断絶してしまったのであろう。また、SK229とSK207の遺構の関係から徳利の再利用について本藩邸においては五合徳利が多く使用されていたのではないかとの可能性を指摘した。

「すゝき」は徳利の広がりから2店舗の可能性が想定され、また、大きく外れたところからの出土も仙台藩伊達家上屋敷から下屋敷への人の移動とともに持ち込まれたものであろう事が想定でき興味深い。

近年発表された鈴木裕子「灰釉系徳利の釘書 遺跡単位の集計から」の研究ノート(鈴木2022)などもあり、多くの地域のこのような刻書の論考が積み重なることにより様々な様相が明らかになろう。また、発掘調査の結果から解る事象を文献などと検証することにより、より江戸市中の様々な動向が明らかになろう。刻書ごとの個数を報告することは難しいと思うが、少しでも多くの報告を希望したい。また、どのような刻書が多く見られたかの記載があれば地域ごとに分析することができるであろう。

本稿を草するに当たり以下の方々にお世話になりました。感謝いたします。

堀内秀樹、小川祐二、香取祐一

## 【引用・参考文献】

- 株式会社イビソク 2021『白金台町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』
- 国際文化財株式会社 2019『港区 No.194 遺跡発掘調査報告書』
- 小林謙一 1986「7、釘書」『郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻

- 布台1丁目遺跡調査会  
 小林謙一 1989「江戸における近世灰釉徳利の釘書きについて」  
 『物質文化』第52号  
 慶應義塾大学文学部民俗学考古学研究室 2021『三田二丁目町  
 家跡遺跡』  
 汐留地区遺跡調査会 1996『汐留』  
 品川区遺跡調査会 1990『仙台坂遺跡』  
 鈴木裕子 2022「灰釉系徳利の釘書 遺跡単位の集計からーラ  
 フスケッチー」『江戸遺跡研究』第九号  
 港区麻布台1丁目遺跡調査会 1986『郵政省飯倉分館構内遺跡』  
 港区教育委員会 2006『上行寺跡・上行寺門前町屋跡遺跡発掘  
 調査報告書』  
 港区教育委員会 2007『筑前秋月藩黒田家屋敷跡遺跡発掘調査  
 報告書』  
 港区教育委員会 2008『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調  
 査報告書』  
 長佐古真也 1988「近世「徳利」の諸様相ー江戸における液体  
 加工品流通と徳利ー」『江戸の食文化』  
 長佐古真也 1992「近世「徳利」の諸様相ー瀬戸美濃産灰釉系  
 徳利をめぐる型式学的考察ー」『江戸の食文化』江戸遺跡  
 研究会編  
 東京市市史編纂係編 1907『東京案内 下巻』二七頁  
 東京大学埋蔵文化財調査室 2022『医科学研究所附属病院 A 棟  
 地点』報告編  
 東京都埋蔵文化財センター 2020『汐留Ⅱ』  
 東京都埋蔵文化財センター 2011『愛宕下遺跡 Ⅱ』  
 東京都埋蔵文化財センター 2014『愛宕下遺跡 Ⅲ』  
 東京都埋蔵文化財センター 2020『大和芝村藩織田家屋敷跡』  
 多治見市教育委員会・文化財保護センター 2014 多治見市文化  
 財保護センター企画展「高田徳利～高田の窯屋と小名田の  
 商人～」  
 美濃部達也 1996「いわゆる「通い徳利」について」『百人町三  
 丁目遺跡 Ⅲ』新宿区遺跡調査会  
 山下峰司・春日美海 2019「瀬戸美濃窯における貧乏徳利の変  
 遷-19世紀の生産状況と容量を中心にー」『近世の  
 酒と宴』「近世考古学の提唱」50周年記念研究大会実行委員会

# 大村藩下屋敷における動物利用の様相

—医科学研究所附属病院 A 棟地点出土の動物遺体—

阿部常樹\*・江田真毅\*\*・大内利紗\*\*\*

## はじめに

本稿で対象とする港区医科学研究所附属病院 A 棟地点は、肥前国彼杵・高来郡のあたりを領していた外様大名大村家の下屋敷跡である。本調査地点からは、特にニホンジカとイノシシ類の骨が大量に出土している。大村藩は外国との玄関口であった長崎に近く、元々がキリストタン大名であり、さらに近世に長崎警固役を務めている。つまり、異国文化と関係性が深く、そのため、イノシシ類のなかにブタが含まれている可能性も推測される。本稿では、本調査地点より出土した動物遺体について整理・分析した結果を述べるとともに、下屋敷内における動物資源利用の様相の解明を目的にする。

本地点より出土した動物遺体は、現場にて調査者が目視で確認できたものを任意で取り上げてきたもの（ピックアップ法）である。これらの資料を、貝類、魚類、鳥類、爬虫類、哺乳類のカテゴリーで大きく分け、その内、貝類、魚類、爬虫類を阿部が、鳥類を江田が、哺乳類を阿部と大内がそれぞれ分析から報告までの一連の作業をおこなった。以下、上記のカテゴリーごとに報告をおこなう。なお、出土した動物遺体の種名は、1 表に記す。(阿部)

## 1. 貝類 (2～6 表, PL1～3)

### 1-1. 分析方法

**計数方法と概要** 貝種組成は最小個体数で提示する。なお、計数方法は以下のとおりである。巻貝類は基本的に殻高が2分の1以上残存している資料を計数対象とした。しかし、アワビ類など殻口部分が広くそれによって形状が笠・皿形の巻貝類は、殻頂部分が残存している資料を計数対象とした。また、タンベイキサゴについては、殻高が低い場合底面の滑層部分の残存しているものを計数の対象とした。

二枚貝類は、殻頂部分の残存している資料を計数対象とし、それらを左殻と右殻に分類してからそれぞれ計数した。そして、そのうち多いほうを最小個体数とした。以上の計数対象以外の資料は、「破片」として一括して扱った。なお、各サンプルの分類群内において、計数対象資料が残存せず「破片」のみである場合は、一括して

1 個体として計数をおこなった。

**主要貝種のサイズ分析** 本遺跡より出土している貝類の内、アサリとハマグリについてサイズの計測及び分析をおこなった。なお、サイズ計測の定義は、阿部 (2006) にもとづく。計測に際して、遺構などのサンプル単位で左右殻の多いほう、具体的にハマグリは右殻、アサリは左殻を対象とした。さて、出土資料は、破損が激しく、主要計測部位（殻長など）が計測できないものが多い。そこで、ハマグリは欠損の少ない外靱帯溝の長さ、そしてアサリは殻高からそれぞれ殻長を推定した。その際、回帰・相関分析によってその推定式の導出を試みた。その分析結果は、3 表と 5 表を参照されたい。以上に伴い殻長の表記は、計測で得られた値を「計測値」、推定式で導出された値を「推定値」とし、本文中では「推定値」を分析に用いる。

## 1-2. 分析結果

### 1-2-1. 貝種組成

#### (1) 概要

22 種 1449 個体が出土している (2 表)。サザエが最も多く 382 個体出土しており、全体の 26.4% を占める。次いでハマグリが多く 394 個体出土し、全体の 27.2% を占める。さらに、アサリ (273 個体・18.8%) とヤマトシジミ (222 個体・15.3%) が比較的多い。そのほかに、アワビ類 (48 個体・3.3%)、アカニシ (46 個体・3.2%)、アカガイ (24 個体・1.7%)、マガキ、オキシジミ (各 17 個体・1.2%) などが出土している。アワビ類の内訳は、メガイアワビが 18 個体、クロアワビが 8 個体、マダカアワビが 17 個体、種不明が 5 個体である。次に遺構ごとに出土傾向を概観する。

**SK207** 10 群 254 個体が出土している。ヤマトシジミが最も多く 119 個体出土しており、全体の 46.9% を占める。次いでハマグリが多く 66 個体出土し、全体の 26.0% を占める。さらに、アサリ (27 個体・10.6%) も比較的多い。そのほかに、サザエ (12 個体・4.7%)、アカガイ・マガキ (各 9 個体・3.5%)、アワビ類 (5 個体・2.0%)、アカニシ (3 個体・1.2%)、サルボウガイ (2 個体・0.8%)、イタボガキ (1 個体・0.4%) が出土している。イタボガキは左右殻共に出土している。アワビ類の内訳は、メガイアワビが 2 個体、種不明が 3 個体である。

\* 所属 \* 國學院大學学術資料センター、\*\* 北海道大学総合博物館、\*\*\* 船橋市教育委員会

1 表 医科学研究所附属病院 A 棟地点出土動物遺体種名一覧

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

- 腹足綱 Class Gastropoda  
 古腹足目 Order Vetigastropoda  
   ミミガイ科 Family Haliotidae  
     メガイアワビ *Halitosis (Nordotis) gigantea*  
     マダカアワビ *Haliotis (Nordotis) madaka*  
     クロアワビ *Haliotis (Nordotis) discus discus*  
   ニシキウズガイ科 Family Trochidae  
     バテイラ *Omphalius pfeifferi pfeifferi*  
     ダンベイキサゴ *Umbonium giganteum*  
   サザエ科 Family Turbinidae  
     サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*
- 盤足目 Order Discopoda  
   タマガイ科 Family Naticidae  
     ツメタガイ *Glossaulax didyma*
- 新腹足目 Order Neogastropoda  
   アクキガイ科 Family Muricidae  
     アカニシ *Rapana venosa*  
   エゾバイ科 Family Buccinidae  
     バイ *Babyronia japonica*
- 二枚貝綱 Class Bivalvia  
   イガイ目 Order Mytiloidea  
     ハボウキガイ科 Family Pinnidae  
       タイラギ *Atrina (Servatrina) pectinata*  
   フネガイ目 Order Arcoidea  
     フネガイ科 Family Arcidae  
       アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*  
       サルボウガイ *Scapharca kagoshimensis*  
   イタヤガイ目 Order Pectinoidea  
     イタヤガイ科 Family Pectinidae  
       イタヤガイ *Pecten albicans*
- カキ目 Order Ostreoida  
   イタボガキ科 Family Ostreidae  
     イタボガキ *Ostrea denselamellosa*  
     マガキ *Crassostrea gigas*
- マルスダレガイ目 Order Veneroidea  
   バカガイ科 Family Mactridae  
     シオフキガイ *Mactra veneriformis*  
     ミルクイ *Tresus keenae*  
   シジミ科 Family Cobicalidae  
     ヤマトシジミ *Corbicula japonica*  
   マルスダレガイ科 Family Veneridae  
     アサリ *Ruditapes philippinarum*  
     ハマグリ *Meretrix lusoria*  
     オキシジミ *Cyclina sinensis*
- オオノガイ目 Order Myoidea  
   オオノガイ科 Family Myodae  
     オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

- 硬骨魚綱 Class Osteichthyes  
   スズキ目 Order Perciformes  
     タイ科 Family Sparidae  
       マダイ 亜科 Subfamily Pagrinae  
         マダイ *Pagrus major*  
     サバ科 Family Scombridae  
       サバ属 *Scomber* sp.  
       マグロ属 *Thunnus* sp.  
   カレイ目 Order Pleuronectiformes  
     ヒラメ科 Family Paralichthyidae  
       ヒラメ *Paralichthys olivaceus*
- 爬虫綱 Class Reptilia  
   カメ目 Order Testudines  
     イシガメ科 Family Geoemydidae  
       ニホンイシガメ *Mauremys japonica*
- 鳥綱 Class Aves  
   キジ目 Order Galliformes  
     キジ科 Family Phasianidae  
       ニワトリ *Gallus gallus var.domesticus*  
       属種不明 gen. et sp. indet.  
   カモ目 Order Anseriformes  
     カモ科 Family Anatidae  
       カモ亜科 Subfamily Anatinae  
       属種不明 gen. et sp. indet.
- 哺乳綱 Class Mammalia  
   齧歯目 Order Rodentia  
     ネズミ科 Family Muridae  
       属種不明 gen. et sp. indet.  
   食肉目 Order Carnivora  
     ネコ科 Family Felidae  
       イエネコ *Felis silvestris catus*  
     イヌ科 Family Canidae  
       イヌ *Canis familiaris*
- 偶蹄目 Order Artiodactyla  
   イノシシ科 Family Suidae  
     イノシシ *Sus scrofa*  
   シカ科 Family Cervidae  
     ニホンジカ *Cervus nippon*
- 奇蹄目 Order Perissodactyla  
   ウマ科 Family Equidae  
     ウマ *Equus caballus*

2-1 表 出土貝類遺体組成表

(1) 全体

	アワビ類			サザエ		アカニシ		アカガイ		マガキ		ミルクイ		ヤマトシジミ		アサリ		ハマグリ		オキシジミ		その他	合計 (MNI)
	メガイアワビ	マダカアワビ	クロアワビ	種不明	蓋	殻	左	右	fr.	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
	SD268					1	1	1	1										1	1			
SE002瓦層			F		23	4			F			1		1		14	22	17	21			73	
SE002 2層				F																		1	
SE002 (合計)				F	23	4			F			1		1		14	22	17	21			73	
SK001					4	13	4	6	5			6		10				2	6			39	
SK201	1	2		F	32	170	1				F			49		3		14	16			245	
SK258		5						2	1					1				7	5	4		20	
SK477																						22	
SK583		3			6	73	4			F	1			2		3	4	18	13			6116	
SX207	2			3	1	12	3	9	7		9	6	1	101		27	20	40	66			3254	
SX229	15	7	8	F	1	12	3	5	6		7	1	3	42	1	226	224	238	264	12	7	9617	
SX267				2	1	40	18	1					1	1				5	2			574	
D層版築					2	1																3	
D層版築C-2						F												F				2	
D層版築D-2						F	3															4	
D層版築D-3						9																9	
D層版築E-2					2	1												1				4	
遺構外						2																2	
版築						1																13	
その他 (1点のみ)					1	4	3															1	
全体	18	17	8	5	48	382	46	24	20	17	7	5	7	202	1	273	270	343	394	17	11	19	
合計 (MNI)	18	17	8	5	382	46	24	24	24	17	7	5	7	222	273	273	273	394	394	17	19	1449	

F:破片資料のみ

2-2 表 出土貝類遺体組成表

(2) 貝種の「その他」内訳

	バ テ イ ラ	ダン ベ イ キ サ ゴ	ツ メ タ ガ イ	バ イ	タイ ラ ギ		サル ボ ウ		イ タ ヤ ガ イ		イ タ ボ ガ キ		シ オ フ キ ガ イ		オ オ ノ ガ イ
					左	右	左	合	右	右	左	右	左	右	
SK201					F		1								
SK583	1								1	2	4				
SX207									2		1	1			
SX229		1			2	1	3		1		1	F	1		F
SX267			F	1						F		F		1	
版築			1												

F：破片資料のみ

SK001 5種39個体が出土している。サザエが最も多く13個体出土しており、全体の33.3%を占める。次いでヤマトシジミが多く10個体出土し、全体の25.6%を占める。そのほかに、アカガイ、ハマグリ（各6個体・15.4%）とアカニシ（4個体・10.3%）が出土している。

SE002 7群73個体が出土している。サザエが最も多く23個体出土しており、全体の31.5%を占める。なお、アサリ（22個体・30.1%）とハマグリ（21個体・28.8%）の出土数はサザエとほとんど変わらない。そのほかに、アカニシ（4個体・5.5%）、ヤマトシジミ（1個体・1.4%）、アワビ類種不明、アカガイ（破片・1.4%）が出土している。ヤマトシジミは左右殻共に出土している。なお、2層でアカニシの破片（遺構全体では計数対象外）が出土している以外は、すべて瓦層より出土している。

SK201 10種245個体が出土している。サザエが最も多く170個体出土しており、全体の69.4%を占める。次いでヤマトシジミが多く49個体出土し、全体の20.0%を占めている。そのほかに、ハマグリ（16個体・6.5%）、アワビ類、アサリ（各3個体・1.2%）、アカニシ（1個体・0.4%）、サルボウガイ（1個体（合弁）・0.4%）、マガキ（右殻破片・0.4%）、タイラギ（破片・0.4%）が出土している。アワビ類の内訳は、メガイアワビが1個体、マダカアワビが2個体である。

SK207 11種254個体が出土している。ヤマトシジミが最も多く119個体出土しており、全体の46.9%を占める。次いでハマグリが多く66個体出土し、全体の26.0%を占めている。そのほかに、アサリ（27個体・10.6%）、サザエ（12個体・4.7%）、アカガイ、マガキ（各

(3) 遺構の「その他」内訳

遺構など	貝種など	数
SK218	サザエ・殻	F
SK387・388	アカニシ	F
D層版築D-7	アカニシ	1
D層版築Dグリッド	アカニシ	1
D層版築E-5	サザエ・殻	1
攪乱	サザエ・殻	1
無記名	サザエ・蓋	1
	サザエ・殻	F

(4) 備考

遺構	備考
SX207	アワビ類種不明：マダカorクロ？
SX267	アワビ類（マダカ？）

9個体・3.5%）、アワビ類（5個体・2.0%）、アカニシ（3個体・1.2%）、サルボウガイ（右殻2点・0.8%）、イタボガキ（左右殻各1点・0.4%）が出土している。アワビ類の内訳は、メガイアワビが2個体、種不明が3個体である。

SK218 サザエの殻の破片のみ出土している。

SX229 18種617個体が出土している。ハマグリが最も多く264個体出土しており、全体の42.8%を占める。次いでアサリが多く226個体出土し、全体の36.6%を占める。そのほかに、ヤマトシジミ（43個体・7.0%）、アワビ類（30個体・4.9%）、サザエ、オキシジミ（各12個体・1.9%）、マガキ（7個体・1.1%）、アカガイ（6個体・1.0%）、ミルクイ（5個体・0.8%）、アカニシ、サルボウガイ（各3個体・0.5%）、タイラギ（2個体・0.3%）、ダンベイキサゴ、イタボガキ（各1個体・0.2%）、オオノガイ（破片・0.2%）が出土している。タイラギとイタボガキ共に左右殻両方が出土している。アワビ類の内訳は、メガイアワビ15個体、クロアワビ8個体、マダカアワビ7個体である。

SK258 5種20個体が出土している。具体的には、ハマグリ（7個体・35.0%）、マダカアワビ、オキシジミ（各5個体・25.0%）、アカガイ（2個体・10.0%）、ミルクイ（右殻1点・5.0%）が出土している。

SX267 12群74個体が出土している。サザエが最も多く40個体出土しており、全体の54.1%を占める。次いでアカニシが多く18個体出土し、全体の24.3%を占める。そのほかに、ハマグリ（5個体・6.8%）、アワビ類種不明、ヤマトシジミ（各2個体・2.7%）、バイ（1個体・1.4%）、アカガイ、ミルクイ（各左殻1点・1.4%）、

シオフキガイ（右殻1点・1.4%）、ツメタガイ（破片・1.4%）、イタボガキ、イタヤガイ（各右殻破片・1.4%）が出土している。

SD268 5種5個体が出土している。具体的には、サザエ、アカニシ（各殻1個体）、アカガイ、ハマグリ（各左右殻1点ずつ）、ミルクイ（右殻1点）が出土している。

SK387・388 アカニシの破片のみが出土している。

SK477 サザエの殻のみ22個体出土している。

SK583 11種116個体が出土している。サザエが最も多く73個体出土しており、全体の62.9%を占める。次いでハマグリが多く18個体出土し、全体の15.5%を占める。そのほかに、ヤマトシジミ（6個体・5.2%）、アカニシ、アサリ、イタボガキ（各4個体・3.4%）、マダカアワビ（3個体・2.6%）、バテイラ（1個体・0.9%）、アカガイ（破片・0.9%）、イタヤガイ（右殻1点・0.9%）、マガキ（左殻1点・0.9%）が出土している。

## (2) 小結

遺構出土の組成はすべて、サザエやアワビ類など特別な場で供されたと想定される大型巻貝類が含まれている。特に、タイラギやミルクイ、イタボガキなど大名屋敷以外ではあまりみられない種類がみられる。さて、その大型貝類のなかでもサザエの出土率が高い。特に遺構12基中7基がサザエ主体もしくはサザエのみが出土している。サザエを主体としている遺構は18世紀以前にあたるものである。それに対して、19世紀以降のものは、ハマグリとヤマトシジミが主体である。具体的に、ヤマトシジミを主体とするものは、SK207のみで19世紀第2四半期、ハマグリを主体とする遺構は2基で、SX229は19世紀第2四半期、SK258は19世紀前葉である。

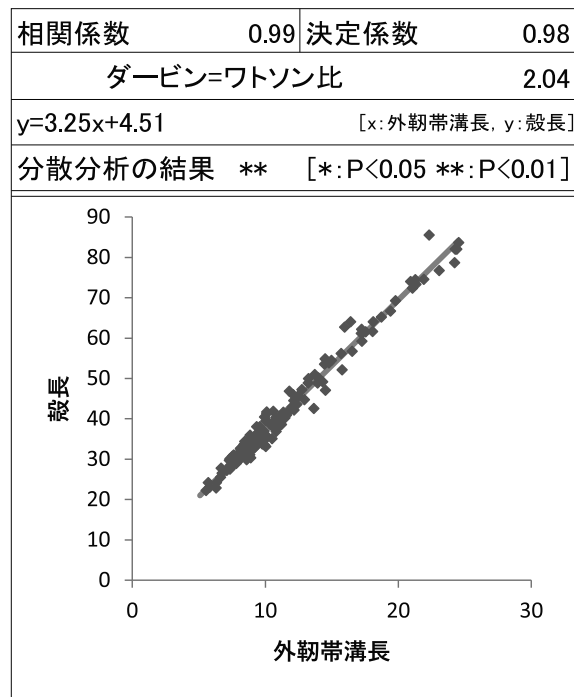
## 1-2-2. サイズ分析

### (1) ハマグリ・殻長 (3・4表)

全体 分析資料数は321点である。平均値は42.7mm、中央値は38.8mmであった。ヒストグラムは、30mm以上35mm未満に大きなピークがあり、50mm以上55mm未満に小さなピークをもつ双峰型を示す。江戸遺跡より出土する本種の殻長のヒストグラムは50mmを境にそれ未満と以上で2つのピークをもつ双峰型を示す傾向がある。その背景として、サイズによる料理の使い分けなどが指摘されている（桜井1986）。以下、その点も踏まえて分析結果を概観する。

SK001 分析資料数は3点である。分析の結果、平均値が51.7mm、中央値が50.8mmであった。なお、最小値が38.5mm、最大値が65.7mmであった。

3表 ハマグリ の殻長と外靱帯溝長に関する回帰・相関分析の結果



SE002（瓦層） 分析資料数は8点である。分析の結果、平均値が28.9mm、中央値が28.8mmであった。なお、最小値が24.7mm、最大値が34.4mmで、すべて50mm未満の上、1cm差のなかに収まっている。ヒストグラムは、25mm以上35mm未満にのみ分布する単峰型を示す。

SK201 分析資料数は9点である。分析の結果、平均値が43.3mm、中央値が42.4mmであった。なお、最小値が29.2mm、最大値が60.6mmで、サイズのばらつきがある。ヒストグラムでもその様子がみられる。具体的にまず30mm以上35mm未満をピークとする25mm以上45mm未満の集まりがあり、さらに50mm以上55mm未満と60mm以上65mm未満の2つのピーク（集まり）が見られる。50mmを基準に分けて分析をおこなった結果は以下のとおりである。未満では分析資料数が5点で、平均値が34.5mm、中央値が33.4mmであった。対して、以上では分析資料数が4点で、平均値が54.7mm、中央値が53.7mmであった。

SK207 分析資料数は46点である。分析の結果、平均値が36.8mm、中央値が32.1mmであった。ヒストグラムは25mm以上30mm未満に大きなピークがあり、35mm以上40mm未満と50mm以上55mm未満にそれぞれ小さなピークをもつ多峰型を示す。50mmを基準に分けて分析をおこなった結果は以下のとおりである。未満では分析資料数が38点で、平均値が31.7mm、中央値が28.8mmであった。対して、以上では分析資料数が8点で、平均値が60.8mm、中央値が56.2mmであった。

4表 ハマグリサイズのに関する記述統計量(1)(値単位:mm)

遺構		殻長		殻高	外靱帯 溝長	度数分布図(殻長[推定値]) 横軸:サイズ[mm], 縦軸:資料数
		計測値	推定値			
全体	n	153	321	210	321	<p style="text-align: center;"><b>全体</b></p>
	平均	41.6	42.7	33.8	11.8	
	不偏分散	211.5	202.1	108.7	19.2	
	標準偏差	14.5	14.2	10.4	4.4	
	標準誤差	1.2	0.8	0.7	0.2	
	範囲	64.2	63.1	50.6	19.5	
	最小値	21.4	21.0	13.1	5.1	
	最大値	85.5	84.1	63.7	24.5	
	中央値	36.8	38.8	31.0	10.6	
	第1四分位数	31.6	32.2	26.1	8.5	
	第3四分位数	46.8	51.6	41.1	14.5	
	四分位範囲	15.2	19.4	15.1	6.0	
	変動係数	0.3	0.3	0.3	0.4	
	尖度	1.0	0.1	0.1	0.1	
歪度	1.3	0.9	0.9	0.9		
SK001	n	0	3	0	3	<p style="text-align: center;"><b>SK001</b></p>
	平均		51.7		14.5	
	不偏分散		184.7		17.5	
	標準偏差		13.6		4.2	
	標準誤差		7.8		2.4	
	範囲		27.1		8.4	
	最小値		38.5		10.5	
	最大値		65.7		18.8	
	中央値		50.8		14.3	
	第1四分位数		44.7		12.4	
	第3四分位数		58.2		16.6	
	四分位範囲		13.6		4.2	
	変動係数		0.3		0.3	
SE02瓦層	n	2	8	2	8	<p style="text-align: center;"><b>SE02瓦層</b></p>
	平均	28.7	29.3	23.2	7.6	
	不偏分散	1.8	13.3	1.7	1.3	
	標準偏差	1.3	3.6	1.3	1.1	
	標準誤差	0.9	1.3	0.9	0.4	
	範囲	1.9	9.6	1.9	3.0	
	最小値	27.8	25.1	22.2	6.4	
	最大値	29.7	34.7	24.1	9.3	
	中央値	28.7	29.2	23.2	7.6	
	第1四分位数	28.2	26.0	22.7	6.6	
	第3四分位数	29.2	32.2	23.6	8.5	
	四分位範囲	1.0	6.2	0.9	1.9	
	変動係数	0.0	0.1	0.1	0.1	
	尖度		-1.6		-1.6	
歪度		0.2		0.2		
尖度						
歪度		0.3		0.3		
SK201	n	0	9	0	9	<p style="text-align: center;"><b>SK201</b></p>
	平均		43.5		12.0	
	不偏分散		133.6		12.7	
	標準偏差		11.6		3.6	
	標準誤差		3.9		1.2	
	範囲		31.3		9.6	
	最小値		29.6		7.7	
	最大値		60.9		17.4	
	中央値		42.6		11.7	
	第1四分位数		33.4		8.9	
	第3四分位数		52.7		14.9	
	四分位範囲		19.3		5.9	
	変動係数		0.3		0.3	
	尖度		-1.7		-1.7	
歪度		0.2		0.2		



4表 ハマグリサイズのに関する記述統計量(2) (値単位:mm)

遺構		殻長		殻高	外韧带 溝長	度数分布図(殻長 [推定値]) 横軸: サイズ [mm], 縦軸: 資料数
		計測値	推定値			
SK207	n	11	46	18	46	<p style="text-align: center;"><b>SK207</b></p>
	平均	36.2	36.8	30.5	9.9	
	不偏分散	132.4	193.9	108.0	18.4	
	標準偏差	11.5	13.9	10.4	4.3	
	標準誤差	3.5	2.1	2.4	0.6	
	範囲	33.8	61.9	39.4	19.1	
	最小値	22.9	21.0	18.8	5.1	
	最大値	56.7	82.9	58.1	24.1	
	中央値	35.9	32.1	30.7	8.5	
	第1四分位数	28.0	26.3	23.0	6.7	
	第3四分位数	40.3	42.6	34.6	11.7	
	四分位範囲	12.3	16.3	11.6	5.0	
	変動係数	31.8%	37.9%	34.1%	43.1%	
	尖度	-0.3	1.9	1.4	1.9	
歪度	0.7	1.4	1.1	1.4		
SX229	n	138	240	185	240	<p style="text-align: center;"><b>SX229</b></p>
	平均	42.0	43.7	33.9	12.1	
	不偏分散	215.7	198.8	107.5	18.9	
	標準偏差	14.7	14.1	10.4	4.3	
	標準誤差	1.3	0.9	0.8	0.3	
	範囲	64.2	61.7	50.6	19.0	
	最小値	21.4	22.5	13.1	5.5	
	最大値	85.5	84.1	63.7	24.5	
	中央値	37.0	39.0	30.9	10.6	
	第1四分位数	32.5	33.0	26.4	8.8	
	第3四分位数	46.6	52.3	40.5	14.7	
	四分位範囲	14.1	19.3	14.1	5.9	
	変動係数	35.0%	32.3%	30.5%	36.0%	
	尖度	1.0	0.2	0.2	0.2	
歪度	1.3	1.0	0.9	1.0		
SK258	n	2	4	3	4	
	平均	58.3	58.3	45.1	16.6	
	不偏分散	39.1	55.6	4.8	5.3	
	標準偏差	6.3	7.5	2.2	2.3	
	標準誤差	4.4	3.7	1.3	1.1	
	範囲	8.8	16.7	4.4	5.2	
	最小値	53.9	52.5	43.0	14.8	
	最大値	62.7	69.2	47.4	19.9	
	中央値	58.3	55.7	45.1	15.8	
	第1四分位数	56.1	54.5	44.0	15.4	
	第3四分位数	60.5	59.6	46.2	17.0	
	四分位範囲	4.4	5.1	2.2	1.6	
	変動係数	0.1	0.1	0.0	0.1	
	尖度		3.2		3.2	
歪度		1.7	0.1	1.7		
SX267	n	0	1	0	1	
	値		71.7		20.7	
SK583	n	0	10	2	10	<p style="text-align: center;"><b>SK583</b></p>
	平均		44.3	45.5	12.2	
	不偏分散		154.0	9.7	14.6	
	標準偏差		12.4	3.1	3.8	
	標準誤差		3.9	2.2	1.2	
	範囲		34.9	4.4	10.7	
	最小値		28.7	43.3	7.4	
	最大値		63.5	47.7	18.2	
	中央値		43.0	45.5	11.9	
	第1四分位数		34.5	44.4	9.2	
	第3四分位数		53.1	46.6	15.0	
	四分位範囲		18.6	2.2	5.7	
	変動係数		0.3	0.1	0.3	
	尖度		-1.1		-1.1	
歪度		0.4		0.4		

**SX229** 分析資料数は240点である。分析の結果、平均値が43.7mm、中央値が39.0mmであった。ヒストグラムは30mm以上35mm未満に大きなピーク、55mm以上65mm未満に小さなピークをもつ双峰型を示す。50mmを基準に分けて分析をおこなった結果は以下のとおりである。未満では分析資料数が174点で、平均値が36.2mm、中央値が35.7mmであった。対して、以上では分析資料数が66点で、平均値が63.4mm、中央値が61.0mmであった。

**SK258** 分析資料数は4点である。分析の結果、平均値が58.3mm、中央値が55.7mmであった。なお、最小値が52.5mm、最大値が69.2mmで、すべて50mm以上の所謂「大型」のもののみで構成されている。

**SX267** 分析資料は1点で71.7mmであった。

**SK583** 分析資料数は10点である。分析の結果、平均値が44.3mm、中央値が43.0mmであった。ヒストグラムはまず25mm以上50mm未満と55mm以上65mm未満に大きく分かれ、さらに前者は30mm以上35mm未満と40mm以上45mm未満の2つのピークをもつ多峰型を示す。50mmを基準に分けて分析をおこなった結果は以下のとおりである。未満では分析資料数が7点で、平均値が37.5mm、中央値が38.9mmであった。対して、以上では分析資料数が3点で、平均値が60.2mm、中央値が61.3mmであった。

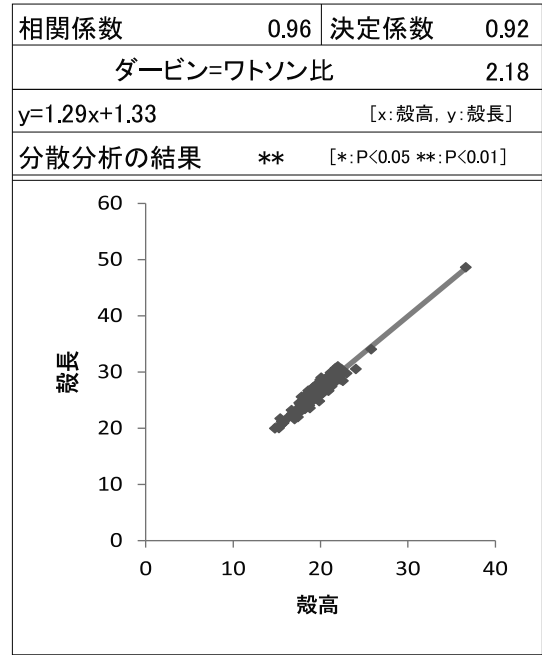
**小結** SE002を除くとすべての遺構のヒストグラムは多峰型を示した。これらの分布は凡そ45mm以上50mm未満を境にその前と後ろの値でそれぞれピークをもつ形状を示している。つまり、先述したように、料理による使い分けが行われたことが推測されるようなものが含まれているといえる。なお、すべての遺構において50mm未満のほうが以上より分析資料数の上では多い。さて、50mm未満の「中小型」は、19世紀以降に小型化する(阿部2003)。本調査地点においては、18世紀中葉から後葉とされるSE002が中央値29.2mm、そして19世紀中葉に属するSK207が中央値28.8mmである。しかし、19世紀第2四半期に属するSX229は35.7mmであり、必ずしも法則どおりのもののみではない。

(2) アサリ・殻長 (5・6表)

**全体** 分析資料数は182点である。分析の結果、平均値が26.9mm、中央値が27.0mmであった。ヒストグラムは25mm以上30mm未満に極めて大きなピークをもつ単峰型を示す。また、1点が48.5mmであるほかは、20mm以上35mm未満の狭い範囲に収まる。それは、変動係数が10.2%である点にも表れている。

**SE002** 分析資料数は左右殻1点ずつである。左殻が32.6mm、右殻が27.8mmであった。

5表 アサリの殻長と殻高に関する回帰・相関分析の結果



**SK207** 分析資料数は14点である。分析の結果、平均値が27.4mm、中央値が26.8mmであった。ヒストグラムは25mm以上30mm未満にピークをもつ単峰型を示す。最小値は21.0mm、最大値は32.6mmで狭い範囲に収まる。それは変動係数が12.7%である点にも表れている。

**SK229** 分析資料数は166点である。分析の結果、平均値が26.9mm、中央値が27.0mmであった。ヒストグラムは25mm以上30mm未満に全体の77.1%が収まる極めて大きなピークをもつ単峰型を示す。また、1点が48.5mmであるほかは、20mm以上35mm未満の狭い範囲に収まる。それは変動係数が9.9%である点にも表れている。

**SX583** 分析資料は1点で30.1mmであった。

**小結** 10点以上分析のおこなえた2基は、ほとんど同じ傾向を示した。中央値は、共に30mmを超えず小型である。この傾向は、中小型ハマグリと同様に19世紀代の遺構においてみられるもので(阿部2003)、SK207、SX229共に19世紀中葉であり江戸遺跡全体の傾向が本調査地点においてもあてはまる。

1-2-3. 貝類遺体の分析結果

どの遺構においても、サザエをはじめとする大型貝類とハマグリ、アサリ、ヤマトシジミなどの中小型二枚貝類が混在していた。前者は日常的には頻繁には食すことができなかったものであるに対して、後者は日常的に食すことのできたものである。それは、江戸遺跡のこれらの出土傾向においても、当時の値段(熊倉・宮坂1997)からも指摘できる。つまり、料理として出された場の異

6表 アサリのサイズに関する記述統計量(値単位:mm)

遺構		殻長		殻高	度数分布図(殻長 [推定値]) 横軸: サイズ [mm], 縦軸: 資料数
		計測値	推定値		
全体	n	174	182	182	
	平均	26.8	26.9	19.9	
	不偏分散	8.3	7.6	4.6	
	標準偏差	2.9	2.8	2.1	
	標準誤差	0.2	0.2	0.2	
	範囲	28.6	28.1	21.8	
	最小値	20.0	20.3	14.8	
	最大値	48.7	48.5	36.6	
	中央値	27.0	27.0	19.9	
	第1四分位数	25.5	25.5	18.8	
	第3四分位数	28.3	28.3	20.9	
	四分位範囲	2.8	2.8	2.2	
	変動係数	10.7%	10.2%	10.8%	
尖度	18.4	19.8	19.8		
歪度	2.2	2.5	2.5		
SX207	n	14	14	14	
	平均	26.8	27.4	20.3	
	不偏分散	8.4	12.1	7.3	
	標準偏差	2.9	3.5	2.7	
	標準誤差	0.8	0.9	0.7	
	範囲	12.3	13.4	10.4	
	最小値	21.8	21.1	15.4	
	最大値	34.1	34.6	25.8	
	中央値	26.4	26.8	19.8	
	第1四分位数	25.4	25.5	18.8	
	第3四分位数	27.5	29.5	21.9	
	四分位範囲	2.2	4.0	3.1	
	変動係数	10.8%	12.7%	13.3%	
尖度	2.6	0.5	0.5		
歪度	1.1	0.5	0.5		
SK229	n	159	166	166	
	平均	26.8	26.9	19.8	
	不偏分散	8.3	7.1	4.3	
	標準偏差	2.9	2.7	2.1	
	標準誤差	0.2	0.2	0.2	
	範囲	28.6	28.1	21.8	
	最小値	20.0	20.3	14.8	
	最大値	48.7	48.5	36.6	
	中央値	27.0	27.0	19.9	
	第1四分位数	25.5	25.5	18.8	
	第3四分位数	28.3	28.2	20.9	
	四分位範囲	2.8	2.7	2.1	
	変動係数	10.7%	9.9%	10.5%	
尖度	20.2	25.3	25.3		
歪度	2.3	2.9	2.9		

遺構	左右	殻長		殻高
		計測値	推定値	
SE02瓦層	左		32.6	24.3
SE02瓦層	右		27.8	20.6
SX583	左	30.6	30.1	22.4

なることが推測される種類が混在している。混在はハマグリサイズの組成にも見られ、SE002（瓦層）を除くすべて、ヒストグラムが多峰型を示し、ピークも殻長50mm未満と以上に分かれる。なお、50mm以上のものはサザエなど大型貝類と共伴することが多く（阿部2001）、同様に日常的に食されたものとは考えにくい。

中小型ハマグリとアサリのサイズに関しては、19世紀中葉に属するSK207のものが共に殻長30mm未満のものがほとんどである。この19世紀代の中小型ハマグリとアサリが小型化する傾向は、19世紀代の江戸遺跡全般にみられるものである（阿部2003）。（阿部）

## 2. 魚類（7表, PL4）

### 2-1. 分析方法

同定に際して、阿部所蔵の現生標本を用いた。分析方法は樋泉（1999）に準拠する。具体的には、綱より下位まで同定可能な部位である主上顎骨・前上顎骨・歯骨・角骨・方骨・舌顎骨・擬鎖骨・前鰓蓋骨・主鰓蓋骨・椎骨を中心に抽出して「同定対象資料」としている。綱よ

り下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。なお、同定対象外資料には計数困難な細片も含まれており、表中では“○”、文中では“+ a”と表記し、その上で計数はおこなわなかった。また、それ以外の「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、一致する現生標本が手許になく、調査期間の関係などから同定に到らなかった資料は「未同定」と記載した。一連の作業を経て、綱より下位まで同定できたものを「同定資料」とした。組成は破片数で提示する。

### 2-2. 分析結果

調査地点全体で魚類遺体は33点+ aが出土している。その内、同定対象外とした資料は2点+ aで、30点が同定対象資料として抽出された。また、同定不可であった資料が5点で、25点が綱より下位まで同定することができた（同定資料）。なお、同定不可とした資料はすべてSK201より出土しており、5点中3点はタイ科の可能性のあるものであった。さらに、SK207 獣骨集中

7表 出土魚類遺体一覧

遺構	種名	部位	左右	数	備考
SK201	サバ属	尾椎		7	
SK201	サバ属	腹椎		2	
SK201	マダイ	上後頭骨		1	
SK201	マダイ亜科	主上顎骨	左	1	関節部分欠損。
SK201	マダイ亜科	歯骨	右	1	貝層土壌サンプル
SK201	タイ科	肩甲骨	左	1	
SK201	タイ科	主鰓蓋骨	左	1	
SK201	タイ科	主鰓蓋骨	右	1	
SK201	タイ科	尾椎		2	
SK201	ヒラメ	尾椎		1	貝層土壌サンプル。椎体部分で前後に切断。
SK201	同定不可	擬鎖骨	左	1	
SK201	同定不可	後側頭骨	右	1	貝層土壌サンプル。タイ科？
SK201	同定不可	主鰓蓋骨	左	1	関節部分欠損。切断面を有する。タイ科？
SK201	同定不可	椎骨		1	
SK201	同定不可	腹椎		1	椎体部分で前後に切断。タイ科？
SK201	同定対象外	うろこ		1	
SK201	同定対象外			○	
SK201	同定対象外			○	貝層土壌サンプル
SK207	マグロ属	鰭棘		1	
SK207獣骨集中区	未同定	主鰓蓋骨	右	1	ヒメダイ標本に近似。
SK258①	マグロ属	尾椎		1	
SX267①	同定対象外	鰭棘		1	
SK387・388	マグロ属	尾椎		2	切断痕有。
SK583①	マダイ亜科	歯骨	右	2	
SK583①	マダイ亜科	前上顎骨	右	1	

区より出土した右主鰓蓋骨は未同定とした。

結果、4群の魚類が確認された。最も多いのがタイ科で11点出土しており、全体の44.0%を占める。そのほかにサバ属(9点・36.0%)、マグロ属(4点・16.0%)、ヒラメ(1点・4.0%)が出土している。タイ科は、科より下位まで同定できたものはマダイもしくはマダイ亜科である。なお、25点中18点はSK201から出土している。上記の魚種で出土していないのはマグロ属のみであった。そのほかの遺構からは1・2点出土しているだけである。(阿部)

### 3. 爬虫類 (8表, PL.5・6)

イシガメ科が13点出土している。すべて甲羅部分であり、ほとんどのものがニホンイシガメ(以下、“イシガメ”と略す)と同定することができた。その内、SE02(瓦層)の左胸甲板1点とSX267の右胸甲板1点は他のものに比べて小型である。この小型のものには、クサガメとの違いを示す部位が出土していないため、イシガメ科ととめた。

出土した遺構の位置は、SE02のみG2グリッドで離れているが、SX229、SK258、SX267、SK583はB～D-4～7グリッドに集中している。SX229の左胸甲板と

SK258の左腹甲板は接合することから同一個体であると推定される。遺構同士が隣接しているもののSX229が19世紀中頃(東大編年Ⅷc期:以下“東大編Ⅷc”と略す)でSK258が19世紀前半(東大編Ⅷb)であり、やや時期が異なる。また、SX267の右胸甲板と右腹甲板も上述のSX229とSK258のものと同サイズで、部位も重複しないことから同一個体のものである可能性がある。時期は18世紀後葉(東大編Ⅶ)であり、2基の遺構よりも古い。そのほかの遺構は、SE002が18世紀中葉～後葉、SK583が18世紀後葉(東大編Ⅶ)である。

遺構ごとの出土傾向では、SK583が最も多く5点、次いでSE002とSX267が各3点、そして、SX229とSK258が各1点である。つまり、まず多く出土している遺構は全て18世紀後葉のものであり、19世紀代の2基の遺構は1点ずつと少ない。SE002を除く遺構の分布は、B5～6、CD4～7のグリッドに広がるSK207に隣接する形で、南側に18世紀代のSK583とSX267、北側に19世紀代のSX229とSK258が位置する。想像の域は出ないが、19世紀代の2基の遺構より出土した2点の資料は、18世紀代の遺構に廃棄されていたものが混入した可能性も考える必要があろう。

SK229の左胸甲板、SK583の左腹甲板と左第1肋骨板にそれぞれ刀傷が観察された。SK229の左胸甲板は、

8表 出土爬虫類遺体一覧

遺構	層位	種名	部位		左右	数	備考	
SE002	瓦層	イシガメ	背甲	第1肋甲板	左	1	1	キールはない。
		イシガメ	腹甲	胸甲板	左	1		
		イシガメ科	腹甲	胸甲板	左	1		
SX229	②	イシガメ	腹甲	胸甲板	左	1	1	同一個体 SX267(右)=本資料<SK583(右)。※サイズ 腋下甲板と接合する突起部分に外側から斜めに刃を 入れたような削りと数条の刀傷が見られる。
SK258	①	イシガメ	腹甲	腹甲板	左	1		
SX267	①	イシガメ科	腹甲	胸甲板	右	1	1	小型。 同一個体? 同一個体?腹甲
	②	イシガメ	腹甲	胸甲板	右	1		
		イシガメ	腹甲	腹甲板	右	1		
SK583		イシガメ	背甲	第1肋甲板	左	1	1	同一個体 キールはない。SE02のものに比べてやや小型。肋骨部分の頭側に肋骨に沿わせ且つ肋骨頭に当てるような横位の刀傷が見られる。 キールはない。 後縁。鈍いが縁部が鋸歯状か? 内側に縦に数条の細かい刀傷が見られる。
		イシガメ	背甲	第2肋骨版	左	1		
		イシガメ	背甲	縁甲板		1		
		イシガメ	腹甲	胸甲板	右	1		
		イシガメ	腹甲	腹甲板	左	1		
合計(破片数)						13	6	

腋甲板と接合する突起部分に外側から斜めに刃をいれたような削りと数条の刀傷が見られる (PL.5-6)。SK583の左腹甲板は、外側の縁辺前位に縦に4条の刀傷がみられ、内側に縦に数条の細かい刀傷がみられる (PL.6-5a)。左第1肋骨板は、肋骨頭部分の頭側に肋骨に沿わせ且つ肋骨頭に当てるような横位の刀傷が見られる。つまり、これらの資料は食したものや薬に用いたものである可能性が高い。食材として用いられた記述は『料理物語』にみられる。具体的に、「第三 川魚之部」において、「真亀 すい物 さしみ いしがめも同」という記述が見られる。薬に関する記述は、『和漢三才図絵』や『本朝食鑑』に「蛀牙(むしば)の苦痛(いたみ)」に陰干しにした頭や前臑骨(『和漢』)もしくは尾(『本朝』)が効くという記述が見られる。(阿部)

#### 4. 鳥類 (9表, PL. 7)

##### 4-1. 分析方法

資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵資料 (HoUMVC) および江田 (EP) の所蔵標本を利用した。骨の部位の名称は Baumel et al (1993) および日本獣医解剖学会 (1998) に、分類群名は基本的に日本鳥学会 (2012) に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科の分類は American Ornithologist' Union (1998) に従った。キジ科資料については、江田・井上 (2011) および許・江田 (2022) の基準による同定を試みた。資料の残存状態は、近位や遠位の関節が半分以上残っているものをそれぞれ近位端、遠位端とした。また、主要四肢骨では骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨は骨体部として記載した。上記の近位端、遠位端、骨体部のすべてが残存している資料は完存とした。一方、資料の破損が著しい

9表 出土鳥類遺体一覧

遺構	袋番号	種名	部位	左右	部分	Bp <sup>1</sup>	Bd <sup>2</sup>	GL	備考
SK201		同定不能	四肢骨		sfr				
SK207		キジ科	大腿骨	右	p				大転子含気窩なし
SK207		キジ科	上腕骨	左	d		18.4		骨幹粗い。遠位端は一部切断されている
SX229	②	キジ科	脛足根骨	左	s-d		11.3		
SX229	②	キジ科	脛足根骨	右	d		15.2		内・外側顆前面および遠位端の下面に解体痕あり
SX229	②	ニワトリ	足根中足骨	左	w		13.6	83.8	内側足底稜なし、距突起あり
SX229	②	キジ科	尺骨	右	sfr				遠位端よりは切断されている
SX229	③	キジ科	上腕骨	左	p	28.3			遠位端よりは切断されている。三角胸筋稜尾側面に解体痕あり
SX229	④	キジ科	大腿骨	左	d		24.2		遠位端よりは内側顆・外側顆の一部は火を受けている
SX229		キジ科	上腕骨	右	d		18.0		
SK258	①	キジ科	大腿骨	左	s-d		15.4		外側顆に解体痕あり
SK258	①	ニワトリ	脛足根骨	左	p-s	12.7			後腓骨頭韌帯の付着部は線状
SK258	①	キジ科	脛足根骨	右	d		16.1		骨髄骨あり。骨幹前面遠位端よりに解体痕あり
SK258	①	キジ科	烏口骨	左	s-d				肩端は一部切断されている
SK267	⑤	カモ亜科	大腿骨	左	s				
SK583	①	カモ亜科	上腕骨	右	d		14.0		
SK583	①	カモ亜科	尺骨	右	w	9.5	10.2	76.3	
SK583	①	カモ亜科	手根中手骨	右	w	13.1		54.4	
SK583	④	キジ科	大腿骨	左	w		16.8		大転子含気窩なし。骨幹の大腿骨頭直下内面、および遠位端より内側面に解体痕あり
E-2版築D層		キジ科	上腕骨	左	p-s	30.5			上腕骨頭頭側面に解体痕あり

w: 完存、p: 近位端、d: 遠位端 (烏口骨では肩端)、s: 骨体部、fr: 破片

<sup>1</sup>脛足根骨では内側顆内側縁-外側顆外側縁間の距離、<sup>2</sup>尺骨ではDid。

ために鳥綱以下の同定ができなかった資料は同定不可とした。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、同定時に目に付いた解体痕と加工痕を記載した。骨の成長段階は、すべての部位について未癒合のものは幼鳥、癒合しているものの形成が不完全な資料と骨体表面が粗い資料は若鳥とした。また、破損して髓腔を観察できた資料では骨髓骨の有無を記載した。

## 4-2. 分析結果と考察

調査地点全体で出土した鳥類遺体 20 点のうち 19 点を科以下の単位で同定できた。ニワトリを含むキジ科が 15 点で最も多く、他にカモ亜科が 4 点出土した。キジ科は SK207、SK258、SK583、SX229 の各遺構と E-2 版築 D 層から検出された。キジ科資料のうち SX229 出土の足根中足骨は内側足底稜がないことから、SK258 出土の脛足根骨は長軸方向に長い後腓骨頭靭帯付着部の形状からそれぞれニワトリと同定された。前者では距突起が確認され、オス個体に由来すると考えられた。一方、後者では骨髓骨が確認され、繁殖期のメスに由来すると考えられた。他の資料では骨髓骨は認められなかった。また SK207 と SK583 出土の大腿骨はともに大転子含気窩がないことからニワトリもしくはヤマドリのものと同定できた。キジ科と同定した資料のほとんどは現生標本のキジ (EP-143) やヤマドリ (EP-144) より大きく、太いものであった。ニワトリに由来する標本が多いものと考えられる。SK207 出土の上腕骨が骨幹の粗い若鳥のものであったのを除き、他の資料では骨化が完了していた。解体痕はニワトリを含むキジ科の骨 9 点で認められた。鳥口骨の肩端、上腕骨の近位端・遠位端、尺骨の遠位端、大腿骨の近位端・遠位端、脛足根骨の遠位端に分布しており、様々な関節で解体された様子がうかがえた。カモ亜科は SK267 と SK583 から出土した。SK267 から出土した大腿骨は現生標本のオナガガモ (EP-4) とほぼ同大の資料、SK583 から出土した上肢骨 3 点はヒドリガモ (EP-6) とオナガガモ (EP-4) の中間程度の大きさの資料であった。カモ亜科の資料はすべて骨髓骨を含まない骨化が完了した骨であり、解体痕も認められなかった。(江田)

## 5. 哺乳類 (10 ~ 21 表, PL.8 ~ 19)

### 5-1. 分析方法

**同定及び計数方法** 同定に際して、阿部所蔵の現生標本を用いた。まず、綱より下位の同定が困難な部位は「同定対象外資料」として対象からはずした。また、それ以

外の「同定対象資料」の内、同定するための特徴的な部分が欠損しているために同定することのできなかった資料は「同定不可」と記載した。さらに、一致する標本が手許になかったなど理由から、今回の分析で綱より下位まで同定できなかったものは、「未同定」と記載した。以上の過程を経て綱より下位まで同定できたものを「同定資料」とした。組成は破片数で提示する。なお、整理の前段階で小破片化していたものが多く含まれていた。そのような資料が整理前段階での袋単位で 20 点以上あるものを計数不可能資料とし表中で“○”で表記し、計数時には“○”1 つにつき“20 点”とした。文中では記載を省略する。

**サイズの計測方法** 各部位のサイズ計測定義は、Driesch (1976) に基づく。(阿部・大内)

## 5-2. 分析結果

### 5-2-1. 概要 (10, 15 ~ 21 表)

調査地点全体で哺乳類遺体は 2064 点が出土している。同定対象外とした資料は 551 点で、1513 点を同定対象資料として抽出した。その内、同定不可であった資料が 364 点、未同定であった資料が 3 点で、結果、全体の 55.5% にあたる 1164 点が綱より下位まで同定することができた (同定資料)。

分析の結果、6 群の哺乳類が確認された。最も多いのがニホンジカ (以下、“シカ”と略す) で 776 点出土しており、全体の 67.7% を占める。次いで、イノシシ類が多く 236 点出土しており、全体の 20.6% を占める。さらにイヌ (126 点・11.0%) が比較的多く出土している。そのほかにネズミ科 (4 点・0.3% : SK001)、ネコ (1 点・0.1% : SX229)、ウマ (1 点・0.1% : SK207) が出土している。さらに、イヌ科? とした詳細不明の遊離歯 (SX267 ②) とシカかイノシシ類のものと同定される上腕骨遠位端部 (SX267 ①) も各 1 点含まれている。なお、イノシシ類にはブタの可能性のあるものが含まれる (後述)。

哺乳類の出土している場所は、14 基の遺構と D 層版築部分である。その内、SX267 (815 点・39.5%)、SK207 (516 点・25.0%)、SK583 (360 点・17.5%) から非常に多く出土しており、この 3 基で全体の 81.9% を占めている。遺構のものに限れば、この 3 基以外に出土点数が 100 点を超えるものはない。以上の主要 3 基は調査地点内の南東端 (B・C-5・6・7 グリッド) に近接して分布している。具体的に SK207 の南側に SK563、西側に SX267 で、SK207 が 2 基の遺構に囲まれるように配置している。

時期は SX267 が 18 世紀後葉 (~ 19 世紀中葉 : 東大

編Ⅶ)、SK583が18世紀後葉でほぼ同じである。SK207が19世紀中葉とやや新しい。

以下、動物種ごとに傾向を概観する。なお、出土哺乳類に関する観察結果や出土傾向などの詳細は15～21表を参照されたい。(阿部)

5-2-2. イヌ (PL.8・9)

(1) 概要

イヌは5基の遺構から出土しているが、SK207とSK583以外からは部分的に1点ずつ出土するのみである。以下、その2基の遺構について詳細を述べる。なお、イヌの体高の推定には、山内(1958)の式(橈骨はⅡ式、それ以外はⅢ式)を用いている。

(2) SK207 (19世紀中葉) (PL.8)

破片数で66点出土しているが、軸椎のみ2点出土しているほかは部位の重複が認められないことから、1体分と軸椎のみのもので最小2体分が含まれているものと推定される。頭部から脊椎部分の軸性骨格部分とそれら

に連なる寛骨は残存しているものの、肩甲骨から遠位の前肢、大腿骨から遠位の後肢の四肢骨部分が出土していない。同定不可とした資料でイヌの四肢骨の可能性が指摘されているのは、腓骨骨幹片と不明骨幹部分破片の2点に留まる。頭蓋骨や左下顎骨、寛骨に刀傷が見られることから解体された個体であると考えられる。特に寛骨白縁部分やその周辺に刀傷が見られることは、大腿骨より遠位の後肢部分を取り外す作業がおこなわれたことを示している。なお、SK258より出土している右大腿骨も大転子の下に横位の細かな傷が数条見られる(PL.8.4)。

次に齢査定をおこなう。歯は全て永久歯であるものの、寛骨において坐骨結節及び弓縁が化骨化の途上で、端部が未癒合である。寛骨は腸骨・坐骨・恥骨が癒合するのが4～6か月、坐骨結節及び弓縁が癒合するのが8～14か月である(浅利2003)。前者が癒合済みであるため、早くとも生後4か月であり、後者が未癒合であるため遅くとも生後14か月未満と推定される。骨質は成獣のものと同じである。顎骨は全て永久歯が生えそろっているため、7カ月齢以上(König and Liebich 2010)と推定

10表 出土哺乳類遺体組成表

面	グリッド	遺構名	時期	ニホンジカ		イノシシ		ノイノシシ		イヌ		イヌ科?	ネズミ科	ネコ	ウマ	同定資料・計	未同定	同定不可		同定対象外		同定外資料	全体	出土比率	
				数	○	数	○	数	○	数	○							数	○	数	○				
L	G2	SK001	17c後										4			4						0	4	0.2%	
L	G2	SE002	18c中～後	26	5											31		10	1	3		33	64	3.1%	
L	F3・G3	SK201	18c中	4	2											6		13		11		24	30	1.5%	
L	H3・H4	SK202	18c前?															1				1	1	0.05%	
不明	C5・D5・D6	SK206	18c後?		1											1						0	1	0.05%	
A	B5・B6・C4～7・D4～7	SK207	Vllc	129	51				46	1					1	247	1	76		72	6	269	516	25.0%	
A	C4・C5・D4・D5	SK229	Vllc	23	8				1				1			33		22		22		44	77	3.7%	
L	D4	SK258	Vlllb	9	3				1							13		1		11		12	25	1.2%	
A	B6	SX267	Vll	360	93			1	1		1					456	1	130	1	88	6	359	815	39.5%	
C	D1・D2	SD357	19c前?		1											1						0	1	0.05%	
L	C3	SX386	—		1											1						0	1	0.05%	
L	C3	SK387・388	18c前?		2											2		2		2		4	6	0.3%	
L	D2	SK477	18c前～中		3											3				1		1	4	0.2%	
L	C7・D7	SK583	18c後葉 [一部17c後葉含む]	114	50	1			57							241		43		56	1	119	360	17.4%	
	C2	D層・版築			3											3				1		1	4	0.2%	
	D1	D層・版築			3											3						0	3	0.1%	
C	D2	D層・版築	18c後～19c前		54											54	1	0	1	1	1	42	96	4.7%	
	D3	D層・版築			2											2		2				2	4	0.2%	
	D7	D層・版築			3											3						0	3	0.1%	
	D	D層・版築			4											4						0	4	0.2%	
C	E2	D層・版築	18c後～19c前		11											11						0	11	0.5%	
	—	D層・版築			5	1										6		4				4	10	0.5%	
	—	D層・トレンチ														0				1		1	1	0.05%	
	—	版築			16	1										17						0	17	0.8%	
表土	—	表土			2											2				1		1	3	0.1%	
	—	遺構外			2											2						0	2	0.1%	
	—	出土地不明																		1		1	1	0.05%	
合計(破片数)				776	216	1	1	106	1	1	4	1	1	1146	3	304	3	271	14			918	2064		
出土比率(分析段階)					236			126							55.5%	0.1%		364		551			17.6%	26.7%	44.5%
出土比率(同定資料内)				67.7%	20.6%	0.1%	11.0%	0.1%	0.3%	0.1%	0.1%														

○: 整理時の段階でまとまりで細片20点以上が含まれていたもの [計数段階では、“○”の数に対して、20を乗算している。]



される。以上から本資料は生後7カ月～14か月未満の若獣のものと推定される。また、脊椎においても椎頭部分が未癒合のものが多く。

体高は、下顎骨全長から48.5cmと推定された。現生犬種での分類では中型(46～61cm)にあたり、日本在来犬種では紀州(46～52cm)、北海道(46～56cm)、甲斐(46～58cm)に近い。19世紀の段階では江戸市中において45mm以上50mm未満のものが多く(三輪2021)、本資料は一般的なサイズであるといえる。

### (3) SK583 (18世紀後葉) (PL.9)

破片数で57点出土しているが、右下顎第2前臼歯のみ重複が見られるものの他の部位に重複が見られないことから、1体分と右下顎第2前臼歯のみのもので最小2体分が含まれているものと推測される。さらに、頭部から脊椎の軸性骨格部分をはじめ四肢骨部分もある程度そろって出土している。全長が計測できたものは左下顎骨、左上腕骨、左橈骨、右脛骨の4点で、推定された体高は最小で44.3cm(脛骨)で最大で45.0cm(上腕骨・橈骨)であった。下顎骨からの推定値は44.4cmであった。現生犬種での分類では小型(46cm以下)にあたり、日本在来犬種では柴(36～40cm)より大きく、紀州(46～52cm)などより小さい。18世紀の段階では45mm以上50mm未満のものが多く(三輪2021)から、この時期でもやや小さい個体であったことが推測される。むしろ、17世紀段階(40cm以上45mm未満)に近い。なお、18世紀以降の町犬や野犬(のいぬ)も含めた江戸のイヌの大型化の背景に、大名屋敷で飼育していたイヌ(洋犬)との交雑が指摘されている(三輪2021)。

本資料において刀傷は観察されなかった、一方で腰椎の椎体などに咬痕がみられた。つまり、本資料は、死後、土を被せない状態で本遺構に遺棄されたか、土が被さっていたとしても他のイヌが掘り起こせる程度で、しっかり埋葬された状態ではなかったと推測される。おそらく、本資料は、屋敷内で生活していた(もしくは出入りしていた)町犬もしくは野犬(のいぬ)で、屋敷内で死亡し、その後、SK583に遺棄されたものと推測される。

### (4) 小結

本調査地点より出土したイヌでほぼ1体分まとまって出土したものは、1体は人に食されたもしくは鷹餌などにされたもの、もう1体は人為的解体痕跡はないものの埋葬されずに遺棄されたものであることが推測された。つまり、いずれも、本屋敷内に出入りもしくは棲み付いた町犬や野犬であったと推測される。(阿部)

## 5-2-3. イノシシ類 (11表, PL.10～13)

### (1) 概要

イノシシ類は、9基の遺構と版築部分から出土している。その内、10点以上出土しているのは、SX267(93点・39.4%)、SK583(70点・29.7%)、SK207(51点・21.6%)の3基の遺構で、全体の90.7%を占めている。

部位組成において頭部が多く、頭部以外の軸性骨格も含めて他の部位は少ない。上記の3基の遺構に限定しても、SK207では前肢部分を中心に頭部以外の部位が比較的出土しているものの、SX267とSK583では頭部以外はあまり出土していない。SK207においては、前肢と後肢で比較すると前肢が17点であるのに対し、後肢が2点とバランスが悪い。主要3基の遺構において主に歯の数から最小個体数を換算した。結果、まず頭部以外がほとんど出土していないSX267とSK583は共に最小で5体分が含まれていることが推測された。一方で、頭部以外も比較的出土しているSK229は最小で3体分であるが、頭部と環椎、肩甲骨を除いた他の部位は1点ずつしか出土していない。

時期は、最も多く出土しているSX267(93点)が18世紀後葉～19世紀初頭(東大編Ⅶ)で、次いで多いSK583(70点)も18世紀後葉である。さらに、51点で比較的多いSK207は19世紀中葉(東大編Ⅷc)と少し時期が離れる。調査地点内での分布では、この3基の遺構は調査地区の北東端に隣接している。可能性として北東端に18世紀後葉から19世紀中葉にかけて、イノシシ類の解体作業後の廃棄がおこなわれていた可能性と、SX267やSK583の遺構を中心に18世紀後葉にこの一帯に廃棄されていたものが19世紀中葉にSK207に混入した可能性などが考えられる。

### (2) 「ブタ」であるかの検証

イノシシ類の一部に、「ブタ」の可能性のあるものも含まれているか検証する。全体的にはイノシシ標本と明確な違いがみられるものはなかった。そこで、イノシシとブタの形態的な違いがより分かりやすい頭部の内、比較的、残りの良い下顎骨に注目し、イノシシの現生標本と形質の異なるものや歯周症による顎体の退縮が認められるものを抽出した。また、これらには、人為的な加工痕が見られものが多い。そこで、上記の資料のほかに人為的な加工痕を持つ頭部の資料もあわせて抽出し、詳細を記すことにする。

#### i) SK583

SK583からは左1点、右2点抽出することができた。以下に詳細を記す。



## ・サンプル②

：左下顎骨（×P××34M123）（PL10-5）第3後臼歯後端が未萌出。第1後臼歯後端から第2後臼歯にかけての頬側歯槽に歯周症によるものと推定される顎体の退縮がみとめられる。それにより、これらの箇所歯根の一部が露出している。また、同じく頬側の第3前臼歯から第1後臼歯の前半分の歯槽も軽微ではあるが、歯周症によるものと推定される顎体の退縮が認められる。

下顎枝部分はほぼ欠損しているが底部が残存している。イノシシ標本に比べて、下顎体底面に対して下顎枝底面が低く（外に膨らみ）、そのためそれらの境にあたるくびれが顕著である。切歯歯槽部分は欠損しているもの、右下顎骨との連合部を分割するために折った際のものとして推測される痕跡が見られる。後述するが、連合部以下顎骨を左右に分割した際の鋸状の刃物の痕跡を有するなどより切断したことが明確な資料がいくつか見られ、本資料の痕跡も同様の経緯のもの可能性も想定される。

## ・サンプル④

：右下顎骨（I×××△P1234M123）（PL10-4, PL12）第3後臼歯後端が未萌出。犬歯のサイズからメス。第1と第2後臼歯の間から第2後臼歯前側にかけての頬側歯槽に歯周症によるものと推測される退縮が認められる。それにより第2後臼歯の歯根の一部が露出している。

また、本資料では人為的な傷が確認された。まず、下顎枝頬側に縦位の刀傷が4条確認された。また、下顎体舌側の第2・第3後臼歯歯槽付近、そして第3後臼歯歯槽直後にそれぞれ縦位の刀傷が認められる。さらに連合部においても結合面（下顎間軟骨結合部分）に平行して、数条の細かい刀傷が認められる。また、連合部中央・左右結合部分よりもやや左寄りの部分で切断されている。切断面の観察から鋸状の刃物で下顎骨の下部から上部に向かって切断されたことが推測される。

：右下顎骨（CP×34M1）連合部を左右に切断した痕跡が認められる。切断面の観察から鋸状の刃物で下顎骨の下部から上部に向かって切断されたことが推測される。さらに、その切断部分の上面に内側から外側に向かって鑿状の刃物で削った痕跡もみられる。

## ii) SK207 獣骨集中区：左下顎骨

（I×××CP×234M123）（PL10-3）

本遺構から1点出土している。本資料は左下顎骨で、筋突起や関節突起が欠損しているがほぼ完存。形態は歯牙も含めてイノシシの現生標本と変わらない。歯周症によるものと推測される歯槽の退縮は、頬舌側ともに全体に見られるものの表面がやや多孔質になる程度で極軽微

なものにとどまっている。第3後臼歯の後端は未萌出。切歯の歯槽は第1からあるものの連合部中央よりやや左寄り切断されており、連合部後側の切断面は下顎体に接している。

## iii) SX267 ③：左右下顎骨連合部分

（L：I11, R：I12×CP×××）

本遺構から1点出土している。本資料は下顎骨連合と右下顎骨部分で、下顎骨を連合部で左右に切断したものであることが推測される。切断されたと推測される箇所は、連合部中央より左側、具体的には左第1切歯と第2切歯の間である。他の同様の資料で見られたような鋸状の刃物などの人為的な痕跡は観察できないが、その割れ口は直線的であり、同様に切断されたものと推測される。

## iv) SX267 ②：頭蓋骨（PL13）

左側前頭骨部分のみ残存。前頭骨のちょうど正中線上（矢上縫合上？）で切断している。また、左側頭部分にも後頭鱗との接合線（ラムダ縫合）より5mm内側（吻部側）で平行した位置に刀傷がある。なお、後頭鱗部分との間のラムダ縫合部分の化骨化が終わっていないことから若獣である。

## v) 小結

以上の観察から、明確に「ブタ」であると推定できるものはなかった。一方で、下顎骨や頭蓋骨に頭部を矢上方向に切断した際のものとして推定される人為的な痕跡が見られた。特に連合部を残す資料では、人為的に左右を分割した痕跡をもつものが多く含まれていた。この痕跡は下顎骨の下から上へ、つまり外面から内面に向かって切断したものである。しかし、食用を前提とした解体において、左右に分割したとは考えにくい。筆者のひとりである阿部が所有するブタ標本の頭蓋骨及び下顎骨が左右に分割されており、その標本はもともと東京大学農学部にて解剖実習に用いられたものである。想像の域はでないが、藩邸内で解剖のようなことをおこない、その後廃棄したものである可能性も推測される。なお、頭部以外の部位の出土が極めて少ないことを含めて考えても、肉の付いている四肢部分を切り離すなどの解体作業後の廃棄であったとしてもその際に頭部と共に廃棄されたとする脊椎部分の出土が極めて少なく、この点からも頭部の解剖をおこなった際のもものが主体となっている可能性も想起される。（阿部）

## 5-2-4. ニホンジカ（12表, PL14～PL19）

## (1) 概要

ニホンジカは、10基の遺構と版築部分、そして表土から出土している。その内、10点以上出土しているの

は、SX267 (360点・46.4%)、SK207 (129点・16.1%)、SK583 (114点・14.7%)、SE02 (26点・3.4%) の4基の遺構で、全体の81.1%を占めている。さらにD層版築からは85点(11.0%)出土している。4基の遺構のものにD層版築のものを加えると92.0%を占める。

部位組成において頭部が多く、そのほかの部位が少ない。上記の4基の遺構とD層版築に限定しても、まず、SK207で頭部以外の部位も比較的出土しているほかは、SX267で脊椎部分と寛骨が比較的出土しているものの四肢骨部分はあまり多くない。SK583とD層版築に到っては頭部以外ほとんど出土していない。最小個体数では、まずSX267が22体分と極めて多い。本遺構では軸性骨格及び寛骨が比較的多く最小個体数に換算した際に頭部以外で最も多いのが6点(6体分)の左寛骨である。しかし、頭部とは3倍近く差がある。

また、SK207とSK583、D層版築の最小個体数は各8体分であった。その内、SK207では、まず最小で1体分はほぼ全身の部位がそろっている。その上で頭部以外では、寛骨右、橈骨左、中手骨右が各4点(4体分)で他の部位より多い。(阿部)

## (2) 角部分が切断されている頭蓋骨 (PL16)

シカの頭蓋骨に関しては、角坐骨とその付近の脳頭蓋部分の残る資料が48点(左28, 右20)出土している。これらは、基本的に鹿角部分が切断されている。ほとんどのものが角坐より下部の角坐骨部分で切断が行われている。また、切断方法として、鋸によるものと推定されるものも含まれるが、鈍のようなもので複数方向から刃を入れ、海綿質部分に達した当たりでへし折っているものがほとんどである。一方で、鹿角自体の出土は、破片がSX267から4点、SK207から5点出土している程度でほとんど見られない。つまり、鹿角自体を切り離す作業をした際の廃棄で、これらを用いた細工などの作業は別の場所でおこなわれていたと考えられる。

年代では、18世紀後葉から19世紀初頭(東大編Ⅶ)に比定されるSX267が最も多く30点出土している。ついで18世紀後葉(東大編Ⅶ)のSK583と19世紀中葉(東大編Ⅷc)のSK207がそれぞれ5点で多い。18世紀後葉～19世紀前葉の版築部分で4点、18世紀前葉から中葉のSK477と19世紀中葉(東大Ⅷc)のSK258で各2点出土している。つまり、18世紀後葉の遺構から多く出土している。特に版築部分に用いたところに直接これらの資料を廃棄したとは考えにくく、土壌の移動の際と一緒に持ち込まれたものと考えられる。

調査地点内の分布では、版築より東側に分布し、南東

端(B6)にあるSX267が最も多く、北西側に向かうにつれて規則正しく点数が少なくなる。

以上から、鹿角が切り落とされたシカ頭蓋骨は、18世紀後葉にSX267もしくはその付近に廃棄され、その後の何かしらの要因で他の遺構などに混入した可能性が推測される。

## (3) イノシシ類による咬痕のある橈骨

(SK207 獣骨集中区・右橈骨) (PL18・19)

本遺構から出土しているニホンジカ右橈骨の遠位端部には、イノシシ類のものと推定される咬痕が前位と後位ともについている。その咬痕は共に端部ギリギリに上下2列ついており、その幅は約2cmである。そして、前位に上顎、後位に下顎の咬痕がついているものと推定される。その内、後位のもの、同遺構同区から出土しているイノシシ類左下顎骨の第2及び第3後臼歯の一部と一致した。まず、後位のもの内、近位(上位)側の列は、3つの咬痕で構成されている。最も外側のものは外側面を括るような形についている。この括れている部分が第3後臼歯舌側第2咬頭前面と一致する。そして、内側に向かって連なる次の咬痕が同じく第3後臼歯舌側第1咬頭と一致する。さらに最も内側にある咬痕は第2後臼歯舌側第2咬頭と一致する。

遠位(下位)側の列は、最も外側にある咬痕がやや近位寄りではあるが、近位側の列と同様に3つの咬痕で構成されている。まず、最も外側の咬痕は第3後臼歯頰側第2咬頭と一致する。そして次の咬痕が、離接する第3後臼歯舌側第2咬頭と一致し、最も内側にある咬痕が第3後臼歯舌側の第1咬頭と一致する。

以上の左下顎後臼歯の咬頭との対応関係から、この2列の咬痕は、1度についたわけではなく、少なくとも2回の咀嚼によってついたものであることがわかる。

一方で、前位の咬痕に関しては、本調査地点で上顎骨の残りの良い資料がないことや、阿部所蔵のイノシシ標本が本調査地点出土資料よりサイズが小さいことから、上顎後臼歯部分と実際にあわせてみることはできなかった。しかし、橈骨遠位端部を遠位方向から観察すると、先述の後位遠位側との咬み合わせの関係で、前位遠位側の咬痕が上顎第2後臼歯第2咬頭と第3後臼歯第1咬頭の位置と一致していた。なお、両端部背面を中心に長軸に対して交差する形で細かい切痕が数条みられることから、シカの右橈骨は解体作業後に棄てられたものと考えられる。

以上、この咬痕がイノシシ類の第1及び第2後臼歯と一致することは、その橈骨を漁っていたイノシシ類が屋



敷内に生息していた証拠となりうる。そして、イノシシを江戸下屋敷内で飼育していたとは考えにくいことから、ブタであったことが推定される。(阿部)

(4) 出土ニホンジカを対象にした齢査定分析

(13・14表, PL.17)

シカを対象に齢査定分析を行った。対象資料は、本調査地点出土のシカの下顎骨20点(A～T)である(13表)。なお対象資料は遺構内出土のもので、状態が良く分析に耐えうるものを抽出した。特にSK207・SX267・SK583より多数抽出された。

シカの下顎骨を用いた齢査定分析は、現在、大泰司紀之(1980)による現生の査定法が基にされている。この研究を軸とし、新美倫子(1997)、山崎健(2019)、佐藤巧庸(2021)などの研究がある。中でも佐藤(2021)は、新美(1997)の下顎骨の後臼歯における萌出段階と、山崎(2019)のX線分析による後臼歯のセメント質分析を組み合わせ、より厳密な死亡時期を推定できる分析法として評価できる。よって本稿では、佐藤(2021)の分析に準拠する(14表)。なお齢段階については、佐藤(2021)と同様に、新美(1997)がエゾシカ標本の肉眼観察結果に基づいて設定した後臼歯の萌出段階に準拠する。具体的には、第1後臼歯の萌出が完了するまでをI段階、第2後臼歯の萌出が開始～完了するまでをII段階、第3後臼歯の萌出が開始～完了するまでをIII段階、第3後臼歯の萌出が完了した以後をIV段階と大別している。そしてその段階に対応させた死亡月に加え佐藤が加筆修正を行った月齢の情報を基に死亡時期を推定していく(14表)。なお死亡時期(季節)の推定に際して、6月を誕

13表 ニホンジカに関する齢査定結果

出土遺構	査定No.	歯式	分析結果	
SX207	A	(P× <sub>34</sub> M×)	成獣	II-3
SX267②	B	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> )	成獣	III-4
SX267②	C	(p <sub>34</sub> M <sub>12</sub> )	若獣	II-3
SX267②	D	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> )	成獣	III-4
SX267②	E	(M <sub>123</sub> )	老獣か	III-4
SX267②	F	(M <sub>3</sub> )	成獣	III-3
SX267②	G	(M <sub>23</sub> )	成獣	III-3
SX267②	H	(M <sub>23</sub> )	成獣	III-4
SX267②	I	(M <sub>123</sub> )	成獣	III-4
SX267②	J	(P <sub>234</sub> M <sub>1</sub> )	成獣	III-4
SX267②	K	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> )	成獣	III-3
SX267③	L	(M <sub>23</sub> )	成獣	III-4
SX267③	N	(M <sub>3</sub> )	成獣	III-3
SX267③	M	(P <sub>234</sub> M <sub>12</sub> )	成獣	III-3
SX267③	O	(p <sub>34</sub> )	若獣	
SX267③	P	(p <sub>34</sub> M <sub>12</sub> )	若獣	II-3
SK583	Q	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> )	成獣	III-3
SK583	R	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> )	成獣	III-3
SK583	S	(M <sub>23</sub> )	成獣	III-4
SK583	T	(P <sub>234</sub> M <sub>12</sub> )	成獣	III-3

生月とする新美(1997)の基準に準拠した。

20点の資料の齢段階別分析を行った結果、II-3が3点、III-3が8点、III-4が8点、そして、分析不可となったのが1点であった。この結果より生後10～14ヶ月頃と推定される資料と、22～29ヶ月頃と推定される資料が大半を占め、特定の年齢幅に収まることが示された。

14表 ニホンジカの後臼歯の萌出段階(佐藤2021)

	死亡月	月齢
I 第1後臼歯の萌出が完了するまでの段階		
I-1 第1後臼歯が未萌出のもの		
I-2 第1後臼歯が萌出途中のもの	9～10	3～4
II 第1後臼歯の萌出が完了した段階		
II-1 第2後臼歯が未萌出で、歯槽が開いているもの	11～4	5～10
II-2 第2後臼歯の第1咬頭が萌出を開始してから、第2咬頭が萌出を開始するまでのもの		
II-3 第2後臼歯の第2咬頭が萌出を開始してから、完了するまでのもの	4～8	10～14
III 第2後臼歯の萌出が完了した段階		
III-1 第3後臼歯が未萌出で、歯槽が開いているもの	8～12	14～18
III-2 第3後臼歯の第1咬頭が萌出を開始してから、第2咬頭が萌出を開始するまでのもの	11～5	17～23
III-3 第3後臼歯の第2咬頭が萌出を開始してから、第3咬頭が萌出を開始するまでのもの	4～6	22～24
III-4 第3後臼歯の第3咬頭が萌出を開始してから、ほぼ完了するまでのもの	4～11	22～29
IV 第3後臼歯の萌出が完了した段階		29以上

次にこれらの齢段階を基に、死亡時期が判定した。それに際して、3月～5月を春季、6月～8月を夏季、9月～11月を秋季、12月～翌2月を冬季とする佐藤(2021)の区分を用いた。その結果、4月～8月(春～夏季)を示す資料と、4月～11月(春～秋季)を示す2つの資料に大きく分かれた。特に春季～夏季を中心に死亡した資料が多く、それに対して冬季をしめす資料はほとんどなかった。よって本調査地点より出土したシカの猟期は、春季～夏季を中心としたものと想定される。

本稿では、以上のような結果が判明したが、今回後臼歯のセメント質分析など、より詳細な分析を基にした考察を行うことはできなかった。また分析資料自体が20点と非常に少なく、出土資料全体の把握を進めることができなかった。本遺跡における人と動物の関係性を把握するためには、他資料を考慮した分析が必要である。同遺構からはイノシシ類も多く出土していることから、本報告の再検討に加えイノシシ類などを加えたより詳細な分析を行っていく必要があるとともに、今後の課題としたい。(大内)

### 5-2-5. 哺乳類体の分析結果

哺乳類遺体が出土した主要な3基(SK207, SX267, SK583)は調査地点内の南東端(B・C-5・6・7グリッド)に近接して分布していた。時期に関しては、SX267が18世紀後葉(～19世紀初頭:東大編Ⅶ)、SK583が18世紀後葉でほぼ同じであるが、SK207が19世紀中葉とやや新しかった。シカとイノシシ類の詳細な分析の結果、SX267とその付近を中心に18世紀後葉ごろ廃棄されたものであることが推測された。19世紀中葉とされているSK207のものはその時期まで継続的に廃棄が行われた可能性と、SX267に廃棄されたものが覆土の移動などの要因で混入した可能性の2つが考えられる。出土部位は、特にこの3基の遺構において、シカ、イノシシ類に関して肉付きの良い部位である四肢部分の出土が少なかった。なお、SK207の解体痕を有するイヌも四肢骨の出土がない。さらに、シカに関しては、頭蓋骨の部分が切断されており、角自体の出土はほとんどない。以上から、これらは、必要な部位をとるための解体作業をおこなった際の廃棄物であると推定される。この3基のなかでも、SK207のシカとイノシシ類に関しては、四肢部分も出土が他の2基の遺構よりも目立つ。これは、時期による解体作業の違いを反映している可能性も推測される。

イノシシ類に関して、「ブタ」が含まれているのかを検討した。まず、イノシシ類そのものの分析では、形態

的に明確にイノシシ標本と異なるものはなかった。歯周症による顎体の退縮が認められるものがSK583より下顎骨左右1点ずつ、SK207 獣骨集中区より左下顎骨1点が見られたものの、特にSK207 獣骨集中区の歯周症による顎体の退縮はごく軽微なものであった。つまり、形態や病変などの観察からブタと明確に断定できるものはなかった。一方で、SK207 獣骨集中区から出土しているシカの右橈骨の遠位端部には咬痕が観察された。その咬痕はイノシシ類のものと推定された。実際に、本資料をイノシシ類の左下顎骨(前述のSK207 獣骨集中区資料)と交差する形で遠位端部咬痕を後臼歯上に配置すると一致した。つまり、先述したように、ブタを下屋敷内で飼っていたことが推測される。おそらく形態や歯周症からブタの可能性が指摘されたものがそれであった可能性が高い。これらの頭部は正中線上で真っ二つに切断されていたことも指摘した。食肉用に解体した際に、頭

15表 出土哺乳類遺体一覧(SE2)

種	部位	左右	数	備考	
イノシシ類	頭蓋骨		1	左後頭顆付近。	瓦層
イノシシ類	上顎犬歯	左	1	縦に半分欠損。メス。	
イノシシ類	上顎第4前臼歯	左	1		瓦層
イノシシ類	下顎第3後臼歯	左	1	歯根未形成。未萌出のもの。	瓦層
イノシシ類	第3頸椎		1		瓦層
ニホンジカ	頭蓋骨		1	左側頭骨部分。	瓦層
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	左	1		瓦層
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	1		瓦層
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	1		瓦層
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	2		瓦層
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	2		瓦層
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	2		瓦層
ニホンジカ	上顎後臼歯	右	1	前後が欠損。	瓦層
ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分(M3)	瓦層
ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分。P3～M3歯槽付近。	瓦層
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎枝部分	瓦層
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体部分(P4 M123)	瓦層
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	1	歯根形成途中。未萌出のもの。	瓦層
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	1		⑦
ニホンジカ	第7頸椎		1		瓦層
ニホンジカ	寛骨	右	1	寛骨臼～腸骨	瓦層
ニホンジカ	脛骨	左	1	近位端部欠損。	瓦層
ニホンジカ	距骨	左	1		瓦層
ニホンジカ	中足骨	右	1	骨幹前面部分破片。	⑦
ニホンジカ	中足骨		4	骨幹部分破片。	瓦層
同定不可	頭蓋骨		4	脳頭蓋破片。イノシシ?	瓦層
同定不可	下顎骨		1	イノシシの右下顎枝部分か?	瓦層
同定不可	下顎骨		1	破片資料。	瓦層
同定不可	下顎骨		1	下顎体部分。シカ?	瓦層
同定不可	椎骨		1	椎骨弓部分。大型哺乳類	瓦層
同定不可	上腕骨	左	1	骨幹部分。シカorイノシシ?	瓦層
同定不可	橈骨	右	1	骨幹部分。シカ?	瓦層
同定不可	四肢骨		○	骨幹部分破片。	瓦層
同定対象外	—		3	破片資料。	2層

16-1表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
イヌ	頭蓋骨		1	頭に刀傷とみられる痕跡あり	
イヌ	上顎骨	左	1	(I <sup>2</sup> × C × P <sup>1</sup> × M <sup>12</sup> )	
イヌ	上顎骨	右	1	(I × CP <sup>12</sup> × 4M <sup>12</sup> )	
イヌ	上顎骨		14	破片資料	
イヌ	下顎骨	左	1	(I <sub>1</sub> × CP <sub>123</sub> M <sub>123</sub> ) 舌側に刺突、全体に刀傷と考えられる痕跡あり。下顎角にカットマーク?と思われる痕跡も付随	
イヌ	下顎骨	右	1	(I <sub>1</sub> × CP <sub>123</sub> M <sub>12</sub> ) 全長(Id-Goc):143.9mm	
イヌ	下顎第4前臼歯	右	1	前半分のみ残存。	①
イヌ	舌骨		1		
イヌ	環椎		1	環椎翼部分欠損。	
イヌ	軸椎		1	骨端未癒合	
イヌ	軸椎		1	椎体部分のみ残存。	
イヌ	頸椎		5	椎頭が未癒合。	
イヌ	胸椎		4	椎頭が未癒合個体がほとんど	
イヌ	腰椎		9	椎頭が未癒合個体がほとんど。椎骨弓に刀傷があるものがある。	
イヌ	椎骨		○	破片資料	
イヌ	仙骨		1	腰椎側椎頭に癒合線残存	
イヌ	尾椎		1		
イヌ	寛骨	左	1	恥骨と腸骨の近位端部付近が欠損。坐骨結節及び弓縁部分が化骨化の途中で端部が未癒合。腸骨体表面に長軸に対して横位の刀傷が2条、腸骨翼の腸骨体に近い所にも1条みられる。寛骨臼の縁にも背から腹側に跨ぐ形で腸骨側に近い部分に1条、同じく腹側が寛骨臼切痕である背側の縁部分にもう1条みられる。	
イヌ	寛骨	右	1	寛骨臼周辺と坐骨のみ残存。寛骨臼に近い部分を中心に腸骨、坐骨、恥骨の表面部分にそれぞれの長軸に対して横位の刀傷が何条もみられる。寛骨臼の外側縁部にも刀傷がある。	
イノシシ類	頭蓋骨	左	1	頬骨部分	
イノシシ類	頭蓋骨	左	1	頭頂骨部分	
イノシシ類	頭蓋骨	右	1	頭頂骨部分	
イノシシ類	頭蓋骨		1	鼻骨部分	獣骨集中区
イノシシ類	上顎骨	左	1	(I <sup>12</sup> )	獣骨集中区
イノシシ類	上顎骨	左	1	犬歯 (C) 歯槽部分	獣骨集中区
イノシシ類	上顎骨	右	1	(P <sub>34</sub> M <sub>12</sub> )	獣骨集中区
イノシシ類	上顎骨	右	1	右上顎骨部分	
イノシシ類	上顎第1切歯	左	1	遊離歯	獣骨集中区
イノシシ類	上顎第2切歯	左	1	遊離歯	獣骨集中区
イノシシ類	上顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	
イノシシ類	下顎骨	左	1	(M <sub>12</sub> ) M <sub>3</sub> は未萌出だが顎内にあり	
イノシシ類	下顎骨	左	1	M <sub>3</sub> 後側付近下顎枝	
イノシシ類	下顎骨	左	1	下顎枝部分	
イノシシ類	下顎骨	左	1	(I × CP × <sub>234</sub> M <sub>123</sub> ) M <sub>3</sub> 第3咬頭まで萌出	獣骨集中区
イノシシ類	下顎骨	右	1	M <sub>3</sub> 後側付近下顎枝	
イノシシ類	下顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	
イノシシ類	下顎第2後臼歯	右	1	遊離歯、下記M <sub>3</sub> の1つと同一個体と推定される	
イノシシ類	下顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	



16-2表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
イノシシ類	環椎		1	右前関節窩部分	
イノシシ類	環椎		2		獣骨集中区
イノシシ類	環椎		2	1点切断面あり	
イノシシ類	軸椎		1	骨端未癒合	獣骨集中区
イノシシ類	胸椎		1		
イノシシ類	腰椎		1	椎頭部分骨端	
イノシシ類	肩甲骨	左	1	咬痕、切断面あり	
イノシシ類	肩甲骨	左	2		獣骨集中区
イノシシ類	肩甲骨	左	1		
イノシシ類	肩甲骨	右	3		獣骨集中区
イノシシ類	上腕骨	左	1	近位に病理痕による骨増殖有り カットマークあり	獣骨集中区
イノシシ類	橈尺骨	左	1		獣骨集中区
イノシシ類	橈骨	左	1	骨幹部分	獣骨集中区
イノシシ類	橈骨	右	1	近位	獣骨集中区
イノシシ類	尺骨	左	1		獣骨集中区
イノシシ類	尺骨	右	1	肋突起部分	獣骨集中区
イノシシ類	尺骨	右	1		獣骨集中区
イノシシ類	第2中手骨	右	1	遠位端未癒合	獣骨集中区
イノシシ類	第4中手骨	左	1	内側近位部分	獣骨集中区
イノシシ類	第4中手骨	右	1	完形	獣骨集中区
イノシシ類	寛骨	左	1	寛骨白部分	獣骨集中区
イノシシ類	寛骨	右	1	寛骨白付近	獣骨集中区
イノシシ類	踵骨	右	1		獣骨集中区
イノシシ類	基節骨		1	近位端未癒合、但し端部あり	獣骨集中区
イノシシ類?	頭蓋骨		1	破片資料	獣骨集中区
イノシシ類?	大腿骨		1	破片資料	

16-3表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨付近, 角坐骨に前から後に前頭骨の面と同じ角度で斜めに切断面を有する。その部分に焦げ目あり。さらに角坐骨の周りに切痕が数条見られる。	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨付近。角坐より上は切断されている。切断は複数方向から行われている。	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨付近。角及び角坐部分も残存。角坐直下に横位の切痕が数条見られる。	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨付近残存, 角坐骨に切断面あり。	獣骨集中区
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨部分	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	関節結節部分	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	左頬骨側頭突起部分	獣骨集中区
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	後頭顆部分	
ニホンジカ	頭蓋骨		1	後頭骨から後頭顆まで	
ニホンジカ	頭蓋骨		1	外耳孔部分	
ニホンジカ	頭蓋骨		1	角坐骨破片資料	獣骨集中区
ニホンジカ	頭蓋骨		1	後頭骨底部	
ニホンジカ	頭蓋骨		1		
ニホンジカ	鹿角		4	破片資料	
ニホンジカ	鹿角		1		
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(M <sup>12</sup> )	
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(M <sup>123</sup> )	
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	右	1	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	2	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	3	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P × <sub>34</sub> M <sub>1</sub> × ×)	
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P × <sub>34</sub> M <sub>12</sub> ×)	
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> ) M <sub>3</sub> の後葉(三葉)部分が欠損	
ニホンジカ	下顎骨	左	1	舌側, M <sub>3</sub> 部分	
ニホンジカ	下顎骨	左	3	下顎枝	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M × <sub>23</sub> ) M <sub>3</sub> 後葉(三葉)部分が完全に萌出しきっていない	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M <sub>3</sub> )	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M <sub>3</sub> ) 関節突起付近にカットマークあり	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P × <sub>34</sub> M <sub>1</sub> )	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> )	獣骨集中区
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> )	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(dp <sub>3</sub> × M ×) 第3乳臼歯の前端部が欠損, 萌出状況から2歳未満(0歳~1歳)か	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> )	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	M <sub>3</sub> 部分か	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体頰側破片資料, M <sub>3</sub> 歯槽あり	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	顎体部分, (P × <sub>34</sub> M <sub>1</sub> ×), 齢査定A	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	筋突起、関節突起部分	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	頰側部分, M <sub>3</sub> ~P <sub>4</sub> 部分まで残存	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎枝部分	
ニホンジカ	下顎骨	右	1		

16-4表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	下顎第3切歯	左	1	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3前臼歯	左	1	遊離歯, 後葉(三葉)部分が欠損	
ニホンジカ	下顎第3前臼歯	右	2	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	左	1	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	1	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	3	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	2	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3乳臼歯	右	1		⑨
ニホンジカ	乳臼歯		1	下顎乳臼歯破片資料, 後端部のみ残存	
ニホンジカ	歯		1	遊離歯	
ニホンジカ	環椎		1		獣骨集中区
ニホンジカ	環椎		1		
ニホンジカ	軸椎		1	カットマークあり	
ニホンジカ	軸椎		1		獣骨集中区
ニホンジカ	頸椎		1	前方椎頭及び椎体の一部	
ニホンジカ	頸椎		3		獣骨集中区
ニホンジカ	胸椎		1		獣骨集中区
ニホンジカ	胸椎		2	1点骨端未癒合(端部あり)	獣骨集中区
ニホンジカ	胸椎		2	1点被熱, 2点ともに骨端未癒合	獣骨集中区
ニホンジカ	胸椎		1		
ニホンジカ	腰椎		1	カットマークあり	
ニホンジカ	腰椎		1		
ニホンジカ	腰椎		2	1点骨端未癒合	獣骨集中区
ニホンジカ	肩甲骨	左	1		獣骨集中区
ニホンジカ	肩甲骨	左	1		
ニホンジカ	肩甲骨	右	1		獣骨集中区
ニホンジカ	上腕骨	右	1	近位欠損	獣骨集中区
ニホンジカ	上腕骨	右	2		獣骨集中区
ニホンジカ	上腕骨		1	遠位 被熱(青灰色)	
ニホンジカ	橈骨	左	1	近位骨端付近に咬痕あり, 遠位にカットマークあり	
ニホンジカ	橈骨	左	1		獣骨集中区
ニホンジカ	橈骨	左	2	2点ともに近位, 1点は被熱(青灰色)	獣骨集中区
ニホンジカ	橈骨	右	1	両端部背面を中心に長軸に対して交差する形で細かい切痕が数条あり。さらに遠位端部には、イノシシ類のものと推定される咬痕あり	獣骨集中区

16-5表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	尺骨	左	2	1点は被熱(青灰色)	獣骨集中区
ニホンジカ	尺骨	右	1	カットマークあり	
ニホンジカ	尺骨	右	1		獣骨集中区
ニホンジカ	尺側手根骨	右	1		獣骨集中区
ニホンジカ	中手骨	左	1		獣骨集中区
ニホンジカ	中手骨	右	1	遠位端欠損。	⑨
ニホンジカ	中手骨	右	1	近位残存	
ニホンジカ	中手骨	右	1	遠位端部分癒合	獣骨集中区
ニホンジカ	中手骨	右	1	近位骨端部分に病理痕(骨増殖)あり, 遠位に咬痕あり	獣骨集中区
ニホンジカ	中手骨		1	骨幹部分	
ニホンジカ	寛骨	左	1	寛骨臼付近	獣骨集中区
ニホンジカ	寛骨	右	1	寛骨臼付近	獣骨集中区
ニホンジカ	寛骨	右	1	腸骨～寛骨臼	
ニホンジカ	寛骨	右	1	腸骨体～寛骨臼上部まで残存, 咬痕、被熱あり(赤茶・黒)	
ニホンジカ	寛骨	右	1	腸骨体～坐骨棘	
ニホンジカ	大腿骨	左	1		
ニホンジカ	大腿骨	右	1	カットマークあり, 近位骨端付近に咬痕あり	
ニホンジカ	脛骨	左	1	前縁付近に咬痕あり	
ニホンジカ	脛骨	左	2		
ニホンジカ	脛骨	右	1	近位	
ニホンジカ	中足骨	左	1		獣骨集中区
ニホンジカ	中足骨		1	骨幹部分	
ニホンジカ	基節骨		1		獣骨集中区
ニホンジカ?	頭蓋骨		2	破片資料	
ニホンジカ?	胸椎		2	1点骨端未癒合	獣骨集中区
ニホンジカ?	肩甲骨		1		獣骨集中区
ニホンジカ?	上腕骨	左	1	骨幹部分破片資料, 被熱している。栄養孔の位置がニホンジカのものと同じ	獣骨集中区
ニホンジカ?	大腿骨	左	1	外側顆上粗面付近。破片資料	
ウマ	上腕骨	左	1		
未同定	蝶形骨体		1		
同定不可	頭蓋骨		1	耳小骨	
同定不可	頭蓋骨		9	破片資料	
同定不可	頭蓋骨		5	脳頭蓋部分破片資料	
同定不可	頭蓋骨		8	大型哺乳類(ニホンジカorイノシシ), 破片資料	
同定不可	上顎骨		1	破片資料, ニホンジカ?	
同定不可	下顎骨	右	1	下顎骨・下顎枝の一部, ニホンジカ?	
同定不可	下顎骨		8	破片資料	
同定不可	下顎骨		4	破片資料, ニホンジカorイノシシ?	
同定不可	歯		1	遊離歯, イノシシ犬歯か	

16-6表 出土哺乳類遺体一覧(SK207)

種	部位	左右	数量	備考	
同定不可	胸椎		2	突起部分	獣骨集中区
同定不可	椎骨		3	破片資料	
同定不可	肩甲骨		1	破片資料, ニホンジカorイノシシ (サイズから)	獣骨集中区
同定不可	肩甲骨		4	破片資料	獣骨集中区
同定不可	橈骨	左	1	近位~骨幹中位残存, 近位端外側欠, イヌ?	
同定不可	橈骨	右	1	骨幹部分, 割れ口はスパイラル状, ニホンジカorイノシシ	獣骨集中区
同定不可	寛骨	左	1	腸骨部分(腹側), ニホンジカorイノシシ	獣骨集中区
同定不可	寛骨	右	1	イノシシ?, 坐骨部分破片資料, ピビアナイトが見られる。	獣骨集中区
同定不可	寛骨	右	1	坐骨破片資料 ニホンジカ?	獣骨集中区
同定不可	寛骨	不明	1	坐骨付近	獣骨集中区
同定不可	寛骨	不明	1	恥骨付近	獣骨集中区
同定不可	大腿骨		1	近位骨幹, イノシシに近似	
同定不可	腓骨		1	骨幹破片資料, イヌ?	
同定不可	脛骨	左	1	骨幹部分破片資料×2(同一個体), イノシシ?	獣骨集中区
同定不可	脛骨	左	1	骨幹後側片, 大型哺乳類(イノシシ?)	
同定不可	指骨		1	遠位欠+近位端未癒合, ニホンジカorイノシシ	獣骨集中区
同定不可	四肢骨		1	骨幹破片資料, イヌ?	
同定不可	四肢骨		11	骨幹部分破片資料	
同定不可	四肢骨		1	骨幹部分破片資料, ニホンジカorイノシシ?	獣骨集中区
同定不可	四肢骨		7	骨幹部分破片資料	獣骨集中区
同定不可	四肢骨		4	破片資料	
同定不可	長骨		1	骨幹部分	
同定対象外	平骨		3	破片資料	獣骨集中区
同定対象外	肋骨		1	イヌ?	①
同定対象外	肋骨		5		獣骨集中区
同定対象外	肋骨		12		
同定対象外	肋骨		○	○×4 サンプル	獣骨集中区
同定対象外	—		5	破片資料。	
同定対象外	—		2	イヌの一部か, 破片資料	
同定対象外	—		28	破片資料	獣骨集中区
同定対象外	—		7	カットマークあり ネズミ科の嚙跡あり 破片資料	獣骨集中区
同定対象外	—		○	破片資料	獣骨集中区
同定対象外	—		○	破片資料	

17表 出土哺乳類遺体一覧(SK229)

種	部位	左右	数	備考	
イヌ	大腿骨	右	1		①
ネコ	上腕骨		1	骨幹	
イノシシ類	頭蓋骨	右	1	眼窩付近	⑤
イノシシ類	頭蓋骨		1	眼窩～前頭骨	①
イノシシ類	頭蓋骨		1	側頭骨鱗部	①
イノシシ類	後臼歯		2	遊離歯, 歯冠部分, 未萌出	①
イノシシ類	肩甲骨	左	1		⑤
イノシシ類	肩甲骨	右	1	近位, 関節部骨端癒合済	①
イノシシ類	胸椎		1	椎骨骨端未癒合	④
ニホンジカ	上顎骨	左	1	M <sup>1</sup>	②
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	2	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎角突起部分	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P×)	④
ニホンジカ	環椎		1		⑤
ニホンジカ	胸椎		1	咬痕あり	⑤
ニホンジカ	腰椎		1		④
ニホンジカ	腰椎?		1		③
ニホンジカ	肩甲骨	右	1		②
ニホンジカ	橈尺骨	左	1	尺骨: 肘頭付近に咬痕あり/橈骨: やや筋肉質か。表面の凹凸が激しめ	⑤
ニホンジカ	橈骨	左	1	遠位骨端欠損	②
ニホンジカ	尺骨	右	1	肘頭未癒合欠損	②
ニホンジカ	尺側手根骨	左	1		⑤
ニホンジカ	副手根骨	左	1		⑤
ニホンジカ	第2・3手根骨	左	1		⑤
ニホンジカ	中手骨	左	1	完存, やや筋肉質か	⑤
ニホンジカ	寛骨	右	1	寛骨臼付近	⑤
ニホンジカ	寛骨	?	1	腸骨部分破片	④
ニホンジカ	大腿骨	左	1	骨頭付近, 複数の咬痕あり	⑤
ニホンジカ	大腿骨	左	1		⑤
ニホンジカ	大腿骨	左	1	近位端部欠損	⑤
ニホンジカ	基節骨		1	完形, カットマークあり	②
同定不可	肩甲骨	左	1	イノシシ?	①
同定不可	四肢骨		1	骨幹破片資料, イノシシ?, 左大腿骨骨幹遠位背面破片資料?	①
同定不可	四肢骨		2	骨幹部分破片	④
同定不可	四肢骨		18	骨幹部分破片資料, ニホンジカorイノシシ	⑤
同定対象外	—		3	下顎骨or寛骨(腸骨部分)か	④
同定対象外	—		6		⑤
同定対象外	—		13	破片資料	①

18-1表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
イヌ?	頸椎		1	椎弓部分	①
イヌ科?	歯	不明	1	遊離歯, 第3前臼歯?	②
イノシシ類	頭蓋骨	左	1	後頭顆	①
イノシシ類	頭蓋骨		1	眼窩口	①
イノシシ類	頭蓋骨		1	破片資料。左側前頭骨部分。前頭骨正中線上で切断している。左側頭部分にも後頭鱗との接合線に平行した刀傷がある。なお、後頭鱗部分は未癒合。	②
イノシシ類	頭蓋骨		2	脳頭蓋部分破片資料	②
イノシシ類	上顎骨	左	1	(M <sup>×2</sup> )	③
イノシシ類	上顎骨	左	1	(P <sup>12</sup> )	①
イノシシ類	上顎骨	左	1	(P <sup>3</sup> )	①
イノシシ類	上顎骨	左	1	切歯歯槽付近, (I <sup>×</sup> )	①
イノシシ類	上顎骨	右	1	(M <sup>123</sup> ) 歯の咬耗激しめ。	
イノシシ類	上顎骨	右	1	(M <sup>2</sup> )	
イノシシ類	上顎骨	右	1	(M <sup>2</sup> ×)	③
イノシシ類	上顎骨	右	1	(M <sup>3</sup> )	③
イノシシ類	上顎骨	右	1	(P×M <sup>123</sup> )、歯の咬耗激しめ	①
イノシシ類	上顎骨	右	1	(P <sup>4</sup> M <sup>1</sup> )	①
イノシシ類	上顎骨	右	1	(P <sup>4</sup> M <sup>12</sup> )、P <sup>4</sup> は萌出途中、歯の咬耗はほとんどなし	①
イノシシ類	上顎第1切歯	左	1	遊離歯	①
イノシシ類	上顎第1切歯	左	1	遊離歯	③
イノシシ類	上顎第1切歯	右	2	遊離歯	②
イノシシ類	上顎第2切歯	左	1	遊離歯, 歯根が形成途中。	⑤
イノシシ類	上顎犬歯	左	1	遊離歯, メス	①
イノシシ類	上顎犬歯	左	1	遊離歯, メス	③
イノシシ類	上顎犬歯	右	1	破片資料, オス	①
イノシシ類	上顎犬歯	右	1	遊離歯, オス	①
イノシシ類	上顎犬歯	右	1	遊離歯, メス	①
イノシシ類	上顎第2前臼歯	左	1	遊離歯, 歯冠後端	⑤
イノシシ類	上顎第3前臼歯?	右	1	遊離歯, 後側欠損	①
イノシシ類	上顎第4前臼歯	左	1	遊離歯, 前半部分のみ残存。	⑤
イノシシ類	上顎第1後臼歯	不明	1	遊離歯、歯の咬耗激しめ	①
イノシシ類	上顎第2後臼歯	—	1	遊離歯	①
イノシシ類	上顎第2乳臼歯	左	1	後端部分。	⑤
イノシシ類	下顎骨	左右	1	連合部分 L (I <sub>1</sub> ) R (I <sub>123</sub> )	①
イノシシ類	下顎骨	左右	1	連合部分	①
イノシシ類	下顎骨	左右	1	下顎体切歯部 (連合部)	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	(dp <sup>×34</sup> ) 下顎体部分	③
イノシシ類	下顎骨	左	1	(M <sub>1</sub> )	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	(P <sub>3</sub> )	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	M <sub>1</sub>	②
イノシシ類	下顎骨	左	1	M <sub>3</sub>	
イノシシ類	下顎骨	左	1	下顎枝部分, (M <sub>3</sub> 歯槽直後)	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	下顎体部分, (C)	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	下顎体部分, (I <sup>×2</sup> ×)	①
イノシシ類	下顎骨	右	1	(M <sub>23</sub> )	②
イノシシ類	下顎骨	右	2	(P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> )	
イノシシ類	下顎骨	右	1	下顎体の一部のみ (M <sub>2</sub> ) ※M <sub>3</sub> 歯槽形成前。	⑤
イノシシ類	下顎骨	右	1	下顎体部分, P <sub>3</sub> ・ <sub>4</sub> 歯槽部分舌側	①
イノシシ類	下顎骨	右	1	関節突起 (骨端未癒合)	①
イノシシ類	下顎骨	右	2	(M <sub>3</sub> )	①
イノシシ類	下顎骨	右?	1	下顎体破片資料	③

18-2表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
イノシシ類	下顎骨	不明	1	下顎体	①
イノシシ類	下顎骨	不明	1	下顎体(下顎角)	③
イノシシ類	下顎第1切歯	左	2	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第1切歯	右	1	遊離歯	
イノシシ類	下顎第1切歯	右	2	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第2切歯	左	3	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第2切歯	右	1	遊離歯	③
イノシシ類	下顎第2切歯	右	2	遊離歯	①
イノシシ類	下顎切歯		1	歯根部分破片資料	①
イノシシ類	下顎第2前臼歯	左	1	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第3前臼歯	左	1	遊離歯。後半のみ残存。	⑤
イノシシ類	下顎前臼歯	右	1	破片資料	①
イノシシ類	下顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	③
イノシシ類	下顎第1後臼歯?	右	1	遊離歯, 歯根部分のみ残存	③
イノシシ類	下顎第2後臼歯	右	1	遊離歯, 歯根が長い	③
イノシシ類	下顎第2後臼歯	右	1	遊離歯, 歯根未形成・未萌出	①
イノシシ類	下顎第3後臼歯	左	1	歯根が異常に長い。	②
イノシシ類	下顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第3後臼歯	右	1	遊離歯, 歯根未形成・未萌出	①
イノシシ類	臼歯	不明	1	破片資料	⑤
イノシシ類	肩甲骨	左	1	遠位残存	
イノシシ類	肩甲骨	右	1		②
イノシシ類	上腕骨	左	1	形質的にブタに近いか? 骨端の幅が大きく、全長が短めで寸詰まりのような感を持つ	③
イノシシ類	寛骨	左	1	寛骨臼付近	
イノシシ類	寛骨	右	1	寛骨臼付近	④
イノシシ類	脛骨	左	1		②
イノシシ類	脛骨	左	1		②
イノシシ類	脛骨	右	1	近位骨端	①
イノシシ類	距骨	左	1	ほぼ完形	③
イノシシ類	膝蓋骨	右	1		①
イノシシ類			2	破片資料	③
イノシシ類?	頭蓋骨	—	1	蝶形骨体	①
イノシシ類?	下顎骨	左	1	下顎角部分	①
イノシシ類?	下顎骨	右	1	下顎体部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋骨。遺存状態が悪い。前面の方が低い形で前後に段差のある切断面がある。鋸によるものか?	②
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋骨の一部。遺存状態が悪い。角坐骨の部分に角坐より上の角部分をへし折った痕跡が見られる。	②
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨と前頭骨部分。外側に間隔3~4mm程の3段に分かれる刀傷、その上部に前方からの刀傷1条がみられる。その背面には角坐骨より上をへし折った痕が残る。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその周辺の脳頭蓋部分 角坐骨の根本の前方と外側に横位の刀傷が2~3条ある。さらに角坐より下部でへし折られた痕跡も残る。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近の頭蓋骨部分。背面は欠損。角は角坐の上面で前方から鈍のようなもので切られ、中心よりやや後方でへし折られている。角坐骨部分において前方・外側に無数の横位の刀傷がみられる。	②
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその周辺の脳頭蓋の一部。角坐骨に刀傷が認められる。角坐より下で角部分を切り取っている。しかし外側が縦に欠損しているため詳細は不明。	④



18-3表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨と付近脳頭蓋部分。角坐骨の根本付近に前方からの角切断の際の粗い切断痕あり。鉋による？	
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐骨に鋸で後方外側から前方内側に向けて角を切断した際の痕跡を残す。角坐骨の右側の脳頭蓋部分に鋸による切痕が縦に一条、また、同左側にも一条見られる。	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。3～4mm程の4段に分かれるように前方と外側からの切込みを有する。鋸によるものか？	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	3	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐より下で切断。切断面は前方から鋸でおこなっている。	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその周辺の脳頭蓋の一部。角坐骨の前方平坦な切断面、後方にへし折られた跡がみられる。角の切り取りは角坐より下。	④
ニホンジカ	頭蓋骨	左	3	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐直下にあたる部分に切断面を有する。切断面は、1点鋸によるものと推定、2点は四方からの切込みを有する。	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨部分残存、骨質・角の太さより若獣か	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	後頭顆部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	2	後頭顆部分	③
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐骨に複数方向からの切込みが何条も見られる。鉋によるもの？さらにその刀傷に囲まれるように角坐より上がへし折られたような形跡を残す。	②
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐骨に複数方向からの切込みが何条も見られる。鉋によるもの？さらにその刀傷に囲まれるように角坐より上がへし折られたような形跡を残す。	②
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨から角坐・第1分岐部分の角。角坐骨部分側面は削られ、断面が正方形を呈する。下部には横位の刀傷が主に前方と外側に数条みられる。角部分は残存状況が悪く、加工があったかどうかは不明。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐より下で角が切断。内外側両方からの切込みが認められ、それに挟まれるようにへし折った痕が残る。角坐骨の根本の脳頭蓋部分に矢状方向に2本深い刀傷がみられる。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	右	2	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐より下で角が折られている。折られている部分から1cm程下に四方（主に前方と内側）からの無数の切込みが見られる。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐骨に複数方向からの切込みが何条も見られる。鉋によるもの？	②
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐骨に複数方向からの切込みが何条も見られる。鉋によるもの？さらにその刀傷に囲まれるように角坐より上がへし折られたような形跡を残す。	②
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨と付近脳頭蓋部分。角坐より下で角を切断。角坐骨に海绵質部分を囲むように全方向からの切断痕あり。鉋による？	
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近脳頭蓋部分。角坐骨に鉋のようなもので粗くおられた痕が見られる。	①
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨部分残存。角坐骨より下で角を切断。前方から後方へに角切断の際の切断面あり。鋸によるものと推定される。	

18-4表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	頭蓋骨	右	2	角坐角と付近脳頭蓋部分。角坐より下で角を切断。1点は外側から内側へ鋸による切断。1点はへし折られたような痕が残る。	
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨部分(根本部分) ※残存状況が悪いため、詳細は不明。	③
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	間接結接部分破片資料	①
ニホンジカ	頭蓋骨	不明	1	後頭顆	⑤
ニホンジカ	頭蓋骨	不明	1	耳小骨	⑤
ニホンジカ	頭蓋骨	不明	1	頭頂部	③
ニホンジカ	頭蓋骨	不明	3	頭頂部	⑤
ニホンジカ	頭蓋骨	—	1	後頭顆部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	頂陵部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	頭頂部部分	②
ニホンジカ	鹿角	不明	1	枝角 破片	②
ニホンジカ	鹿角	不明	1	長軸4cm程。先端部分が四方より何条も切込みが入れられ切断されている。下部は欠損。	③
ニホンジカ	鹿角	右	2		②
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P <sup>234</sup> )	④
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(M <sup>12</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(dp <sup>34</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(M× <sup>2</sup> )	③
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	左	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	左	1	遊離歯, 同一個体か(→a)	⑤
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	右	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	左	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	左	1	遊離歯, 同一個体か(→a)	⑤
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	1	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	1	遊離歯, 同一個体か(→a)	⑤
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	2	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	右	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	右	3	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	3	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	5	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	2	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	3	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	2	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	③
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎後臼歯	左	1	遊離歯, 破片資料(前方)	①
ニホンジカ	上顎第4乳臼歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第4乳臼歯	右	1	遊離歯	①

18-5表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	下顎骨	左	2	先端部分(連合部)	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(dp× <sub>4</sub> M×)	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	切歯歯槽部分	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P× <sub>3</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>23</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	顎体部分, (P <sub>23</sub> )	①
ニホンジカ	下顎骨	左	2	(P <sub>234</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>234</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>34</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(dp <sub>34</sub> ) 齢査定O	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>23</sub> ×M×)	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P×M <sub>12</sub> ×) 齢査定E	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>234</sub> M <sub>12</sub> ) 齢査定J	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>234</sub> M <sub>12</sub> ) 齢査定M	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> ) 齢査定K	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P <sub>2</sub> dp <sub>34</sub> M <sub>12</sub> ) P <sub>2</sub> は萌出途中	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(dp <sub>34</sub> M <sub>1</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	顎体部分, (P <sub>34</sub> M <sub>12</sub> ×)	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M× <sub>2</sub> ×)	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M× <sub>3</sub> )	
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>123</sub> ) 齢査定I	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>23</sub> ) 齢査定G	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>23</sub> ) 齢査定H	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M× <sub>3</sub> ) 齢査定N	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>3</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>3</sub> ) 齢査定F	②
ニホンジカ	下顎骨	左	1	P <sub>2</sub> ~ <sub>4</sub> 顎体部分	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	頰側, M <sub>3</sub> 歯槽付近	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎枝(M <sub>3</sub> 歯槽直後部分)	①
ニホンジカ	下顎骨	左	3	下顎体	①
ニホンジカ	下顎骨	左	2	下顎体	④
ニホンジカ	下顎骨	左	2	筋突起部分	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	先端部分(連合部)	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P× <sub>3</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(dp× <sub>34</sub> M <sub>12</sub> ) 若獣個体 齢査定C	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>2</sub> ×)	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>23</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>23</sub> ×), P <sub>2</sub> は未萌出	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> M <sub>1</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>4</sub> M <sub>1</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> ) M <sub>3</sub> 第1咬頭まで 齢査定B	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>4</sub> M <sub>123</sub> ) 植物付着痕あり 齢査定D	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M <sub>12</sub> )	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M <sub>12</sub> ×)	
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M× <sub>23</sub> ) 齢査定L	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎角	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体(先端)部分, (I××××)	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	顎底部分	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	筋突起部分	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	後臼歯列部分, 顎体頰側	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	槽間縁部分	①
ニホンジカ	下顎骨	右	2	下顎体	④
ニホンジカ	下顎骨	右	4	下顎体	①

18-6表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	下顎骨	右	2	下顎角部分	①
ニホンジカ	下顎骨	右	2	下顎枝 (M <sub>3</sub> 歯槽直後部分)	①
ニホンジカ	下顎骨	右	4	関節突起部分	③
ニホンジカ	下顎骨		14	破片資料 (同一個体?)	④
ニホンジカ	下顎骨		2	破片資料	①
ニホンジカ	下顎骨		15	破片資料	②
ニホンジカ	下顎骨		20	破片資料	③
ニホンジカ	下顎第1切歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2切歯	右	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第2前臼歯	左	1	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第2前臼歯	左	1	遊離歯, 後側及び内側	①
ニホンジカ	下顎第2前臼歯	右	1	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第2前臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3前臼歯	右	2	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3前臼歯	右	2	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第3前臼歯?	左	2	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	左	2	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	左	1	遊離歯, 歯冠部分が顕著に摩滅	②
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	2	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	4	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	左	2	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	左	5	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	右	2	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	右	5	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	1	遊離歯	②
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	2	遊離歯	④
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	2	遊離歯 歯冠部分などの状態から1点萌出途中のもの。	③
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	5	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	3	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	3	遊離歯	⑤
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	3	遊離歯 うち2点は歯冠部分の状態から萌出途中のもの	③
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	5	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	④
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	2	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	3	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	8	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	4	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	②
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	④
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	4	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3乳臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第4乳臼歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第4乳臼歯	左	1	遊離歯	④
ニホンジカ	下顎第4乳臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第4乳臼歯	右	3	遊離歯	①
ニホンジカ	後臼歯		1	歯冠部分破片資料	①
ニホンジカ	乳臼歯	不明	1	遊離歯。	⑤
ニホンジカ	環椎		1		③
ニホンジカ	軸椎		1		③
ニホンジカ	頸椎		2	第3頸椎、第4頸椎 (各1ずつ)	④
ニホンジカ	頸椎		2		③
ニホンジカ	頸椎		1	椎頭部分	①
ニホンジカ	頸椎		2		②
ニホンジカ	頸椎		3	1点カットマークあり, 1点骨端線未癒合 (癒合途中か)	①

18-7表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
ニホンジカ	胸椎		1	椎体部分, 後端椎頭未癒合	①
ニホンジカ	胸椎		1		
ニホンジカ	腰椎	—	1	突起部分	①
ニホンジカ	腰椎	—	2		③
ニホンジカ	腰椎		1		①
ニホンジカ	椎体	—	3	破片資料	③
ニホンジカ	上腕骨	不明	1	大結節部分?	③
ニホンジカ	上腕骨	右	1	遠位残存	②
ニホンジカ	橈骨	左	1	近位	③
ニホンジカ	中手骨	左	1		
ニホンジカ	寛骨	左	1	寛骨臼付近	④
ニホンジカ	寛骨	左	1	寛骨臼月状面~坐骨体	
ニホンジカ	寛骨	左	1	腸骨部分	①
ニホンジカ	寛骨	左	2	腸骨~寛骨臼部分残存	③
ニホンジカ	寛骨	右	1	寛骨臼付近	②
ニホンジカ	寛骨	不明	1	寛骨臼月状面~恥骨	①
ニホンジカ	脛骨	左	1	近位残存	②
ニホンジカ	脛骨	右	1	近位残存	②
ニホンジカ	中足骨	左	1	両端部欠損。	③
ニホンジカ	中足骨	不明	1	骨幹	④
ニホンジカ	基節骨	不明	1	完存	③
ニホンジカ?	頭蓋骨		1	角坐付近?, 破片資料	①
ニホンジカ?	上顎骨		1	後臼歯歯槽部分	①
ニホンジカ?	下顎骨	左	1	下顎体部分 (M <sub>3</sub> 歯槽舌側)	①
ニホンジカ?	下顎骨	左	1	下顎枝部分	①
ニホンジカ?	寛骨	左	1	寛骨臼部分	①
ニホンジカ?	中足骨	—	1	近位	①
ニホンジカorイノシシ類	上腕骨		1	遠位	①
未同定	頭蓋骨		1	ニホンジカorイノシシ, 頭蓋骨の一部	③
同定不可	頭蓋骨	左	1	後頭顆部分, 不明哺乳類	③
同定不可	頭蓋骨	右	1	大型哺乳類 (イノシシ?), 後頭顆部分	①
同定不可	頭蓋骨	右	1	後頭顆部分, ニホンジカorイノシシ	①
同定不可	頭蓋骨	不明	1	耳小骨, 不明哺乳類	③
同定不可	頭蓋骨	不明	1	耳小骨付近	②
同定不可	頭蓋骨		5	耳小骨	①
同定不可	頭蓋骨		1	後頭顆, ニホンジカ?	①
同定不可	頭蓋骨		1	後頭骨底部, ニホンジカorイノシシ	①
同定不可	頭蓋骨		1	耳小骨, ニホンジカorイノシシ	①
同定不可	頭蓋骨		1	耳小骨, 哺乳類	①
同定不可	頭蓋骨		1	側頭骨頬骨突起, ニホンジカ?	①
同定不可	頭蓋骨		1	頂陵部分, イノシシ?	①
同定不可	頭蓋骨		47	破片資料	①
同定不可	下顎骨	左	1	下顎枝破片資料 (M <sub>3</sub> 直後あたり), ニホンジカ?	①
同定不可	下顎骨	右	1	関節突起	①
同定不可	下顎骨	不明	3	下顎体, 不明哺乳類	③
同定不可	下顎骨	不明	13	下顎体部分破片資料, 大型哺乳類 (ニホンジカorイノシシ)	①
同定不可	下顎骨		9	下顎体	①
同定不可	下顎骨		1	下顎体部分のみ残存	
同定不可	下顎骨		1	不明哺乳類	①
同定不可	下顎骨		3	下顎枝部分破片資料, 大型哺乳類 (イノシシorニホンジカ)	①
同定不可	下顎骨		○	顎体部分破片資料, ニホンジカorイノシシ	①
同定不可	顎骨		1	顎体部分, 大型哺乳類	①
同定不可	顎骨		1	歯槽部分破片資料, 大型哺乳類	①
同定不可	歯		1	遊離歯, 歯根部分, 前臼歯?	③
同定不可	歯		1	歯根部分破片資料	①

18-8表 出土哺乳類遺体一覧(SX267)

種	部位	左右	数量	備考	
同定不可	頸椎		1	破片資料	②
同定不可	胸椎	—	1	イノシシ?, 椎体部分, 両椎頭部分未癒合?	①
同定不可	腰椎		1	椎頭部分破片資料	①
同定不可	椎骨		2	椎骨弓破片資料	①
同定不可	椎骨		1		①
同定不可	肩甲骨	左	1	関節部分, 大型哺乳類 (イノシシorニホンジカ)	①
同定不可	肩甲骨		1	後縁部破片資料, ニホンジカorイノシシ?	①
同定不可	肩甲骨		1	骨幹	
同定不可	上腕骨	不明	1	近位	①
同定不可	上腕骨	不明	1	骨幹	②
同定不可	大腿骨	不明	1	骨幹	④
同定不可	寛骨		1	腸骨付近, 不明哺乳類	①
同定不可	寛骨		1	腸骨付近か	④
同定不可	寛骨		1	寛骨臼月状面部分, ニホンジカ?	
同定不可	寛骨		1	腸骨体部分, カットマークあり	①
同定不可	寛骨		1	哺乳類	①
同定不可	大腿骨?	不明	1	大結節部分か	②
同定不可	脛骨	不明	2	近位, 不明哺乳類	③
同定不可	脛骨		1	骨幹	
同定不可	脛骨		1	骨幹	
同定不可	脛骨		1	骨幹部分, 大型哺乳類 (ニホンジカorイノシシ)	①
同定不可	四肢骨		1	大型哺乳類, 骨幹破片資料, 大腿骨?	①
同定不可	四肢骨		7	破片資料, 不明大型哺乳類	①
同定対象外	基節骨		1	底面部分, 破片資料, ニホンジカorイノシシ	①
同定対象外	長骨		○	骨幹破片資料, ニホンジカorイノシシ?	①
同定対象外	肋骨		1	切痕あり	③
同定対象外	肋骨		1		④
同定対象外	肋骨		2		①
同定対象外	肋骨		5	破片資料, ニホンジカorイノシシ	①
同定対象外	肋骨		1		
同定対象外	肋骨		3	骨幹破片資料, ニホンジカorイノシシ	①
同定対象外	部位不明		1	手/足根骨?	①
同定対象外	—		20	破片資料	①
同定対象外	—		○	破片資料	①
同定対象外	—		○	破片資料	②
同定対象外	—		2	破片資料	③
同定対象外	—		○	破片資料	③
同定対象外	—		○	破片資料	④
同定対象外	—		○	破片資料	⑤
同定対象外	—		51	破片資料	

19-1表 出土哺乳類遺体一覧(SK583)

種	部位	左右	数	備考	
イヌ	頭蓋骨	左	1	前頭骨頬骨突起	
イヌ	頭蓋骨	右	1	後頭骨頭頂部～頭頂骨にかけて残存	
イヌ	頭蓋骨	右	1	頭蓋腔底部（側頭骨頬骨突起付近）	
イヌ	上顎骨	左	1	(I×××) (P××M <sup>1</sup> ××)	
イヌ	上顎骨	右	1	(I×××CP××× <sup>4</sup> M <sup>1</sup> ××)	
イヌ	上顎第2切歯	左	1	遊離歯	
イヌ	下顎骨	左	1	(I××××CP××××M <sub>12</sub> ×) 全長(Id-Goc):127.0mm	
イヌ	下顎骨	右	1	(I×××××P× <sub>23</sub> ●M <sub>12</sub> ×), P4部分歯槽閉鎖。M <sub>1</sub> 後葉部分欠損	
イヌ	下顎第2前臼歯	右	1	後半のみ	④
イヌ	環椎		1	完存。	①
イヌ	軸椎		1	完存。	①
イヌ	頸椎		4		①
イヌ	胸椎		4		①
イヌ	腰椎		8	咬痕を持つものあり。	①
イヌ	仙骨		1	完存。	①
イヌ	肩甲骨	左	1	関節部分とその周辺のみ残存。	①
イヌ	肩甲骨	右	1	関節部分のみ残存。	①
イヌ	上腕骨	左	1	完存。全長：144.6mm	①
イヌ	上腕骨	右	1	近位上腕骨頸部分が欠損。骨頭部分はある。	①
イヌ	橈骨	左	1	完存。全長：144.9mm	①
イヌ	橈骨	右	1	遠位部分が欠損。	①
イヌ	尺骨	左	1	遠位端部欠損。	①
イヌ	尺骨	右	1	骨幹部分のみ。	④
イヌ	第2中手骨	左	1		①
イヌ	第2中手骨	右	1		①
イヌ	第3中手骨	左	1		①
イヌ	第4中手骨	左	1		①
イヌ	第4中手骨	右	1		①
イヌ	第5中手骨	左	1		①
イヌ	第5中手骨	右	1		①
イヌ	寛骨	左	1	腸骨近位と恥骨、坐骨遠位が欠損。	①
イヌ	寛骨	右	1	腸骨から寛骨臼周辺が残存。	①
イヌ	大腿骨	左	1	遠位端欠損。	①
イヌ	大腿骨	右	1	遠位端欠損。	①
イヌ	脛骨	左	1	遠位端欠損。	①
イヌ	脛骨	右	1	完存。全長：158.0mm	①
イヌ	踵骨	右	1	完存。	①
イヌ	第2中足骨	左	1		①
イヌ	第2中足骨	右	1		①
イヌ	第3中足骨	左	1		①
イヌ	第3中足骨	右	1		①
イヌ	第4中足骨	左	1		①
イヌ	第5中足骨	右	1		①
イヌ	中手/中足骨		1	遠位部分, 第2or第5	①
イノシシ類	頭蓋骨	左	1	眼窩付近	④
イノシシ類	頭蓋骨		1	脳頭蓋部分破片資料	①
イノシシ類	頭蓋骨		1	破片資料	④
イノシシ類	上顎骨	右	1	(×P <sup>12</sup> )	④
イノシシ類	上顎骨	右	1	切歯歯槽部分	④
イノシシ類	上顎骨	右	1	(P× <sup>4</sup> M <sup>12</sup> ×) M <sup>1</sup> 咬耗激しめ	④
イノシシ類	上顎第1後臼歯?	左?	1	遊離歯, 前葉部分欠損	
イノシシ類	上顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	

19-2表 出土哺乳類遺体一覧(SK583)

種	部位	左右	数	備考	
イノシシ類	上顎第3後臼歯	左	3	遊離歯, 1点萌出前	③
イノシシ類	上顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	
イノシシ類	上顎第3後臼歯	右	3	遊離歯, 1点萌出前	③
イノシシ類	下顎骨	左右	1	(C) 下顎連合部	④
イノシシ類	下顎骨	左右	1	右 (I×××C) 左 (I× <sub>2</sub> ×CP× <sub>2</sub> ) 下顎連合部	④
イノシシ類	下顎骨	左	1	(×P××× <sub>34</sub> M <sub>123</sub> ) プタ?	②
イノシシ類	下顎骨	左	1	(P× <sub>34</sub> )	①
イノシシ類	下顎骨	左	1	後臼歯歯槽部分顎体	③
イノシシ類	下顎骨	左	1	(M× <sub>2</sub> ×)	④
イノシシ類	下顎骨	左	1	(M <sub>23</sub> ) M <sub>3</sub> 萌出途中	①
イノシシ類	下顎骨	左	2	(M <sub>2</sub> ×)	③
イノシシ類	下顎骨	右	1	(CP× <sub>34</sub> M <sub>1</sub> ×) 歯の咬耗激しめ	④
イノシシ類	下顎骨	右	1	(I×××C△P <sub>1234</sub> M <sub>123</sub> ) M <sub>3</sub> 第3咬頭放出途中 C歯冠部分欠損	④
イノシシ類	下顎骨		○	破片資料。歯槽部分と下顎角部分あり ※同一個体のものか?	④
イノシシ類	下顎第1切歯	左	1	遊離歯, 歯冠部分欠損	①
イノシシ類	下顎第1切歯	左	2	遊離歯	④
イノシシ類	下顎第1切歯	右	1	遊離歯	④
イノシシ類	下顎第2切歯	左	1	遊離歯	④
イノシシ類	下顎第2切歯	右	1	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第2切歯	右	2	遊離歯	④
イノシシ類	下顎第3切歯	右	1	遊離歯	④
イノシシ類	下顎犬歯	左	1	遊離歯	①
イノシシ類	下顎第3後臼歯	左	1		③
イノシシ類	頸椎		1	骨端未癒合	③
イノシシ類	上腕骨	左	1	骨幹中位から遠位端部にかけて残存。	③
イノシシ類	尺骨	左	1		④
イノシシ類	脛骨	右	1	遠位端。割れ口がスパイラル	①
イノシシ類	踵骨	右	1	骨端未癒合。咬痕あり	①
イノシシ類	基節骨		1	近位骨端未癒合	①
イノシシ類	末節骨	右	2		①
イノシシ類?	頭蓋骨		1	頬骨	
イノシシ類?	下顎骨		1	下顎体部分破片資料	①
イノシシ類?	頸椎?		1		①
イノシシ類?	胸椎		2	1点カットマークあり	①
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその周辺の脳頭蓋部分。角坐の一部が残り、その角坐直下にいろいろな方向からの横位の切込みが見られる。脳頭蓋付近にも刀傷が見られる。また、脳頭蓋に当時の割られた痕が残る。	④
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨と左前頭骨部分。角坐より下位で切断。その部分には前面から刃物で何度も叩きつけるように切り込み、最後にへし折ったような切断面を有する。	④
ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	脳頭蓋+角坐骨部分, 切断痕あり	②
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨と右前頭骨部分。角坐骨の径がやや細い。若獣か。角坐より下位で切断。その部分には前面から刃物で何度も叩きつけるように切り込み、最後にへし折ったような切断面を有する。	④
ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨及び付近脳頭蓋部分。角坐部分に切断痕あり。	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	後頭骨外側部~右後頭顆にかけて残存, 後頭顆部分にカットマークあり	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	上顎歯槽部分	②
ニホンジカ	頭蓋骨		1	底蝶形骨	③
ニホンジカ	頭蓋骨		1	頭蓋底の蝶形骨付近破片	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	左切歯骨体部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨		2	左前頭骨部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	右関節結節部分	①
ニホンジカ	頭蓋骨		1	右頬骨部分	①



19-3表 出土哺乳類遺体一覧(SK583)

種	部位	左右	数	備考	
ニホンジカ	頭蓋骨		2	右切歯骨体部分, 2点とも犬歯歯槽含む	①
ニホンジカ	頭蓋骨		4	破片資料	④
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P <sup>234</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P × <sup>34</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P × <sup>34</sup> M <sup>1</sup> ×)	④
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P × M <sup>1</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	左	1	(P <sup>34</sup> M <sup>123</sup> ) 歯の咬耗激しめ	④
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(P <sup>234</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(P <sup>34</sup> )	①
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(P <sub>34</sub> M <sub>1</sub> ×)	②
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(P <sup>34</sup> M <sup>123</sup> )	④
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(P × M <sup>12</sup> ×), M <sup>3</sup> 萌出前か	①
ニホンジカ	上顎骨	右	1	(M <sup>12</sup> ), 歯はほとんど磨耗なし	①
ニホンジカ	上顎骨	右	1	遠位	④
ニホンジカ	上顎骨	不明	1	近位骨端	④
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	左	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	左	1	遊離歯	④
ニホンジカ	上顎第2前臼歯	右	2	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第3前臼歯	左	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	1	遊離歯	
ニホンジカ	上顎第4前臼歯	右	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	2	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	2	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	3	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	2	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	2	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	3	遊離歯	①
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	④
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	②
ニホンジカ	上顎第3後臼歯	右	2	遊離歯	④
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(P × M × <sub>2</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M × <sub>3</sub> )	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	(M <sub>3</sub> )	④
ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎枝部分。咬痕あり	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	関節突起部分破片	①
ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎枝	④
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(I × × × × P <sub>234</sub> M <sub>12</sub> ×)	②
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P × <sub>3</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> ) 齢査定Q	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>234</sub> M <sub>123</sub> ) 齢査定R	④
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>34</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P <sub>4</sub> )	③
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M × <sub>3</sub> ) 齢査定S	④
ニホンジカ	下顎骨	右	1	(M <sub>3</sub> ) M <sub>3</sub> 後葉(三葉)部分が萌出途中	①
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体	④
ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体(歯槽あり)	③
ニホンジカ	下顎骨	不明	1	(P × ×)	
ニホンジカ	下顎骨	不明	1	下顎体(歯槽あり)	③

19-4表 出土哺乳類遺体一覧(SK583)

種	部位	左右	数	備考	
ニホンジカ	下顎第2前臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第3前臼歯	左	1	遊離歯	
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	左	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第1後臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	3	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	2	遊離歯	②
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	1	遊離歯	①
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	3	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	1	遊離歯	③
ニホンジカ	下顎臼歯	不明	1	破片資料	②
ニホンジカ	下顎第4乳臼歯	右	1	遊離歯	①
ニホンジカ	軸椎		1	骨端未癒合	④
ニホンジカ	軸椎		1		
ニホンジカ	頸椎		2		④
ニホンジカ	頸椎		1	椎体骨端癒合途中	①
ニホンジカ	頸椎		3		③
ニホンジカ	胸椎		3		④
ニホンジカ	大腿骨	左	1	近位遠位骨端未癒合	④
ニホンジカ	脛骨	左	1	近位骨端	④
ニホンジカ	脛骨	右	1	遠位のみ残存。	③
ニホンジカ	脛骨		1	骨幹部分。カットマークあり	④
同定不可	頭蓋骨		1	眼窩付近	
同定不可	頭蓋骨		4	脳頭蓋部分破片。イノシシか？	①
同定不可	頭蓋骨		1	破片資料	①
同定不可	頭蓋骨	不明	1	耳小骨	①
同定不可	歯		1	歯根部分破片資料。ニホンジカorイノシシ	①
同定不可	頸椎		1	ニホンジカ？椎頭部分（未癒合）	①
同定不可	肩甲骨		1	破片資料。関節部分	④
同定不可	尺骨	不明	1	近位 被熱により白色に。	③
同定不可	大腿骨	左	1	ニホンジカ？骨頭部分（未癒合）	①
同定不可	脛骨		1	骨幹破片資料。ニホンジカorイノシシ	④
同定不可	四肢骨		1	骨幹破片資料	④
同定不可	四肢骨		13	骨幹破片資料。スパイラル状のものも含む	①
同定不可	四肢骨		13	骨幹破片資料。スパイラル状のものも含む	③
同定対象外	肋骨		2		④
同定対象外	肋骨		4		②
同定対象外	肋骨		15		①
同定対象外	—		3	破片資料	③
同定対象外	—		8	破片資料	
同定対象外	—		27	破片資料 1点カットマークあり	①
同定対象外	—		○	破片資料	②

20表 出土哺乳類遺体一覧(そのほかの遺構内)

遺構名		種	部位	左右	数	備考
SK001		ネズミ科	上顎切歯		2	歯冠部分破片。
SK001		ネズミ科	下顎切歯		2	歯冠部分破片。
SK201		イノシシ類	頭蓋骨		1	成獣。右眼窩付近。
SK201		イノシシ類?	頭蓋骨		1	幼獣。前頭骨部分。
SK201		ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	1	歯根が形成途上。
SK201		ニホンジカ	下顎骨	右	1	幼獣。下顎体部分 (dp234M×)
SK201		ニホンジカ?	橈骨	右	1	骨幹部分。割れ口がスパイラル状。
SK201		ニホンジカ?	橈骨	右	1	骨幹部分破片。スパイラル状。
SK201		同定不可	頭蓋骨		6	破片資料。幼獣?
SK201		同定不可	脛骨	右	1	骨幹背面部分破片。スパイラル状。シカか?
SK201		同定不可	四肢骨		6	四肢骨骨幹破片資料。大腿骨含む?シカorイノシシ?
SK201		同定対象外	—		11	破片資料。
SK202		同定不可	脛骨	左	1	骨幹部分。大型。
SX206		イノシシ類	上顎第1切歯	左	1	歯冠部分のみ。
SK258	①	イヌ	大腿骨	右	1	近位~中位残存。近位に切痕が数条見られる。
SK258	①	イノシシ類	下顎骨	右	1	下顎角付近。
SK258	①	イノシシ類	上腕骨	右	2	共に近位端欠損。さらに1点遠位端も欠損。
SK258	①	ニホンジカ	頭蓋骨	左	2	角坐骨と付近脳頭蓋部分。角座骨に複数方向からの切断痕あり。
SK258		ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	
SK258	①	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P×M×2×)
SK258	⑧	ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	1	
SK258		ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	1	歯根部分未形成。萌出途中のものか?
SK258	①	ニホンジカ	上腕骨	右	2	骨幹部分破片。スパイラル状。
SK258	⑧	ニホンジカ	中足骨	右	1	近位から骨幹中位まで残存。
SK258		同定不可	下顎骨	左	1	下顎底部分。シカ?
SK258	①	同定対象外	—		11	破片資料。
SD357		イノシシ類	頭蓋骨		1	右後頭骨外側部付近
SX386		ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその付近の頭蓋骨部分。角坐より下で切断。緻密質部分が鈍のようなもので全ての方向から刃が入られ、海綿部分でへし折られている。角坐骨の根本付近の前頭骨部分にも横位の刀傷が何条かみられる。
SK387・388		ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (前臼歯歯槽付近)
SK387・388		ニホンジカ	寛骨	右	1	寛骨臼~坐骨
SK387・388		同定不可	腰椎		1	横突起部分。シカorイノシシ?
SK387・388		同定不可	大腿骨		1	骨幹部分破片。スパイラル状。
SK387・388		同定対象外	—		2	破片資料。
SK477		ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨と前頭骨部分。角坐骨の根本に近い部分で角を切断。角坐骨の前方に無数の横位の刀傷が密集してついている。
SK477		ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨と前頭骨部分。角坐より下で角を切断。角坐骨の前方及ぶ外側・内側に無数の横位の刀傷が密集してついている。最終的に角はへし折られている。
SK477		ニホンジカ	下顎骨	右	1	(P×M×M123) 前端部が切断 (切歯歯槽部分)
SK477		同定対象外	—		1	破片資料。

21-1表 出土哺乳類遺体一覧(遺構外)

遺構名	種	部位	左右	数量	備考
D層・C2版築	ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐より下で切断。さらに切断面より2cm下(後面は1cm)に前・後方と外側に横位の深い刀傷が残る。切断面は残存状況が悪く不詳。
D層・C2版築	ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	前端部分のみ。
D層・C2版築	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	1	
D層・C2版築	同定対象外	—		1	肩甲骨関節部分か？
D層・D1版築	ニホンジカ	上顎第1後臼歯	右	1	
D層・D1版築	ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	1	歯冠部分のみ
D層・D1版築	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨とその付近の脳頭蓋部分。角坐より下で角を切断。角部分は鋸で外側から内側に向かって切断している。
D層・D2版築	ニホンジカ	頭蓋骨		1	左脳頭蓋・側頭線付近破片
D層・D2版築	ニホンジカ	頭蓋骨		1	右脳頭蓋・側頭線付近破片。
D層・D2版築	ニホンジカ	頭蓋骨		1	左上顎骨部分(M23)
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第3前臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	3	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	1	歯冠部分のみ
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第2後臼歯	右	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	上顎第4乳臼歯	左	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分(P34M123)
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分。(M23)※M3は未萌出。
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体部分。(P234M1)
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体部分。(P34)
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体部分(M23)
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎枝部分。
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体舌側部分
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第2前臼歯	左	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第3前臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第4前臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第1後臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第1後臼歯	右	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第2後臼歯	左	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	左	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	2	歯冠部分のみ
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第3後臼歯	右	2	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎第2乳臼歯	左	1	
D層・D2版築	ニホンジカ	下顎後臼歯	右	1	歯冠の一部。
D層・D2版築	ニホンジカ	歯		5	歯冠部分破片資料。
D層・D2版築	ニホンジカ？	胸椎		2	椎体部分。
D層・D2版築	ニホンジカ？	腰椎		4	1点椎体のみ。
D層・D2版築	未同定	—		1	頭蓋骨後頭顆部分？
D層・D2版築	同定不可	顎骨		○	破片資料。シカ？
D層・D2版築	同定対象外	肋骨		1	骨幹部分。シカorイノシシ？
D層・D2版築	同定対象外	—		○	シカ顎骨部分破片か？
D層・D3版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	顎体部分(P4M1)
D層・D3版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体舌側部分(P×M×2×)
D層・D3版築	同定不可	下顎骨		2	下顎体部分小破片。シカorイノシシ？

21-2表 出土哺乳類遺体一覧(遺構外)

遺構名	種	部位	左右	数量	備考
D層・D7版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体M3付近。
D層・D7版築	ニホンジカ	下顎第4前臼歯	右	1	
D層・D7版築	ニホンジカ	下顎第1後臼歯	右	1	
D層・D版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P×4M123)
D層・D版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P23)
D層・D版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (M23)
D層・D版築	ニホンジカ	橈骨	左	1	近位端～骨幹中位残存。
D層・版築	イノシシ類	下顎第3後臼歯	左	1	歯冠部分第2・3咬頭部分のみ。
D層・版築	ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	1	
D層・版築	ニホンジカ	上顎第3後臼歯	左	1	
D層・版築	ニホンジカ	下顎第1切歯	左	1	
D層・版築	ニホンジカ	後臼歯		1	歯冠部分破片。
D層・版築	ニホンジカ	腰椎		1	左横突起部分欠損。
D層・版築	同定不可	下顎骨		3	下顎体部分破片。シカ？
D層・版築	同定不可	四肢骨		1	骨幹部分破片，シカ大腿骨？
D層(灰色土) トレンチ	同定対象外	肋骨		1	骨幹部分破片，大型哺乳類
D層・E2版築	ニホンジカ	頭蓋骨	右	1	角坐骨と極周辺の脳頭蓋部分。状態が悪くないため詳細は不明。
D層・E2版築	ニホンジカ	頭蓋骨	左	1	角坐骨とその周辺の脳頭蓋部分。角坐より下で切断。状態が悪くないため詳細は不明。
D層・E2版築	ニホンジカ	上顎第4前臼歯	左	2	
D層・E2版築	ニホンジカ	上顎第1後臼歯	左	1	
D層・E2版築	ニホンジカ	上顎第2後臼歯	左	1	
D層・E2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	M3付近下顎底部分。
D層・E2版築	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体頰側部分 (M23)
D層・E2版築	ニホンジカ	下顎第2前臼歯	左	1	
D層・E2版築	ニホンジカ	下顎第4前臼歯	左	1	歯冠部分のみ
D層・E2版築	ニホンジカ	下顎第2後臼歯	右	1	歯冠部分のみ
版築	イノシシ類	下顎第3後臼歯	右	1	第2・3咬頭部分。萌出前。
版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P×M12)
版築	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (M3)
版築	ニホンジカ	歯		14	歯冠部分破片資料。
表土	ニホンジカ	下顎骨	右	1	下顎体部分のみ (I×××P23)
表土	ニホンジカ	中足骨	右	1	骨幹後面のみ残存。
表土	同定対象外	肋骨		1	骨幹部分破片，大型哺乳類
遺構外	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P×34M1)
遺構外	ニホンジカ	下顎骨	左	1	下顎体部分 (P×34M123)
出土地不明	同定対象外	—		1	

部を切断することは考えにくく、何か別の目的（解剖など）に用いられたことが推測される。鹿角が製品の素材としていた可能性が高いが、漢方薬として用いられていた可能性も想起される。想像の域はでないものの、真っ二つに割られたイノシシ類の頭骨が解剖などの医学的な行為でおこなわれたと想定した場合、漢方薬としての鹿角も含めて、医学もしくは薬学関連の廃棄である可能性も想定する必要があるかもしれない。（阿部）

## おわりに（22・23表）

本調査地点において魚貝類は調理後もしくは供した後の食物残渣と推定される。鳥類も出土部位が上腕骨などの可食部分を中心であるため、魚貝類と同様であろう。一方で哺乳類の内、シカとイノシシ類、SK207のイヌなどは解体作業の廃棄であることが示された。

イシガメは調査地点全体で13点と少ないものの、18世紀後葉のSK583を中心にSE002以外東南部分に集中して出土している。大まかな出土傾向は、哺乳類のものと近似しており、廃棄に至るまでの過程が同じなのかもしれない。漢方薬としても用いる角部分を取り去ったシカの頭蓋骨、現在の解剖実習後と同じ状態で単純に可食部分を得るための解体に伴うものとは考えにくい痕跡をもつイノシシ類の頭骨との関係性から、イシガメも単純に食物残渣というよりは滋養強壮などを目的としたもの、さらには薬の材料として使用されたものかもしれない。そして、本調査地点の18世紀後葉を中心とする哺乳類やイシガメ関連の廃棄物は、想像の域は出ないものの、薬学や医学に関わるものであったことも想起される。

さて、これらの哺乳類骨を主体とする廃棄物には土を被せていなかったか、動物が掘り起こせる程度しか被っていなかったことが、これらの資料に咬痕がついていたことから指摘できる。また、この敷地内には、町犬や野犬（のいぬ）といった屋敷内できちんと管理・飼育されていた以外のイヌも生息していたことが推測された。さらに、イヌ以外にもブタが飼育されていた可能性も指摘された。そして、これらのブタは、廃棄されていたシカの骨に咬痕があることから、放し飼いであったことも想起される。（阿部）

22表 本調査地点における動物遺体の出土傾向(遺構内)

時期	遺構	貝類		魚類		爬虫類	鳥類	哺乳類	
		MNI	内訳	NISP	内訳			NISP	内訳
17c後	SK001	39	サザエ [13], ヤマトシジミ [10], アカガイ [6], ハマグリ [6], アカニシ [4]					4	ネズミ科 (4)
IVa(17c後:1680年代) 18c前?	SK218 SK202	1	サザエ殻片					1	同定不可(1)
18c前? 18c前~中	SK387・388 SK477	1 22	アカニシ片 サザエ [22]	2	マグロ属(2)			2 3	シカ(2) シカ(3)
18c中~後	SE002	73	サザエ [23], アサリ [22], ハマグリ [21], アカニシ [4], ヤマトシジミ [1], アワビ類片, アカガイ片			イシガメ(3)		31	シカ(26)、 イノシシ類(5)
18c中	SK201	245	サザエ [170], ヤマトシジミ [49], ハマグリ [16], アサリ [3], マダカアワビ [2], メガイアワビ [1], アカニシ [1], サルボウガイ [1], タイラギ片, マガキ片	23	サバ属(9), タイ科(8), ヒラメ(1), 同定不可(5)		同定不可(1)	6	シカ(4)、 イノシシ類(2)
18c後葉(一部17c後葉含)	SK583	116	サザエ [73], ハマグリ [18], ヤマトシジミ [6], アカニシ [4], イタボガキ [4], アサリ [4], マダカアワビ [3], バテイラ [1], イタヤガイ [右殻1], マガキ [1], アカガイ片	3	マダイ亜科(3)	イシガメ(5)	カモ亜科(3), キジ科(1)	241	シカ(114)、 イノシシ類(70)、 イヌ(57)
18c後?	SX206							1	イノシシ類(1)
VII(18c後~19c初 : 1780~1802)	SX267	74	サザエ [40], アカニシ [18], ハマグリ [5], アワビ類種不明 [2], ヤマトシジミ [2], バイ [1], アカガイ [1], シオフキガイ [1], ミルクイ [1], ツメタガイ片, イタヤガイ右殻片, イタボガキ右殻片	1	同定対象外(1)	イシガメ(3)	カモ亜科(1)	456	シカ(360)、 イノシシ類(93)、 イヌ(1)など
VIIIb(19c前 : 1820~1830)	SK258	20	ハマグリ [7], マダカアワビ [5], オキシジミ [5], アカガイ [2], ミルクイ [1]	1	マグロ属(1)	イシガメ(1)	キジ科 (4:※内 ニワトリ1)	13	シカ(9)、 イノシシ類(3)、 イヌ(1)
19c前?	SD268	5	サザエ [殻1], アカニシ [1], アカガイ [1], ミルクイ [1], ハマグリ [1]						
19c前?	SD357							1	イノシシ類(1)
VIIIc(19c中 : 1830~1840)	SK207	254	ヤマトシジミ [119], ハマグリ [66], アサリ [27], サザエ [12], アカガイ [9], マガキ [9], メガイアワビ [2], アワビ類種不明 [3], アカニシ [3], サルボウガイ [2],  イタボガキ [1], ミルクイ [1]	2	マグロ属(1), 未同定 (1)		キジ科(2)	247	シカ(129)、 イノシシ類(51)、 イヌ(66)、 ウマ(1)
VIIIc(19c中 : 1830~1840)	SX229	617	サザエ [12], オキシジミ [12], クロアワビ [8], マダカアワビ [7], マガキ [7], アカガイ [6], ミルクイ [5], アカニシ [3], サルボウガイ [3], タイラギ [2], ダンベイキサゴ [1], イタボガキ [1], シオフキガイ [1], オオノガイ片			イシガメ(1)	キジ科 (7:※内 ニワトリ1)	33	シカ(23)、 イノシシ類(8)、 イヌ(1)、 ネコ (1)
—	SX386							1	シカ(1)

[ ]: 最小個体数, ( ): 破片数

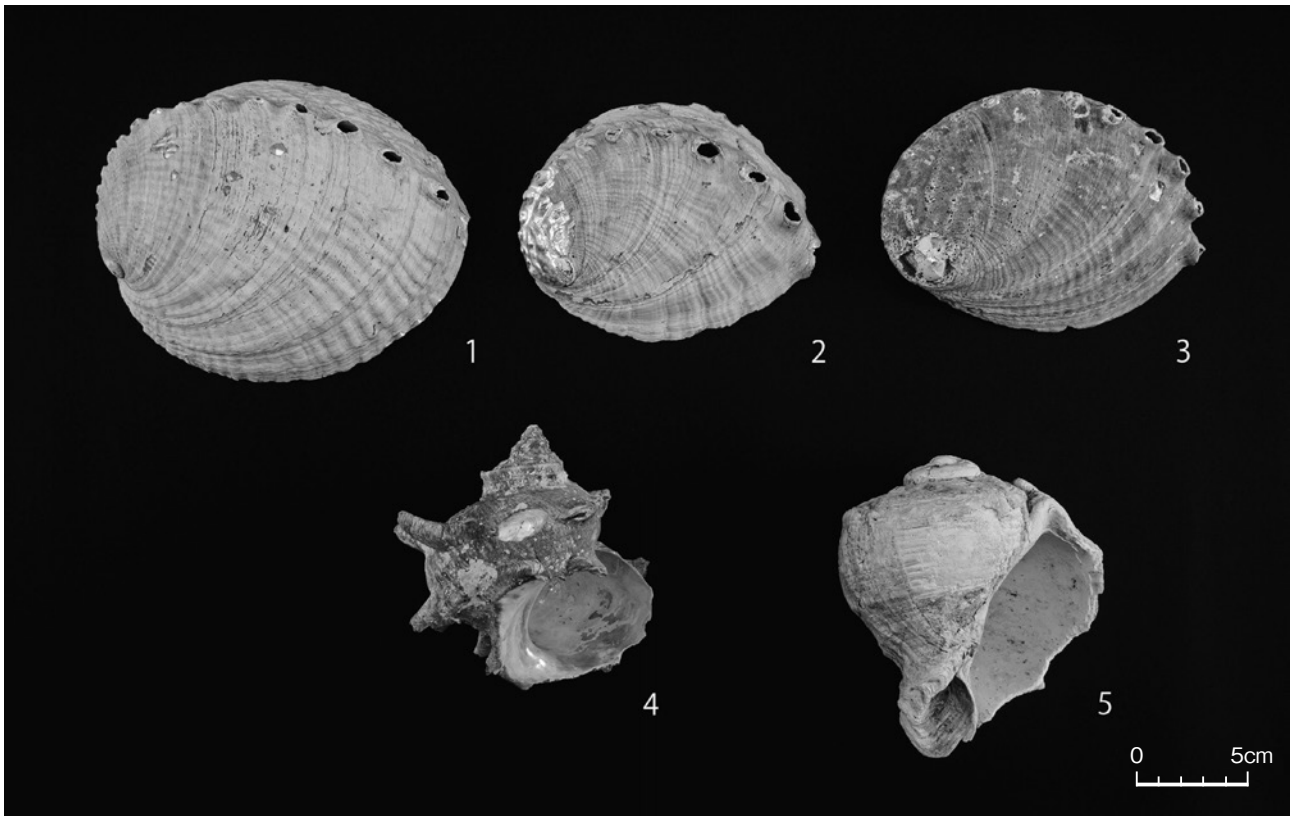
23表 本調査地点における動物遺体の出土傾向（遺構外）

時期		貝類	鳥類	哺乳類
	D層版築	サザエ [2] , アカニシ [1]		シカ(5)、 イノシシ類(1)
	D層版築C-2	サザエ片, ハマグリ片		シカ(3)
	D層版築D-1			シカ(3)
18c後～19c前	D層版築D-2	アカニシ [3] , サザエ片		シカ(54)
	D層版築D-3	サザエ [9]		シカ(2)
	D層版築D-7	アカニシ [1]		シカ(3)
	D層版築Dグリッド	アカニシ [1]		シカ(3)
18c後～19c前	D層版築E-2	サザエ [蓋2] , アカニシ [1] , ハマグリ [1]	キジ科(1)	シカ(11)
	D層版築E-5	サザエ [殻1]		
	版築	サザエ [殻1] , ツメタガイ [1] , アカニシ [1]		シカ(16)、 イノシシ類(1)
	D層トレンチ			同定対象外(1)
	表土			シカ(2)

【参考文献】

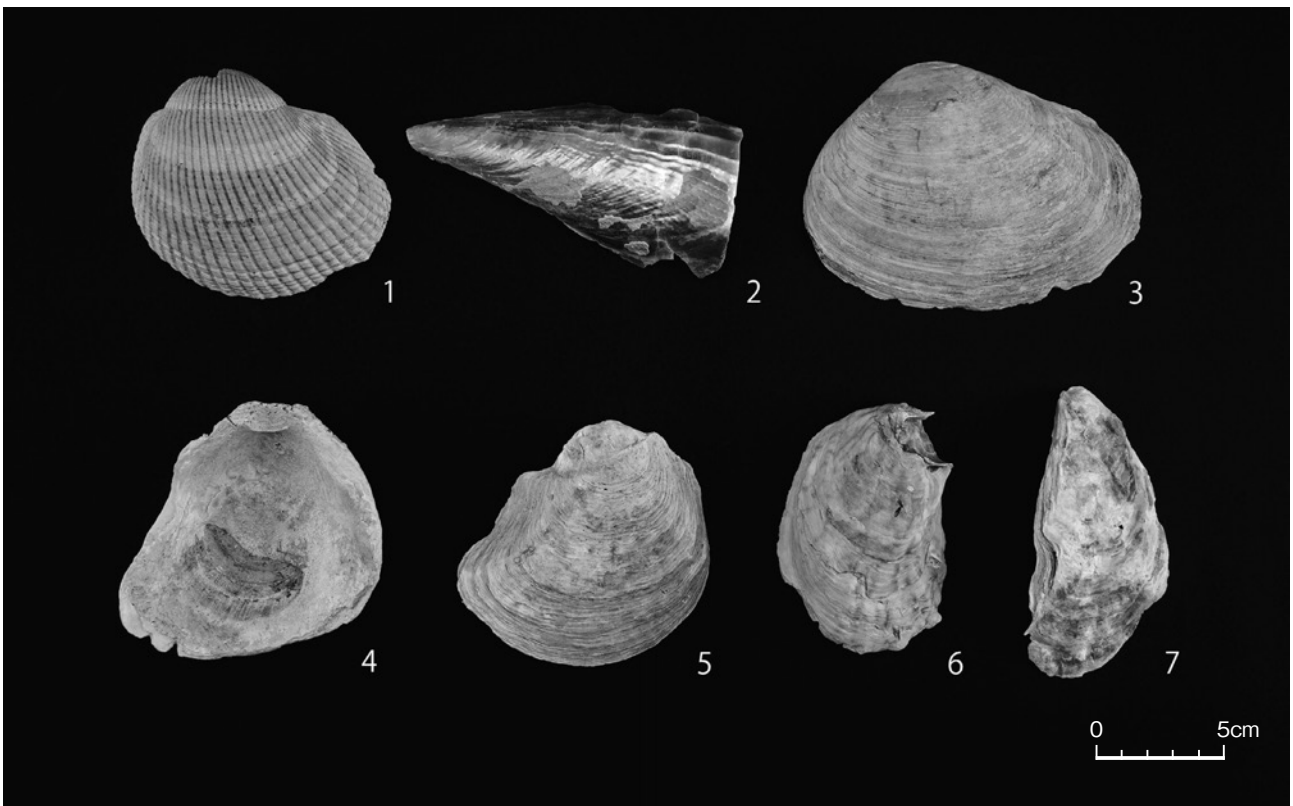
- 浅利昌男 2003『新・犬と猫の解剖セミナー ―基礎と臨床―』  
株式会社インターズー
- 阿部常樹 2001「江戸遺跡出土ハマグリのサイズの解釈に関する試論」『國學院大學考古学資料館紀要』第18輯 國學院大學考古学資料館
- 阿部常樹 2003「19世紀における江戸府内遺跡出土の主要貝類遺体の大きさの変化とその歴史的背景―東京都新宿区行元寺跡出土資料を例に―」『國學院大學考古学資料館紀要』第20輯 國學院大學考古学資料館
- 阿部常樹 2006「貝類遺体のサイズに関する計測方法」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 江田真毅・井上貴央 2011「非計測形質によるキジ科遺存体の同定基準作成と弥生時代のニワトリの再評価の試み」『動物考古学』第28号 動物考古学研究会
- 大泰司紀之 1980「遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』日本文化財科学会
- 許開軒・江田真毅 2022「キジ科遺体の形態学的同定基準の作成とその適用―出島和蘭商館跡出土資料の再検討―」『動物考古学』第39号 日本動物考古学会
- 熊倉功夫・宮坂正英 1997「シーボルトが記録した江戸の食材」『季刊ヴェスタ (VESTA)』第27号 財団法人味の素文化センター
- 佐藤巧庸 2021「鳥浜貝塚出土ニホンジカ遺体の死亡時季・下顎骨の萌出・交換に基づく非破壊分析」『動物考古学』第38号 日本動物考古学会
- 桜井準也 1986「貝類・魚類の大きさとその分布について」『麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡』港区麻布台一丁目遺跡調査会
- 樋泉岳二 1999「魚類」西本豊弘・松井章編『考古学と動物学』同成社
- 新美倫子 1997「シカの死亡時期査定に関する予報-エゾシカの場合-」『動物考古学』第9号 動物考古学研究会
- 日本獣医解剖学会 1998『家禽解剖学用語』日本中央競馬会
- 日本鳥学会 2012『日本鳥類目録改訂 第7版』日本鳥学会
- 三輪みなみ 2021「どうしてイヌは大きくなったのか？」金子美香・阿部常樹編『江戸動物誌―生活のなかの動物たち―展示図録』城西大学水田美術館
- 山崎 健 2019『農耕開始期の動物考古学』六一書房
- 山内忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号 鹿児島大学農学部
- American Ornithologist' Union, 1998. The AOU Checklist of North American Birds, 7th Edition. American Ornithologist' Union, Washington, D.C.
- Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E. and Berge, J.C.V., 1993. Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium. Nuttall Ornithological Club, Cambridge.
- Driesch, 1976. A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology.
- Horst Erich König, Hans-Georg Liebich 2010『カラーアトラス獣医解剖学 増補改訂版 [上巻]』チクサン出版社





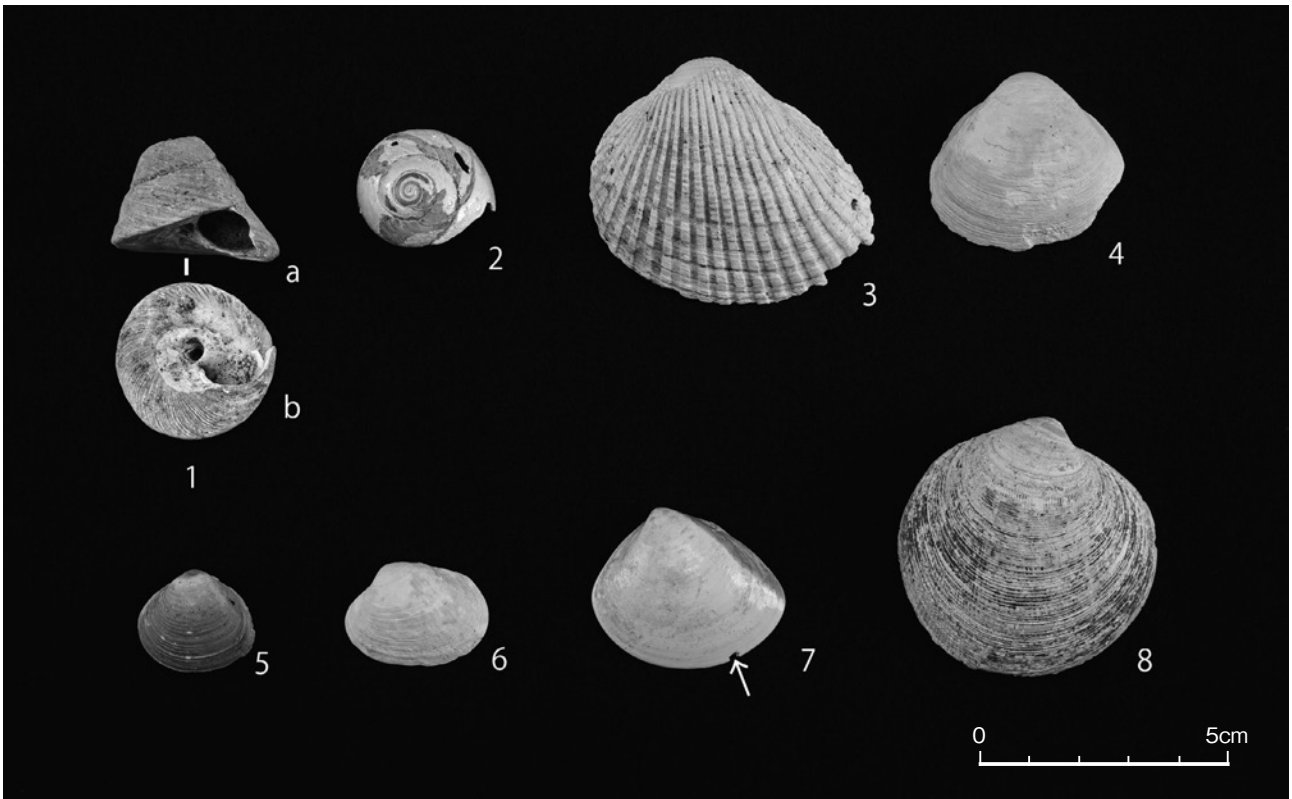
PL.1 出土貝類 (1)

1. メガイアワビ 2. マダカアワビ 3. クロアワビ 4. サザエ 5. アカニシ ※1~4 SX229 5. SK583



PL.2 出土貝類 (2)

1. アカガイ左殻 2. タイラギ左殻 3. ミルクイ左殻 4・5. イタボガキ (4: 左殻, 5: 右殻) 6・7. マガキ (6: 左殻, 7: 右殻)  
※1~3, 6・7. SX229 4・5. SK583



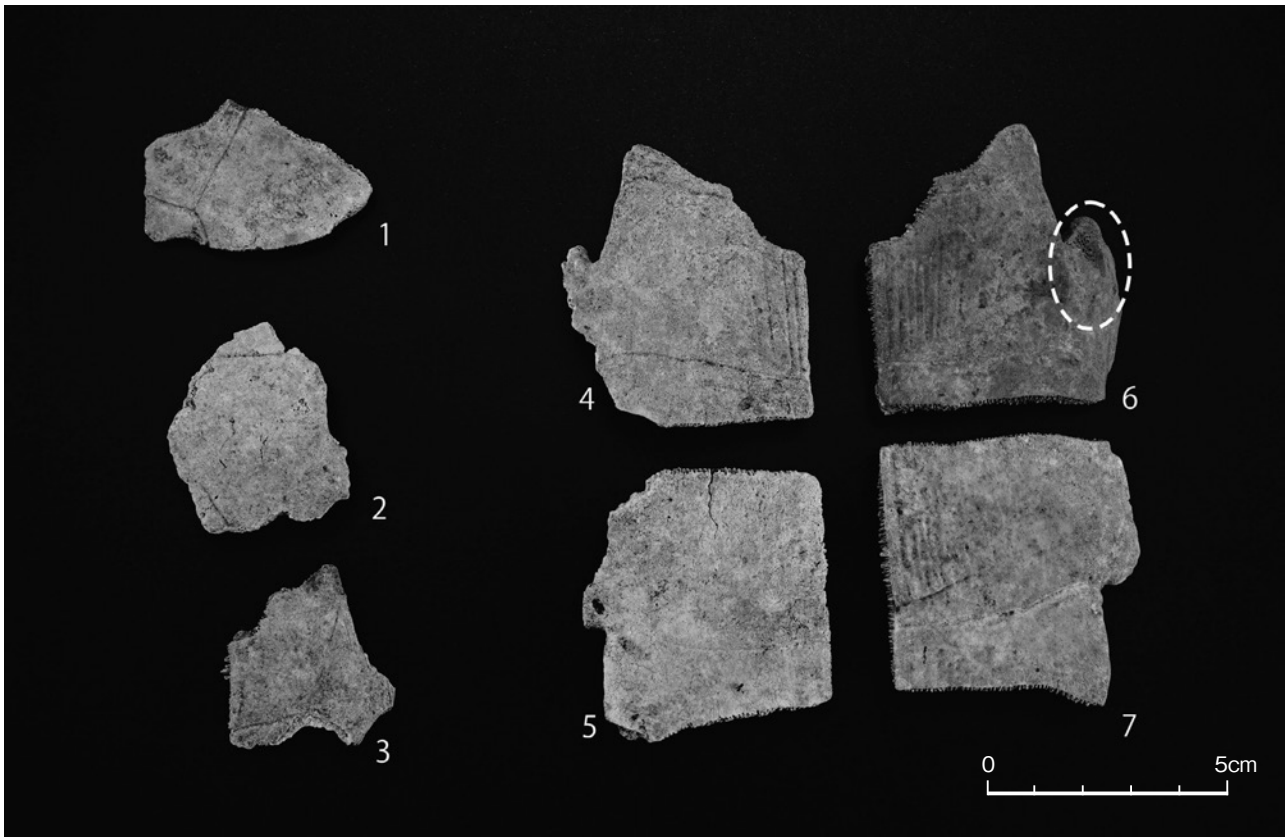
PL.3 出土貝類 (3)

1. バテイラ [a: 側面観, b: 底面観] 2. ダンバイキサゴ 3. サルボウ左殻 4. シオフキガイ右殻 5. ヤマトシジミ左殻 6. アサリ左殻 7. ハマグリ左殻 8. オキシジミ右殻 ※1. SK583 2・3・5～8. SX229 4. SX267 →: 人為的欠損



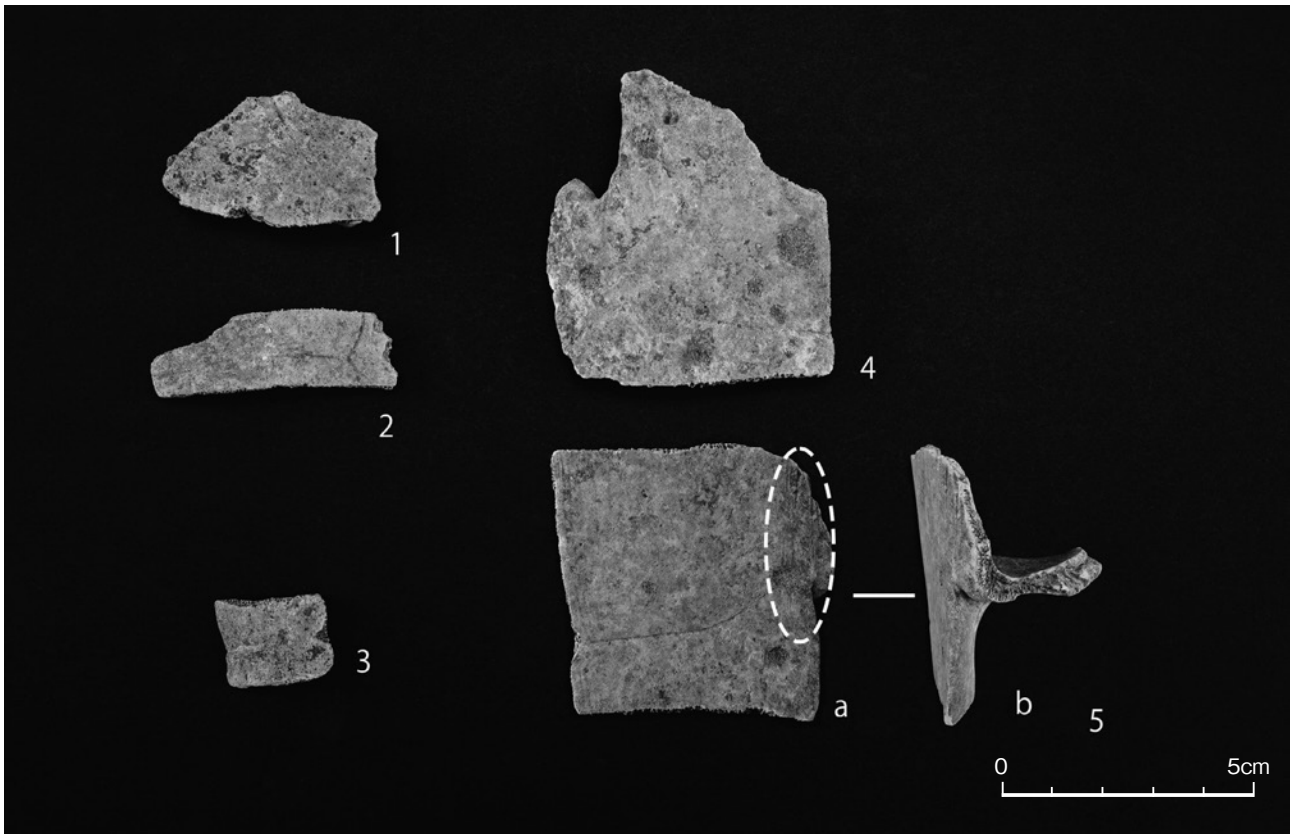
PL.4 出土魚類

1. マダイ・上後頭骨 2. マダイ亜科・右歯骨 3・4. タイ科 (3: 左主鰓蓋骨, 4: 尾椎) 5. サバ属・尾椎  
6. ヒラメ・尾椎 7. 未同定・右主鰓蓋骨 8. マグロ属・尾椎 [a: 後面観, b: 右側面観]  
※1・3～6. SK201 2. SK583 7. SK207 8. SK387・388



PL.5 出土爬虫類(イシガメ)(1)

1・3. 左胸甲板 2. 右第1肋甲板 4. 右胸甲板 5. 右腹甲板 6. 左胸甲板 7. 左腹甲板  
 ※1～3. SE2 4・5. SX267 6. SX229 7. SK258 ○: 人為的欠損のある箇所



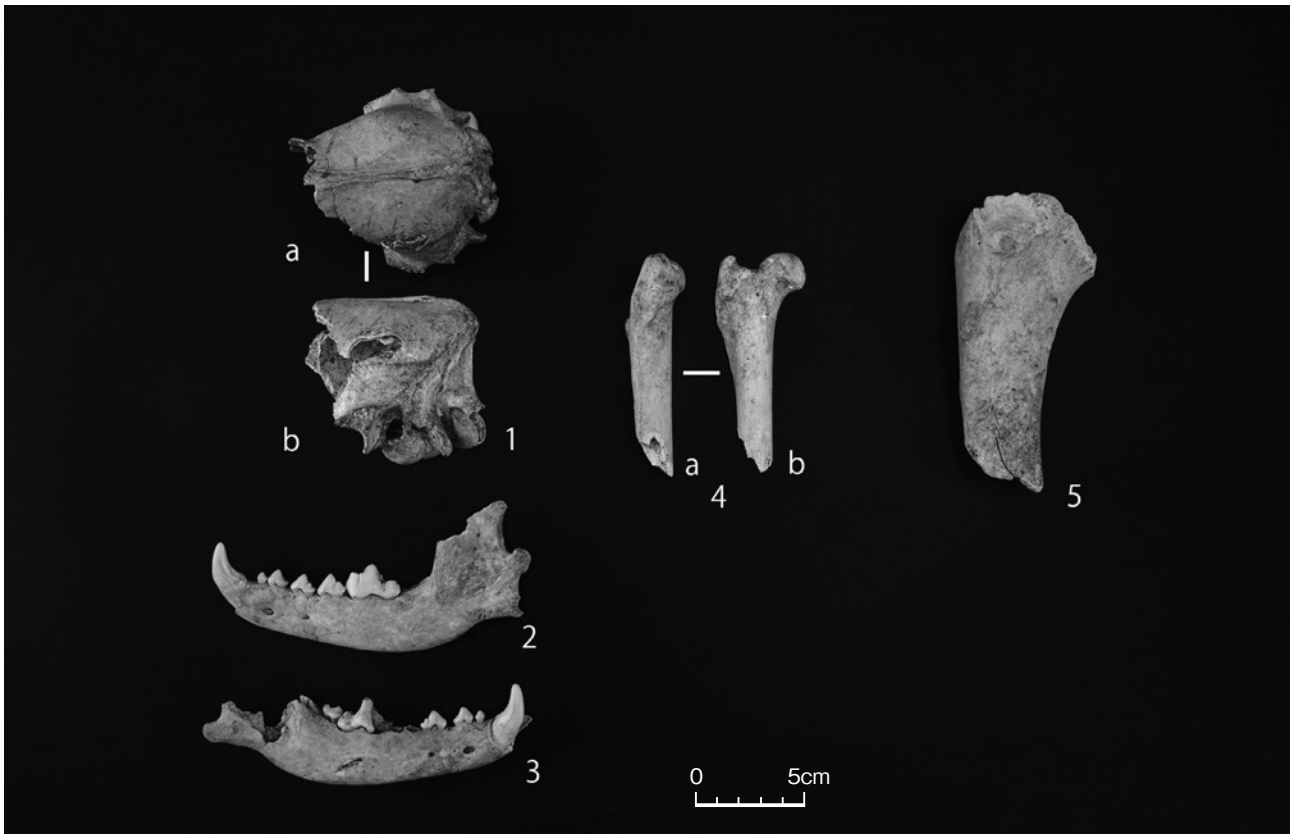
PL.6 出土爬虫類(イシガメ)(2)

1. 左第1肋甲板 2. 左第2肋甲板 3. 縁甲板 4. 右胸甲板 5. 左腹甲板 [a: 底面観, b: 左側面観]  
 ※すべてSK583出土 ○: 刀傷のある箇所



PL.7 出土鳥類

1・2・6・8・9. キジ科 (1・2. 上腕骨 [1:左, 2:右], 6. 左大腿骨, 8・9. 脛足根骨 [8:左, 9:右]) 3～5. カモ亜科 (3. 右上腕骨, 4. 右尺骨, 5. 右手根中手骨), 7・10. ニワトリ (7. 左脛足根骨, 10. 左足根中足骨)  
※1. E-2 版築 D 層, 2・8・10. SX229 3～6. SK583 7・9. SK258



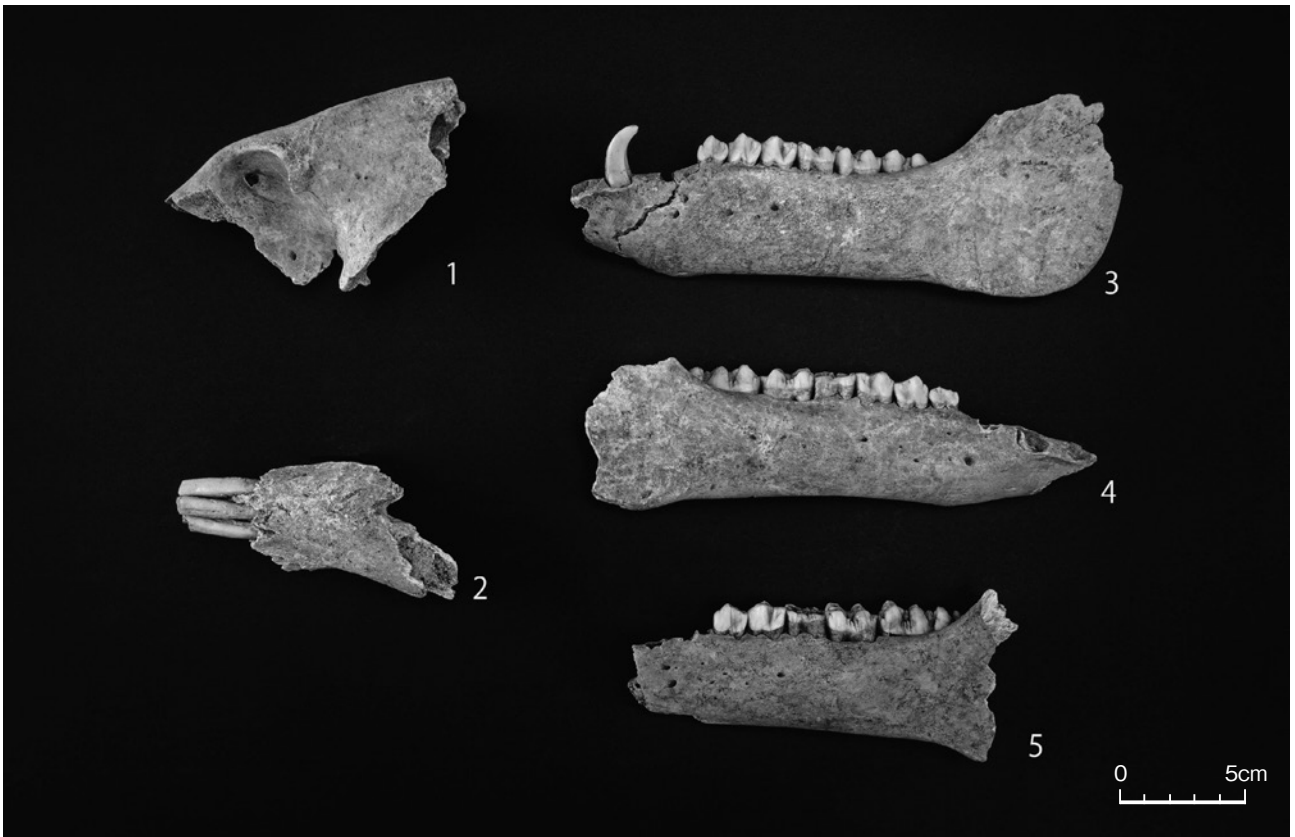
PL.8 刀傷のみられるイヌ (SX207・SK258) /ウマ

1～4. イヌ 1. 頭蓋骨 [a: 上面観, b: 左側面観] 2・3. 下顎骨 (2: 左, 3: 右) 4. 右大腿骨 [a: 正面観, b: 外側面観]  
 ※1～3. SX207, 4. SK258 5. ウマ 左上腕骨 ※SX207



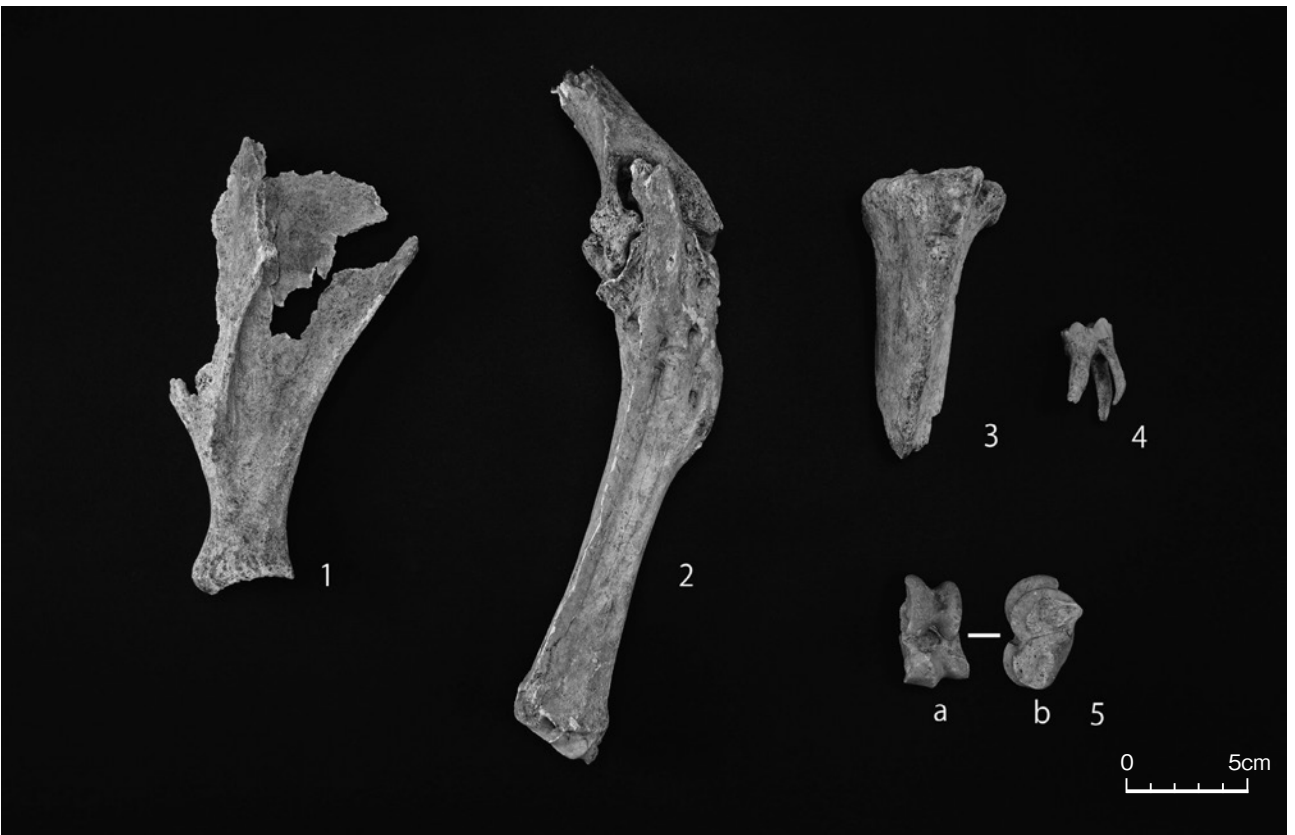
PL.9 SK583 出土イヌ遺体

1. 頭蓋骨 [右側面観] 2・3. 下顎骨 (2: 左, 3: 右) 4. 環椎 5. 軸椎 6. 左上腕骨 7. 左橈骨 8. 左尺骨  
 9. 右寛骨 10. 右大腿骨 11. 右脛骨



PL.10 イノシシ類 (1)

1. 頭蓋骨 [左側面観] 2~5. 下顎骨 (2. 連合部分 [底面観], 3・5. 左, 4. 右)  
 ※1. SK583 2. SX267 3. SX207 獣骨集中区 4・5. SK583



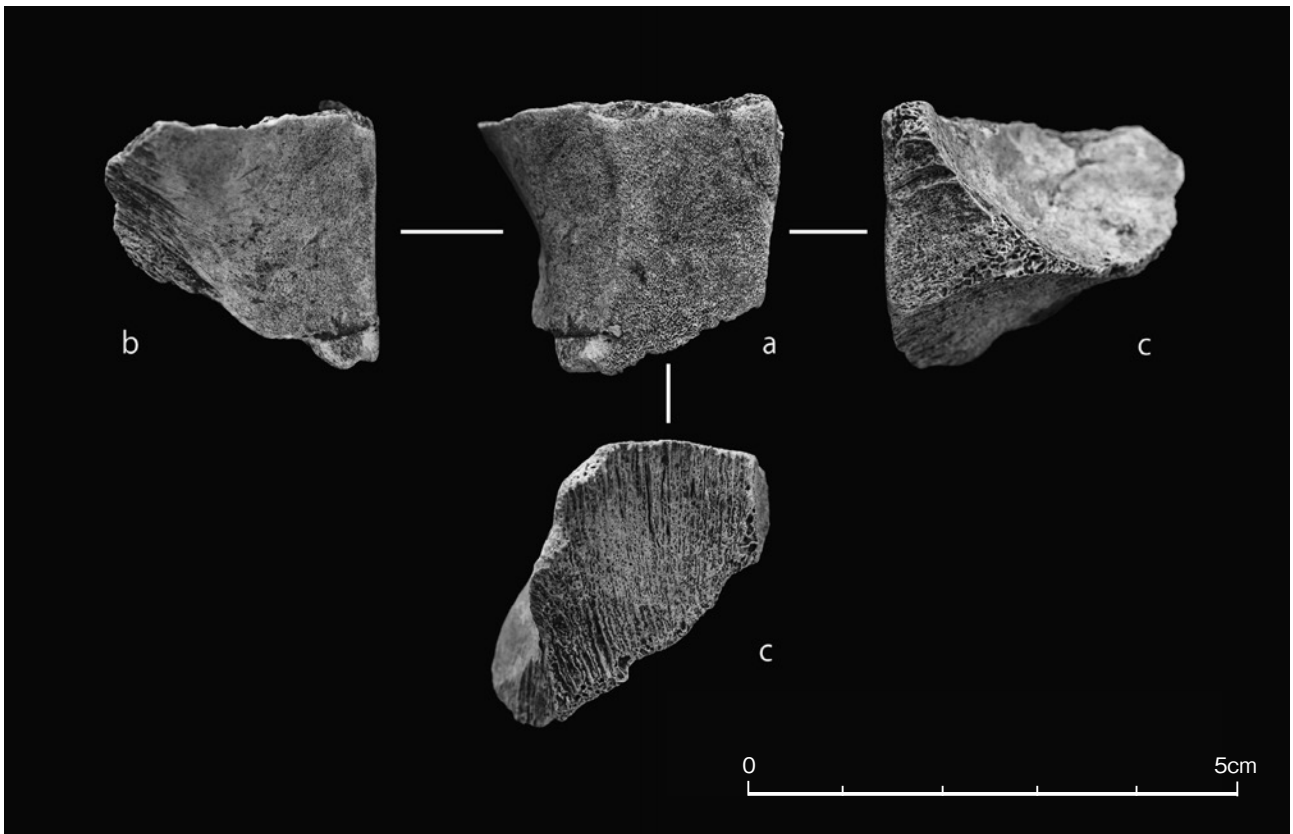
PL.11 イノシシ類 (2)

1. 左肩甲骨 2. 左上腕骨+橈・尺骨 [橈尺骨近位に骨折の治癒痕がある]  
 3. 左脛骨, 4. 左下顎第1後臼歯 5. 右距骨 [a: 正面観, b: 左側面観 [刀傷がある]]  
 ※1. SX229 2・5. SX207 獣骨集中区 3・4. SX267



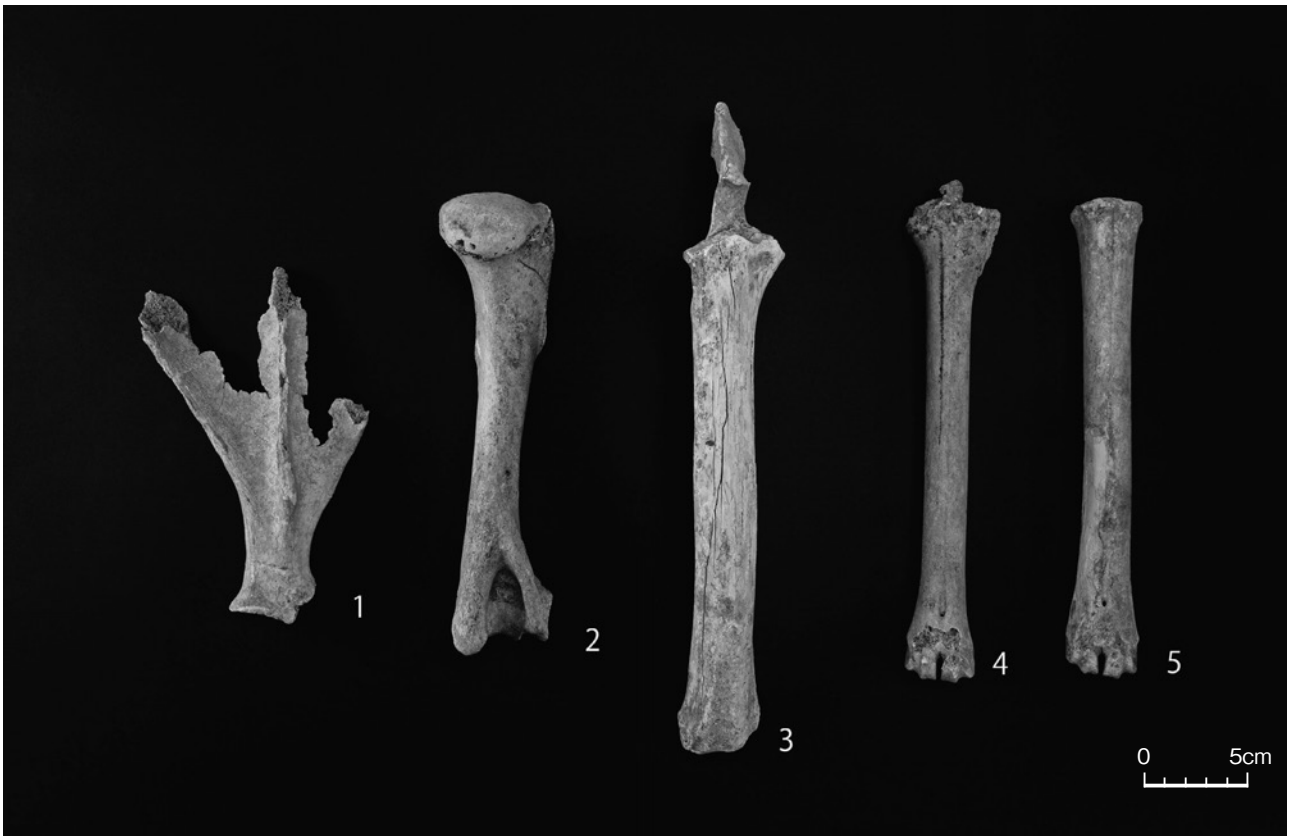
PL.12 連合部で切断されているイノシシ類の下顎骨

・右下顎骨 [a:上面観, b:左(内)側面観, c:底面観 [連合部分のみ]]  
※SK583 (PL.10-4 と同一個体)



PL.13 正中線上で切断されているイノシシ類の頭蓋骨

・左前頭骨 [a:上面観, b:左(外)側面観, c:右(内)側面観, d:後面観]※SX267



PL.14 ニホンジカ (1)

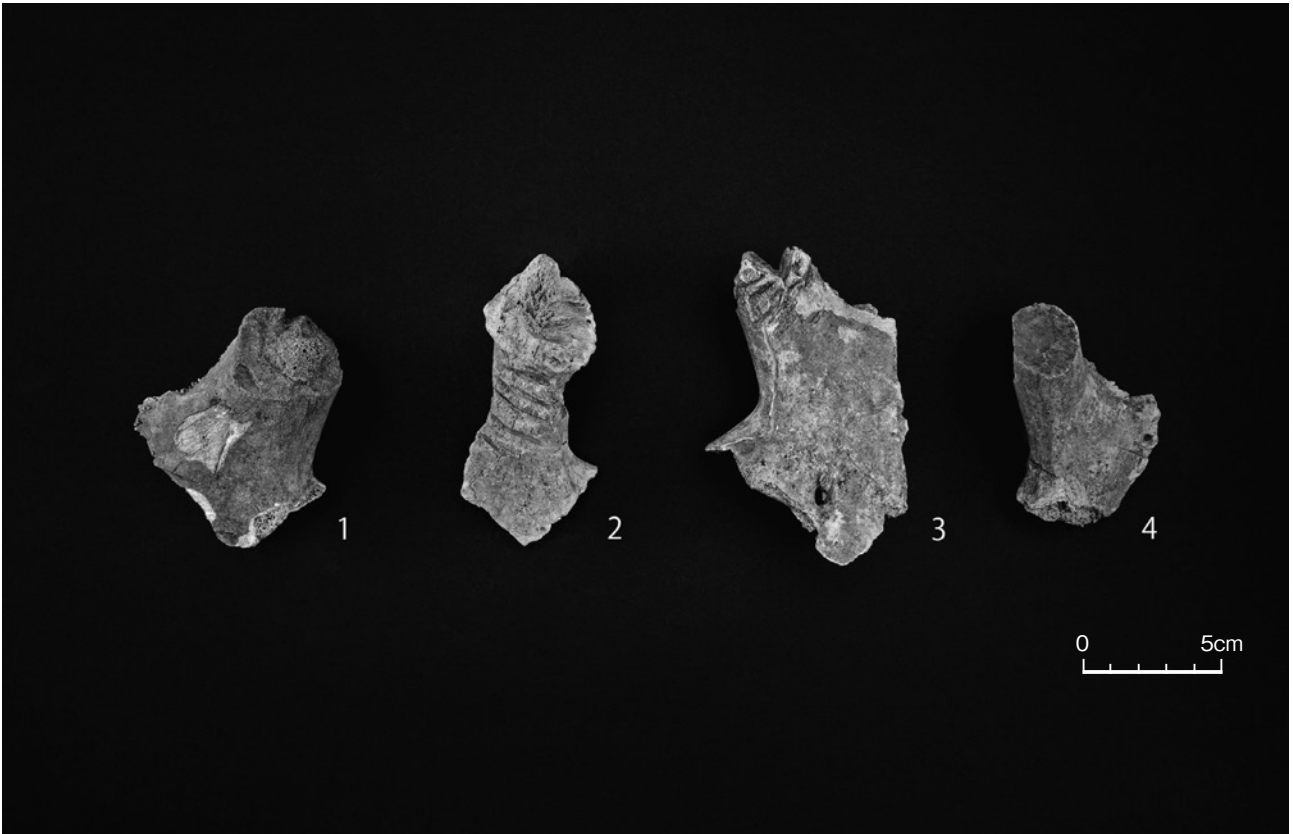
1. 右肩甲骨 2. 右上腕骨 3. 左橈尺骨 4・5. 右中手骨 (4. 右: 近位端部に病理痕有, 5. 左)  
※1・3・5. SX229 2・4. SX207 獣骨集中区



PL.15 ニホンジカ (2)

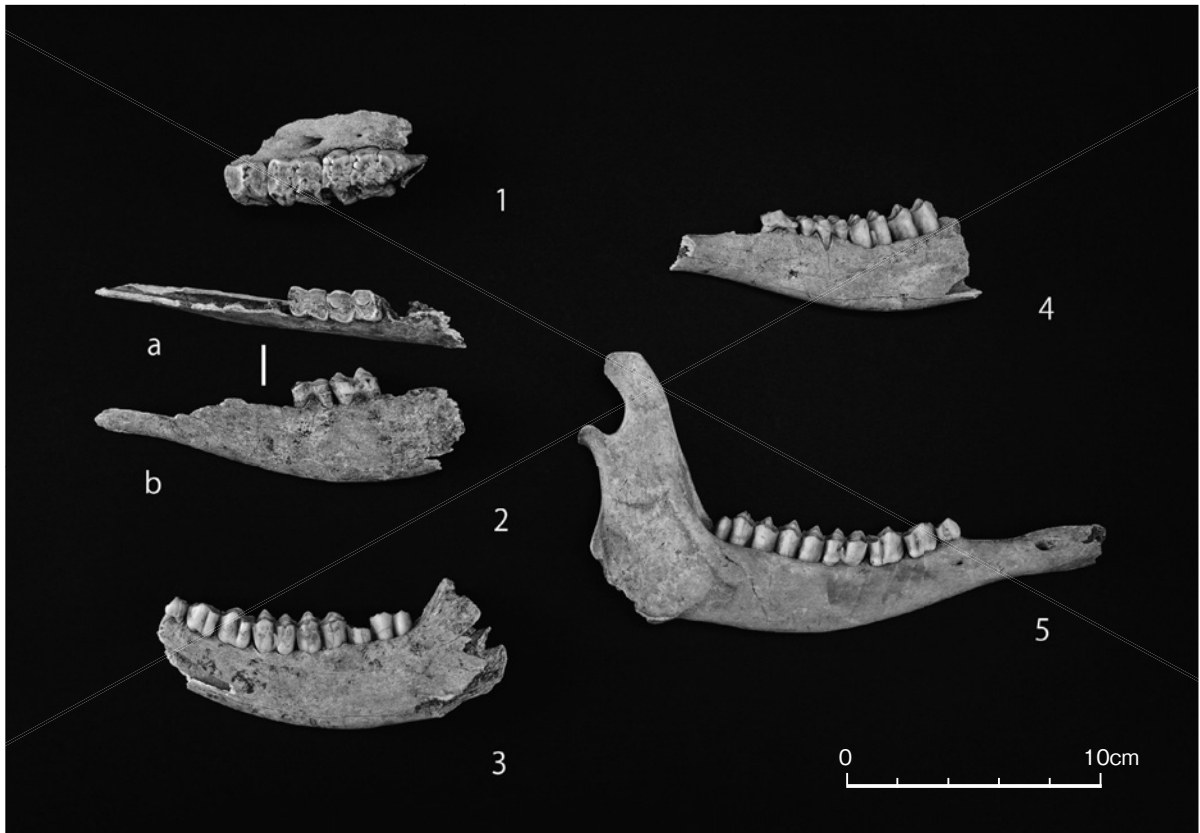
1. 左寛骨 2. 左大腿骨 3. 左脛骨 4. 基節骨  
※1. SX267 2・4. SX229 3. SX207





PL.16 角部分が切断されたニホンジカ頭蓋骨

1. 左側：SX386 2. 左側：SX267② 3. 右側：SK477 4. 右側：D-2 版築 D 層



PL.17 齢査定に用いたニホンジカ及びイノシシ類

1. イノシシ類・右上顎骨 2～5. ニホンジカ 下顎骨  
※1～4. SX267, 5. SK583 2. 左 [a: 上面観, b: 左側面観] (資料 E) 3. 左 (資料 K) 4. 左 (資料 P) 5. 右 (資料 R)



PL.18 イノシシ類の咬痕があるニホンジカ右橈骨

・右橈骨 [a: 背面観, b: 正面観] ※SX207 獣骨集中区

①・②咬痕 [①遠位端部背面 ②遠位端部正面], ③近位端部右(外)側面にみられる刀傷



PL.19 遠位端部背面の咬痕にイノシシ類の左下顎骨を合わせてみたもの

※イノシシ類左下顎骨はSX207 獣骨集中区のもの (PL.10-3 と同一個体)

## 出土ガラスについて

西田 泰民\*

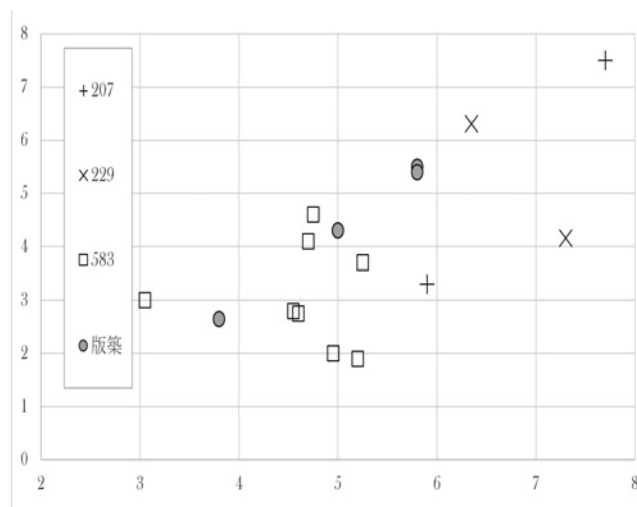
東京大学医科学研究所附属病院 A 棟建設予定地の発掘調査において出土した近世ガラスは 37 点を確認しており、18 世紀末に位置づけられる SK583、19 世紀初めに構築された版築、安政元 (1854) 年の火災に伴う SK207、SK229 からまとまって出土している。その構成は 25 点が簪筭類であり、容器片は 3 点、おはじき 2 点、蓋 1 点などとなっている。SP591 出土のガラス棒は非常に細く、竹ひごのように虫籠などに使用されたものかもしれない。

簪筭類は女性のための装身具であるため、女性が当時居住していたことを間接的に示していると考えてよいであろう。江戸の遺跡でガラス製品の出土数の偏りがあるのは、時期差だけでなく、発掘地点の性格の違いである可能性が高い。文献ではガラス生産が行われていたことが知られる大坂で、ガラス製品の出土例がわずかであるのではないかと筆者は考えている。当地点は、大村藩下屋敷の位置づけながら、前藩主の隠居所となっていたり、上屋敷の被災や改築のため、たびたび藩主や前藩主の家族が住んでいた期間があったことが知られており (渋谷 2004、本研究編研究 8 参照)、ガラス装身具類の出土はそうした事情を反映しているとみられる。

興味深いことに、SK583、版築、SK207・SK229 の簪筭類をそれぞれ群としてみると、違いが認められる。SK583 では全てが褐色に近い濃黄色の角柱のタイプであ

り、しかも幅 4mm ほどで細い。全て簪である。一方で版築出土ガラスは無色透明のものが主体を占め、断面が楕円形のものがあり、SK207・SK229 では褐色と無色の双方があるほか、6～7mm 前後の太いタイプが多くなっている。前田藩邸の工学部 14 号館地点でも、19 世紀から色や形態のバリエーションが増えることが確認できるので、遺構によるガラス装身具の内容の違いは使用者の好みや年齢を反映しているだけでなく、時期差による違いも想定できよう。ねじりや 2 本合わせたタイプの製品は出土していない。丹青色の失透の円柱状のタイプが 1 点、19 世紀前半に位置づけられる SK258 から出土している。同様の失透ガラスは長崎での出土比率が高いことが知られており、江戸遺跡からは少量出土のみみられる。

これら全ての資料に対して、新潟県工業技術総合研究所県央技術支援センターの日立ハイテクサイエンス製 SEA6000VX を使用して蛍光 X 線による定性分析を行った。タンダステン線源を用い、電流 500  $\mu$  A、コリメータ径 0.2mm で 15keV と 50keV で 30 秒ずつ測定した。大気中の測定であるため、Si より重い元素についてのみ、カウント数を計測し、Si との強度比を表示した。また一部の資料について東京大学総合研究資料館の堀場製作所 XGT2700W を使用し、FP 法による半定量を行った。測定時間を 300 秒とした以外は、本郷構内工学部 14 号館地点報告書に記載したのと同様の条件で、電流



1 図 簪類の幅・厚さ (mm)

\* 所属 新潟県立歴史博物館

1 m A、径 0.1mm で測定した。SK267 出土試料 1 点については UBE 科学分析センターに委託し、0.5g を採取し、ICP 分析による定量を行った。分析装置は島津製作所製 ICPE-9820 である。

大多数は江戸時代の国産ガラスに特徴的なカリ鉛ガラスであり、SK207 出土の蓋（図番号 809）のみがアルカリガラスであることが確認された。輸入品である可能性がある。工学部 14 号館報告書で示したように、鉛ガラスの主成分の一つであるカリウムは水溶性であるため、出土品では表面と内部が異なる値となることが知られている。今回も蛍光 X 線分析の結果は非破壊の分析であるためカリウムの含有量は実際より低く出ているケースもあると見込まれ、表の値は真値ではない。褐色の濃い個体には鉄が多く含有され、透明な個体では清澄剤として使用されることの多い亜鉛の含有が認められる。

容器類も鉛ガラスが過半数で、版築から出土した濃紺色の瓶にもわずかに鉛が含有されている。緑色の SE2 は銅による発色であり、失透青色の SK258-2 は鉄による発色である。SK207-4 と 229-4 にはマンガンが加えられている。おはじきは両方ともに鉛を少量含む組成で、簞類とは異なる製法による。

分析にあたり、吉田邦夫、宮内信雄、土田知宏の皆様にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

#### 【参考文献】

- 渋谷葉子 2004「肥前国大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査年報』4
- 西田泰民・吉田邦夫 2006「近世ガラスの化学分析」『工学部 14 号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室編

表1 出土ガラスの定性分析結果

資料番号	遺構番号	図版番号	色調	断面	器種	K/Si	Ca/Si	Ti/Si	Mn/Si	Fe/Si	Cu/Si	Zn/Si	Zr/Si	Pb/Si
SK207-1	207	807	黄色	方	簪	2.078	1.022	1.494	2.484	532.854	0.000	101.740	1.851	702.181
SK207-2	207	808	濃黄色	方	簪	18.739	3.821	2.160	0.000	195.761	0.000	99.272	0.000	1135.476
SK207-5	207	-	透明	円	簪	8.203	1.714	1.974	0.000	13.996	0.000	134.288	3.436	972.500
SK229-1	229	283	濃黄色	方	簪	4.456	3.068	0.000	0.000	132.172	0.000	0.000	0.000	639.194
SK229-6	229	-	濃黄色	方	簪	7.731	3.915	2.144	4.144	194.378	0.000	0.000	1.978	935.595
SK258-1	258	46	黄色	方	簪	12.301	3.253	3.018	0.000	209.940	0.000	210.607	2.988	1246.274
SK258-2	258	47	水色	円	簪	19.351	13.590	0.000	0.000	22.290	0.000	0.000	0.000	2.564
SK583-1	583	178	濃黄色	方	簪	8.373	2.839	2.815	3.842	412.857	0.000	0.000	4.104	1257.337
SK583-2	583	180	濃黄色	方	簪	7.670	2.933	2.933	0.000	330.938	0.000	55.103	0.000	1211.623
SK583-3	583	179	濃黄色	方	簪	13.596	2.721	0.000	3.640	278.957	0.000	0.000	4.621	1343.206
SK583-4a	583	-	濃黄色	方	簪	7.890	3.500	0.000	0.000	663.767	39.543	61.113	0.000	1394.467
SK583-4b	583	-	濃黄色	方	簪	7.078	2.705	1.216	2.966	193.617	0.000	0.000	0.000	915.812
SK583-4c	583	-	濃黄色	方	簪	9.051	2.414	0.000	0.000	161.876	0.000	0.000	2.674	1036.697
SK583-4d/4e	583	-	濃黄色	方	簪	11.245	2.179	0.000	0.000	130.606	0.000	48.867	0.000	1085.424
SK583-4f	583	-	濃黄色	方	簪	14.369	4.627	0.000	0.000	314.351	0.000	0.000	6.571	1759.425
SK586	586	1	濃黄色	方	簪	8.873	2.308	0.000	0.000	146.206	0.000	75.065	0.000	975.812
B1	版築	151	透明	方	簪	9.659	3.297	2.226	0.000	16.798	0.000	120.499	0.000	1228.454
B2	版築	152	黄色	方	簪	12.193	2.439	0.000	0.000	190.764	0.000	0.000	6.362	1552.724
B3	版築	153	透明	方	簪	6.018	2.050	0.000	0.000	11.583	0.000	122.152	2.152	906.917
B4	版築	-	透明	楕円	簪	6.891	1.492	0.000	2.424	12.608	0.000	66.513	2.560	631.072
B5	版築	-	透明	方	簪	8.551	4.219	3.312	3.698	58.143	0.000	181.299	3.721	1486.100
D	カクラン	-	透明	方	簪	7.158	1.272	0.000	0.000	6.327	0.000	88.303	1.653	742.629
O1	遺構外	21	濃黄色	円	簪	6.845	1.860	2.394	1.970	209.657	0.000	58.785	0.000	969.383
O2	遺構外	-	透明	円	簪	13.974	6.681	1.655	0.000	6.985	0.000	191.536	0.000	875.494
SE2	2	-	緑色		容器?	9.302	2.547	0.000	3.127	66.768	66.592	0.000	2.572	811.567
SK207-3	207	809	透明		容器	14.246	14.519	0.545	3.018	5.152	0.000	11.874	0.000	0.000
SK207-4	207	-	黒色		容器	8.101	2.058	0.000	15.401	13.841	0.000	0.000	2.319	696.438
SK229-4	229	286	黒色		容器	2.402	14.552	0.882	353.011	123.023	0.000	36.909	0.000	297.893
B6	版築	-	青色		容器	4.957	27.599	0.000	35.787	82.039	0.000	16.705	3.178	17.801
SP591	591	-	黄色	円	棒	3.840	3.361	0.000	0.000	404.679	0.000	0.000	3.053	751.483
SK229-2	229	284	透明		おはじき	2.973	16.110	0.000	15.701	53.277	0.000	81.950	0.000	105.930
SK229-3	229	285	透明		おはじき	1.597	11.657	0.000	8.489	29.792	0.000	39.646	0.000	175.449
SK207-6	207	-	濃黄色		不明	13.635	2.635	1.319	0.000	3.626	0.000	98.957	2.676	845.136
SK229-5	229	287	透明		不明	10.059	8.416	0.000	6.062	27.941	0.000	116.746	3.446	947.243

表2 定量結果 (% wt)

	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	SiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	ZnO	PbO
SK207-1	3.64	39.58	9.02	0.91	1.24	0.22	46.27
SK207-2	1.72	58.98	6.54	0.55	0.18	1.00	31.89
SK207-3	-	83.31	8.97	6.92	0.04	0.05	0.14
SK207-4	-	63.37	5.51	1.38	0.34	0.23	29.18
SK207-5	1.21	58.82	4.28	0.31	0.4	0.44	34.43
SK229-3	5.79	81.55	1.46	7.03	0.12	0.27	3.68
SK229-4	4.32	75.65	2.49	9.71	0.77	0.07	7.00
SK229-5	1.76	59.07	9.40	1.82	0.19	0.30	27.46
SK583-1	2.14	50.70	2.33	0.51	1.91	0.00	42.87
SK583-2	1.22	36.02	6.01	0.30	1.54	0.00	54.91
B1	0.76	56.67	4.18	0.18	0.07	0.21	38.45
B2	-	57.80	4.55	0.22	0.10	0.52	36.35
B3	1.82	36.98	6.47	0.43	0.96	0.02	54.36
B6	6.92	78.66	2.24	11.41	0.53	0.01	0.24
SK267		37.00	7.30		0.13		54.00

(ICP-AES)



# 東京大学医科学研究所（旧大村藩下屋敷）から出土した鉛塊について

原 祐一

## 1. はじめに

江戸時代、鉛は寛永通宝をはじめとする青銅、白粉、網の錘等や、南蛮吹きと呼ばれた銅精錬に使用された。遺物が出土した東京大学白金構内遺跡 医科学研究所附属病院診療棟・総合研究棟地点<sup>\*</sup>は港区白金台に位置し、江戸時代の大村藩下屋敷に該当する。地下室 SU360 遺構底部より棒状軟質金属 112 本、総重量約 20kg が出土した（2 図）。遺構は東大陶磁器編年から 18 世紀中頃に廃絶されたとされる。これらの金属を ICP-MS 分析、PIXE 分析した結果、出土鉛塊は高純度鉛であることが明らかになった。棒状鉛塊の製造方法等についても検討を行なった。本研究は、伊藤博之（和光金属技術研究所）、小泉好延（武蔵野文化財修復研究所）の共同研究である。

## 2. ICP-MS 分析

ICP-MS 分析は島村匡氏（北里大学）にお願いした。保存状態良好な資料を選出し 10mm 幅の金属塊を切出した。表面部の錆を除去し分析を行なった。

### ・試料の前処理と分析方法

1. 試料片の中央部の一部を切断し、硝酸：純水 = 1：1 で表面を洗浄。
2. 乾燥後秤量 0.1701g
3. 硝酸：純水 = 1：1 の溶液で加熱溶解。さらに純水で希釈し 100.026g に調整した。
4. 溶液の一部 1.018g を取り純粋で希釈し 20.043g とし分析を行なった。
5. 分析は 5 回繰返し、ほぼ全金属元素について定性分析を行い、含有量の多いものについて定量分析を行なった。

### ・分析結果

定量値を 1 表に示す。微量成分として Sb、Cu、Ti、Ag、As が検出された。珪素、硫黄、リン、炭素、塩素は非測定である。分析に供した金属試料は純度 99.4% の高純度鉛であった。

## 3. PIXE 分析

保存状態良好な資料を選出し PIXE 分析（荷電粒子励起 X 線分析 Particle Induced X-ray Emission）を行った。標準試料を入手できなかったため、微量成分の

定量は行なわれなかったが、ICP-MS の分析と同様に微量な Cu、Fe、Sb、Sn などが確認された。

## 4. 棒状金属塊の形状

黒灰色の表面には所々に白色錆が見られ、一部では金属内部まで達している部分もあった。長さ 216 ~ 218mm（7 寸 1 ~ 2 分）とほぼ一定で断面はかまぼこ型を呈していた。両端部の幅は広く中央部はくびれ、厚さも両端部は厚く、中央部は薄かった。仔細に観察すると全ての金属塊において、両端部の厚さは同一ではなく、どちらか一方の端部のほうが厚かった。端部の幅は 22 ~ 24mm（7 ~ 8 分）で外側にバリが広がるものもあった。中央部の幅は 14 ~ 20mm、端部の厚さは 5.8 ~ 10.7mm で中央部は 3.9 ~ 8.4mm であった。重さは 110 ~ 300g であった。1 個単独、2 個、3 個が連結したものもあった。かまぼこ型凸面表面には縦の筋が全資料に見られた。2 図は 3 本が連結し重量は 536.85g であった。

## 5. まとめ

出土した棒状鉛塊は As、Sn、Sb 量が微量で 99.4% の高純度であることが明らかになった。鉛塊の出土は住友銅吹所跡で報告されている（註 1）。この鉛塊は銅精錬所から出土した遺物であり、銅の精錬に使用されたものである。報告では Cu 量に注目し、山元より購入された荒鉛と銅吹所内で精錬された鉛である可能性が指摘されている。医科学研究所出土鉛塊は、住友銅吹所跡の鉛塊と同様な高純度鉛であった。本遺跡で銅精錬が行なわれたとは考え難く、大村藩下屋敷に何らかの材料用として持ち込まれた鉛と考えられる。現在のところ用途を限定することができる出土資料、文書は確認されていない。しかし、本鉛塊は精錬用ではなく一般に流通した鉛材料という点で貴重な資料である。

『鼓銅図録』、『飛騨かな山絵図』（註 2）（3 図）に鉛塊の鑄造方法が描かれている。『飛騨かな山絵図』によれば鉛は鉄鍋の炉で溶解され、溶解された鉛は銅製の金型に鑄込まれ金型と共に水桶に投入し急冷されて棒状鉛塊となる。出土棒状鉛塊には、凝固した所へ熔湯が再び加えられたものが見られた。鉛塊の観察から冷却鑄型を用い、熔湯を急冷させている事が伺え、絵図と同様な方法により製作されたものと考えられる。また、左

右の厚みと状態が異なるのは、鋳型を傾斜させ鉛を冷却鋳型に鋳込んだためと考えられる。住友銅吹所跡の棒鉛塊は実測図から同様の方法で鋳造されたものと考えられる。日本金属学会附属金属博物館所蔵の英国スワンシー大学博物館より貸与された鉛塊は棒状鉛が8本連結した板チョコ状であった。本鉛資料と同様の方法で製造されたかは不明である。

出土鉛塊はどこから持ち込まれたのかは現在のところ不明である。大村藩の国許では大串金山、雪浦金山、波佐見銅山等の発掘が知られる。「大村家譜」十一（東京大学史料編纂所蔵 2075/863/9-9）に「純熙代 同（嘉永）六年癸丑正月十八日上書日、領内波佐見村或産鉛矣邑請試掘之許之如何、二月九日老中阿部伊予守正弘授付札曰、宜其請安政二年以鉛少止之乃告 大村」（渋谷葉子氏調査）とある。国許での鉛産出と流通に関する具体的史料は現在のところ見出せないが、大村産鉛、他国産鉛、輸入鉛を含め現在調査を行なっている。

謝辞

学習院大学 渋谷葉子氏、住友資料館 今井典子氏、日本金属

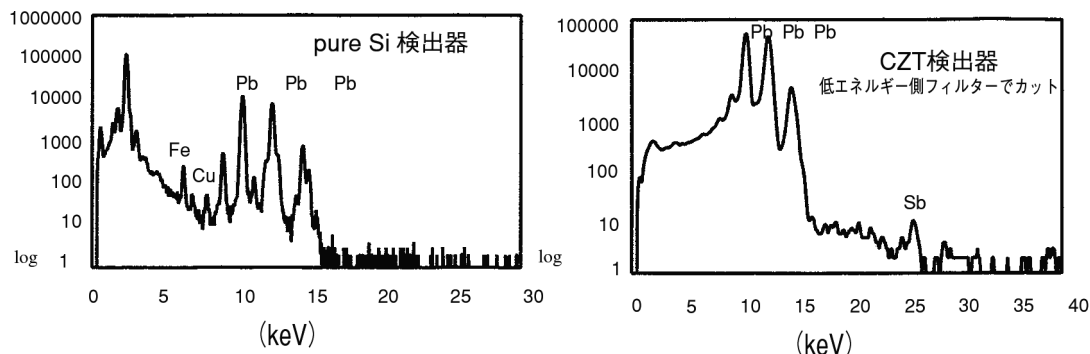
学会附属金属博物館 野崎準氏、神岡町史編纂室 向島昌雄氏、東京大学原子力総合研究センタータンデム加速器 中野忠一郎氏、松崎浩之氏に謝辞申し上げます。

注

1. 「新校正山相秘録」鉛山第六 鶴田恵吉編 1944『佐藤信淵 鉱山学集 富山房蔵版』PP40-41
2. (財)大阪市文化財協会 1998『住友銅吹所跡発掘調査報告』

(本稿は、『東京大学構内遺跡調査研究年報』3（東京大学埋蔵文化財調査室 2002）に掲載した同論考を図表番号を振り替えて再録したものである。)

※報告書になった正式な調査地点の名称は、「東京大学白金台 構内の遺跡（港区 No.135 遺跡）医科学研究所附属病院 A 棟 地点」である



1 図 PIXEスペクトル 東京大学原子力研究総合研究センタータンデム加速器による分析

1 表 東京大学医科学研究所出土鉛塊分析結果 (wt%)

試料No.	Cu	As	Ag	Sn	Sb	Bi	Ti	Fe
白金 42	0.11	0.048	0.05	0.036	0.31	0.014	0.08	<0.05

分析は北里大学 島村匡氏による ICP-MS 分析

2 表 住友銅吹所跡出土鉛塊の分析結果 (wt%)

試料No.	種類・形状	比重	Pb	Cu	As	Ag	Ca	Sb
30	鉛インゴット	9.91	95.7	0.044	<0.01	0.03	<0.01	0.2
32	鉛インゴット	10.7	98.2	0.075	<0.01	0.05	<0.01	0.7
55	鉛インゴット	11.05	97.9	0.084	<0.001	0.05		
25	鉛インゴット	10.3	98.4	0.086	<0.01	0.04	<0.01	< 0.01
24	鉛インゴット	11.2	99.2	0.086	<0.01	0.03	<0.001	0.2
31	鉛インゴット	10.7	98.5	0.24	0.02	0.03	<0.01	0.08
23	鉛インゴット	10.3	97.7	0.26	<0.01	0.04	<0.001	0.07
123	鉛インゴット	10.34	98.4	10.08	0.05	0.022	<0.01	

住友銅吹所跡発掘調査報告 199 8 (財)大阪市文化財協会「3. 鉛製遺物」内田俊秀 P404-410 ICP-MS 分析

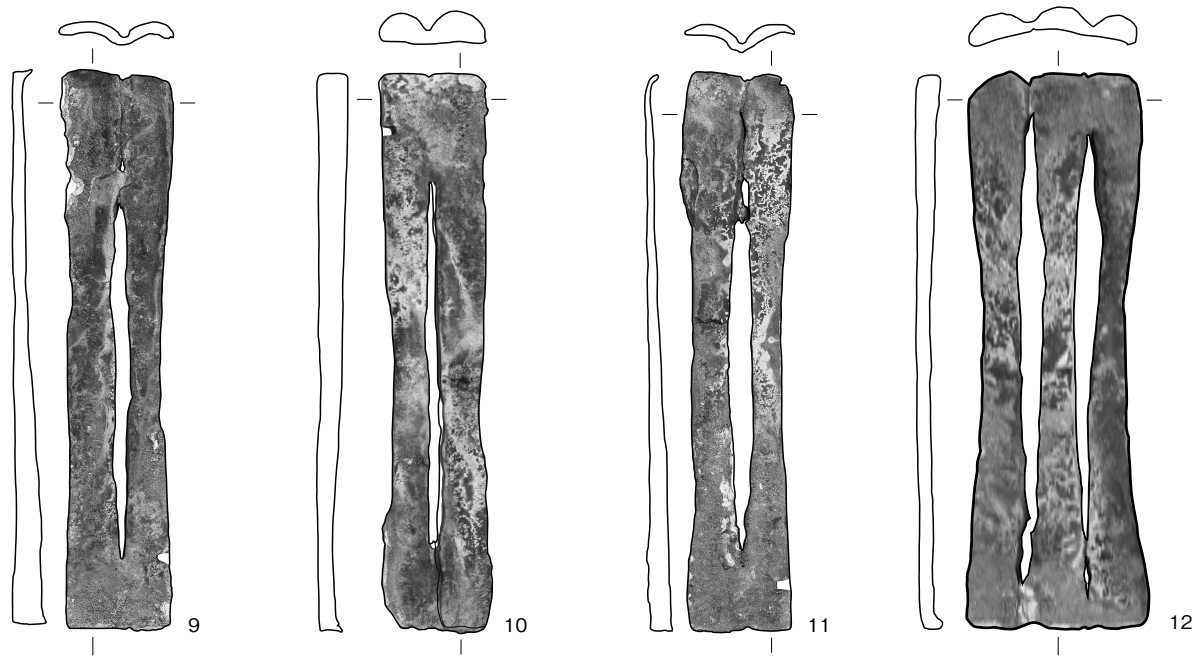
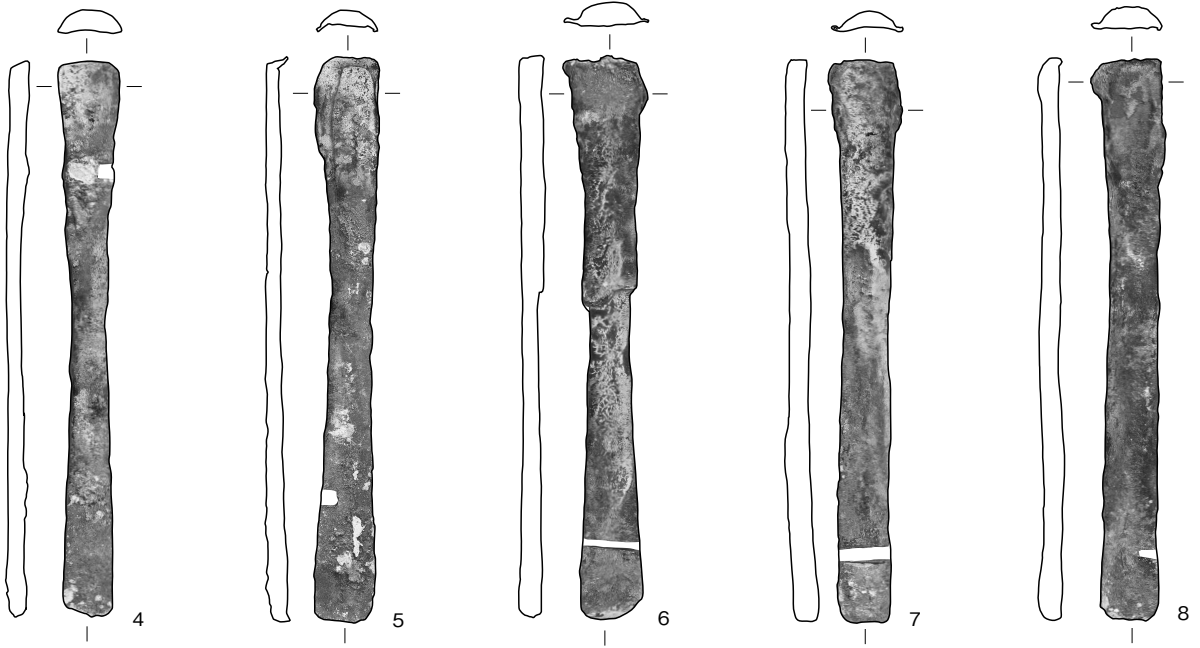




2 図 東京大学医科学研究所出土鉛塊



3 図 飛騨加奈山絵図 鉛を吹く図



追補 SU360出土鉛塊

# 肥前国大村藩白金下屋敷について

\* 渋谷 葉子

## はじめに

本稿は、東京大学白金構内医科学研究所附属病院診療棟・総合研究所の建設に伴って行われた発掘調査に関連する文献調査の報告である。

発掘調査区域は、『復元・江戸情報地図』（朝日新聞社、1994年）によれば、安政3年（1856）ころには肥前国大村藩（現長崎県）大村純熙の所有する屋敷の一部であったことが判明する。この屋敷地は寛文元年（1661）12月15日、大村藩が白金村のうち5,600坪を江戸幕府より下屋敷として拝領したもので、以来「白金下屋敷」として、同藩が幕末まで所持し続けた。

## 第一章 白金下屋敷の概要

### 第一節 大村藩大村氏と江戸屋敷

まず、この屋敷地を所有した、大村藩と藩主大村氏について述べておく。

大村藩は肥前国南西部、大村湾に臨む<sup>そのぎ</sup>彼杵郡のほぼ一帯を占めた。朱印高は2万7,973石8斗7升7合、藩主は、鎌倉期以来周辺の在地領主であった大村氏が、江戸時代を通じて務めた。日本初のキリシタン大名で、長崎を開港しポルトガル船との貿易を積極的に行ったことで知られる、大村純忠を父にもつ<sup>すみただ</sup>喜前<sup>よしあき</sup>を初代として、  
すみより すみのぶ すみなが すみまさ すみつね すみひさ すみもり すみやす  
 純頼・純信・純長・純尹・純庸・純富・純保・純鎮・  
すみよし すみあき すみひろ  
 純昌・純顕・純熙と12代にわたった（表1「大村藩主一覧」参照）。

大村藩の藩主は、諸大名のような隔年での江戸参勤が、基本的に免除されていた。これは幕府より長崎警衛の役を命じられていたことによる。その内容は、不法外国人などの大村牢収監、異国船の航路にあたる藩領沿岸の海上警備、異国船入津中の長崎市中の警備が主たるものであった。3代純信の藩主期、寛永18年（1641）に長崎警衛が本格化して以後、異国船の長崎入津が6月から9月だったことから、2月に幕府より帰国の暇を受けて3月に江戸を出立し、35～40日の道中を経て4月に大村着、約1年半在国し、9月のオランダ船出帆を見届けてから大村を出発し、11月に参府、というのが定式化した。これが一時、4代純長期の万治3年（1660）から、4月就封、翌年4月参府という諸大名同様の参勤形態と

なるが、正徳4年（1714）、6代純庸が2月賜暇・翌年11月参府という旧例の復活を願い出て許可された。これ以後、大村藩主の在府、つまり江戸屋敷での滞在は4ヶ月ほどの短い期間に定着することになる<sup>(1)</sup>。また長崎における異国船の入津や出帆の情勢により、江戸への参勤を免除される場合もあった。

大村藩が幕府から最初に与えられた江戸屋敷は、江戸城の南方、外桜田の地1,935坪半であった。屋敷北側の表門正面が町人地の備前町だったことから「外桜田備前町屋敷」と通称されたこの屋敷の拝領年は、江戸時代の文化年中（1804～18）の段階ですでに不明とされ、慶長期（1596～1615）の末に「江戸屋敷番」という役職が存在したことを根拠に、そのころには与えられていたものと類推されている<sup>(2)</sup>。この屋敷は藩主が参勤時に住まう居屋敷、いわゆる江戸上屋敷とされ、白金の下屋敷拝領前は、大村藩唯一の幕府からの拝領屋敷であった。

### 第二節 白金下屋敷の拝領

白金下屋敷の拝領は、3代藩主純信夫人究竟院および4代藩主純長の実父で、幕府勘定奉行を務める伊丹勝長が、幕府へ下屋敷拝領を願い出るよう指示し、大村藩がこれに従ったことから実現したものであった<sup>(3)</sup>。

それより前、大村藩が所持した拝領屋敷は、既述のように外桜田備前町の屋敷のみだった。勝長からの指示を受けて、大村藩用人安田与左衛門が下屋敷の用地を探し、二本榎にある大村家の菩提寺、長祐山承教寺近くの白金原を選定した。幕府への下屋敷拝領の願い出は、藩自らが拝領を希望する土地を選定し、その絵図を作成して提出するというものであったが、出願の前に幕府老中に内談する慣例があった<sup>(4)</sup>。大村藩の場合は、勝長が老中稲葉正則へ白金村での下屋敷拝領を願い、その内諾を得て出願にこぎつけている。このとき勝長が稲葉に述べた口上によれば、第一に、大村純長は下屋敷を所持しておらず、前藩主純信のころから上屋敷は飽和状態で、町屋に住む家中の者がいたこと、第二に大村藩は長崎と大村藩領内の番所に家臣を多く派遣する必要から、江戸へ参勤で伴う者は少なくとよとされていたが、江戸で火消しの番を命じられたために、江戸詰の家臣が多くなったこと、以上から下屋敷を拝領する必要性が生じた、ということであった<sup>(5)</sup>。稲葉はこれを聞き届け、白金村の

\*所属 徳川林政史研究所

希望地を描いた絵図を受け取ったことから、万治2年(1659)12月、幕府へ出願の運びとなり、下屋敷の拝領が事実上確定した。

土地の下賜は、寛文元年(1661)12月15日に正式に申し渡された。このとき大村家を含めて44の大名家が同時に下屋敷を与えられた。この達しは、藩主在国中の場合はその親類が受けたが、純長も大村に帰国中で、おそらく伊丹勝長が老中からこれを受けたものと推定される<sup>(6)</sup>。拝領場所は白金村のうち、京間で東西62間1尺4寸・南北90間、総坪数5,600坪であった<sup>(7)</sup>。万治2年12月の出願以来、2年を経過しての下賜申し渡しであったが、土地の授受はさらに遅れて寛文2年(1662)3月21日になってようやく行われ、ここに大村藩の白金下屋敷拝領が完了した。

### 第三節 白金下屋敷拝領の背景

伊丹勝長が、大村藩に下屋敷拝領の出願を働きかけた背景には、明暦3年(1657)1月18・19日に起った、いわゆる明暦の大火の後、幕府が諸大名へ避災屋敷としての下屋敷の下賜を、政策的に進めていたことがあった。大村家が拝領した寛文元年12月5日には、一挙に44家へ下屋敷が下賜されており、この前後、万治元年(1658)閏12月19日と寛文4年(1664)12月15日にも、それぞれ38件と31件の下屋敷一括下賜が行われている<sup>(8)</sup>。

明暦の大火では、大村藩の外桜田備前町上屋敷も焼失し、そのとき藩主純長は在国中で、2月7日に参勤した際には、上屋敷の焼け跡の小屋掛けに居住している<sup>(9)</sup>。火災時、上屋敷に居住していたはずの純長夫人智と究竟院については、避難先やその後の住居が不明である。都智は火災のあった翌年、万治元年2月17日に死去するが、その間の居所は明らかにならない。究竟院に関しては、くだって寛文元年(1661)8月9日、牛込屋敷に完成した殿舎に引き移ったとの記録が確認される。この牛込屋敷は獲得した年月や経緯が全く明らかでないが、寛文13年(1673)刊「新板江戸大絵図」には「大村イナバ」と記載があり、大村藩が所持していたことは確かである。興味深いのは、同図の大村家屋敷の東隣に「イタミ大スミ」、つまり勝長の子で藩主純長の実兄、そして究竟院の実弟でもある伊丹大隅守勝政の屋敷がみられることである。さかのぼって、明暦の大火後間もない頃の様相を描いたとされる「江戸大絵図」では、大村家の牛込屋敷は存在せず、その一帯が「伊丹内蔵」、つまり勝長の所有となっている。この屋敷地はおそらく、勝長の父で幕府勘定奉行を勤めた伊丹康勝(順斎)が元和8年(1622)、幕府より拝領した牛込佐渡原(砂土原)下

屋敷1万3,565坪で、以来伊丹家の屋敷として存続していたものと推定される<sup>(10)</sup>。すなわち牛込屋敷は、明暦の大火の後から寛文元年までの約4年の間に、伊丹家が自らの下屋敷の一部を大村家に割譲したものだことが判明する。同じ間、伊丹勝長は大村藩に下屋敷拝領の出願を働きかけているが、牛込屋敷はその代替機能を果たすものとして、伊丹家から大村家へ融通された可能性が指摘される。

寛文元年に牛込屋敷を新たに整備し8月9日に究竟院が引き移ったのは、同年9月10日に藩主純長が日向国延岡藩主有馬康純女亀を継室として迎えることになっていたのに伴う措置と考えられる。同年には上屋敷でも大規模な作事が行われていることが確認できる。その着手した日付は不明だが、11月13日付で「御居屋敷御作事ニ入ル金銀」として金小判945両1分・銀28匁3分2厘が書き上げられている。「御居屋敷」の指し示す場所が殿舎全体かその一部かの判断は難しいが、継室亀の入興にあたり、少なくともその住居となる殿舎奥向きは新たに作事されたことが確実である。

以上を踏まえて、大村藩が寛文元年末の段階で所持した3つの江戸屋敷を、大名屋敷の機能による一般的な分類に当てはめるなら、藩主とその夫人が居住する上屋敷は外桜田備前町、隠居した藩主や世子が居住する中屋敷的な機能を持つ牛込、そして被災時の避難所である下屋敷は白金、と位置付けられ、ここに大村藩江戸屋敷の整備が完了したといえることができる。

大名屋敷の上・中・下という屋敷の機能分化は、明暦の大火後に見られるようになったといわれる。大村藩の江戸屋敷整備もその趨勢に即したものと見えるが、それを志向し、且つなし得たのは伊丹勝長の存在があったからといっても過言ではなからう。勝長は第一に、自らの屋敷の一部を大村家に割譲し、その中屋敷的な機能を補完した。第二に、幕府の下屋敷下賜政策を利用し、とりわけ武家が町屋に混住する現象である町宿や、幕府の役と江戸詰家臣の増加を関連付けて、下屋敷の必要性を強調して拝領運動を展開した。町宿などは当時、幕府・諸藩で問題化しており、これらを出願理由に巧みに取り入れたことは、武家社会で懸案とされている問題を的確にとらえた幕閣勝長ならではの方策といえる。これと関連して第三に、勝長は土地拝領に関する幕府内でのさまざまな情報、例えば拝領希望地の競合相手の有無なども入手することが可能な立場にあった<sup>(11)</sup>。幕府との交渉者が勝長だったことで、大村藩の下屋敷拝領は比較的円滑に運んだことが想像されるのである。

#### 第四節 白金下屋敷の範囲と立地

白金村のうち、大村藩が拝領を希望した周辺は「江戸大絵図」（図 1）によれば、明暦 3 年頃には武家屋敷がほとんど見当たらない。幕府に対して、大村藩が下屋敷拝領を出願した際、ここを「白金原」と呼称していることから、辺りは野原のような場所であったことが窺われる。寛文元年 12 月 15 日の拝領後も、しばらくは周辺隣接地に武家屋敷はなかったようである。これは徳島藩蜂須賀家が下屋敷拝領の出願にあたって作成した「御望屋鋪之絵図」（図 2）から判明する<sup>(12)</sup>。その内容年代は、上限が、記載の屋敷所有者名から寛文元年 12 月 15 日、下限は、蜂須賀家が大村家の南隣に目黒下屋敷を拝領する同 4 年（1664）12 月 15 日である。絵図上「大村因幡守屋敷」と貼紙のある矩形の土地が白金下屋敷だが、この絵図は正確な測量に基づいて作成されたものではないといい、確かに実際の敷地の形とは異なっている。しかし絵図作成の目的上、少なくとも蜂須賀家が拝領を望む土地周辺の地形的な特徴は、凡そ捉えられているとみてよかろう。これによれば白金下屋敷は、南側と西側に大きな谷が切れ込み、それらをあがりきった、比較的高い場所に立地したことが看取される。

屋敷地の範囲を確定してみよう。図 3 は弘化 3 年（1846）、幕府普請方が作成した「御府内場末往還其外沿革図書」をトレースしたもので、中央の「大村丹後守下屋敷」が白金下屋敷、「丹後守」とは 11 代藩主純顕のことである。図 4 は明治 28 年（1895）、内務省地図局発行「東京実測全図」のうち、旧白金下屋敷の周辺である白金三光町附近部分、そして図 5 は現在の東京大学医科学研究所の地図である。図 3 の「大村丹後守下屋敷」北側に沿ってほぼ東西に走る道 A は、図 4 の道 A'、さらに図 5 の道 A'' へ受け継がれたと考えられる。道 A は、図 3 では「大村丹後守下屋敷」の西隣、「藤堂乗之丞」屋敷の内部に至って行き止まりとなっているが、図 4 によれば明治期にはそれより東側、図 3 でいうと「大村丹後守下屋敷」の内部北西の「大村当分御預地」の北西角と道 A を隔てた北側の「白金村」の南西角を結んだところで突き当たりになったことがわかる。白金下屋敷は京間で東西 62 間 1 尺 4 寸（約 122 m）・南北 90 間（約 177 m）であったといい、図 4 上で道 A' 西端の突き当たりを基点に、東へ 62 間 1 尺 4 寸＝約 122 メートル、南へ 90 間＝約 177 メートル四方の範囲が、江戸時代の白金下屋敷であったことになる。これは図 4 の 316・317 番地の範囲に合致している。さらに、図 5 の道 A'' は図 4 の道 A' を踏襲しており、前と同様、道 A'' 西端から道沿いにそれぞれ東へ約 122m、南へ

約 177m 四方が図 4 の 316・317 番地、つまりは江戸時代の白金下屋敷ということになる。この範囲は図 5 上に太破線で限った部分に相当し、これがすなわち江戸時代の白金下屋敷の範囲と確定される。

範囲の確定を受けて再び図 4 に注目する。江戸時代の白金下屋敷の範囲に等しいことが確認された 316・317 番地は、南半と北半では地形的に相異することが読みとれる。南半は平坦な広がりを見せ、北半やや東寄りには谷地で、北に向かって傾斜している。図 3 と考え合わせると、この地が白金下屋敷だった当時から明治 28 年まで、大幅な地形的改変はないと理解され、江戸時代の白金下屋敷は、基本的には台地上に位置するが南側の平坦面から北に向かって緩斜するという地形的条件に立地していたことが明らかになるのである。

#### 第五節 白金下屋敷の空間構造

白金下屋敷はその下屋敷としての機能に依拠すれば、火災などによる被災時には藩主やその家族が直ちに避難、さらには居住もできるように、ある程度の殿舎を恒常的に整備していたと推定される。また拝領出願の際に伊丹勝長が述べていたように、ここには多くの家臣も居住していたと考えられる。したがってこの屋敷にも大名屋敷内部の二元的な空間構造の概念、すなわち藩主やその夫人らの生活の場である「御殿空間」と、家臣や陪臣が起居する「詰人空間」は当てはめられる<sup>(13)</sup>。今のところ白金下屋敷の絵図などはまったく確認されておらず、屋敷地の利用について直接的に知りうる史料はないが、白金下屋敷の空間利用は、南半と北半で地形が相異するという条件に大きく規定されざるを得なかったことは想像に難くない。仮に北半を「御殿空間」とすると、地形的に高い南半が「詰人空間」となり、長屋が 2 階建ての場合「御殿空間」の内部が見下ろせる恐れが生じる。また表向き・奥向きを備えた殿舎を傾斜地に建造することは技術面等でさまざまな困難があろう。したがって北半は「御殿空間」には不向きと判断される。発掘調査では調査区東側から掘立柱建物址が検出され、構造的にみて家臣の住居である長屋か、それに類する建築物と推定されていることから、北半が「詰人空間」で、南半が「御殿空間」だったと想定するのがおおむね妥当であろう。

さらに史料によれば、白金下屋敷の受け取りに際して、屋敷地の四方の側に堀を掘り、土居を築きあげ、竹を植えることが幕府から命じられたといい、大村藩はおそらくこの指示に従ったとみられる。以上から白金下屋敷は、外部とは土居と堀によって隔てられ、内部は藩主らが滞

在する殿舎を含む「御殿空間」を南半に、家臣団の長屋群を含む「詰人空間」を北半に、それぞれ配した空間構造だったことが想定される。

## 第二章 江戸屋敷の変遷と白金下屋敷<sup>(14)</sup>

### 第一節 備前町上屋敷の焼失と白金下屋敷

#### — 17世紀後半

寛文8年(1668)2月1日、外桜田備前町上屋敷が焼失した。同年5月28日、参府した藩主純長は白金下屋敷を居屋敷とする旨を幕府に届け出た<sup>(15)</sup>。拝領から6年以上を経たこのとき初めて、白金下屋敷は上屋敷再建までの藩主居屋敷として利用されることになった。

白金下屋敷には、寛文2年3月の受け取り時点で番屋が設けられたようだが、そのほかに建物が作事されたかは史料的ではまったく明らかにならない。「詰人空間」については下屋敷拝領の出願理由に家臣団居住用地の確保をあげていたことから推すと、長屋は拝領当初から建設が進められたと考えられる。一方「御殿空間」の純長が入った殿舎が、既存だったか、あるいは上屋敷焼失に応じて建設されたのかは確認しえないが、参府が上屋敷焼失から約4ヶ月を経ていること、4月に参府すべきところを5月末まで延期していることなどから、殿舎の有無、いずれにしても純長が居住できるよう環境を整備するため時間を要したことが推察される。純長は翌寛文9年6月24日に大村に帰城したことから、5月下旬まで在府していたとみられる。

純長の次の参府は寛文10年(1670)4月であったが、いずれを居屋敷としたかは明らかにならない。焼失した備前町上屋敷は、ある時点で再建に着手され、寛文11年(1671)1月23日には完成していたようである。これは同日、大老酒井忠清と老中稲葉正則が江戸城よりの帰途、大村藩邸に立ち寄ったという記録から窺われることである<sup>(16)</sup>。大村藩の場合、藩主の道中および在国中に作事を進め、次回の参府にあわせて殿舎の完成をみる事が多く、このときも純長の出府にあわせて上屋敷建設が進行した可能性がある。これにしたがえば、寛文10年4月には上屋敷殿舎が出来していたことになる。以上の推定も踏まえると、少なくとも寛文8年5月末から翌9年5月下旬までの約1年間、白金下屋敷は藩主居屋敷として機能していたといえることができる。

下って元禄2年(1689)、純長の世子純真が廢嫡となった。純真は帰国して大村に居住することになったが、その住まい完成まで、同年4月から約5ヶ月間、白金下屋敷に滞在したことが判明する<sup>(17)</sup>。元禄13年(1700)

10月2日には、門前に辻番所を設置することが申し渡されており、18世紀に入ると、江戸の中心部における慢性的な屋敷地不足が江戸近郊村落の市街地化を促すが、白金周辺もその影響から元禄期に武家屋敷などが増加し、閑静な土地柄が変容した様子が窺われる<sup>(18)</sup>。

### 第二節 備前町上屋敷と白金下屋敷の焼失

#### — 18世紀半ば

享保16年(1731)4月18日、護国寺より出火の延焼により備前町上屋敷が類焼した。藩主純富はこのとき在府中であったが、6月7日には大村に帰城した。35～40日という道中の日数を考慮すると、4月末から5月初めには江戸を出立したことになり、避災のため、いったんは白金下屋敷に退去したとみられるが、滞在はごく短期だったと考えられる。純富が翌17年(1732)11月の参府時、いずれを居屋敷としたか明記する史料はない。この在府中の享保18年(1733)1月8日、白金下屋敷奥向きからの失火で殿舎の半ばが焼け、居住していた純富の妹藤などが負傷したことが確認されるが、純富がそこに滞在していた様子はない<sup>(19)</sup>。同年3月16日に純富は江戸を発ち、4月13日に大村に帰国、同月25日には前年、つまり享保17年の江戸屋敷作事を賞した、家臣への加増を行っている<sup>(20)</sup>。ここでいう江戸屋敷とは上屋敷と考えられ、享保17年のうち、おそらく純富の参府前に上屋敷の殿舎が急遽建造され、純富は参府してここに入ったと推定される。加増は急な作事に働いた家臣に対する報奨だったのであろう。ただし享保19年(1734)の幕府に対する上申で、困窮のために上屋敷を元通りに再建するのが早急には難しいと述べており<sup>(21)</sup>、これは仮に作事された殿舎だったことが窺われる。6年後の元文5年(1740)1月19日には、江戸屋敷作事のため国許から役人4人と職人など36人が参府した<sup>(22)</sup>。これは同年12月28日、純富に上野沼田藩主本多正武の女恵津が入興することが決まり、奥向きの殿舎を整備する必要性に基づくものだったと判断されるが、上屋敷の元通りの再建も、このときまで保留されていた可能性もあろう。

なお、享保16年の上屋敷火災時には、白金下屋敷は藩主居屋敷とはならなかった様子だが、純富生母紋は江戸上屋敷に居住していたはずで、その火災の折には白金下屋敷に避難した可能性が高く、あるいは上屋敷再建まで居住したことも考えられよう。藤については、既述のとおり下屋敷焼失時、そこに居住していたことが確認されるが、それが恒常的な居住か、上屋敷焼失に伴う一時的なものだったのかは明らかにしえない。

享保 18 年の火災後、白金下屋敷の殿舎が再建されたかも不明である。下って明和 9 年（1772）2 月 29 日の、いわゆる目黒行人坂火事も白金下屋敷に延焼し、被災状況は不明だが、このときは同年のうちに家作と七社が元通り再興されたということである<sup>(23)</sup>。享保 18 年から明和 9 年までの約 40 年で、藩主は純庸・純富・純保・純鎮と代替わりしたが、この間、江戸屋敷の狭隘化が進んでいた。享保 18 年から元文 3 年（1738）までは純庸が隠居としており、また奥向きには寛延 3～明和 2 年（1750～65）と安永 6～天明 6 年（1777～86）には、前々代および前代、そして当代の藩主夫人 3 人が江戸に居住するという状態になった<sup>(24)</sup>。このほか子女もあり、上屋敷のみでは物理的に収容困難で、白金下屋敷も住居として使用されていたことがじゅうぶんありうる。したがってこの当時については、白金下屋敷の殿舎は火災後、すみやかに再建されたとみるのが妥当と思われる。

### 第三節 上屋敷替地と白金下屋敷

#### — 18 世紀末

寛政 6 年（1794）1 月 10 日、麴町 5 丁目からの出火により備前町上屋敷が全焼した。火災時、藩主純鎮は在国で、被災した家族は湯島天神下屋敷に退去した<sup>(25)</sup>。この屋敷は寛政 2 年（1790）11 月 11 日、前代藩主純保夫人の真如院の所望により、姫路藩酒井家所有で分家の姫路新田藩酒井家が使用していた 1,866 坪を、相対替で獲得したものである。真如院は、前節で述べたような 18 世紀中葉の屋敷不足の状況から、この屋敷獲得に動いたと推察される。寛政 4 年（1792）2 月 18 日の真如院没後の利用状況、およびこの火災に際して、藩主家族が白金下屋敷ではなく湯島天神下屋敷に避難した理由については定かでない。

さて幕府は、この火災を機に、新シ橋から幸橋間の堀沿いの町人地を火除地に転換することを決めた。町人地の移転先として、この火災で焼失した武家屋敷地が充てられることになり、備前町上屋敷もこれに含まれ、寛政 6 年 3 月 14 日に上地、代地として永田町横丁通りに面した米倉三八および伊沢内記の屋敷跡 3,600 坪が与えられた。備前町上屋敷は、延宝 8 年（1680）8 月、捕鯨などによって蓄財した深沢儀太夫勝清が、隣接する戸田某の屋敷地 783 坪 8 合を買得して大村家に献上したことから 2,719 坪 3 合に拡大、さらに宝暦 9 年（1759）7 月 3 日には、南隣の佐久間小路通井関玄説屋敷 961 坪を相対替によって獲得し 3,680 坪 2 合となっていた<sup>(26)</sup>。永田町に下賜された 3,600 坪はこれに見合った面積だったと推定され、また同時に引料（引越料）として銀 250

枚も与えられた。

寛政 6 年 11 月 22 日、藩主純鎮は参府し、永田町上屋敷が完成していないことを理由に、白金下屋敷を居屋敷とする旨を幕府に届け出た<sup>(27)</sup>。永田町上屋敷は本来的に藩主居屋敷であるにもかかわらず、その作事は拝領後 2 年以上を経過した寛政 8 年（1796）10 月 1 日になって、表長屋からようやく始まった<sup>(28)</sup>。それから 3 年を経た寛政 11 年（1799）12 月に殿舎がおおむね出来し、同月 10 日に藩主家族が、次いで 15 日には家中が、新たな永田町上屋敷に引き移った<sup>(29)</sup>。純鎮は寛政 12 年（1800）11 月の参府からこの新邸に入っている。火災後の急ごしらえの再建とは大きく性質を異にし、新たな拝領地への建築という点で、新規の正式な殿舎や長屋の設計・施工計画の検討、さらにそれを実行するための資金・資材の調達は急には難しく、時間を必要としたのであろう。結果、白金下屋敷は寛政 6 年 11 月以来、約 6 年もの長きにわたり藩主在府時の居屋敷として機能したのである。

### 第四節 相対替による屋敷地獲得と白金下屋敷

#### — 18 世紀末～19 世紀前半

白金下屋敷は藩主居屋敷として利用された一方、寛政期の末頃から、その一部を用地とした相対替が積極的に行われるようになる（表 2「大村藩江戸屋敷関係相対替一覧」参照）。これより前、宝暦 9 年（1759）7 月 3 日の備前町上屋敷添地と、寛政 2 年（1790）11 月 11 日の湯島天神下屋敷の獲得に際して白金下屋敷の一部が替地に利用されたが、この時期の白金下屋敷を用地とする相対替で獲得されたのは、すべて永田町上屋敷の隣接地である。相対替は、寛政 10 年（1798）4 月 25 日、天保 3 年（1832）9 月 23 日、同 5 年（1834）8 月 29 日、同 8 年（1837）9 月 1 日に行われ、4 回で合計 1,449 坪を得た。これらは替地が下屋敷であったため、麴町元山王下屋敷と呼称されたが、永田町上屋敷はこれらを囲い込んで 5,049 坪に事実上拡大した<sup>(30)</sup>。一方白金下屋敷は、4 回で合計 553 坪が割譲されたが、このうち天保 3・5・8 年の相対替の内実は拝領屋敷の売買であった。具体的には、大村藩は引料の名目で相手方に数百両の金銭を支払って麴町元山王下の屋敷地を獲得し、白金下屋敷の替地は所持し続けたことが史料で確認される<sup>(31)</sup>。また明記されてはいないが、寛政 10 年の相対替も同様であったことが窺われる。根拠は第一に、大村藩は麴町元山王下屋敷を所持する内藤弥左衛門に金 400 両もの引料を支払っていること、そして第二の根拠は市谷葉王寺前下屋敷の獲得時に求められる。この屋敷地は寛政

12年と文化7年に湯島天神下下屋敷との相対替で獲得したが(表2-④・⑤)、実はこれより前、寛政8年(1796)に大村藩は溝口相模守から市谷の1,000坪を借用し、うち400坪を能勢又十郎に譲渡して、幕府へは追って正式に相対替を願い出ること、その後は表向きは能勢が白金下屋敷のうち303坪を受け取ったことになるが、辻番などは大村藩で引き続き勤め、市谷の屋敷に関する諸事は能勢が引き受けることが約定された。つまり大村藩は買得で麴町元山王下屋敷を獲得し、能勢への白金下屋敷割譲はあくまでも幕府への届け出上のごことで、実際には市谷の屋敷地を譲渡して、白金の替地は温存したと理解されるのである。以上から寛政10年の相対替もその後3回と同様の内実であったとみられる。なおこのとき届け出上割譲された土地は、文政4年(1821)4月14日、相対替によって能勢から大村藩に再度わたり、最終的には届け出と実際の所持者の一致をみた(表2-⑥)。そしてこれによって大村藩の所持する江戸屋敷は、永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所となった。

このような拝領屋敷地の所有者をめぐる届け出と実態の乖離は、幕府による相対替年限の規制によるものと考えられる<sup>(32)</sup>。しかし天保期末になると、相対替で大村藩が名目上他家へ譲渡した土地に関して、預地という形態での授受が行われるようになる(表4「大村藩白金下屋敷替地所持者変遷」参照)。これは幕府による土地所有者の名実の一致と下級幕臣への下賜地確保のための施策であったと考えられる。具体的には、譲渡地を幕府が上地し預地として大村藩に渡す、またその預地を幕府が再び収公し幕臣に下賜するなど、天保14年(1843)12月25日、嘉永5年(1852)2月11日、安政5年(1858)4月4日、同6年(1859)12月7日、万延元年(1860)11月2日の5回行われ、幕末の白金下屋敷は354坪ほど減少することになった(表3「大村藩江戸屋敷変遷」参照)。

## 第五節 幕末の白金下屋敷

### — 19世紀半ば

大村藩の所持する江戸屋敷は、文政4年、永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所に絞られたが、幕末は両屋敷とも度々の災害に見舞われた。まず弘化2年(1845)1月24日、青山からの出火が飛び火して白金下屋敷の2間梁8間の表長屋1棟を焼いた。拝領当初、周囲に廻らされた堀はある時点で埋め立てられ、長屋が建設されたことがここから判明する<sup>(33)</sup>。

嘉永3年(1850)2月5日、麴町4丁目からの出火により、永田町上屋敷が殿舎・長屋とも全焼した。藩主

純熙は在国中で、その家族は白金下屋敷に避難した<sup>(34)</sup>。上屋敷は、同年4月7日に国許から出府した作事奉行らによって再建に着手され、翌4年(1851)5月26日までに完成、藩主家族はこれと同時に戻ったと考えられ、白金下屋敷での居住は1年3ヶ月ほどだったとみられる。藩主純熙は同年冬の参府から新邸に入ったという<sup>(35)</sup>。そして安政元年(1854)10月12日、今度は白金下屋敷が、西隣の藤堂乗之丞屋敷からの出火により全焼した。藤堂家の屋敷とは「合壁」、つまり塀1枚で隣り合っていたため延焼したという。このとき白金下屋敷に居住していた前藩主純顕夫人整は菩提寺の承教寺へ避難し、その後同人の休息所が上屋敷奥向きに建造され、藩主純熙夫人嘉庸と同居することになった<sup>(36)</sup>。整は安政3年(1856)4月8日に白金下屋敷へ移り住んでおり<sup>(37)</sup>、その殿舎が完成したこと、また整は白金を恒常的な住まいとしていたことが判明する。

白金下屋敷は焼失から1年半という比較的短期のうちに再建された。建設中の安政2年10月2日には安政の大地震に見舞われており、これを勘案すれば非常に迅速といえよう。下屋敷火災当時、上屋敷奥向きには嘉庸のほか、前々代藩主純昌夫人恭容院も居住しており、整が入ることで著しく狭隘化したと推察され、早急に原状回復するため、白金下屋敷の再建が急がれたのであろう。また整が恒常的に住まったことから判断すると、白金下屋敷は隠居屋敷だったと考えられる。整の主人、つまり前藩主純顕は弘化4年(1847)2月11日、持病を理由に27歳の若さで隠居、療養のために帰国した。順快したことから嘉永5年(1852)3月26日に出府するが病が再発、同年11月2日、幕府に帰国療養を願い出て許可されて間もなく江戸を離れ、その後は4年に1度、幕府に在邑の届けを提出して国許に居住した<sup>(38)</sup>。隠居した前藩主は、基本的には江戸居住とされ、純顕は病身でそれが困難なことから国許に住まうことが幕府から許されていたが、嘉永5年の例にみるように、治癒をみれば江戸居住しなければならず、その住まいは整えておく必要があったと考えられ、これも早期再建を促した理由とみられる。

安政2年の大地震時、白金下屋敷が建設中だったことは述べたが、その被害状況は明らかにならない。永田町上屋敷では殿舎・長屋・石垣・塀・土蔵が被害を受け、このうち殿舎奥向きでは嘉庸と恭容院の住居の破損が甚大で、比較的被害の少なかった表居間や庭などに避難したという。整の休息所は新築のためか、さほどの被害はなかったようである<sup>(39)</sup>。また白金下屋敷完成後間もない安政3年8月25日、江戸は激しい風水害(安政の大



風雨)に襲われ、白金下屋敷も被害を受けたというが、状況はまったく不明である。永田町上屋敷では書院など殿舎表向きのおちこちが破損し、長屋 1 棟が倒壊して死傷者が出たという、下屋敷も相当に被災したおそれがある<sup>(40)</sup>。万延元年(1860)7月24日にも大風雨の被害に見舞われたというが具体的な状況は不明である<sup>(41)</sup>。

文久2年(1862)、幕政改革により大名妻子の在府・在国が自由とされたのを機に、大村藩では江戸の妻子らを翌文久3年(1863)3月までにすべて帰国させた。同改革では、大名の江戸参勤も3年ごと100日に緩和されたが、藩主純熙は文久3年から長崎惣奉行に任命されたため、在職中の参勤を免除されていた。翌元治元年(1864)、その職を辞したことから参勤せざるを得なくなり、翌慶応元年(1865)3月に純熙は参府の途に就くが、京都滞在中第2次長州征伐により幕府から九州諸侯へ帰国命令が出されたため、大村へ引き返した。また同年、幕府より大名妻子・嫡子の江戸居住命令が再び発せられ、大村藩ではこれに応じなかったが、純顯夫人整のみは江戸居住を強く望み、慶応2年4月よりその居宅の建設が始まった<sup>(42)</sup>。その場所は不明だが、前例からすると白金下屋敷内であったのではないかと推定される。これ以外は文久3年以降、藩主とその家族が江戸屋敷に居住することはなく、江戸詰家臣も慶応4年(1868)2月15日まではすべて帰国した<sup>(43)</sup>。そして同年8月、明治維新政府によって諸侯の江戸藩邸が没収されることになり、これを受けて永田町上屋敷・白金下屋敷、ともに大村藩の手を離れたとみられる。

### 第三章 白金下屋敷の土地利用

#### 第一節 白金下屋敷利用の画期

大村藩江戸屋敷の所持状況は、概ね表3「大村藩江戸屋敷変遷」のように、備前町、続く永田町上屋敷と白金下屋敷の2ヶ所の屋敷を基本としていた。機能としては藩主居屋敷は備前町、そして永田町上屋敷、その補助屋敷としての白金下屋敷、と位置づけられていたと考えられる。白金下屋敷の場合、災害時の避難屋敷としての利用はもちろんだが、隠居屋敷の機能を果たした時期が何回かあったことは変遷にみたとおりである。

白金下屋敷の利用に関して特に注目したいのは、寛政6年(1794)3月の備前町から永田町への上屋敷替地時である。永田町の屋敷地拝領後、建築はしばらく見送られ、当面白金下屋敷が藩主居屋敷とされた。そして永田町の新邸は着工までに2年以上、それから完成までに3年半以上を費やし、拝領から藩主移徙まで通して約6

年を要し、その間白金下屋敷が藩主居屋敷としての機能を負ったのである。このことによって白金下屋敷は以下のような変化を来たことが推定しうる。すなわち「御殿空間」は藩主在府時の恒常的な生活の場になるとともに、書院などの儀式空間や政務全般を執行する役所向きなど必要な施設が増設され、「詰人空間」でも従来居住していた藩士に上屋敷居住だったものが加わることになり、そのための長屋が増築されたとみられる。つまり「御殿空間」・「詰人空間」とも、多くの建物を新築・増設する必要が生じたと考えられるのである。

そこで想起されるのが発掘調査によって検出された版築の遺構である<sup>(44)</sup>。屋敷地東側、谷の入りこんだ部分を高上げて西側と同じ高さの平場にするため構築されたもので、その土中に「寛政年製」銘の陶磁器底部片など、18世紀末頃のものと思われる陶磁器類を多く包含することから、そのころに行われたと推定されている。前述のように白金下屋敷は、地形的に南から北へ傾斜するため屋敷地として利用しにくい場所があった。居屋敷化に伴い、建物を新築・増設する用地を新たに確保する必要から、これまで利用されずにあった傾斜地部分を版築によって平坦にし、屋敷地への転換を図ったものと考えられる。18世紀末という構築時期からも、居屋敷化との関連性は間違いなからう。しかもこのとき、従来あった掘立柱建物が埋め立てられたという指摘もあり、建物配置など白金下屋敷全体の平面構成が大きく見直された可能性も考えられる。版築によって造成された土地も含めた、新たな屋敷地利用が計画、実行され、18世紀末、白金下屋敷の利用は、大きな画期を迎えたと推定されるのである。

#### 第二節 相対替用地としての白金下屋敷

白金下屋敷の土地利用ではもうひとつ、相対替用地としての利用を考えなければならない。敷地ごとに所有者の変遷を整理したのが表4「大村藩白金下屋敷替地所持者変遷」である。図3によれば、相対替の替地とされて大村藩から他家へわたったのは、名目上のものを含めて、白金下屋敷の北東角のⅠ・Ⅱ・Ⅲおよび北西角のⅣ・Ⅴで、すべて北側を東西に走る道Aに面していることがわかる。

このうち北西角のⅣに関しては、道沿い(東西)10間、奥行き(南北)5間と判明する<sup>(45)</sup>。これに隣接するⅤはⅣ同様50坪、また図3によれば奥行きも同じで、したがって図4に書き入れたような範囲を占めたと推定される。一方北東角についてみると、図4で316番地と317番地を隔てるラインは、替地と白金下屋敷の境

界の名残とみられ、Ⅲ西側の境界線を南へ延長したものが316・317番地を隔するラインとなる。図4によれば317番地の道沿いは約45.5メートル＝25.2間ほど、またⅠ・Ⅱ・Ⅲの坪数合計は954坪であることから単純計算すると奥行きは約38間となる。ただしⅠ・Ⅲの奥行きは等しいがⅡの敷地はL字型を呈しており、仮にⅠ・Ⅲの奥行きを30間と想定した場合にⅠ・Ⅱ・Ⅲの各坪数の辻褃が合うことから、おそらく図4に記入したような範囲を占めたものと考えられる。

これに基づいて、それぞれの敷地がどのような地形であったかを考えてみたい。まず屋敷地北東角から、Ⅰは途中2つに分割され、特に東側の内藤家の敷地は急勾配を示し、西側の小林家の所有地も傾斜地で、いずれも屋敷地としては利用しにくかったであろう。内藤家の居屋敷は裏二番町に500坪で、白金今里村200坪は「地守附置」と記されている<sup>(46)</sup>。小林家は小川町水道橋通400坪の拝領屋敷を所持、弘化4年(1847)9月には相対替で小石川門内土手通415坪に移っており、これが居屋敷だったと考えられる<sup>(47)</sup>。Ⅱの敷地はL字型を呈し、ⅠとⅢに挟まれた部分の傾斜は緩やかだが、Ⅰの南側は南東方向に急勾配しており屋敷地に利用するのは困難である。表4のように嘉永5年、早川鉄五郎がこの土地304坪を幕府から受け取った際、拝領屋敷は200坪で、残りの104坪は預地とされた。幕府は、急傾斜地(「崖なだれ」などと呼称)に関しては拝領屋敷とは別に預地として渡す例が多くみられ、この場合も地形的にみて南側が預地104坪、ⅠとⅢの間が拝領地200坪だったと推定される。Ⅲも傾斜地で屋敷地には不向きであったといえよう。所持者の三浦源太夫は山本数馬拝領屋敷四谷大原町200坪を借用して居屋敷としていたらしい<sup>(48)</sup>。次に北西角について、Ⅳは全体的に平坦で屋敷地としての利用は可能だろうが、Ⅴは傾斜部分にかかっており利用しにくかったことが察せられる。Ⅴを所持した高木家は交代寄合4000石で、牛込神楽坂上1,411坪を居屋敷とし、また拝領下屋敷として深川海辺新田1,706坪も所持していたことが判明する<sup>(49)</sup>。

以上から、白金下屋敷のうち替地に利用された部分はほとんどが急な傾斜地で、屋敷地としての利用が困難な場所だったことが指摘される。各敷地の所持者の多くは別に居屋敷を所持していたこともあり、白金の敷地は居住するために獲得されたものではなかったといえる<sup>(50)</sup>。

おわりに

本稿では大村藩江戸屋敷のうち、白金下屋敷の立地条件や空間構造、居住者や利用の変遷について、関連する文献や絵図・地図など各種資料に基づいて記述した。屋敷絵図や江戸での動静を具体的に知りうる史料がほとんどないため、多くを推定に拠らざるを得なかったが、最後に白金下屋敷の土地利用から示唆をうけた課題をひとつ示して結びたい。

大村藩では、屋敷地としての利用が困難な部分を相対替の替地に充てたと窺われた。これは相対替の実態の一端を示す事例として興味深い。では相対替後、その替地はどのように利用されたのか。大村藩は名目のみ他家へ譲渡した場所をどのように利用したのか、また替地として傾斜地を受けとった場合はどう利用したのか、という点はいまだ明らかになっていない。さらにその替地は幕府によって収公や再下賜されることもあり、また預地とされる場合もあった。以上のような幕府の土地政策も含めて、替地とされた、屋敷地に不向きな土地の利用の実態を明らかにしていく必要がある。これは武家屋敷のみならず、都市江戸の土地利用を考えるうえでも、ひとつの論点となりうると考える。

#### 【補註】

- (1) 大村藩の参勤交代については「純庸公御代々百日御暇御免許之事」(藤野保編『大村見聞集』高科書店、1994年、958～62頁、以後『見聞集』958～62と略す)による。
- (2) 「備前町御屋敷之事、附屋敷図之事」(『見聞集』77～80)。現在の港区西新橋1丁目附近に所在し、のちに添地で隣接することになる「佐久間小路」や周辺一帯の呼称である「愛宕下」、また近隣の町人地「久保町」などを冠して呼ばれることもある。藤野保氏によれば『見聞集』の内容の下限は文化年中とされ、このころにはすでに拝領年月が不明だったということである。慶長10年(1605)、2代藩主純頼の世子時代、伏見で徳川家康・秀忠父子に初拝謁したのち、家康に供奉して江戸に赴いたときの滞在先は不明で、江戸屋敷は未拝領だったと考えられる。
- (3) 以下の本章の記述は概ね「白金御下屋敷并牛込之事、附湯島御屋敷之事」(『見聞集』81～84)に依拠し、その他による場合のみ註を付す。
- (4) 一般的な屋敷地拝領の方法と手順については、宮崎勝美「江戸の土地—大名・幕臣の土地問題」(吉田伸之編『日本の近世』第9巻、中央公論社、1992年)137～40頁を参照されたい。また特に寛文期の下屋敷拝領に関しては金行信輔「寛文期江戸における大名下屋敷拝領過程」(『日本建築学会計画系論文集』第516号、1999年)が詳しい。金行氏によれば、大名家は拝領を希望する土地にまず「望杭」

- を打ってその意思表示をしてから、幕府に希望地の絵図を提出したという。
- (5) 「(屋敷届ノ儀ニ付書状)」(大村市立史料館所蔵大村家史料106-31)。
- (6) 『東京市史稿』市街篇第7(臨川書店、1994年復刻版)、1208～10頁。
- (7) 「白金村下屋敷請取事」(「大村家覚書」卷之七、大村市立史料館所蔵、東京大学史料編纂所所蔵写真帳を使用、以下「覚書」七、と略す)。なお、この条は日付が寛文元年3月21日とされているが、他史料との比較から、寛文2年の誤記と考えられる。
- (8) 『御府内備考』第一(雄山閣出版、1967年)
- (9) 「上屋敷火災之事」(「覚書」七、明暦3年1月18日条)。
- (10) 『東京市史稿』市街篇第4(臨川書店、1994年復刻版)、122～23頁。なお本稿で参照する絵図資料は概ね『5千分の1江戸-東京市街地図集成-1657(明暦3)年～1895(明治28)年-』(柏書房、1988年)に収録されている。
- (11) 白金下屋敷の南側に下屋敷を拝領した徳島藩蜂須賀家の場合、幕府内での情報収集に非常に苦慮した様子が窺われる。詳しくは註(4)金行論文参照。
- (12) 国文学研究資料館史料館所蔵阿波蜂須賀家文書1269。これは拝領の出願に伴い幕府に提出された絵図の控えと考えられ、前節で記した白金下屋敷拝領の出願時に伊丹勝長が老中稲葉正則に提出した絵図もこのようなものだったと考えられる。なお絵図の内容年代等は註(4)金行論文に拠った。
- (13) 吉田伸之「近世の城下町・江戸から金沢へ」(『週刊朝日百科日本の歴史・別冊歴史の読み方2・都市と景観の読み方』朝日新聞社、1988年、所収)。
- (14) 本章の記述は概ね「備前町御屋敷之事、附御屋敷図之事」・「永田町御屋敷之事」・「白金御下屋敷并牛込之事、附湯島御屋敷之事」(『見聞集』77～84)に依拠し、その他による場合のみ註を付す。
- (15) 「上屋敷類焼之事」(「覚書」七、寛文8年2月1日条)。
- (16) 『九葉実録』第一冊(大村史談会、1994年)、39頁、寛文11年1月23日条。
- (17) 「純真在所住居之事」(「覚書」八、元禄2年月日不詳条)。白金下屋敷を出立した日には判明しないが、9月25日に帰国していることから、8月下旬には江戸を発ったと考えられる。
- (18) 「下屋敷辻番所之事」(「覚書」八)。
- (19) 『九葉実録』第二冊(大村史談会、1995年)43頁。
- (20) 『同』第二冊、46頁。
- (21) 『同』第二冊、52頁。
- (22) 『同』第二冊、75頁。
- (23) 「下屋敷類焼之事」(「覚書」十三)。
- (24) 寛延3～明和2年には、純庸夫人長松院(紋)・純富夫人正寿院(恵津)・純保夫人秀が、安永6～天明6年には正寿院・真如院(秀)・純鎮夫人留、が江戸屋敷に居住していた。なお、純庸は隠居後大村に帰国したが、隠居・世子は江戸居住が幕府が定めた基本方針であり、藩はその屋敷を確保しておかなければならなかったとみられる。
- (25) 「江戸屋敷火災之事」(「覚書」十四)。
- (26) 「上屋敷坪数書出之事」(「覚書」十)・「上屋敷坪数加入之事」(「同」十二)。
- (27) 「下屋敷住居之事」(「覚書」十四)。
- (28) 『九葉実録』第二冊、354頁。
- (29) 「永田町屋敷引移之事」(「覚書」十四)。
- (30) 安政3年(1856)頃に幕府屋敷改が作成した「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第14巻、汲古書院、1982年、62頁)では、当初拝領の3,600坪に相對替による獲得地を合せた5,049坪が永田町上屋敷の坪数として記載され、実質的に両者は一体に把握されていたようである。
- (31) 「白金下屋敷切坪相對替、上屋敷坪数加入之事」(「覚書」十七、天保3年8月13日条)・「白金下屋敷切坪相對替、上屋敷坪数加入之事」(「同」十七、同5年8月25日条)・「白金下屋敷切坪相對替、上屋敷坪数加入之事」(「同」十八、同8年8月11日条)。このうち天保3年の相對替では河内に引料金200両支払ったことが判明、同5・8年にはそれぞれ石川・村上へ、金額は不明だが引料を支払ったことが明記されている。
- (32) 相對替年限の制限については宮崎勝美「江戸の武家屋敷地」(吉田伸之編『日本の近世』第9巻、中央公論社、1992年、所収)参照。
- (33) 屋敷周りの堀を埋め立てて囲い込んだ例は安永8年(1779)8月、武蔵忍藩主阿部氏の蛸殻町中屋敷があり、屋敷地不足が問題化すると諸藩で同様のことが行われたと推察される。
- (34) 「永田町上屋敷類焼之事」(「覚書」二十)。
- (35) 「永田町上屋敷作事成就の事」(「覚書」二十)。これによれば「翌年(嘉永四年—引用者註)五月廿六日迄に成就、同冬參勤の節より新屋敷に着府」とあり、純熙の參勤は「同冬」すなわち嘉永4年10～12月に參府したことになる。嘉永年間には諸史料を欠き、純熙參勤の正確な年月日を知ることができない。森崎兼広「大村藩の參勤交代表(江戸後期)」(『大村史談』50、1999年)は出府・帰国の順当なサイクルを想定し、嘉永2年4月帰城・翌3年10月大村発とするが、「覚書」には前述のように記され、また当時江戸の屋敷は過密な状況にあり、下屋敷が藩主居屋敷となる状態になかったことが察せられ、嘉永3年10月の參府は上屋敷の成就まで控えられた可能性がある。

- (36) 「白銀下屋敷類焼之事」(「覚書」二十一)・『九葉実録』第五冊(大村史談会、1996年)128～29頁。
- (37) 『九葉実録』第五冊、146頁
- (38) 「在所住居之事」(「覚書」十九、弘化4年3月5日条)・『九葉実録』第五冊、96頁
- (39) 「江戸地震、上下屋敷破損之事」(「覚書」二十一)・『九葉実録』第五冊、140～41頁。
- (40) 「江戸大風雨、居屋敷・下屋敷所々破損之事」(「覚書」二十一)・『九葉実録』第五冊、151頁
- (41) 『九葉実録』第五冊、193頁。
- (42) 『九葉実録』第五冊、63頁
- (43) 『東京市史稿』市街篇第48、750頁。
- (44) 調査内容に関する記述は「東京大学白金構内遺跡 医学研究所附属病院診療棟・総合研究所地点発掘調査略報」に拠った。
- (45) 『東京市史稿』市街篇第45、319頁
- (46) 「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第14巻)448頁。
- (47) 『東京市史稿』市街篇第42、249頁。
- (48) 小川恭一編著『寛政譜以降旗本家百科事典』第5巻(東洋書林、1998年)、2919頁「山木兵庫勝茂」の項・「諸向地面取調書」333頁。
- (49) 「諸向地面取調書」(『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第15巻、汲古書院、1982年)769頁。
- (50) ただしIVに関しては、当初は完全な名目上の譲渡であったが、途中から小禄の幕臣に与えられており、屋敷地としての利用にも耐える土地であったことから、実際の居住があった可能性もある。

【付記】

本稿の作成にあたり、大村市立史料館、学習院大学史料館のみなさんに大変お世話になりました。また大村家御子孫の勝田直子氏には貴重なご教示をいただきました。末尾ながら感謝致します。

2003年3月31日

(本稿は、『東京大学構内遺跡調査研究年報』4(東京大学埋蔵文化財調査室2004)に掲載した同名論考を修正の上、再録したものである。)

表 1 大村藩主一覧

代	藩主名(読み) 諡号等	生年月日 生誕地	家督相続年月日 (養子年月日)	隠居年月日	没年月日 没地	父 母	正室→継室
1	大村喜前(オモリ) 顯性院	永禄12(1569). -. - 大村	天正15(1587). 6. -	元和11(1615). 春	元和12(1616). 8. 8 大村	大村純忠(円通院) 西郷純久女(円明院)	有馬義純女(能生院)
2	大村純頼(タシロ) 涅槃院	文禄1(1592). -. - 大村	元和11(1615). 5. 1	—	元和5(1619). 11. 13 大村	大村喜前 有馬義純女	大村頼直女加良(寿徳院)
3	大村純信(タシブ) 常照院	元和4(1618). 10. 9 大村	元和16(1620). 5. 15	—	慶安3(1650). 5. 26 江戸	大村純頼 大村頼直女加良	伊丹勝長女松(究竟院)
4	大村純長(タシガ) 顯了院	寛永13(1636). 8. 21 江戸	慶安4(1651). 2. 20 (慶安3(1650). 5. -)	—	宝永3(1706). 8. 21 江戸	伊丹勝長(幻泡院) 井上加賀右衛門女(見塔院)	大村政直女都智(松寿院) →有馬康純女亀(幸運院)
5	大村純尹(タシマ) 寛長院	寛文4(1664). 3. 21 江戸	宝永3(1706). 10. 29	—	正徳2(1712). 10. 14 江戸	大村純長 有馬康純女亀	織田信久女蝶(玄収院)
6	大村純庸(タシツ) 元通院	寛文10(1670). 1. 13 大村	正徳2(1712). 12. 7 (宝永7(1710). 5. 25)	享保12(1727). 閏1. 9	元文3(1738). 5. 13 大村	大村純長 相沢氏女キウ(円了院)	なし
7	大村純富(タシチ) 慈光院	正徳1(1711). 4. 5 江戸	享保12(1727). 閏1. 9	—	寛延1(1748). 11. 21 大村	大村純庸 諸星氏女紋(長松院)	本多正武女惠津(正寿院)
8	大村純保(タシヒ) 高耀院	享保16(1731). 2. 22 大村	寛延1(1748). 12. 27	—	宝暦10(1760). 12. 24 江戸	大村純富 笹井氏女恵和(清容院)	植村家敬女秀(真如院)
9	大村純鎮(タシチ) 濬哲院	宝暦9(1759). 8. 20 江戸	宝暦11(1761). 2. 16	享和3(1803). 1. 23	文化11(1814). 7. 16 大村	大村純保 植村家敬女秀	松平容頌養女留(離縁)
10	大村純昌(タシキ) 崇謙院	天明6(1786). 1. 25 大村	享和3(1803). 1. 23	天保7(1836). 11. 23	天保9(1838). 10. 5 大村	大村純鎮 鉤氏女八重(敬任院)	亀井矩賢女民(幹・律)(恭容院)
11	大村純頼(タシロ) 慈徳院	文政5(1822). 11. 5 大村	天保7(1836). 11. 23	弘化4(1847). 2. 21	明治15(1882). 4. 2 大村	大村純昌 福田頼之妹仙(心月院)	溝口直清妹菊(離縁) →秋田肥季妹整(道)(寛亮院)
12	大村純熙(タシロ) 建国勲彦命	天保1(1830). 11. 21 大村	弘化4(1847). 2. 21 (弘化3(1846). 2. 23)	—	明治15(1882). 1. 12 東京	大村純昌 福田頼之妹仙	片桐貞照養叔母嘉庸(慈照院)

『寛政重修諸家譜』(続群書類完成会)、『見聞集』・「大村家覚書」・「大村家譜」(以上、東大史料編纂所所蔵写真帳)、『九葉実録』(大村史談会)より作成

表2 大村藩江戸屋敷関係相対替一覧

年(西暦)月日 [出典]	旧所持者	相対替先
①宝暦9年(1759) 7月1日 [市史稿26-513]	井関玄説拝領屋敷愛宕下佐久間小路 大村弾正少弼屋敷隣961坪 大村弾正少弼拝領屋敷白金村5,600坪の内500坪 小林惣兵衛拝領屋敷三番町391坪	大村弾正少弼(純保) 書院番稲葉紀伊守組 小林惣兵衛(正房) 寄合医師 井関玄説
②寛政2年(1790) 11月11日 [市史稿30-811]	土井兵庫頭拝領中屋敷塀殻町2,768坪余 酒井徳太郎拝領屋敷湯島天神下1,866坪余 永井彦兵衛拝領屋敷四ッ谷内藤宿千駄谷1,250坪 大村信濃守拝領下屋敷白銀今里村5,100坪の内304坪	酒井徳太郎(忠道) 大村信濃守(純鎮) 土井兵庫頭(利制) 書院番長谷川丹後守組 永井彦兵衛(尚庸)
③寛政10年(1798) 4月25日 [市史稿32-413]	内藤弥左衛門拝領屋敷麴町元山王下500坪 能勢又十郎拝領屋敷裏六番町565坪の内324坪余 浅井肥後守拝領屋敷表式番町541坪 大村信濃守拝領下屋敷白銀今里町4,796坪の内303坪	大村信濃守(純鎮) 寄合 浅井肥後守(忠郷) 西丸小性組南部肥前守組 内藤弥左衛門(信幅) 小普請組堀田主膳支配 能勢又十郎(頼廉)
④寛政12年(1800) 6月18日 [市史稿32-800]	松平信濃守拝領屋敷市谷薬王寺前460坪の内260坪 溝口相模守拝領屋敷木挽町築地300坪 大村信濃守拝領下屋敷湯島天神下1,866坪余の内1,500坪	大村信濃守(純鎮) 書院番 松平信濃守(忠明) 小普請組支配 溝口相模守(直旧)
⑤文化7年(1810) 8月27日 [市史稿34-130]	溝口備後守拝領屋敷市谷薬王寺前1,000坪 大村上総介拝領下屋敷湯島天神下366坪余	大村上総介(純昌) 中奥小性 溝口備後守(直道)
⑥文政4年(1821) 4月14日 [覚書巻16]	大村上総介拝領下屋敷市谷薬王寺前1,260坪 能勢主水拝領屋敷白金今里村303坪 尾張殿下屋敷内藤宿12,929坪の内400坪	尾張徳川齊温 大村上総介(純昌) 小普請組内藤十次郎支配 能勢主水
⑦文政10年(1827) 5月29日 [市史稿36-556]	花房勘右衛門拝領屋敷麻布古川町510坪 内藤兎八郎拝領屋敷表式番町541坪 渡辺源太郎拝領屋敷白金今里村500坪 植村駿河守拝領下屋敷麻布古川町4,988坪余の内200坪	植村駿河守(家長) 御小納戸 花房勘右衛門 御小性組溝口筑前守組 内藤兎八郎 小普請組久世伊勢守支配 渡辺源太郎
⑧天保3年(1832) 9月23日 [覚書巻16/ 市史稿37-630]	河内長左衛門拝領屋敷麴町元山王213坪 大村丹後守拝領下屋敷白金今里村4,795坪の内150坪	大村丹後守(純昌) 小普請組中山信濃守支配 河内長左衛門
⑨天保5年(1834) 8月29日 [覚書巻16/ 市史稿38-148]	石川次郎太郎拝領屋敷麴町元山王下236坪 大村丹後守拝領下屋敷白銀今里村4,646坪の内50坪	大村丹後守(純昌) 大番小笠原弾正少弼組与頭 石川次郎太郎
⑩天保8年(1837) 9月1日 [市史稿38-651]	村上友之助拝領屋敷麴町元山王下500坪 大村丹後守拝領屋敷白銀今里村4,596坪の内50坪 植村七三郎拝領屋敷浅草新堀端540坪 高木帯刀拝領屋敷牛込神楽坂1,651坪余の内240坪余 長尾小兵衛拝領屋敷渋谷筈橋220坪余の内110坪余 長尾小兵衛拝領屋敷渋谷筈橋220坪余の内110坪余 前嶋逸作拝領屋敷四谷内藤宿新屋敷104坪余 菊地大助拝領屋敷本郷御弓町壱岐坂上200坪 石原正之助拝領屋敷本所壱ツ目松井町100坪 前田右近拝領下屋敷神田佐久間町式丁目725坪の内200坪 勝屋璋太郎拝領屋敷本所南割下水三笠町400坪余 坂井内蔵允拝領屋敷四谷内藤宿裏番衆町200坪	大村丹後守(純頭) 寄合 高木帯刀 西丸書院番高力丹波守組 村上友之助 小普請組藤懸采女支配 植村七三郎 表高家 前田右近 小普請組長井五右衛門支配 石原正之助 天守番 長尾小兵衛 西国郡代寺西蔵太手附普請役格 前嶋逸作 小普請組久留十左衛門組 菊地大助 小普請組戸塚備前守支配 坂井内蔵允 小普請組戸塚備前守支配 勝屋璋太郎
⑪天保9年(1838) 12月29日 [市史稿38-843]	三浦源太夫拝領屋敷青山権田原千日坂上250坪 大草弥三郎拝領屋敷麴町元山王250坪 河内左京拝領屋敷麻布白金今里村150坪	大御番戸田淡路守組 大草弥三郎 戸田隼人正組 河内左京 細川長門守与力 三浦源太夫
⑫天保14年(1843) 12月23日 [市史稿40-873]	新村和三郎拝領屋敷裏式番町500坪余 小林勝蔵拝領屋敷小川町水道橋内589坪の内189坪 内藤熊太郎拝領屋敷麻布白金今里村500坪の内300坪	小普請組深谷遠江守支配 内藤熊太郎 大岡兵庫支配 新村和三郎 諏訪若狭守支配 小林勝蔵

出典凡例：市史稿…『東京市史稿』市街篇、巻数-頁

覚書…「大村家覚書」(大村市立史料館所蔵、東京大学史料編纂所所蔵写真帳)

表3 大村藩江戸屋敷変遷

藩主	屋敷名 年代(西暦)	外桜田備前町 (上屋敷)	永田町(上屋敷) (※廻町元山王下)	白金今里村 (下屋敷)	湯島天神下 (下屋敷)	市谷薬王寺前 (下屋敷)	牛込 (不詳)	深川 (抱地)
喜前	慶長末	+1,935						
	純頼 1615 (元和 1)							
純信	1640 (寛永 17)	火						
純長	1657 (明暦 3)	火					(坪数不明)	
	1661 (寛文 1)			+5,600				
	1668 (寛文 8)	火						
	1680 (延宝 8)	+783.8						
	1689 (元禄 2)							
純尹	1705 (宝永 2)							
	1707 (宝永 4)							+3,000
純富	1731 (享保 17)	火						
	1733 (享保 18)			火				
	1740 (元文 5)							
純保	1757 (宝暦 7)	火						
	1759 (宝暦 9)	+961		-500				
純鎮	1772 (明和 9)			火				
	1790 (寛政 2)			-304				
	1791 (寛政 3)				+1,866			
	1794 (寛政 6)	火/+3,680.2	+3,600					
	1796 (寛政 8)					+1,000/-400		
純昌	1798 (寛政 10)		+500※	-303				
	1800 (寛政 12)				-1,500	+260		
	1810 (文化 7)				-366	+1,000		
	1821 (文政 4)			+303		-1,260		
	1824 (文政 7)		火					
純顕	1832 (天保 3)		+213※	-150				
	1834 (天保 5)		+236※	-50				
	1837 (天保 8)		+500※	-50				
	1843 (天保 14)			+50/+304				
純顕	1845 (弘化 2)			火				
	1850 (嘉永 3)		火					
	1852 (嘉永 5)			-304				
	1854 (安政 1)							
	1856 (安政 3)			火				
	1858 (安政 5)			-50				
	1859 (安政 6)			+50				
	1860 (万延 1)			-50				

凡例：火は火災／「+」は拝領や添地、相對替などによる坪数増、「-」は土地や相對替による坪数減を表す

表4 大村藩江白金下屋敷替地所持者変遷

年月日 (出典)	白金下屋敷	I	II	III	IV	V
寛文元(1661)年 12月15日 (市街7-1206~)	5,600坪					
宝暦9(1759)年 7月晦日 (市街26-513~)	5,100坪	小林惣兵衛 500坪				
宝暦9年8月1日~ 明和4(1767)年 10月21日		渡辺源太郎 500坪				
寛政2(1790)年 11月11日 (市街30-811~)	4,796坪		永井彦兵衛 304坪			
寛政10(1798)年 4月25日 (市街32-413~)	4,493坪			能勢又十郎 303坪		
文政4(1821)年 4月 (沿革図書)	4,796坪					
文政10(1827)年 5月 (沿革図書)		内藤免八郎 500坪				
天保3(1823)年 9月23日 (市街37-630~)	4,646坪			河内長左衛門 150坪		
天保5(1834)年 8月29日 (市街38-148)	4,596坪				石川次郎太郎 50坪	
天保8(1837)年 9月1日 (市街38-651~)	4,546坪					高木帯刀 50坪
天保9(1838)年 12月29日 (市街38-843~)				三浦源大夫 150坪		
天保14(1843)年 6月14日 (市街40-499)	4,850坪					
天保14(1843)年 12月25日 (市街40-849~)	4,850坪+ 預地50坪					
天保14(1843)年 12月27日 (市街40-876)		内藤頼太郎 200坪	小林勝藏 300坪			
嘉永5(1852)年 2月1日 (市街43-413)	4,546坪+ 預地50坪		早川鉄五郎 200坪+ 預地104坪			
安政5(1858)年 4月4日 (市街45-319~)	4,546坪				鈴木藤吉郎 50坪	
安政6(1859)年 12月7日 (市街45-955~)	4,546坪+ 預地50坪					
万延元(1860)年 11月2日 (市街46-204)	4,546坪				平瀬郁三郎 50坪	

『東京市史稿』市街篇第1~48・『御府内場未往還其外沿革図書』より作成



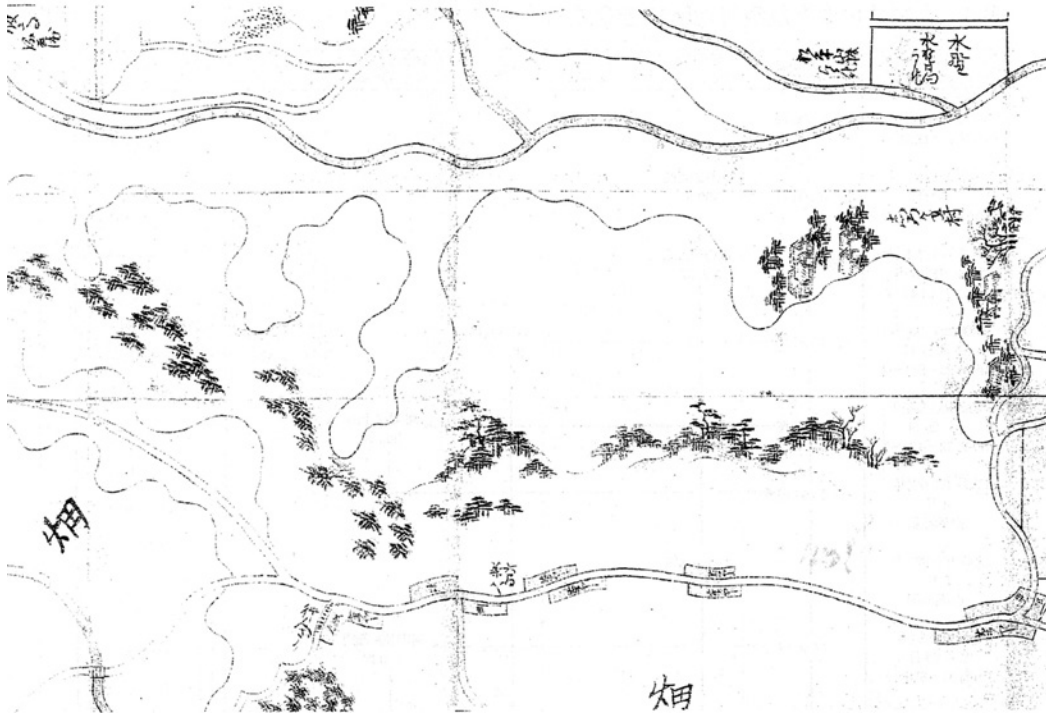


図1 明暦3年(1657)頃の白金村周辺(公益財団法人三井文庫所蔵「江戸大絵図」、部分)

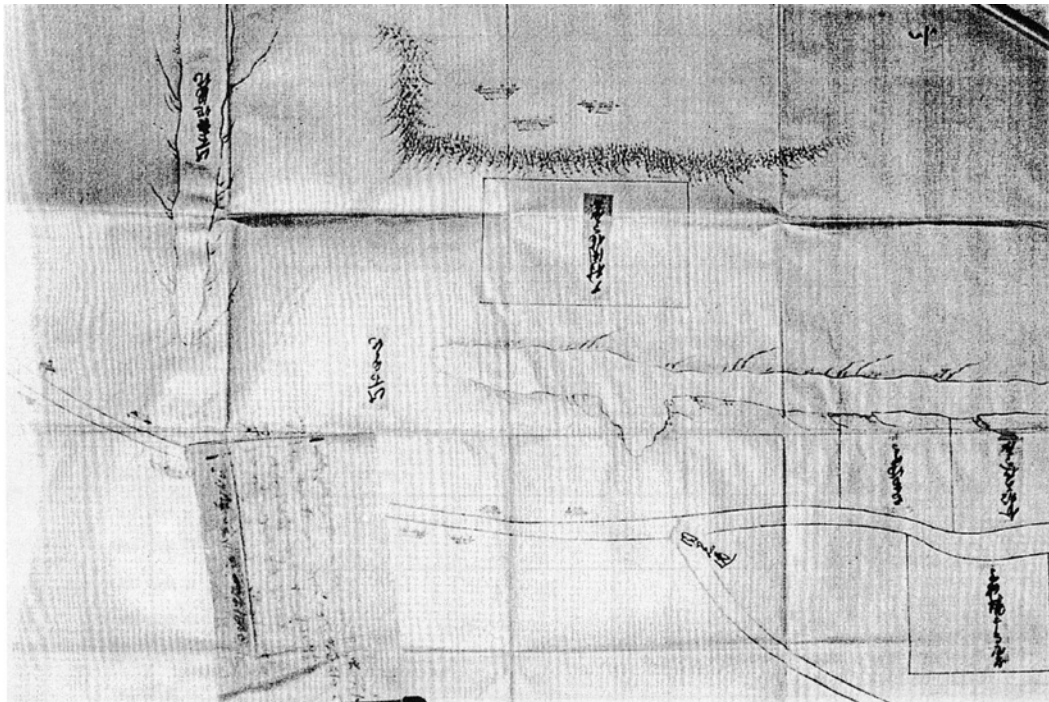


図2 「御望屋舗之絵図」(国立国文学研究資料館史料館所蔵)にみる白金下屋敷周辺

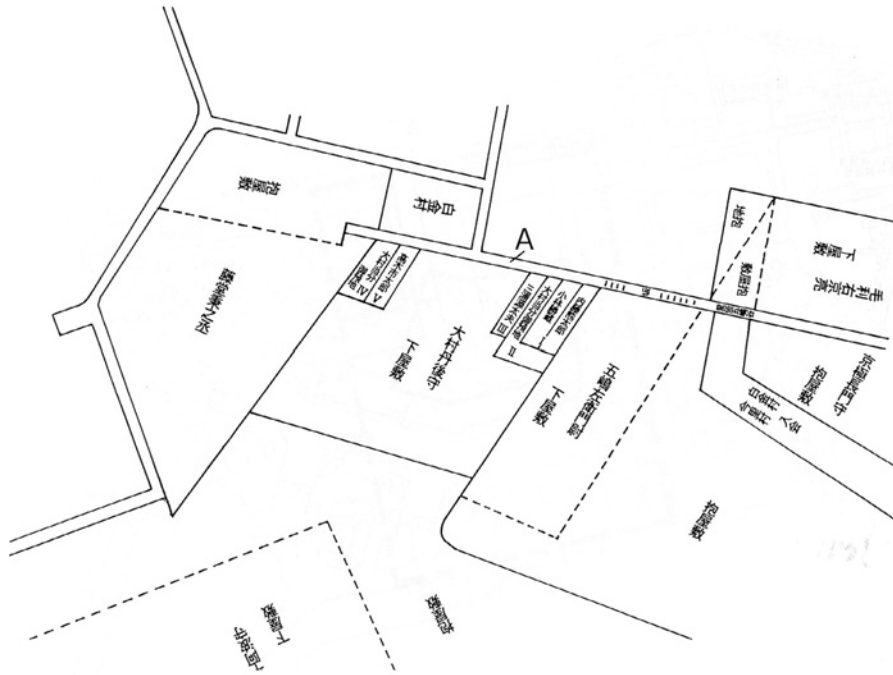


図3 「御府内場末往還其外沿革図書」(国立国会図書館所蔵) 白金下屋敷周辺(トレース図)

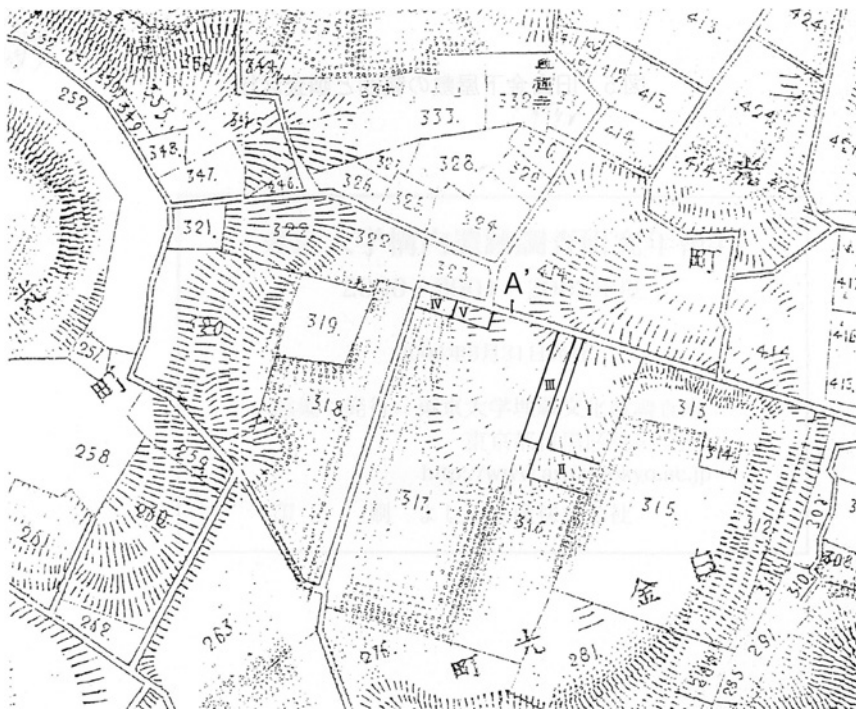


図4 「東京実測全図」(明治28年)にみる旧白金屋敷周辺(一部加筆)

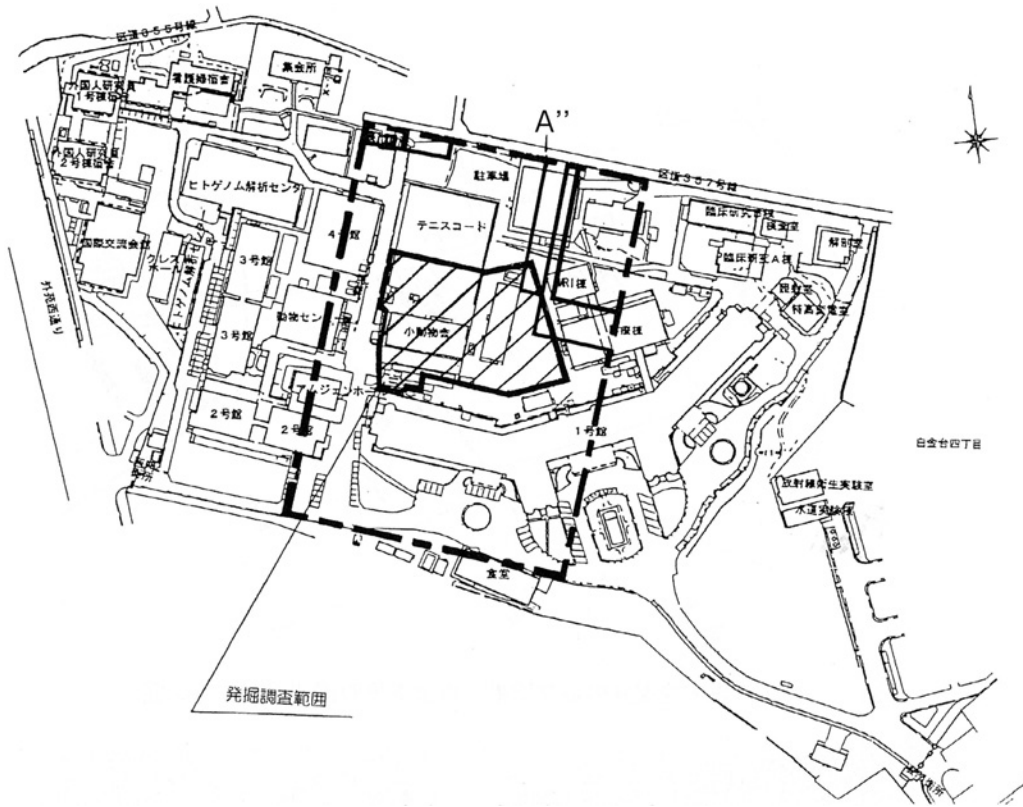


図5 旧白金下屋敷の範囲と調査区域



# 出土したレンガ基礎遺構

堀内秀樹

## はじめに

白金台構内医科学研究所附属病院 A 棟地点からは、旧伝染病研究所に伴う建物基礎、配管などの遺構と医療関連の遺物が出土していた。しかし、発掘調査時には調査の主眼を近世以前としていたこと、出土資料に今日的に言う医療廃棄物が含まれていたことによる危険を避ける意味で、十分な調査と資料化を行うことができなかった。ここでは、上記の限られた資料の中で確認できた近代の建築物と基礎について資料提示をしたい。

## 1. 確認された建物遺構

確認された近代の建物は、その痕跡を含めて建物 1～5 と命名した 5 棟である (1 図)。以下、建物 1 から順を追って触れていきたい。

### (1) 建物 1 (1～5 図)

建物 1 は、調査区北東部から確認された、長方形の南側に突き出しを持つ形状の建物で、基礎外側の測量で、東西 22.6m、南北 10m、南側の張出部が南壁から東西 7m、南北 2.7m であった。建物の位置は西から東 (谷) へ落ちる緩斜面に位置し、地形によって基礎の構築方法も異なっていた。標高が高い建物西側では、建物隅から東に 2.2m までは関東ロームを溝状(布基礎)に掘り込み、いわゆる捨てコンと呼ばれるコンクリートによる根固めを約 50cm 行った上に、レンガを 10 段程度積み上げている (2 図)。それ以東の基礎は、柱状にコンクリート基礎を立ち上げ、各柱の上部に連絡するようにレンガをアーチ状に組んだ構造をしている。コンクリートの柱は、基部をロームまで掘り込み、数十 cm の捨てコンを流した中央に直立して柱状に立ち上げている (3、4 図)。柱表面は 20cm 強の幅で垂直方向に板の痕跡が確認され、柱範囲を板で巡らせ、周囲を埋めて柱範囲にコンクリートを流し込んで作ったと推定される (5 図)。柱上部はアーチ状にレンガを積みやすくするために、隅を 60～70cm 程度斜めに落としている。アーチのレンガは小口面を縦にして 4 段積み、最上段の頂部以上に基礎部分のレンガがいわゆるイギリス積みで積まれている。南側中央に建物入り口と思われる張り出しが設けられているが、基礎構造は本体部分と同様である。また、建物内にも同様の基礎が確認されたが、レンガの積み方などの詳

細は不明である。

### (2) 建物 2 (1、6、7 図)

建物 2 は、調査区南東側、建物 1 の南側に同一主軸方位で位置している。建物は約 17m 四方の方形を呈している。建物の位置は、建物の位置は西から東へ落ちる緩斜面から谷底にかかる部分に位置し、地形によって基礎の構築方法も異なっていた。ただ、建物 1 と比較すると、基礎幅が細く、レンガの積み方なども簡易な構造であった (7 図)。標高の高い西側では布堀状の溝にコンクリートを薄く流し、その上に 2～3 段のレンガを積み上げていたが、上部の状況はその後の削平によって壊され、不明である。谷底にかかる部分では、布堀状の溝の溝底から等間隔にレンガ長手面 2 個四方の柱を基礎としている (6 図)。各柱間上部はレンガをアーチ状に組み上げている。また、これは建物荷重との関係と推定しているが、基礎の最西側は、ローム中に基礎を作り出しているが、SK207 内や東側の基礎は、ローム面まで掘り下げしていない。

### (3) 建物 3 (1、6、8 図)

建物 3 は、調査区南東隅谷底付近に位置している方形の建物である。東側が調査区域外にあり、建物全体の様子はうかがえない。遺存している建物規模は、おおそ東西 8m、南北 7m で、建物主軸は建物 1、2 よりやや北方に寄っている。建物基礎は、西側と東側で異なっており、西側建物は、建物 2 東側と同様の構造で、布堀後に柱心で約 2.5m 間隔で方形に掘り下げ、レンガ柱を据え付ける基礎としている。東側の建物は長方形を呈し、おおそ東西 5m、南北 8m である。基礎の溝底はローム面まで達していない。レンガ柱は、レンガ長手 2 個四方で作られ、その上にアーチ状にレンガが組まれていたが、最も南側の基礎は調査区域外へと延びていた (6 図)。また、本建物と同一か確認できなかったが、調査区東壁本建物と平行して大型のレンガ基礎が確認された (8 図下方)。

### (4) 建物 4 (1、9 図)

建物 4 は、調査区北西側、台地上に位置する長方形の建物である。建物は、南北に長軸を持ち、方位はおおむね建物 1、2、5 と同じである。規模は東西約 8m、南北 13.5m である。遺存状態は、上部を削平されているため悪く、確認面から布堀の溝底までは、20cm 程度であった。



1 図 近代建物遺構の位置



2図 建物1西側基礎の状況



3図 建物1東側北壁基礎の状況1



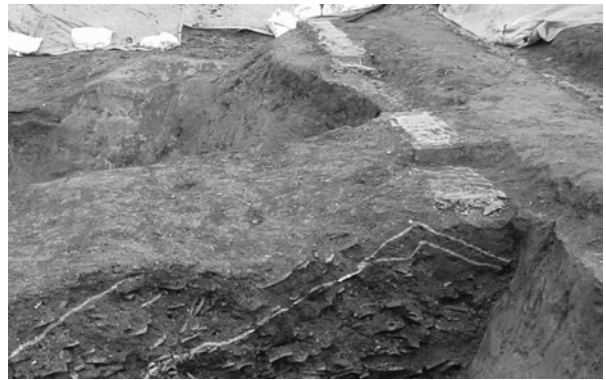
4図 建物1東側北壁基礎の状況2



5図 建物1東側北壁基礎の状況3



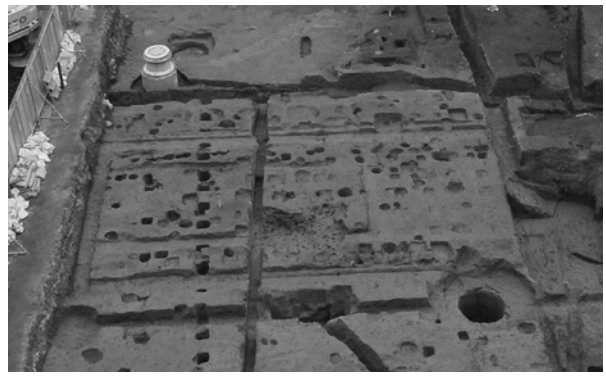
6図 建物2東側基礎の状況



7図 建物2西側基礎の状況



8図 建物3基礎の状況



9図 建物4基礎の状況

束柱のような構造物は確認されなかった。

### (5) 建物5 (1 図)

建物5は、調査区南西側、台地上に位置する長方形の建物である。建物は、東西に長軸を持ち、方位はおおむね建物1、2、5と同じである。規模は、東西約35m、南北約16mである。調査時には建物基礎などの構造物はすでに撤去され、プール状の落ち込みの埋土中には、レンガ、コンクリートなどのガラが多く混入していた。坑底には、バックホーのバケットによって作られた痕跡が確認された。

## 2. 旧伝染病研究所と建物変遷

### (1) 旧伝染病研究所の変遷

旧伝染病研究所（現東京大学附属医科学研究所）は、同研究所100周年を記念して1992年に刊行された『伝染病研究所・医科学研究所の100年』に詳しい（東京大学医科学研究所1992）。以下の記述は、主にこれによって行われている。旧伝染病研究所は、以下のような経緯を経て現在に至っている。

- ・1892（明治25）年11月30日 大日本私立衛生会附属伝染病研究所
- ・1899（明治32）年4月1日 内務省所管国立伝染病研究所
- ・1914（大正3）年10月14日 文部省所管国立伝染病研究所
- ・1916（大正5）年4月1日 東京（帝国）大学附置伝染病研究所
- ・1967（昭和42）年6月1日 東京大学附属医科学研究所

設立当初の研究所については、小高健によると福沢諭吉の篤志により福沢が借地していた現在の港区御成門交差点南東角付近の芝区芝公園五号地三番の地に建坪10余坪の規模で設立された（小高1991）。次いで1894（明治27）年、政府からの補助金で病院を併設できる芝区愛宕町2丁目13番地に病棟を含む研究所を移転した。白金台の地への移転は、その後には拡大、分散した研究所機能を一元化する目的で、1905（明治38）年に敷地面積19,000坪、建坪2,900坪の規模で、新築、移転が行われた。

### (2) 1917（大正6）年の建物配置図

白金台に移った研究所内部の様子は、1917（大正6）年の記銘図（10 図）が最初で、おおむね当初の建物配置が描かれているものと推定される。これに調査区部分と重ね合わせると11 図のようになる。これを見ると建物2、建物3、建物4の位置と建物形状が類似している

ことが判る。考古学的にもこれら建物基礎が布堀状の基礎構造を有する点で類似している。これらはいずれも本郷キャンパスで明治期の校舎などで確認できるような、基礎底を必ずローム層中まで深く掘り込み、布堀基礎幅が1mを超え、基礎底から栗石、厚い捨てコンの上にレンガを複数段積み上げるような堅牢な構造体ではない。

建物配置図には、建物2が「包装室」、建物3が「機関室」、建物4が「馬糧庫」と書かれている。これらの建物で行われた具体的な内容は判じ得ないが、重量物が多く置かれる想定した構造ではないと考えられる。また、機関室も西半は簡易な基礎であったが、調査区東壁際からは堅牢なレンガ基礎が確認され、東半には重量物が置かれるような構造であった可能性も推定される。

### (3) 1927（昭和2）年の建物配置図

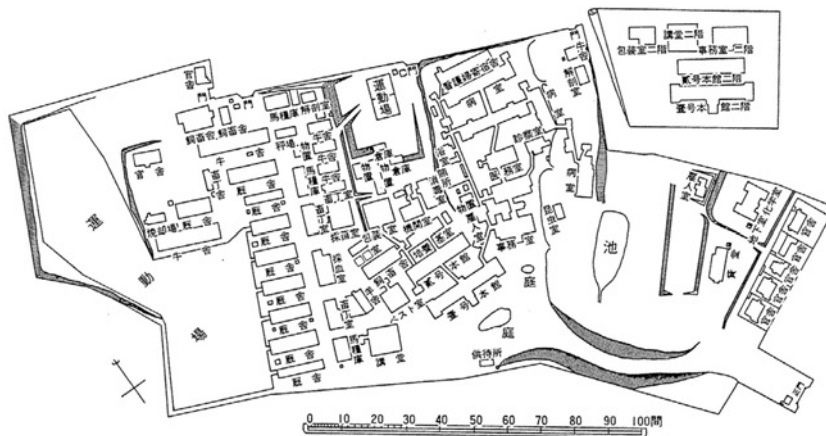
白金台に移転後の経営された建物群は、1923（大正12）年の関東大震災によって大きな被害に遇ったとされている。しかし、その後の配置図を見る限り、本格的な再建が開始されたのは、昭和に入ってからと推定される。12 図は1933（昭和8）年の配置図である。大きな変化として、現在も使用している内田祥三設計の研究所1号館が建築中である（完成は昭和12年）。これにやや遅れた1938（昭和13）年、伝染病研究所内に公衆衛生院（現在、港区立郷土歴史館が入っている建物で、国指定有形文化財）が、震災復興計画の一部として公衆衛生技術者育成のために設立されている。構内西側に配置されていた「既舎」などが取り壊され、建て替えられているのに対して、東側の研究室や病院などは、どれだけ使用に耐えられたかは不明であるが、震災前と建物配置は大きな変化は認められない。

調査区内では、「冷蔵庫」と名前が変更になった建物2の北に「仮研究室」と書かれた建物が描かれている。この「仮研究室」は、位置関係、規模、形状から建物1に類似している。建物1はおそらくこれに該当すると推定されるが、調査区内で確認された建物5棟のうち最も堅牢な作り方であり、こうした「仮」建物を図2～5のような基礎構造にしたのかや疑問が残るが、震災の経験からこうした目的であっても堅牢さが求められたのであろうか？この仮研究室は、1937（昭和12）年の配置図には確認されなくなる。

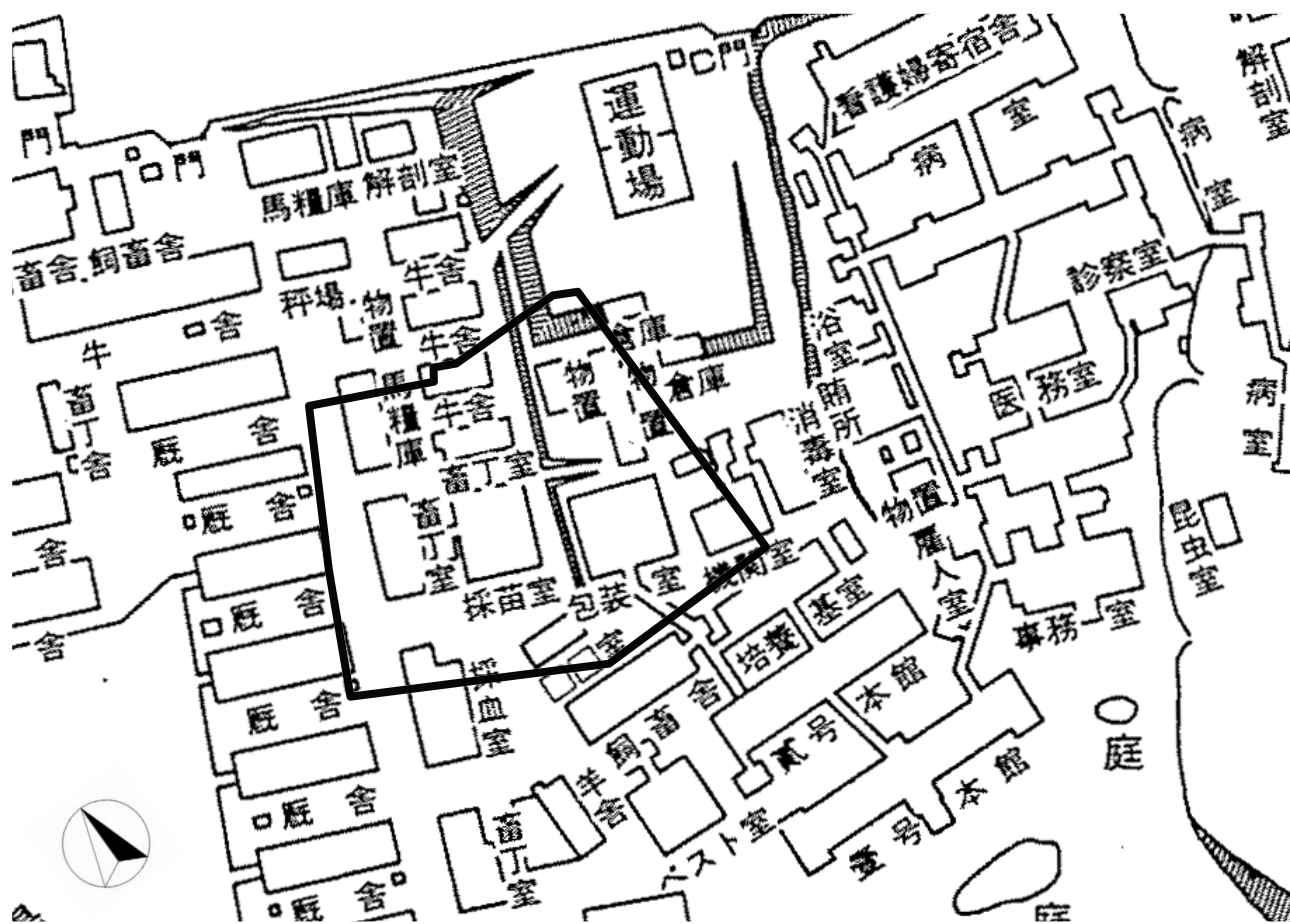
### (4) 1940（昭和15）年の建物配置図

この段階では、震災前から存在した建物はほとんどなくなり、図示した範囲では東北隅に位置する病院の一部が確認できるのみである（13 図）。現1号館は完成し、12 図までに確認された「冷蔵庫」（11 図では「包装室」）、「痘苗製造所」（11 図では「採苗室」）、「畜丁室」（11 図

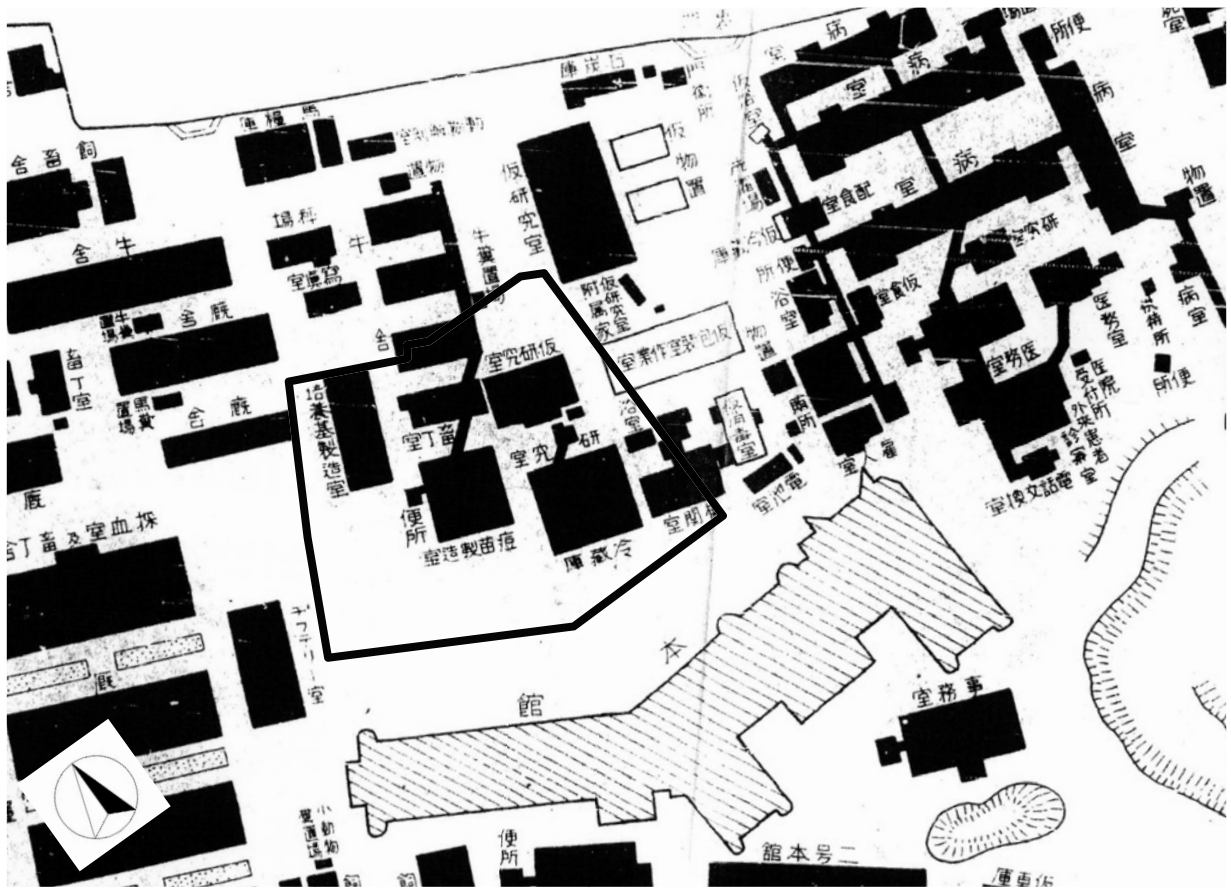




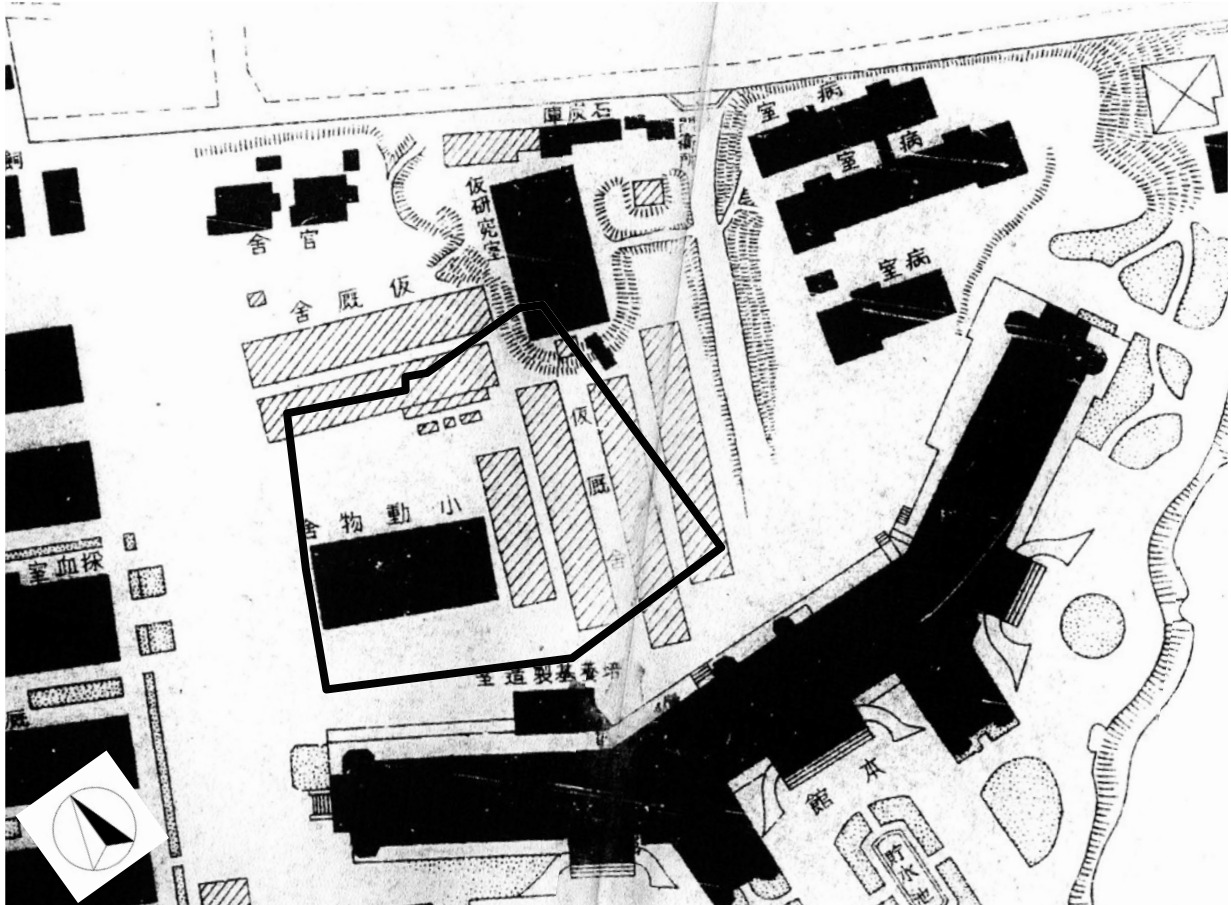
10図 伝染病研究所建物配置(大正6年)  
 東京大学医科学研究所 1992より抜粋



11図 伝染病研究所建物配置(大正6年)と調査位置



12図 伝染病研究所建物配置(昭和8年)と調査区



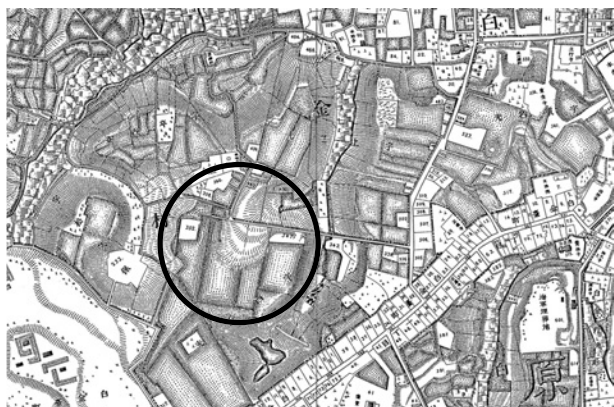
13図 伝染病研究所建物配置(昭和15年)と調査区

でも同様)などは全てなくなっている。一方、「仮厩舎」が小動物室の北側、東側に多く建てられ、この段階でようやく再建に着手した状況にあったと推定される。

調査区内では、調査区南東部に「小動物舎」と書かれた長方形の建物が描かれているが、これは先述した建物5に位置関係、規模、形状が一致している。ただし、先述のように建物5は、調査直前まで使用していた建物であったが、解体前に調査を行わなかったことで詳細な状況は不明である。

## おわりに

旧伝染病研究所が当地に移転したのは、1905（明治38）年のことであった。江戸時代に大村藩下屋敷として機能していたが、廃藩置県後の詳細は不明である。1887（明治20）年の東京実測図には、所有者区画と思しき区画線と地形が描かれているが、番地なども書き込まれておらず、空閑地に近い状態であったと勘案される（14



14図 「東京実測図」(明治20年)  
東京都港区三田図書館 1972より抜粋

図)。

冒頭にも触れたように、本調査では医科学研究所（旧伝染病研究所）を対象とした調査を行うことができなかった。調査を行った平成初期には近代遺跡を保護対象とした時代ではなかったとは言え、2020年から全世界に蔓延した新型コロナウイルス感染症が示したように、細菌やウイルスが人の健康や活動に与えた巨大な影響を考えると近代日本が行った伝染病や感染症政策、研究の中心的な場であった旧伝染病研究所の資料化は重要である。

2022年から東京大学医科学研究所全域が、周知の埋蔵文化財包蔵地（港区 No.135 遺跡）として登録された。

また、伝染病研究所内に建造された、現在港区立郷土歴史館が入っている旧公衆衛生院は、2019年に国指定有形文化財に指定されている。こうした場における近代歴史資産の保護は重要な課題となろう。

## 【引用参考文献】

- 小高 健 1991 「伝染病研究所発祥の地について」『日本医事新報』No.3511
- 渋谷葉子 2004 「肥前国大村藩白金下屋敷について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 東京大学埋蔵文化財調査室（本研究編再録）
- 東京大学医科学研究所 1992 『伝染病研究所・医科学研究所の100年』



---

---

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 17  
東京大学白金台構内の遺跡（港区No.135 遺跡）

医科学研究所附属病院 A 棟地点  
研究編

2022 年 12 月 28 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室  
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1  
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 能登印刷株式会社

---

---





